
sola ~空飛ぶピアノに最後の夢を~

ともみつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

s o l a 空飛ぶピアノに最後の夢を

【Nコード】

N 0 6 2 7 E

【作者名】

ともみつ

【あらすじ】

怪我により空を降りることになった健介。それを馬鹿と一蹴する悠。二人は同僚であり、腐れ縁であり、仲間だった。そこへ空に焦がれる少年が現れる。命を削る日々でも決して諦めない少年の夢に、周囲を巻き込み、健介は悠と共に高みを目指した。夢をおい、懸命に生きる強さと弱さを知る人間たちの、切なく爽やかで優しくなれる、最後の夢の物語。

一・折翼

「いてえ……」

「全く、だから触るなって言ってたのに」

病院へ向かう途中。車内振動が骨身に沁みる。泣き叫びたいくらいだ。それをしないのは、ただの見栄。それが出来るくらいの余裕はあるのかもしれないが、強く瞼を閉じると涙が出てくる。

「いや、だってよお」

「言い訳無用。自分のせいでしょうが」

奥田健介は、腕を応急処置で固め、同僚である雨宮 悠はるかの車で約三十分のところにある市立の病院へ向かっていた。

車中は俺の痛みに耐える呻き声と、悠の俺を呆れたように、うるさいとそれを一蹴する声と、ラジオから聞こえてくるDJのリスナーからの葉書を俺の気持ちに知らずに、笑いを交えて読む声だった。ム力ついた。でも、痛みにそれどころでもなかった。

「腕一本で済んだんだから儲けものでしょ」

俺の様子などを特に気にしていないような抑揚のない喋り方。「大丈夫？」なんて心配の言葉なんて一言もかけちゃくれない。悪いこととした奴には冷たい奴だな。

「一本だからって、痛いもんは痛いんだよ」

迂闊だった。整備班には触るなど言われていたが、やっぱり自分の機体なんだから、少しは自分でも調整したいと思い、ドッグに入ったが良いが、まさか自分の知らないところで解体されてると思いきもなかった。

「大体、一言言うもんだろ？ 普通はよお」

痛みに耐えながら、隣を見る。真っ直ぐに前を見ている、凜々しくてなかなか造形の整った悠の横顔があるが、綺麗だ、なんて感想を言う場合じゃない。痛いの一言しか出ない。

「言ったわよ。なのに健介が航空祭の打ち合わせに夢中だったから

聞いてなかったんでしようが」

言われてみて、記憶を遡ると、そんなことを聞いた覚えがあるようないような、曖昧な記憶しかなかった。

「あんたねえ、自分でラダーの効きが少し悪いって言うから、整備わたし班が寝る間を惜しんで診てあげたのに、自分のことで頭が一杯なんだから……」

そう言われると、返す言葉が見つからない。でも、だからって俺の相棒を全解体に近いほどまでしなくても良いと思うんだけどな。

市内へ入ると道路の整備がされているから、車の振動も少なく、骨に響いていた地味な痛みもほんの少しだけ治まってきた。

「ほら、見えてきたわよ」

フロントガラスの先に、病院の表示が見えてきた。それほど大きな街ではないため、市内といえどそれほど施設はない。最近は古雑貨や古本等の専門店がやっと出てきたくらいだ。

「やっと助かる……」

「自業自得のくせに何言ってるのよ」

悠が鼻で笑いながら、病院の駐車場に車を止めた。駐車すると、折れた左腕を庇うように支えながら受付に向かう。

「健介、あんた座つてなさい。私が行ってきてあげるから」

俺は院内へ入ると、受付を悠に任せ、受付前の椅子に腰を下ろした。平日にも関わらず病院は人が多い。特に年配の人が、本当に診察が必要なのかも分からない様子でテレビで流れる国会中継を見て何かを言っていた。中には親と同伴の学生服の子もいるが、俺と同年代と思しき様な人間は少なかった。

「どうしました？」

柔らかな営業スマイルな看護師。分かっているても可愛らしくて、つい見栄を張ろうとする。

「馬鹿やって、折つたみたいなんです」

俺が言おうとしたら、悠が俺を馬鹿にしたようにこの経緯を伝えていた。

「あー、それは大変でしたね」

「そうなんですよ。全く。おかげで仕事の予定もパーですから」

悠の言葉に看護師さんが苦笑していた。

「もうダメですよ。子供じゃないんですからね」

「……はい、すみません」

子供を宥めるように言われると、流石に恥ずかしい。悠もほら見ろ、と言っているようで、何だか悔しい。

問診を済ませると診察までしばらく待つことになった。

「これが長いんだよなあ」

鈍い痛みを堪えながら、待合室で順番を待つ。どう考えても、隣で新聞読んでいる爺さんよりも俺の方が重症だと思っただけだな。救急で対応されてもおかしくないはずなのに。応急処置で我慢している俺って軽症なのだろうか？

「我慢しなさいって。骨折くらいでギヤーギヤー言わないの」

その時の悠が、母親に見えたなんて言ったら殺されるだろうな。そう思っ言わないでおいだ。

「ん？ 何よ？」

「別に」

リノリウムの床に、消毒液の匂い。あまり病院に世話にならない俺には、落ち着かない雰囲気だった。

「奥田さん、奥田健介さん」

ようやく名前が呼ばれ、悠に付き添われながら診察室へ入る。

「どうしました？」

俺は診察を受ける時、思うことがある。目の前にカルテがあつてそこに症状が書かれているというのに、わざわざまた同じことを聞く必要があるのかと思ってしまう。

「見ての通りです」

他に言うこともないので、見たまんまを言った。

レントゲンを撮るまで、先ほど看護師に言ったことと全く同じことを悠が言ってくれた。そして、医師にも同じように苦笑された。

こちらは痛くて早急に治療をして欲しいというのに。やがて流されるようにレントゲンを取り、しばらく待たされ、再び診察室で診断を受けた。

「これなら手術のほうが経過は早いんですが、どうします？」

「それは入院って事ですよね？」

俺の問いに勿論ですよ、と何故か可笑しそうに笑う医師。

「仕事を抜けるわけにもいかないのです、通院じゃダメですかね？」

さすがにこれからは航空祭の準備やらで時間がない。入院なんてしている暇はない。金もないんだから。

俺の怪我は思った以上に軽症だったが、手術以外での治療は保存的治療のギプスでの固定を余儀なくされる上に、時間も掛かる。だが、仕事を考えると安易に入院と言うわけにはこの時期はいかなかった。何とか押し問答の末に納得してもらい、腕は固定されてしまった。

「これくらいでギヤーギヤー言うなんてね」

治療も終わり、俺の左腕は完全に固定された。慣れないことだからか、何だか少し気恥ずかしかった。

「うるせえ。初めてなんだから仕方ねえだろ」

受付で支払いを悠に済ませてもらい、車へと戻ろうとしていた。入院を免れただけでも、心なしかホッとした。

「ん？」

「どうかしたの？」

出入り口を出て、何か視線を感じ振り向くと、こちらを見下ろすニット帽を被った少年がいた。俺の視線を辿るように悠も同じ方を見上げた。こちらに気がついたのか、少年が奥へ消えて見えなくなった。

「なんだったのかしらね？」

「さあ。ま、とりあえず帰ろうぜ」

入院していると外が恋しくなるのだろう。あの子も早く外に出て遊びたいように見えた。

「健介、そういえばさ」

治療を終え再び仕事場である、飛行場へ悠と戻っていた。

「あんだ、これからどうするの？」

パイロットのため、骨折ともなれば仕事にならない。出来るのは地味な事務仕事の手伝い程度になるか。

「全治二ヶ月だからな。それまでは電話番号でもするしかねえか」

ただでさえ少ない給料だ。治療費だって馬鹿にならない。出来ることがあるなら何でもするしかない。

「そうじゃないわよ。私生活のほう」

悠はハンドルを握りながら、俺の腕をチラッと見た。そう言われて、初めて現状をまともに理解した気がした。言われるまで考えもしなかった。いつものように家に帰っても、これからしばらくの間は生活に支障が出ることなど、念頭にもなかった。

「そっぴや、そっぴやなんだよな。ま、しばらくはコンビニ生活だな」

片手でも料理なんか出来ないことはないが、手間と時間が掛かって面倒臭い。治るまでは弁当で良いだろう。洗濯とかは休みにまとめてするのが良いかもしれない。

「ダメでしょ、そんなの」

分かつてはいる。パイロットには健康管理は当たり前だ。制限が多いから一人暮らしの俺には、結構しんどい生活が待っている。

「耐えるしかねえだろ。どうせ治ったところで、それからもしばらくは乗れねえんだしよ」

治療の間は、愛機と飛べないのは仕方ないな。それに治ったところで、筋力も技術も落ちているだろう。少なくとも三ヶ月は俺は相棒と飛ぶことは出来ないだろうな。

「はあ・・・、本当にダメね」

悠が重たいため息を吐いていた。怪我した同僚を励ますでもなく、完全に呆れたように車を走らせていた。

「じゃあ、面倒見てくれよ」

そこまで呆れられると、結構痛いものがある。

「仕方ないわね。良いわよ」

冗談半分で言って、けなされて笑うつもりでいたのだが、開いた口が塞がらなかった。

「……お前、俺の言ったこと聞いてたか？」

ハンドルを握る悠の横顔に向かって、「冗談を真に受けるなど言い直そうとした。

「何？ あんた自分で頼んでおきながら、逃げるわけ？ 意外とチキンだったの？」

悠は何てことないように流して、俺のことをチキン呼ばわりしてきた。女の口からそんな言葉が出てくるとは思いもなかったぞ。

「いや、普通ありえんだろ」

同僚だからって、普通私生活まで口を、ましてや顔を出すことはしないだろう。同性でもないんだから。

「別に良いんじゃない？ お互い恋人いるわけじゃないんだし、問題ないでしょ？ 昔から知り合ってるんだから」

そう言われると、返答に困るといっつか意識してしまう。

「お前、そういうところって軽いよな」

「そう？ じゃあ一人で苦労したら？」

掴みどころがないというか、感情を読めないその言動には、これまでも散々振り回されてきたが、こういうことでも悠は何とも思っていないようだった。

「放置の方向は勘弁してくれ」

俺も俺だな。飛行場までは家からだど、車を使わないと無理だ。

公共機関も金がかかる。出費が多い分、少しでも安くで済むならその方が良い。そう思ってしまう。

「じゃあ、しばらくは私のペットってことで。はい、お手」

片手でハンドルを握り、もう片方の手を俺に向ける。

「するかっ！」

出されて手を弾き返す。運転中は運転に集中してもらいたいものだ。

「全く、注文の多いお客は嫌われるわよ」

「一つも注文してねえよ……」

先ほどまでの妙な空気がそれで打ち消された。

「それはそうとこれから健介、あんたの家行くわよ？」

俺は頷いた。しばらくの面倒見を了承してくれたが、暮らすのは悠の家になるだろう。荷物を少しはまとめる必要がありそうだ。

「分かった。服くらいでいいか？」

「そうね、必要ならその都度で良いですよ」

言わなくても相手が何を求めているのか、何のことを言っているのか空気だけで分かってしまう。阿吽の呼吸とか言うやつだろうか。俺たちも結構腐れ縁なんだな、と思った。

そのまま飛行場に戻る前に、一旦俺の家により数日分の着替えを持つと、再び仕事へ持った。俺と悠は基本的に仕事場が違ったため、終わり次第落ち合うことにして、俺は職員棟の事務所へ、悠は格納庫へ分かれた。

「ただいま戻りました」

結局戻ってきた頃は、空が夕日に染まりだしていた。なんだかんだで三、四時間近くも出ていた。

「おつ、馬鹿が戻ってきたぞ」

上官が笑いながら他のパイロットや事務員を呼んだ。

「なんだなんだあ」

「うわ、だつせーな、おい」

すぐに俺の周りに人が増えた。しかしそれは心配を匂わせるものではなく、全員が面白おかしそうに俺をからかいに来た者ばかりだった。

「ちよつ、やめろつて」

すると中には俺のギプスにマジックで落書きを始める者も出てきた。ペンが走るたびに少々痛みが走る。ギプスで固定されていても、針を刺すような痛みは感じる。腫れが引くまでだと言われたが、信憑性があるのかには分からない。しかし誰もそんなことは気にする

でもなく、次々と罵詈雑言にも似たことや関係ないことまで色々と書いていた。

「あーあ、何だよこれ……」

それもほんの僅かな間だけ。ひとしきり盛り上がると、仕事に戻る者や飽きて雑談に華を咲かせる者などで俺のことは忘れ去れた花のように、思い思いの時間を過ごしていた。一人残された俺のギプスは、あれほど包帯で真白だったのに、奇異な現代アート模様に変わりしていた。

「奥田さん、お疲れ様です」

デスクに戻り、これからのことを考えようと思ったが、精神的な疲労にやる気が失われた。

「ありがとう」

事務員の小野原美友紀ちゃんがお茶を入れてくれた。彼女はここへ配属となつて三年目だ。元々は市内の会社に勤務していたらしいが、自分に合わないからとここへ来た。まだ二十四の若い子だ。比較的男の多いこの職場。彼女のような存在はマドンナ的でもあった。そついう俺もまだ二十七なんだが。

「左腕、大丈夫ですか？」

ちよつと嬉しくなつた。悠にさえ心配されず、ここへ戻つてきても誰も気に病むような表情を見せる者はいなかった。そのせいか、初めて俺を心配してくれる美友紀ちゃんが眩しかった。

「ありがとう。俺なら平気平気……っ！」

つい調子に乗つて左腕を動かしたら、激痛が走つた。

「だ、大丈夫ですか！」

涙が出てきた。そんな俺を心配してくれる美友紀ちゃんは、本当に優しい子だなんて思ったかつたが、痛さでそれどころではなかった。

「ふんっ、馬鹿者が」

そんな俺を、上官の藤沢孝雄が鼻で笑い飛ばしてくれた。

「おい、健介」

「あ、はい」

上官が俺を呼んだ。痛みが和らいだのを見計らって上官が呼んだ。「お前、しばらく乗れないだろ。その間、ここの雑用だ。いいな？」もう少し細かい説明とかあるかと思っていたら、その一言だけだった。しかし、有無を言わさないその目は、俺がここへ来てから未だに慣れない少々恐い目だった。

「分かりました」

「後、その間の給料も二割減だ」

「……マジですか？」

「自分で何やったか反省しとるのか。降ろされないだけでもありがたいと思え」

そう言われると、反論も何もない。規則違反を犯したのは自分だ。それに伴う結果がこれなのだから、まだ乗れるだけありがたいことか。相棒に乗れなくなるよりはマシだと自分に言い聞かせ、上官に従った。人員不足のおかげなのかもしれない。

「それと、バードフライのメンバーは、お前の代わりに畑山が入ることになったからな」

「………了解しました」

俺が勤務する、このバードフライ飛行場。飛行場とは言いながらも、規模はそれほどではない。本土最南端の中規模飛行場としては知る人ぞ知る飛行場で、地域住民や離島住民には重宝されている。整備班の連中も全て含めても、せいぜい百数十人程度。主な仕事は、航空機での離島や遠地への人員・荷物運搬業務、災害時の民間防災業務。最近では遊覧観光やスカイダイビングなどのエアースポーツ系などにも力を入れている。しかし、それだけではない。もう一つの顔がある。それはアクロバット飛行を民間パイロットで、チーム・バードフライとしてチームを組んでいる。このおかげでここの経営が持っているというのもある。

本来なら三ヶ月後の八月に行われる航空祭で、俺も参加するはずだったが、この様では到底無理だ。

「お前も馬鹿だよなあ」

災難続きで覇気を失くした俺に、俺の代役で飛行することになった畑山智史が寄ってきた。元々メンバーの一人で、今回は外れていたはずだが、俺がダメになったせいで繰り上がった。

「ほっといてくれ。今は何も考えたくないんだ」

「まあ、そう言うなって。お前の分まで俺が華麗に飛んでやつからよ」

肩を組んでくるこいつが、無性にむかついた。

「後で覚えてるよ」

「はははっ、さっさと怪我治しまわないと、お前の椅子は俺が頂いちゃうぞ〜」

智史はそう言うと、そのまま帰っていった。よく見れば、残業組以外はもう終わりの時間だった。嫌がらせだけに寄って来やがったな、あいつ。

「奥田さん」

そろそろ悠も終わる頃だと思い、俺も帰り支度をしていると美友紀ちゃんが制服から私服に着替えて戻ってきた。

「あれ？ まだ帰ってなかったの？」

「あ、はい。少し奥田さんが気になったものですから」

瞬間、同僚の男の目が俺に刺さるように見えたのは気のせいだろうか。

「俺のことは気にしなくていいよ。これくらいで落ちぶれるような真似はしないし」

実際は悠の世話にならなければ、ろくに何も出来ないだろう。ただかんだで知り合ってから長い付き合いだから、色々と面倒は見てもらっているような気がする。でも、それでも少しは男として見栄を張っておきたい気分だった。

「で、でも、その、食事とか、ふ、不自由じゃないですか？」

そこまで心配してくれるなんて、何と良い子なのだろう。無性に頭を撫でてあげたい気分だった。

「大丈夫大丈夫。当てはあるから心配要らないよ」

「そうですか……」

おかしいな。心配かけまいと言ったつもりなのに、美友紀ちゃん、何だか残念そうな顔してるのは気のせいだろうか。

「健介、いる？」

作業着から私服に戻った悠が、ちょうど迎えに来た。

「あ、それじゃあ、先に失礼するね」

「えっ、あ、はい……」

美友紀ちゃんとそこで別れると、俺は悠と帰っていった。

「あいつ、雨宮のところに世話になるみたいだな」

「えっ！」

「おっ……」

藤沢上官の言葉に、美友紀がハツとしていた。その表情に逆に上官が驚き返していた。

「まあ、奥田と雨宮は中学からの付き合いだからですかね。今更なんじゃないですか」

他の同僚の言葉に美友紀は一人、優れない表情をしていた。

「それよりも、美友紀ちゃんこれから俺たちと皆で飲み行かない？」

「そうね。美友紀、あんたもたまには付き合いなさいよ」

「……ごめんなさい、先約があるのでこれで失礼します」
先輩たちの誘いも美友紀は断ると、そそくさと帰っていった。残された者たちはポカンとしたまま見送っていた。

「これから夕飯の買い物行くけど、必要なものとかあるならついでに寄るわよ？」

すっかり辺りは暗くなっていた。飛行場周辺は畑ばかりで、さらに暗く感じる。車の通りもそれほどないため、余計に夜が夜らしく見えた。

「そっぴや、飯代とかはいくらくらいだ？」

いつまでも引きずっていたところで、治るものはいずれ治る。今はそれよりも、これからの生活のことを考えるのが先決だろう。

「飯代つて？」

信号待ちをしていると、悠が俺を不思議そうに見る。

「これから世話になるんだ。渡せるものは先に渡しとかないと、後々色々金がいるからな」

治療費だつて馬鹿にはならないだろうし、車のローンに家賃や保険もある。安月給の俺には痛いものばかりだ。払えるものは先に払っておいたほうが、身の為だろう。減給も言い渡されたばかりだし、いいわよ別に。あんたもお金は必要になるでしょ」

信号が変わり、車が走り出す。ラジオからは夕方の人気番組が流れていた。受験の時に聞いた記憶のある番組で少しだけあの頃の思い出が脳裏を過ぎった。

「いや、でもそれじゃ、お前が大変だろ？」

「一人が二人になつたくらいで、そんなに大差ないわよ」

悠は断として受け取るうとしない。かといって俺もそこで引いたら、ヒモみたいで癪に障る。俺は右手で何とか財布を取り出し、とりあえず入っていた三万をダッシュボードの上に置いた。

「いらないうって言うてるでしょ」

チラツと見て、呆れたようにすぐに視線を前へ向けた。

「それじゃ俺の気が治まらん。これで今月の俺の飯を作ってくれ」
何か、言つてて恥ずかしさがあつたが、ここで引きたくはないから、俺はそこに金を置いた。俺がこういうことに関しては我が俣だと知っている悠は、小さくため息をつくと、

「全く、昔から変わらないんだから」

それを言うなら、頑なに人の好意を受け取るうとしない悠も同じだ。今日初めて悠のまともな笑顔を見た気がした。

市内に近付くにつれて、辺りから明かりが溢れてきた。町の公共事業の一環だとかで、数年前に大通りが綺麗に整備され、昼間よりも夜間の方がライトアップされ綺麗に見える。閑散とはしているが、
「着いたわよ」

途中で大型スーパーで買い物をして、悠の家に着いた頃には、八

時を過ぎていた。

「すつきりしてるなあ」

部屋に入って思ったのは、綺麗に整頓されて、余計なものがないといった感じだった。

「あんまりジロジロ見ないの。それとあなたの部屋はここね」

悠に連れられた部屋は、客室なのだろうか。長らく使われた形跡が見受けられなかった。

「悪いな。何から何まで」

とりあえず、生活の保障をしてくれたことに関しては、感謝している。

「いいわよ。お金ももらってるんだし。必要なことあれば言って」

「助かる。ありがとな」

俺が感謝の意を述べると、意外そうな顔をしていた。

「あなたにそんな風に言われたの久しぶりかも」

「そうか？ まあ言われてみれば、ここ最近はお前とは話す機会少なかったからな」

元同級生で同僚でもあるが、所属する部署が違つと、そう顔を合わせることは少ない。飛ぶ時は誘導してくれることもあるが、それは仕事だ。プライベートじゃ、お互いに時間が合わないことのほうが多い。そのせいなのだろう。

「そうかもね。でもこれからは、嫌でも毎日顔合わせるわね」

「嫌か？」

「そうね、毎日あなたの顔見るのは、飽きそう」

「そう言いながらも、どこか楽しそうに自室へ着替えに行った。」

「それもお互い様だ」

俺も久しぶりに人の温もりのある家に来たせい、頬が緩みかけていた。薬が切れてきたのか、痛みが再発してきて結局頬は引きつっていた。

「やっと落ち着いたな」

悠の夕飯は、美味かった。元々器用な性格もあるためか、手つき

が良い。俺が服を奮闘して着替えている間に用意できていた。俺が着替えるのに手間を取りすぎたせいもあるのかもしれない。

リビングからドラマの音声が聞こえる。しかし誰もそれを見てはいない。悠は風呂で、俺は今日一日の疲れからか夕飯を摂ったら何だかテレビも見るのが億劫なほど、疲れが押し寄せてきた。ベッドに大の字になり、左腕を持ち上げる。時折襲う鋭い痛み顔が歪む。「……………くそっ」

薬を飲んだが、すぐには効いては来ない。自分の情けなさがその痛みを助長するかのようだ。今更になつて、自分が悔しかった。何気なく暮らしていた生活が瞬時に崩壊すると、なかなかついていけず、プライドが邪魔をして妙な悔しさが押し寄せてきた。微かに天井が霞んで見えた。

「はぁ……………」

しばらく天井と睨めっこして、痛みが引くの待つ。満腹感からくる眠気と、疲労感が、次第に俺のまぶたを重くしてくる。

その時だった。心地良いまどろみの中に、やたらけたたましい音色が頭の上から俺を現実に取り戻す。枕元で携帯が俺を呼んでいた。「……………ふぁい？」

夢つつつの状態、携帯を何とか取り通話ボタンを押し耳に押し当てる。

《あの、奥田さん、ですか？》

どこかで聞いた事のある声が聞こえてくる。頭が働かない今の状態では、誰だか思い出せない。

「どちらさん……………？」

《あの、小野原です》

控えめな声が返ってきた。頭をフル回転させて、その声の主を記憶の中の人物と照合させる。

「ごめん、誰だっけ？」

思い当たらなかった。単に頭が動かないだけなのだが。

《あの、美友紀ですけど》

その瞬間、俺の頭は完全に覚醒した。

「み、美友紀ちゃん……っ！？ ……いつてえっ」

勢い良く上体を起こしたら、左腕が足に当たり痛みを襲われた。波のない一定の痛みを堪えていたところに来る衝撃は、耐えられなかった。

《だ、大丈夫ですかっ？》

電話越しに美友紀ちゃんが慌てた声が耳に入ってくる。

「だ、大丈夫。なんでもないよ」

携帯を持っているせいで、擦ることも出来ず痛みが引くのを待つしかない。

「……それで、どうしたの？」

《あ、えっと、その具合はどうですか？》

そこまで俺は彼女を心配させていたのかと思うと、嬉しい傍ら申し訳ない気持ちになった。

「問題ないよ。もう寝ようと思ってたくらいだから」

《そうですか》

少しホツとしたような美友紀ちゃんの声。顔が見えない分、普段意識しない部分を感じる事が出来る気がする。美友紀ちゃんの声が、俺の痛みを包み込んでくれた。

「でもどうしたの、こんな時間に。明日は早朝で配送荷物の申し込みがなかったっけ？」

俺の記憶では、明日は朝六時には地元の吉田工業の配送が入っているはず。

《ありますよ。担当は香田さんですね》

先輩の香田篤志。バードフライのリーダーでもあり、元々航自のパイロットだったそうだが、ここへリターンして飛行場へ再就職を果たした。航自にいた割には、畏まることなく、どちらかと言うと明け透けとして物事を軽視しているような態度だ。今の航自はみんながこういう人なのだろうかと思うが、それはただの偏見だろう。

「そっか。それならそろそろ休んだ方が良いんじゃない？ 朝起き

れないよ?」

《そうですね。奥田さんも早めに休んで下さいね》
どことなく美由紀ちゃんの声のトーンが、低いのは気のせいだろうか。

「ありがとう。それじゃ、また明日。おやすみ」

言いたいことを言えずに話が終わったという感じが、何となくだ
が感じられた。

《……おやすみなさい》

美友紀ちゃんが切ってから、通話を切る。

「一体何だったんだ?」

ベッドに再び横になり、待ち受け画面を見る。そこには俺の相棒
のスマートフォン 26のフルートが写っていた。特に名づけの理由
はないが、初めて乗った時に風を切るような音をエンジン音に紛れ
て聞いた。それがフルートの音のように感じられたため、それ以来
俺は相棒にそう名づけた。競技専用のロシア製プロペラ機で、少々
作りは荒いが、その分機動性とパワーに優れ、国内外の民間アクロ
バットで利用されることの多い機体だ。全長約7mほどで、重量は
約七百kgと小柄のため、うちの飛行場でも十分に活躍できている。
「俺のこと、心配してくれたんだよな」

深呼吸をしながら、わざわざ電話をくれた美友紀ちゃんの履歴を
見る。受付兼事務の美友紀ちゃんとは、毎日顔を合わせている。た
だでさえ人員不足の飛行場だ。俺の怪我でも他の同僚に迷惑がかか
ることを気にしてくれたんだろう。明日お礼を言わないと、などと
考えているうちに、大きな欠伸と共に再び睡魔が襲ってきた。

「だめだ、ねみい……」

視界がぼやけてくると、もはや贖う気も失せる。そのまま俺はま
どろみの世界へ堕ちていった。

「健介、お風呂良いわよ……って何よ。見てないならテレビ消し
ときなさいよね」

風呂を上がった悠が、バスタオルを頭にかけたままりビングに顔

を出す、そこに健介の姿はなかった。

「健介？」

悠が健介の部屋を覗く。

「全く、あんたは……」

部屋を覗き、悠は苦笑した。ベッドに横になり、携帯を握り締めたまま既に深い眠りに就いている健介がいた。呆れたようでありながらも、悠は気持ち良さそうに眠る健介に毛布をかけると、静かに部屋の明かりを消した。

「おやすみ、馬鹿」

そのままドアを閉めた。

翌朝、いつまでも起きてこない健介の部屋に、悠が呆れたように入ると、毛布を剥ぎ取った。

「いつまでも寝てるんじゃないわよっ」

悠の怒声で、健介は飛び起きた。

「うほっ」

急なことで意味不明な声を上げ、健介が上体を起こすと、薬が切れているせいか忘れていた痛みに襲われた。

「健介、あんた昨日お風呂入ってないんだから、シャワー浴びなさい」

顔だけ再び覗かせると、寝着姿で髪も下ろした悠は朝食の支度に取り掛かった。

眠気と腕の痛みとで、健介はなかなかベッドから離れられなかった。ようやく起きて、悠に言われた通りシャワーを浴びようとしたが、初めて骨折した健介には、風呂の入り方が良く分からなかった。普通に入ろうとしても、腕のギプスは外せないからつけたままだろうが、かと言ってそのまま入るわけにもいかないだろう。

「これに腕入れて」

そんな健介に悠は大きめのビニール袋を差し出した。

「ギプス外すわけにはいかないんだから、これに腕入れて入りなさい」

い。腕は後で拭いてあげるから」

言われるがままに健介はビニールで左腕を濡れないようにして、浴室へ向かった。

「あいつ、昔よりもさっぱりしてきたな」

風呂上り前に、悠が腕を拭きに来たが、腰にタオルを巻いただけの健介に、何てこともないように、そそくさと拭き終わると風呂を後にし、健介は悠の態度に内心、取り残されていた。

「ふう、さっぱりしたあ」

濡れた髪をバスタオルで器用に拭きながら、リビングに顔を出すと、ダイニングから良い匂いが漂っていた。

「和食で良いでしょ？」

テーブルにはごく普通の家庭の和食が並んでいた。

「ああ、俺も朝は飯じゃないと持たないからな。それにしても全部作ったのか？」

俺も朝はなるべく和食を心がけているが、精々白飯に味噌汁と納豆くらいだ。

「そうよ。インスタントなんて栄養のバランス悪いじゃない」

健介が風呂に入っている間に、悠はご飯に味噌汁の他に、小鉢で三品、焼き魚と、どこぞの旅館の並みの朝食を用意していた。

「お前、すげえな。これだけ出来るなら男の一人や二人すぐに捕まえられるだろ？」

「こんなので釣れても、嬉しくないわよ」

健介の言葉を流すと悠が先に座り、それに続いて向かい側に健介も座ると朝食が始まった。時計に針はまだ七時を過ぎたばかりだった。

「健介、食べ方汚いわよ」

健介が食べにくそうにしながら、時折ぼろぼろとこぼす様子を呆れたように見ていた。

「利き腕が使えないんだから、上手く食べないんだよ」

「まあ分かってて言ったんだけど」

健介は悠をジト目で見る。左利きの健介には、急に右しか使えなくなるの不便になることが増え、早速今がそうであった。

「あんた、今週はろくな仕事貰えそうに無いわね」

そんな健介を気にかけることなく、朝のニュース番組に目を向けながら箸を進める悠。生活を見てもらっているため言い返すことが叶わない。

「ほら、早く食べないと置いてくわよ」

悠は健介にフォークを差し出すと、残りの自分の朝食を食べ始めた。言葉じゃ、ほとんど励ましなどかけない悠だが、ちよつとした気遣いは人一倍だった。健介は悠にヒビを入られた心が、少しだけ癒されたように感じながらも、やはりそれはただの思い違いだと思っただ。

「フォーク、小鉢に入らねえじゃねえかつ」

「あはははっ」

ガチャガチャと小鉢にフォークの先端しか入らない音が、無常にも健介の内心と、彼女が信用する人間だけに見せる悠の悪戯心を象徴していた。

「香田さん、整備の斉藤さんから連絡です」

「はいよ。もしもし」

早朝のまだ六時。五月と云えど、田舎の朝は肌寒い。出勤してくる人はまだ少ないが、みな薄手の防寒着に身を包んでいる。大きな空港とかではないため、開場するにはまだ早い。それに早朝からの飛行も近隣住民への迷惑となるため、七時を過ぎなければ、緊急時以外は発進はしない。

「はい、分かりました。すぐ行きます」

事務所内にはまだ数人しか出勤していない。ようやくエアコンが利きだしてきたせいか、まだジャケットなどに身を包んでいるパイロットや整備士の姿があった。

「小野原、ちよつとドックの方に行くから、先方さんや他に俺に何

かあったら、そっちに連絡入れるように言っといてくれ」

「はい、分かりました」

今朝一番に飛ぶ予定の香田が事務所を後にすると静まり、残業で眠っている人の寝息がエアコンの駆動音に混じって聞こえる程度で、後は気象庁からの気象情報やニュース番組が聞こえる程度だった。

「はぁ……」

朝一だからと早めに出勤しても、することが無い。みんなの机を綺麗にすることやお茶の用意も昔はしていたけど、今は私にも後輩がいる。新人の仕事だからと、今朝も香田さんに止められた。

「はぁ……」

することも無く、給仕室で自分用にコーヒーを入れる。

「奥田さん、もう起きてるよね」

携帯の履歴の一番上には奥田健介と表示されていた。

予定表には、他のパイロットの人たちは、それぞれ予定が記されていたけど、奥田さんの所は空白だった。それを見て何故か私だけがめ息を漏らしていた。

「結局、言えなかつた……」

美友紀がここへ就職した（た）理由。短大在学中の就職活動の真っ最中に、航空祭があった。航空機の一般、飛行展示から体験搭乗、バードフライのアクロバットの他にも、他の基地からのチームも飛行展示を行っていた。地域住民も、フリーマーケットや地域物産品等の出店など、その日はこの地域が一段と盛り上がっていた。

「格好良かつたんだよねえ」

誰もいない給仕室の壁に寄りかかり、携帯のデータフォルダに保存してある写真を見る。そこには、数年前の航空祭での健介と共に取った写真が数枚入っていた。

「もうそろそろ、来るかな」

画面に表示されている時計が、七時を過ぎていた。

美友紀が一つのカップを取り、少しだけ濃い目のコーヒーの支度をしていた。雨宮と来ることが分かっているから、少しでも会話のき

っかけを持とうとしているようだった。

「なあ、別に俺一人で良いぞ？ お前まで遅れるわけにはいかないだろ」

「食事を終え、着替えを済ませると普段ならとっくに出勤している時間だった。」

「健介が良いなら、良いけど。でも、どうせそのままサボる気ですよ？」

人をなんだとと思っているのだろうか。そりゃあ、昔は面倒臭くて、病気休暇を取ったこともあったが、そんなのは就職した頃の話だ。今じゃそんなことすれば、先輩たちや藤沢さんに何をさせられるか考えただけでも恐ろしい。

「別にこれ見てもらうだけだぞ。一人で十分だって。がきじゃあるまいしよ」

左腕を部屋で身支度をしている悠へ向ける。人前で化粧をしても、気にした様子を見せず、逆に堂々とされるので俺のほうが少し気にしてしまい、リビングで八時のニュースに目を向ける。病院まで付き添うと言ってくれるが、俺からすれば病院まで送ってもらえれば、診察が終了次第、バスでも仕事には行ける。

「それくらいなら、そんなに時間取らないでしょ。それにさっき遅れること言っておいたから遠慮しなくて良いわよ。あ、それと診察の予約も入れといたから」

悠は手回しが良いとでも言うべきか、俺が知らない間にそこまで予定を組んでいたとは。

「分かったよ。それじゃ頼む」

「始めからそう言いなさいよ。素直じゃないわね」

「別にそんなつもりねえよ。俺のせいであってのがちよつと嫌なだけだ」

「良いわよ別に。私は私のやりたいようにしてるだけだし」

「そうですかい」

しつこくない会話は気が楽でいい。それを悠も感じているから、俺も長い言葉は話さない。

「またか。一件出てくると、どんどん出てくるなあ」

ニユースから毎日のように同じ報道が流れているように見える。人は不思議な生き物だと常々思う。たった一つの事件が発覚すれば、今まで出てこなかったものまで根掘り葉掘り持ち出してくる。しつこいったらありやしない。過去のことまで持ち出し、ネチネチと全国ネットで愚痴のような論評をするコメンテーターにも飽き飽きする。そんなことは、家でテレビでも見ながら言うだけで良いじゃないかと思うのは俺だけだろうか。

「最近が多いわね。そういうことは家で勝手に言いなさいって感じよね」

悠が身支度を済ませ、部屋から出てくる。

「どうやらそう思うのは俺だけじゃないらしい。こつこつとこころで意見が合うからこいつとは割が合うと思うのだろう。」

「行くのか？」

「予約も取ってあるからそろそろ出ましょ」

「おう」

テレビ越しに感情を持ち出し、朝から聞いてて疲れるコメンテーターの話の途中で切るように、リモコンを切る。いつもなら色々と手荷物があるのだが、しばらくは雑用だけだ。大した荷物はいらないだろう。持ってきたカバンは薄っぺらの状態で、家を後にした。

「相変わらず、クラシック好きなんだな」

「嫌いになる理由はないしね」

早朝の病院へ向かう車内には、ラジオではなく、眠気を誘うようなクラシックがかかっていた。

「それにしても、今でも吹いてるのか？ 部屋に置いてあったけど」

悠がクラシックを好きなのは、元々姉がやっていたのを機に中学に入ってから吹奏楽部に所属したのがきっかけだった。

「たまにね。でも最近はめっきりよ。忙しくてそんな暇ないし」

自嘲的に悠が苦笑する。仕事が多忙なのはそれだけ飛行場としては良いのだが、それ相応に疲労は心身共に溜まる。だから仕事へ向かう車内くらいは気持ちの安らぎを求めるのだろう。

「しっかし、眠くならねえ？」

クラシックはほとんど聞かない俺には、聞き覚えのない曲は睡魔を呼び起こすのに十分だった。

「あんだ、知ってる曲には反応するくせに、知らないとなると一気に冷めるわね」

悠が俺のことを可笑しそうに見てくる。

「そうは言ってもなあ。なんかそうなつちまうんだよ」

演歌もそうだが、良く耳にしている曲は自然と体が反応するが、そうじゃないのは、クラシックなんかは何度も聞かない限り、その良さは体が受け付けない。

「昔からそうよね、あんだ。興味ないことは全然関心持たないし」

それは自覚している。だから悠の今の言葉が俺に対する貶しであるろうが、俺には褒め言葉に値する。

「だから、今の仕事してるんだ。文句あるか？」

「別に。あんたらしいだけね」

そっけないというか、無関心な悠。元々こういう奴だから俺も気にもしない。

悠の家から病院までは十分程度の距離で、結局聴いた曲は二曲にも満たなかった。それでも悠のセンスなのか、俺の中にはその曲がしばらくの間、反芻していた。こうして聞いていれば、次第に気に入ってくるのかもしれない。

「それにしても、病院ってのはどうして朝ドラなのかねえ」

予約時間まで少し早かったせいも、二人して待合室で朝の連ドラを眺める。

「そお？ 面白いじゃない」

俺がため息交じりに見ているのに、悠は隣で他のご老人方と同じように見ていた。俺と悠の前の椅子には、ニット帽にパジャマ姿の

子供まで、ドラマを見ていた。まだ小学校低学年らしき風貌なのに、戦前戦後の模様を描いている連ドラなんか見ても意味が分かるのだからかと、心中で苦笑してしまう。

「お前、こういうの好きだったけ？」

他のドラマとは違って毎日やっているから、続きはすぐに見れて良いかも知れないが、俺としてはもつと大まかな内容で良い。連ドラともなると、細部にまで話が拘るものは少々俺には荷が重い。

「現実味があつて良いじゃない」

画面を見ながらも、俺の問いには答えてくれる辺りは、真面目な性格の悠らしい。待っているだけで、他にすることは無い。悠は見入っていて、邪魔するのは気が引ける。というよりも、悠と話す話題は少なすぎて、何を話せば良いのかよく分からない。手元にある雑誌も女性誌ばかりで興味も湧かない。

「健介、あんた呼ばれてるわよ？」

テレビを見ながら、悠が言った。一瞬何のことかと思つたが、看護師が俺のことを呼んでいた。

「んじゃ、ちよっくら行つてくる」

俺が立ち上がると、悠が頷いた。

「昨日の今日ですが、どうですか？」

どうですかと言われても、一日でどうこうなる怪我じゃない。痛みは感じるし、腫れから来る熱っぽさも否めない。でも我慢の許容範囲内だ。

「まあそうですよね」

そう言つて笑う医師。人が怪我をしているというのに、それを見て笑われた。信じていたものに裏切られた気分が微かにした。

「とりあえず、それ換えましようか」

俺の左腕を見る。外すというなら歓迎だ。薬臭くて、痒い。風呂でもつけたままだったから、嫌で仕方なかった。潔癖症ではないが、それなりに自分の体を自由に洗うことも出来ないのは、初めてのせいか、気になつて仕方なかった。

「少し痛むかもしれませんが、少しの間だけですからね」

昨日つけたものを外す。ただそれだけのことなのに、妙に緊張する。自分の体なのに、自分じゃないものを目の当たりにする感じと言ったところだろうか。今朝、風呂上りに悠に拭いてもらったが、全くの他人にされると、妙に力が入っていたような気がした。

「・・・・・・・・っ」

支えがなくなり、腕に力を入れないと垂れ下がる。その瞬間、鈍痛が走った。力を込めると、骨に響く。

「私に乗せて良いですよ。力を入れると痛みますでしょ？」

それを見て、看護師さんが俺の腕を支えてくれた。

営業スマイルなのだろうが、それでもその優しさは嬉しく、意味なくドキっとした。

改めて見る自分の腕は、掌から肘の間が右とは違って少々まだ腫れのせいか、微妙に湾曲していた。

「痛いですか？」

呑気に医師がそう言った。この人は本当に医者か？ そう思ってしまったが、それは単なる痛みに耐える俺への気晴らしに言っただけなのだろう。その間に手早く消毒と処置を施し、何かを注射するとまた新しいギプスが着けられた。

「はい、良いですよ。まだしばらくは動かしたりは禁止ですよ。腕が曲っても良いのなら別ですが」

昨日は時間がなく簡単な固定バンドだったが、今日からは本格的なギプスに変わった。仕事に行けば、また昨日のように包帯がアールトにされるのかと思うと、少々笑えた。

「お大事に」

決まり文句のようだが、その笑みは痛みを和らげてくれた。「

待合室へ戻ると、ドラマも終わり、ニュースが流れていた。

「それじゃあ、お金払ってくるから」

「悪いな」

悠が席を立って受付へと行く。身の回りの世話は、ほんと無意識

に近いのだろうが、よく出来る奴だと思つづく。時計を見ると、既に出社時間は過ぎてているが、予め連絡していたから問題はないだろう。悠に迷惑をかけることに対しては申し訳ないと思わざるを得ないが。

「おじちゃん、それ、けが？」

支払いを済ませている悠を待っていると、先ほどのニット帽の少年がこちらを見上げていた。

「……俺？」

まだ俺は若いんだ。おじちゃんじゃない。しかし、少年の見上げる視線の先には、俺しかおじちゃんに値する可能性のある男はいない。他はおじいちゃんだ。

「うん。けがしたの？」

ギプスと包帯で固められた俺の左腕を指差す。

礼儀を知らないのは、仕方ない。子供なのだから、無邪気なのは当然だと思つている。

「そう、怪我したんだ。骨折」

俺の言葉に、へえなどに関心した気配を見せず、あまり興味無さそうに頷く。自分から聞いておいて、適当な返りで終わらせる辺りは、どこかの誰かさんにそっくりな気がした。

「いたい？」

無垢な瞳で俺を見てくる。その目は世界を知らない子が、世界を知る人間に教えを請うかのようだった。

「ああ、痛いよ。でもこれくらいは我慢しないと」

これくらいで喚いては示しがないだろう。流石に子供じゃないのだから。

「何でがまんしてるの？」

不思議そうに俺を見るこの少年。何故かその目を見てみると、純真無垢と言うよりは、自分の置かれている境遇が如何なものかを探ろうとしている目に見えた。

「大人だからな。こういうことじゃ人前で泣いたり出来ないんだ」

自分を嘲るように言うが、少年は表情を変えない。

「なんで？」

本当に何も知らず、ただ理由を聞いたがっているその瞳が俺には眩しかった。

「このおじちゃん、こんなこと言ってるけど、おうちで痛い痛いって泣いてるのよ」

背後から支払いを済ませた悠が、俺の代わりに変なことを暴露してくれた。

「そうなの？」

「うん、そうなの」

少年が俺のことを、うわーこのおじちゃん、うそつきだー的な冷めた視線を送ってくる。大人の目も結構心にくるものがあるが、子供の目のほうが痛いのは俺だけなのか？

「悠、お前は余計なことを言うな」

睨みを利かせて悠を見るが、そんなことは気にも留めた様子もなく、少年と話をしていた。こいつには、そう言うのはまるで通用しないんだっとな。

「ねえ、君は何て言うお名前？」

悠は俺と話す時とは違い、優しい笑みを浮かべて少年と同じ目線に腰を下ろし話しかける。

「たかみねはやと。お姉ちゃんは？」

俺はおじさんなのに、悠のことはお姉ちゃんか。何か悔しいな。

「私は雨宮悠よ。よろしくね。ついでにこの人は奥田健介って言うの」

そう言って差し出した手を、はやとも小さな手で握り返していた。その後も少し話し込んでいたが、そろそろ出勤しなければ、申し出時間を越えてしまう。

「それじゃあな、はやと」

「ええ、またね」

「ばいばい」

時間もなかったせいではほとんど話すことはなかったが、それでもはやはりどこか嬉しそうに俺と悠を見送ってくれた。そしてその目は、俺たちが出入り口を後にすると、寂しそうなもの変わった気がした。

「少し遅れるかもね」

「仕方ないだろ。ちよつくらいなら理由は何とでもなる」

病院から飛行場までは少々遠い。言い訳なら診察に時間が掛かったと言えば通用するだろう。俺としては仕事は雑用しかないので遅れようが良いのだが、悠はきちんと仕事が待っている。迷惑はかけられないだろう。かと言って何も出来ないのは仕方がない。

「あの子、どうして入院してるのかしらね」

前を見ながら珍しく悠が、他人の話題を積極的に持ち出してきた。「さあな。怪我って訳じゃなさそうだから、病気なんだろ」

俺たちと話している時も、時折看護師さんと言葉を交わしていた。慣れ親しんだ感があったから、入院して間もないというわけじゃないだろう。

「可哀想よね……」

悠が気落ちしたような表情で呟いた。

悠がそう思うのは、俺にも分からないこともない。遊び盛りの少年が、何らかの理由で病院から出ることが出来ない。窓の外から見える同年代の子供を見ると、やはり疎外感や孤独感を感じるだろう。俺は入院したことはないからその気持ちは汲んでやれないが、何となく分かる気がする。

「経験者は語る、か？」

俺が横目で悠に言うと、悠は静かに頷いていた。

「やっぱり子供の頃に入院すると、それだけ子供でいられる時間が少なく感じるかも」

悠の言葉は単に思うことを口に出しているわけではなかった。

「小児病棟じゃなかったのか？」

「違うわ。一般よ。だから周りは大人ばっかだったわよ」

そつけない悠の言葉。本人としてはあまり良い思いはなかったよ
うだ。まあ入院に良い思いなんてなかなかなさそうだけどな。

「どれだけ入院してたんだっけ？」

中学からの付き合いで、悠が入院したことがあることは聞いたこ
とがあつたが、詳細は聞いていない。

「最初に一ヶ月で、その後別のを患つて二ヶ月だったかしら。そ
の後は自宅療養で結果として半年近くは学校は休んでたわね」

やはり悠の言葉には色がなかった。俺は知っている。いくらそつ
けない性格だとしても、その中にも悠は感情を含ませる。それを読
み取るまでに俺は成人を軽く超えてしまった。我ながら恋人でもな
い人間のことをよく今まで気にかけていたな、と思うこともある。
そして、今の言葉にはその感情がなかった。こういう時はそれ以上
は聞かないで欲しい、思い出したくない等の意味合いを含んでいる
ため、これ以上は聞かなかった。

「じゃあ、はやとも似たようなものなのか？」

「どうかしら」

それ以上は自分のことも、はやとのことも何も言わなかった。

普通なら妙な空気が漂いそうだが、悠と居ればたまに会話が途切
れることは多いため、特に嫌な間ではなかった。

「あれ、うちのヘリだよな？」

話題を切り替えようと流れて良く景色を見ていると、フロントガ
ラスの先に、赤と白の模様の中型ヘリコプターが飛んでいた。四百
フィートほどの上空を、さらに上へと機体を上昇させている。

「藤沢パイロットね。確かローカルテレビの上空撮影だとか聞いて
たけど」

悠が一瞬俺と同じ方向へ目を向けると、すぐにハンドルを握る先
へ視線を戻す。ヘリを見ればすぐに誰か分かる。何しろヘリパイは
藤沢上官と若いのが二人。航空機部門には俺を含め八人という少な
い人数だ。バードフライに五人併用しているが、他の三人は俺たち
に指導係りでもある、ベテランばかり。その全員を束ねるのが藤沢

上官だ。

「あー、なんかそんなこと書いてたな」

昨日、無駄だがいつもの癖で勤務予定表をチャックしていた時に、上官の藤沢さんの担当に、そんなのが入っていた気がする。大手でもない放送局なんかは、自社ヘリなんてものに予算は費やせないため、たまにうちのチャーターしている。良い顧客だ。

「それにしても、藤沢パイロットの腕は相変わらず綺麗よね」

上昇飛行でなおも高度を上げていくヘリ。滑らかな操縦テクニクはあの人ならではの。さすがは三十年以上のキャリアを持つ人間だと、パイロットとしては尊敬する。

「あの人はベテランだからな」

確か社長と飛行場を共に立ち上げた仲間らしい。元々は大手航空会社のパイロットだったらしいが、退社してうちのパイロットをやっている。滅多に自分のことを話す人ではないから、俺もプライベートにむやみに立ち入るつもりはなかった。身近に似たような人間を知っているからな。それにしてもヘリパイの中では重鎮だから、その腕は格が違う。

「あんたも見習いなさいよ。風の息を読めるくらいにならないと」

藤沢さんは、ヘリを操縦する際、風の息、つまりは風の流れを読む。でなければ、ヘリは風に煽られるからだ。だが、俺の乗る飛行機は違う。それでも風の息は読めないと、操縦桿を取られ、失速する。ヘリも飛行機も空に上がれば常に自然との格闘なのだ。

「そんなもん、すぐに身に付くかよ。藤沢さんと俺を比べるなつて俺なんてまだキャリアになんて数えられない。それにあの人は俺の上司と言えど、ヘリのパイロットだ。俺は飛行機だ。同じ航空機と言えど、その操縦方法から、計器・エンジンまで扱いが違う。あの俺に俺は追いつくことはない。俺がヘリパイロットにでもならない限り。」

従業員用の駐車場に車を止めると、ようやく仕事の始まりだ。もう既にいつもよりも二時間も過ぎている。

「悪かったな。お前まで遅くなつて」

「何度も謝らなくて良いわ。私が決めたんだから」

そう言われては頭が上がらない。俺のせいだというのに、特に気にした様子はない。それ以上は俺がごちゃごちゃ言つても、煙たがられるだろう。俺はそれ以上頭を下げることはしなかった。

「私このまま整備格納庫に行くから」

「了解」

俺は事務所へ、悠は格納庫へ。それぞれの仕事場へとそこで別れる。二時間も遅ければ、彼女にとっては少々取り戻さなければならぬのだろう。俺と別れると小走りに格納庫へと向かっていった。

「早く治さないと、悠に迷惑かけっぱなしには出来ねえか」

俺は悠を見送ると、事務所の裏口へと仕事へ向かった。

「おはようございます」

事務所へ行くと、待機のパイロット以外はほとんどが出払っていた。元々パイロットは飛行機、ヘリを含めて二十人もいないため、数人残っていることは、それだけ仕事が入っていないということの表れでもあった。

「健介、遅かったな」

予め伝えていた時間を越えていたが、治療が長引いたとしか、同僚たちは思っていないようで、軽く挨拶を済ませると、それぞれの仕事へ取り掛かっていた。

「おはようございます、奥田さん」

受付の美友紀が手が空いたようで戻ってきていた。

「美友紀ちゃん、おはよう」

美友紀は健介の腕に目を向ける。

「まだ二日目だからね。すぐには良くならないよ」

その視線に気がついたのか、健介が苦笑する。

「そうですね。でも無理はしないで下さいね」

言いたいことを先に言われたように、美由紀が照れ笑いを浮かべ

ながら、健介に一枚の紙を手渡す。

「藤沢さんが、奥田さんが来たら渡すようにと」

受け取って目を向けると、そこには俺のスケジュールが組まれていた。

「マジで雑用係だな、これ」

そこには所内の清掃から、運搬用の荷物整理、受付助手などここへ入社したての頃のような雑用が、終業時間までみっちり組まれていた。

「ほんと人使い荒いな……」

まだ入社して十年も経っていないからということなのか、日頃から健介は飛ばない日は新人並みにこき使われることが多かった。パイロットとして運行業務に組み込まれるようになってからは、比較的楽になったが、外された今は、もはや新人扱いに戻されていた。

「何でしたらお手伝いしますから、遠慮なく言っして下さいね」

美友紀の言葉が健介には、光りを纏った女神にも感じられた。

昨日同様に、事務所待機している先輩たちからかわれながらも書類整理から次の運行予定の打ち合わせの手続きを済ませていると遅刻してきたこともあり、昼休憩となり、健介は一人管制塔の屋上へと足を運んでいた。飛行場内では一番高い場所のため、見晴らしがよく春風が心地良く吹き抜けていた。煙草に火をつけ、大きく吸い込み吐き出すと、空へと煙が消えていく。

「良いなあ」

眼下では整備中の航空機が数機、日の光を浴びていた。午後発便が出発前に最終チェックを受けているようで、整備班の姿が忙しく動き回っていた。

「あいつも良く働くよな」

健介の視線の先には、副チーフとしてテキパキと指示を飛ばし、自分も率先して作業にかかっている悠がいた。

メリハリが利く悠は、仕事とプライベートを完全に切り離しているため、別人のようだった。そんな悠を眺めていると、自分が雑務に

追われ根を上げていることが、小さく感じてしまつ。怪我をしたのも、自分の単なる不注意。それに悠を巻き込むように世話になり、遅刻までさせてしまつているのに、彼女は忙しそうにしながらも、楽しそうに仕事をしている。それに比べると、愚痴をこぼしながら自分の怪我に甘え、今こうして空を飛べない代わりに、少しでも空に近いところで風を浴びている。

「まだまだ甘ちゃんだな、俺」

まだ半分も吸っていない煙草を携帯灰皿に押し込み、滑走路に向かつて深く深呼吸をすると、背を向けた。

「健介、昼飯まだだろ？ 食いに行こうぜ」

智史は午前の飛行がなかったため、整備班と共にドッグにいたよつで、作業着姿だった。

「お前、何してたんだ？」

午後からの飛行が入っているはずだから、飛行経路の確認と天候チェック等としなければならぬことがあつたはずだ。

「何つて、お前の機体の確認してたんだよ」

普段なら勝手に人の相棒を弄るな、などと言うのだが、今回に限つては何も言えなかつた。しばらくはバードフライとしての活動にも携われないのだから、智史が俺の代役でバードフライに入るのだから、俺の相棒もしばらくはこいつと飛ぶことになる。

俺がいない間に倉庫入りをするよりは、ライバルとは言えど空を飛んでいるほうが、フルートにも良いだろう。ここは大人しく引き下がるのが、相棒を思つてこそだ。

「んじゃ、飯いくか」

二人して食堂へと行くと、午前の飛行から戻ってきたパイロットや、整備士で賑わっていたが、中には地域住民の姿もあつた。うちの飛行場は見学は自由で、観光や地域住民のために食堂も開放していて、昔はいまいちだったらしいが、最近はメニューのバリエーションも増え、味質も向上しているとなかなかの評判だった。

「健介、席取つといてくれ。俺が買ってきてやる。いつものか？」

「了解。それと箸が使えないんだ。パスタ系で頼む」

利き腕が不自由なのは、色々と慣れないうちは不便だし、周囲に気を使わせてしまう。居心地の悪さを感じるのは否めなかった。

「健介、お前のその腕、全治いくつ？」

A 定食をがつつきながら、開いている片手で気象図の確認をしながら、俺の怪我を聞いてくる。どれか一つに絞れよと言いたいが、時間が押していることもあるのだろう。

「全治二ヶ月つてとこだ。航空祭には無理だな」

自分のせいとはいえ、言つて悲しくなる。

「じゃ、八月くらいまでは飛べねえな」

「分かつてるさ」

夏の空は好きだっただけに、飛べないのはいたい。

「無理して長引かせるなよ。フルートも俺よりもお前を待ってるぞ、きつと」

こいつは俺が飛べないから自分が飛べるというのに、それほど嬉しそうに見えないのは気のせいか。それとも俺を気遣っているのかよく分からないが、その言葉だけは受け取っておいた。

「じゃ、俺は支度あるから先行くわ」

俺がまだ半分ほどしか食い終わっていないのに智史は既に食べ終わり、食堂を後にした。普段なら俺もそれほど時間を取らないが、慣れない右腕だけではどうしても時間が掛かってしまう。

「奥田さん、隣良いですか？」

カルボナーラと奮闘していると、美友紀ちゃんが持参してきたのだろうか、可愛らしい巾着とケーキセットを手に入っていた。

「いいよ」

昼時は混雑するため、なかなか席がない。一人で奮闘するのも虚しいから先ほどまで智史のいた隣を譲った。

「奥田さん左利きだったんですよね」

慣れない手つきでフォークを操る俺を見て、大変そうですねと声をかけてくれる。からかつていないのが良く分かるから、その気使

いは素直に嬉しい。

「美友紀ちゃん、弁当は自分で作るの？」

俺なんかは食堂に頼りきりだが、女子社員の中には節約やダイエツトなのだろうか、自分で作ってくる子が多い。朝も早いのに良くやるなあなどと感心してしまう。

「妹が学生だから、ついでに用意してもらってるんです」

照れたような笑みで、弁当を突く姿は愛らしかった。

「実家暮らしだったんだ？」

妹さんが学生なら、母親がついでだからと用意してくれているのか。安上がりだと考える俺は野暮なのだろうか、自嘲してしまっ

た。
「はい、一人暮らしでも良かったんですけど、まだ社会人としての自覚が足りないみたいで……」

最期まで言わずに照れてしまっていた。その様子から何となくその自覚とやらが何なのか予想できてた。俺も入社当時はよく似たようなことがあったからな。

そのまま午後雑用があるが、比較的暇な俺は、食べ終わっても美友紀ちゃんが食べ終わるのを待っていた。

「美友紀ちゃんってケーキ好きなんだ？」

食後に俺はコーヒーを買って、美友紀ちゃんはケーキセットを食べていた。

「甘い物は比較的なんでも好きなんですけど、一番はケーキですね
あんまり食べると太っちゃうから、週に一、二度なんですけどね
と、笑いながら付け加えた。

「美味しい？」

何となく言葉が漏れた。幸せそうに食べている姿を見ると、味は問題ないのだと思う。

「凄くって感じじゃないですけど、美味しいですよ。一口どうですか？」

レストランも兼ねるようになってから、質が向上し味も良くなっ

たのだろう。普段ケーキは食べないからあまり良く分らないが。

「いや、俺は良いよ。ケーキ類は苦手なんだ」

洋菓子系はそれほど得意じゃない。あっさりしたものなら良いが、味がしつこいものが多くてあまり好きじゃない。

「そうだったんですか。ちよつと意外でした」

「そう?」

「奥田さんってあまりお酒飲まないですよね? だから甘いのはお好きなのかと思ってました」

確かに酒はあまり飲めないが、だからと言って甘いものもそれほど好きって訳じゃなかった。

「あっさりしてるのは良いんだけど、しつこいのかはちよつとね」
「そうですか……」

甘い物の好みを言っただけなのに、美友紀ちゃんが残念そうに見えたのは気のせいかな。一緒に食べてあげたほうが良かったか。

「奥田さん、午後からも頑張つて下さい」

昼食を終え、仕事のある美友紀ちゃんと別れる。俺も一応仕事だが、それほど時間のかかるものじゃない。書類の整理なら、何とか時間内には終わるだろう。

「ちよつと一服していくか」

すぐに動くと腹痛がする。それに煙草が吸いたかった。

「健介?」

食堂を後にして、近くのベンチで一服しているとちよつと昼食なのだろうか、悠がいた。

「今、昼か?」

「あんまり時間無いからパンだけど」

やはり朝が遅くなったせいで、仕事が押しているようだった。

隣に腰を下ろし、パンを食べ始めた悠に煙草の煙が行かないように、風下に立つ。

「お前、これから朝は、俺のこと気にしないで良いぞ」

ろくに昼も休めない状態なのに、俺の負担を抱えさせてばかりで

は、やはり立場がないのもあるが、性格上俺がそれを許せない。

「何よ、急に？」

やはり悠なのだと思ってしまふ。全く気にも留めていないようだし、忙しいだけで、疲れを感じさせないように振舞ってくる。浅い付き合いですわね。もう十年近く知り合った仲だ。こいつがどんな性格で、どんな人間かなんて八割は分かっているつもりだ。

「無理してるだろ？ 俺相手にバレてないとも思ったか？」

正直言つと、さっきまで分からなかった。普段仕事中は決して素性を見せない奴だから、周囲も気づいてないか、気にするに値するほどではなかったのだろう。

「何のこと？」

惚けて見せる悠。こいつの悪い癖だ。人の心配はするくせに、他人に自分のことは心配させまいとする頑固な悪い癖。この飛行場に、こいつの癖を知っているのは、俺や藤沢上官くらいだろう。

「良くは見てなかったが、テールローターの調節でも指示した時、他の連中がドッグに入って行った後、疲れたみたいにちよつとふらついてただろ？」

テールローターとは、ヘリコプターの主要心臓部の一つで、ブレードと呼ばれる天頂部のメインローターが回転することで、その反作用によって胴体がローターの回転とは逆に回されるため、それを防ぐ役割をする機体後方部に取り付けられている小さなブレードのことだ。

ヘリコプターの整備中の様子を昼飯前に見ていた時、誰も見ていないから油断でもしたのだろう。俺はその様子を見逃さなかった。

「あんたまたサボってたわけ？」

疑惑の視線を向けてくるが、今の俺には通用しない。

「仕事片付いて、一服入れてた時に見えたんだ」

実際はまだ片付いてないが、本音を言えば悠に呆れられる。

「別にふらついたわけじゃないわ」

悠はそう言うが、それ以上弁明をすることもないので、健介は自分の言っていることが間違いだとは思わなかった。下手に言い訳をしない潔さが、下手に嘘のつけない何よりの証だった。

「お前、最近忙しいくせに、自分から仕事入れてるだろ？」

あくまで推測だが、悠は俺が思っている以上に疲労を抱えていて、その上で俺の面倒まで見て、仕事場でも自宅でも思うように休むことが出来ず、妙な緊張状態に常に身を置いているため、その緊張が解けた時に一気に負担が襲ってきているはずだ。化粧の下の目の下に隈が出来始めている。

「心配するほどじゃないから」

反論する様子はない。凶星だと思うことにした。

「お前が自分で仕事を入れて多忙にするのは別に関係ないが、その上俺のせいだってのは、俺が嫌なんだ」

「私は気にしてないって言ってる」

「俺が嫌だと言ってる。もう少し、他人よりも自分を労われ」

お互い一歩も引こうとしない。二人の悪いところがぶつかり合い、大したことじゃないのに、終わりが来ない。

「午後便の出発アシストがあるから、私行くわ」

逃げるように悠が腰を上げると、俺の前から静かに歩いていった。

「やれやれ。素直じゃないのはどっちだよ……」

俺はその背を見送ることしかしなかった。下手に言っても拗れるだけだ。それは嫌というほど自覚している。

「俺も戻るか」

遠くから聞き慣れたエンジン音がいくつか混じって聞こえていた。そろそろ午後便が出発を開始するのだろう。その音に背を向けると俺は事務所へと戻った。午後の仕事も手続きの書類の整理や、荷物の仕分けの伝票精算、帰社するパイロットのためにデスクの掃除等等など雑務ばかり。入社当時と比べると変わりのない仕事で、これからも続くのかと思うとやる気も失せてくる。

「奥田さん、大丈夫ですか。お手伝いすることがあれば遠慮なく言

「つて下さいね」

そんな中でもめげずにこなせるのは、受付の仕事で手が開いた時に俺を気遣いに戻ってきてくれる美友紀ちゃんの心遣いだ。その真っ直ぐな気持ちは本当に嬉しいが、あまり手が抜けなくなってしまうのまた、俺が順調に仕事をこなせる理由だろう。

「ありがとう。でも大丈夫だからその気持ちだけ受け取っとくよ」
強がってしまうのは、男の性だろうか。素直に甘えれば仕事はもっと速く片付くだろうが、周囲の同僚たちの目が針から刃物へ変わっていくのも確かだ。

「そうですか。でも遠慮しないで下さいね」

そういつて再び仕事へと戻っていく美由紀ちゃんの背中を笑顔で見送り、心で惜涙した。

「それじゃ、お疲れ様でした」

パイロットの時はフライトスケジュールの調整等で、時間通りに終わることは少なかったが、今は俺が定時に終わっても誰も咎めることはなかった。裏口から出ると、まだ夜間飛行組みの仕事が活発に行われていた。

「健介」

外は既に夕闇の中に埋もれているが、寒さはそれほどではないため一息つくには心地良い夜だ。

「もうお前も終わりか？」

悠はまだ作業着だ。これから着替えにでも戻るのだろうか。

「そうじゃないの。もう少し時間掛かりそうだから、食堂で夕食摂ってもらえない？」

「どうやらまだまだ仕事の途中のようで、やはり俺のせいだろう。」

腰に装着している無線機から悠を呼ぶ声が聞こえた。

「分かった。それよりも早く戻れよ、呼ばれてるぞ」

「終わったら私も行くからそれまで時間潰してて」

悠は言い残すと再び来た道に戻っていった。今の悠には、昼のわだかまりは感じられなかった。それだけ仕事が忙しいのか、性格か

らなのかは判断が難しいが、とりあえず悠とまた冷たい言い合いをすることが回避されただけでも儲けものだな。

「しばらくは食堂で時間を潰すか」

悠が来るまでどれほどの時間が掛かるかはわからないが、食堂なら二十時まで営業しているから問題ないだろう。腹も減ったことだ、悠には申し訳ないが先に夕飯にすることにした。食堂は夜間組のパイロットや整備士たちばかりだが、その中で一人俺は慣れない右腕でオムライスと奮闘を続けていた。

「健介、まだ食べてたの？」

食堂のメニューは夜間に限り昼間に比べてボリウムがアップしていて、なかなか食べるのに苦労を強いられた。

「終わったのか？」

「うん。ここ良いでしょ？」

悠も仕事を追え、定食を手に俺の正面に腰を下ろした。

「はい、これ」

そう言っただけで悠が自分のお盆から蓬団子を俺の前に置いた。

「おっ、くれるのか？」

俺の顔を見て少々可笑しそうに笑いながらも頷いた。これは願ってもないものだ。和菓子は好きだ。特に団子系はいくらかでも食えるかもしれない。しつこくなく、あっさりとしていて腹に溜まる。これほど良い菓子はないただろう。昔の人はよくこんな美味なるものを生み出したものだ、感謝の極みを感じないこともない。

「相変わらず団子が好きなのね」

「当然」

目の前に団子を出されてから、水を得た魚のようにオムライスを食す俺の右腕はその動きを機敏にした。そんな俺を、子供を見る母のような目で悠は軽く笑いながらも、俺に合わせるように夕飯を食べていた。些細なことでも、気晴らしにはなっているようで、仕事の話をする事なく、俺たちは帰路に就いた。

二・クロツシングテイリー

幾日が過ぎ、久々に仕事前に悠と共に診察へ行くと、ふと思い出すことがあった。毎日診察に通う必要もないため、忘れていた。

「そっぴや、最近はやとを見なくないか？」

「そっぴや、そっぴや」

診察待ちをしながら、ここ何回かは予約の時間ギリギリに着いて診察を済ませ仕事へと駆け足気味だったため、はやとのことを考える暇がなかった。今日は予約を取っていなかったため気長に待っていたが、はやとの姿どころか、声すらも聞こえてくることはなかった。

「あの、すみません」

別段気にすることはなかったかもしれないが、悠は気になるようで近くを通りかかった看護師に声をかけた。

「はやと君って子は、退院したんですか？」

悠の言葉に一瞬きよとした顔を見せた看護師だったが、すぐにそれが誰なのか思いついたようで、納得したような顔を見せた。

「高峰隼人君は……」

そこで先ほどまで笑顔だったが、微かに表情が険しくなった。言葉を詰まらせた彼女に俺と悠は顔を見合わせた。言葉を交わさずとも、互いの目ではやとの容態が芳しくないのだと感じ取った。看護師の彼女も規則からか詳細は口にしなかったが、その表情が二人の考えをもの語っていた。

「ではお大事に」

いつものように信憑性を疑わせる診察態度でありながら、その手際の良い医師の診察を終えると、悠がどうする？ と目で問いかけた。それは支払いや仕事の事ではなく、先ほどのことを俺に訊ねているのだとすぐに分かった。

「今日は時間も時間だ。また次にでもしよう」

俺の言葉に悠はあっさりと言いて毎度のごとく支払いを済ませてくれた。急に押しかけるのは失礼だろう。きつと悠もそう思ったから潔く引いたのだろう。俺たちはそのまま仕事へと向かった。

「それじゃ、私はこっちだから」

いつものように事務所前で悠と別れ、俺は事務所へと向かった。

一通り挨拶を済ませ、予定表を確認すると、そこには相変わらずの雑用ばかりが並んでいた。

「今日はバードフライ、朝から訓練か」

今日は業務が少ないからか、バードフライのメンバーは朝からブリーフィング室への集合が書かれていた。本来なら俺もそこに加わるのだが、控えの智史の所に俺の代わりに機体番号が示されていた。フルートも今は智史の愛機か。心の穴が開いた感じた。

「健介、よく見ておけよ。俺のフルート捌き」

人が書類整理をしていると、ブリーフィング室からバードフライの面々が打ち合わせを終えて出てきた。これから訓練に入るようで、智史が自分の胸を叩いて俺を指を差し、荷物を取るとそそくさと出て行く。悔しいが今はどうにも出来ない。一通り急ぎの手続き等の整理を済ませると、いつものように管制塔の屋上へ外付階段を上がる。幾つかの機体が発アシストを受けていた。

藤沢上官たちの主のヘリコプターであるエアロスパリアル。ヘリのこととは詳しくは知らないが、最大搭乗員数十三人のウチの飛行場じや髓一の大型ヘリだと言う事は見てわかる。これから観光飛行のよううで、お客さんが乗り込むのを美友紀ちゃんたちが迎えている。そこから視線を横へずらすとバードフライの曲芸飛行機であるsu-26が五機、エンジンを指導する前の点検を行っており、悠の姿も見えた。気丈な態度で、淡々と百以上ものチェック項目をパイロット共に確認していく。よく五機も所有することが出来たなあと社長の懐には感心する。

「はぁー……………」

意味もないため息が煙草の煙と共に、春の夜空へと消えていく。

誰が干しているのかは知らないが、仮眠室と医務室のシートが風に揺れていた。

「明日は、と」

することが無いと仕事にも身が入らない。携帯を取り出しスケジュール帳を見る。フライトスケジュールなんてからつきしだ。メモリーしてあるのは、通院の予約時間ばかりだ。

「明日は、はやと、いるかねえ」

何故だかあの病院は、はやとがいてこそだと俺の中に根付いてしまっている。あいつがいない時に診察を受けると、医師の下らない話がより一層下らなく感じてしまう。

「それにしても、悠ももう少し気を楽しにした方が良さだろうに」

テキパキと指示を飛ばし、次々とバードフライのメンバーを送り出していく。藤沢上官も同僚とフライ機が飛び立つのを待っている。「仕事しろってか？」

俺に気づいた上官がコクピットから仕事をしると、手指示をこちらへ出している。煙草を携帯の灰皿に押し付けると、敬礼をヘリやフライ機に向けて一礼し戻ってきた時に上官たちにネチネチ言わないように、事務所へと戻った。

「これからしばらくは業務はなしか」

ヘリが飛び立つのを見送ると、バードフライ機が滑走路上空をプロペラ機特有のエンジン音を轟かせて俺の目先上を飛んでいった。これから訓練ということは、しばらくの間は飛行場の空域は飛行制限される。それでも精々二時間程度もない。

「奥田さん」

窓越しにその光景を馬鹿みたいな表情で眺めていると、美友紀ちゃんか肩を叩いた。

「どこかしたの？」

「あの、しばらくは訓練で時間も空いちゃいましたから、お昼でもどうですか？」

時間的にはまだ昼には少しあるが、バードフライが訓練を開始し

た以上、電話番程度しかないだろう。特に俺なんかは筋トレ程度しかすることが無い。

「今なら食堂も空いてるか」

「はいっ」

明らかな給料泥棒行為だが、誰も今は俺を咎める者はいない。藤沢上官も香田先輩もいないんだ。今のうちにオアシスで一息つこう。

「腕はどうですか？」

「相変わらずだよ」

特に何も変わっていない。腫れもまだ残っているし、痛みもある。だがそんな不恰好は見せたくはない。我慢できる範囲だから少々無理をしてもどうって事はない。

「あまり無理はしないで下さいね」

「大丈夫」

近隣の常連も多い食堂。中には午後に備えて早めの昼食の整備士たちもいる。特に男の目が必ず俺を見ていくのは、少々痛い。美友紀ちゃんを独占というのが気に入らないのだろうな。別に俺はそういうつもりじゃないんだけどな。

「奥田さん、毎日大変じゃないですか？」

そんな目を知ってか知らずか、美友紀ちゃんは周囲に目を向けることなく話題を色々と振ってくれる。話題の少ない俺をフォローしてくれる優しさは素直に受け取らせてもらおう。

「確かに。色々と制約はあるけど、悠、いや雨宮に色々と手助けはしてもらっているから、何とか大丈夫」

その一方で本当に申し訳ないと思う。嫌な素振り所か、愚痴すら言わない。だからこそ、俺が息苦しさを感じることはある。昔から知っている奴だから、俺も強くは言えない。

「雨宮さん、きつと嫌だとか思っていないですよ。むしろ……」

美友紀ちゃんが何かを言おうとして、顔を上げた。その先には今のうちに軽く食事を済ませようと思ったのか、悠が食堂の入り口に

いた。俺たちに気づいていないようで、他の整備士たちと手前のテーブルに腰を下ろしていた。

「やべ。そろそろ行かないと」

何気なく時間を過ごしていたら、もう一時間近く経っていた。藤沢上官たちが戻ってくる前に、午後以降の便の気象情報収集をしておかなければ。

「美友紀ちゃん、ごめん。俺、先に戻るよ」

「へっ？ あ、はい……」

残っていたお茶を一気に飲み干すと、足早に俺は事務所へと戻った。食堂を後にする時、悠と目が合い、特に深い意味はなかったが、無理はするなよとアイコンタクトを送っておいた。

「まだやってるんだな」

事務所に戻り、気象庁から送られてくる気象情報を元に管制への情報整理していると、外からバードフライの練習音が幾重にも響いてくる。俺が本来いるはずのポジションも智史が見事にこなしている。見ていてやるなあと感心もするが、やはりそこに自分がいないことに悔しさを感じずにはいられなかった。

日本にはいくつかの曲芸飛行チームがあり、それぞれが多くの人々を魅了する演技をする。その中で代表なのは航空自衛隊第十一飛行隊のブルーインパルスだろう。自衛隊の広報任務を主とする精鋭集団だ。俺たちなんて足元にも及ばない。使用機種が違ってもあるが、あちらはプロ中のプロだ。俺たちは各自通常業務の仕事の傍らで、訓練を積んでいる。経験する飛行時間が違うため、技の良し悪しなんて見る前から分かりきっている。だが、それでも人々を魅了させる差はあっても、楽しんでもらうために飛ぶという気持ちは負ける気はしない。勝てる気もしないが。

「次はレインフォールの練習か」

レインフォールとは技の一つで、会場正面をデルタ編成、つまりは四機で三角編成で進入し、ループで上昇し、真下を向いた状態でスモークをオンにして会場正面まで編隊を維持したまま降りてきて、

大きく散開する。流石に本番前にならないと、スモークは出さないため、迫力はいまひとつかもしれないが、ジェット機とは違って、味があつて良い。披露する側に見ればGがきついけどな。

「さ、仕事仕事」

何となく見る気になれず、背を向け仕事を再開した。外を見ないようにブラインドを下ろした。それでもエンジン音が俺の耳から離れることはなかった。

「お疲れ。今日は早く終わつたみたいだな」

一足早く仕事を切り上げて、悠が来るまでのんびりとベンチで衣服していた。

「まだ残つてたけど、他の子たちにもう上がつて良いって追い出されたわ」

いつもより少々早めに来た悠は、どこか不完全燃焼という具合で、いまいち納得出来ないまま仕事を終わらされたらしい。そうさせられるほど、本人が気づいていないだけで、傍からは疲労しているように見えたのだろう。

「同僚の気遣いは素直に受け取つとけ」

俺の言葉に、意味が分からないのか小首を傾げていた。

車に乗り、いつも通り家に向かう。

「そついや、お前、この曲好きなのか？」

仕事の話題を出すのは悠の表情を見て、やめた。だが、同じ職場で今は同じ家にいるとなると、仕事以外でなかなか話題がない。最近知り合つたのならともかく、もう十年近くも知り合つてると、本当に話題がない。黙つていても良いのだが、そういう雰囲気は感じなかった。運転している悠の横顔が、何か話すことない？ と待っているように見えた。

「これ？ そうね、最近結構気に入ってるかも」

ピアノ曲で、誰が作った曲なのか俺には分からない。ただ、流れるようなピアノの音色は、音のせせらぎとでも喻えようか。止むことのないその音色は聞いていて、すうと心が静まりながらも、高揚

するようなテンポが心地良く感じる。

「誰の曲？」

ここ数日悠と出勤する時は、俺が知っている曲、それは恐らく誰でも知っているであろう名曲と呼ばれるものばかりだった。だが、昨日辺りからこの曲がかかっている。俺は聞いたことがないが、違和感を感じなかった。スツと春秋の空気のように体の中に入ってきた。

「シヨパンよ。エチュード練習曲作品二十五、第一番、変イ長調、エオリアン・ハープよ」

「シヨパン？」

名前は聞いたことがあるが、どんな曲が代表曲だったか覚えていない。だから、曲名すら覚えられない。ダメだな、俺。聞けば分かる程度の知識しかない。

「どんなんが有名だっけ？」

「エチュード練習曲作品十、第三番、ホ長調の別れの曲くらいは聞いたことあるでしょ？」

そんな難しい言葉を言われてもピンと来るものがまるでない。悠が俺を見て、それもそうねと、何かを感じ取ったように今かかっていた曲を変えた。

「これよ。昔学校で聞いたことあるでしょ？」

曲目が変わって、先ほどのよりも静かで悲しみを感じさせながらも、優しい美しさを感じさせるような曲に変わった。これは何回も聞いたことがあった。

「ああこれが、シヨパンか」

曲名は知らずとも、聞けば納得するものが俺のクラシックを理解する方法だ。あまりそういうのが分からない俺には、きちんと理解を示す人からは嫌われるかもしれないが、俺はこれで良いと思っっている。昔は貴族しか聞けなかったものだ。こうして気軽に聞ける時代になったのだから、人それぞれの鑑賞法で良いだろう。

「これも良いけど、最近はこのほうが良いのよね」

そう言っただけが再びエオリアン・ハープに変えた。

「俺もこっちの方が好きだな」

別に悠に合わせるわけじゃない。こっちの方が明るくて気持ちがちよつどいい感じに安らいで、高まる。体を音のシャワーが、穢れを落とすように流れるような感覚になる。俺が今まで聞いた中でも、圧倒的な音の連続だ。結局、帰宅する車中は何度も同じ曲の繰り返しだった。それでも飽きさせるところか、家に着いても、俺の脳裏に焼きついたその曲は寝るまでどこかで鳴り止むことはなかった。

「いつまで寝てるのよ」

「……んあ？」

シャツとカーテンが開かれ、眩しい朝陽が差し込んで眠気がゆつくりと爽やかな朝に消えていく。そんな目覚めだったら、すつきりと起きられるというのに、実際はまだ瑠璃色な空に朝陽だなんてものは差し込みするどころか、顔すら見えない。

「あんた準備に時間かかるんだから、いつまでもぐーたら寝てないの」

声だけで起こすと、音が遠ざかっていく。まどろみの中でも悠が朝食の用意にでも戻ったのだろうと、予想がついた。数回の欠伸をした後、首を左右に動かす。良い感じに音が鳴ると、気分もすつきりしてくる。それでも忘れていた左腕の痛みが再発してくる。薬が切れるとやはり痛いな。

「おはよーっす」

一通り顔を洗って髭を剃ると、着替えには時間がかかるため、ジャージでリビングに顔を出す。

「はい、おはよう」

俺を子供のように軽くあしらうと、いつものように旅館の朝食のようなメニューを並べていく。お互いにラフな格好で、まだ髪も整えていない。

「お前、髪にウェーブなんてかけてたか？」

最近ようやく右手でも箸が何とか扱えるようになり、四苦八苦し
ながらも何とか食せている。

「かけてないわよ。寝ていてついたらだけよ」

寝癖かよ。それでも寝癖に見えないのは驚きだ。俺なんかボサボ
サだ。

「それよりも早く食べなさいよ」

何だかんだ良いながら、悠は既に食後のお茶だ。俺なんか半分も
食べていない。

「はいはい」

先に化粧やらしていれば良いのに、待っているなんて物好きだな
あなどる思いながらも、急いだ。

「今日もこれか？」

身支度を済ませ、先に診察へと向かう。その車内は昨日同様にシ
ヨパンのエオリアン・ハーブがかかっている。

「嫌？」

「いや、別に」

聞いていて飽きないというか、違和感がない。何となく起きてか
らも思わずハミングしそうなくらい、聞く分には難しさを感じられ
なかった。

「もうすぐ着くわよ」

なんだかんだで、病院に着くまで5回ほど繰り返して聞いた気が
する。

「あーっ、お姉ちゃんにおじちゃんっ」

時間までしばらく朝の連ドラを悠とのんびりと見ていると、小児
病棟の入り口から久しぶりに見る少年がいた。

「はやとじゃんか」

歩いてくるが、今にも駆け出しそうな表情だ。こちらに向かって
楽しげに何度も俺たちを呼んでいる。

「おはよう、はやとくん」

見慣れたニット帽とパジャマ姿で、朝の散歩をしていたようだ。

「久しぶりだな。元気してたか？」

病人に対してその挨拶はどうかと思いながらも、はやとの元気な姿を見るとそう言いたくなる。

「きのうまでねてた」

はやとはあっけらかんとした表情で、そう言った。

「具合、悪かったのか？」

俺の問いに、うんつと元気に頷く。ここは病院だから寝ていたということは、単に寝ていたわけじゃないのだろうと言うことは、俺にも悠にもすぐに理解出来たが、はやとはいつものことだと、気にする様子を見せないで、俺たちも顔を見合わせたが、それ以上はやとに聞くことはしなかった。

「おじちゃん、まだ治らないの？」

俺たちの前の椅子にこちらに乗り出すように振り返りながら、色々と話しかけてくる。

「そんなすぐにはなあ……」

骨折がすぐに治るなら、俺はここには来ない。はやとにはここが自分の家の感覚なのか、それとも自分のことをきちんと理解しているのか、入院していないのに何度も足を運ぶことが不思議に思うことのようにだ。

「そっかあ、じゃあぼくのへや来る？」

いきなりはやとが自分の部屋に来ないかと誘ってきた。思わず目を見開いた。

「いきなりどうしたの？」

悠も困惑気味ではやとの顔を見ていた。

「だってここにいてもひまでしょ？」

「いや、暇ってわけじゃないんだけどな」

俺の言葉に、そうなの？ とはやとが首を傾げている。それに悠が理由を説明していた。

「そっか。お姉ちゃんたち、ずっとここに居るわけじゃないんだ……」

この後仕事があることを聞いて、はやとの表情が少しふさぎこんでいた。良心が痛むが、ただでさえ仕事に遅れているのだ。これ以上遅れることは、俺はともかく悠に負担を与えてしまう。

「今日は無理だけど、明日は行っても良いかな？」

悠が微笑を浮かべてはやとを見た。悠は明日、仕事は休みだ。俺はいつものように雑用が入っている。折角の休みだというのに、良いのだろうか。

「うんっ」

悠の申し出に、はやとの顔に眩しい太陽のような笑顔が浮かんだ。それを傍から見ていた俺には、悠には失礼だったかもしれないが、仲の良い親子に見えた。お互いの笑顔には温もりが満ちているようだった。

「じゃあな、はやと。またな」

「うんっ、おじちゃんもね」

何故俺のことはおじさん呼ばわりなのだろうか。そんなに年には見えないと思っているんだけどな。ニット帽を軽く右手でクシャッと撫でると、嬉しそうにはやとが笑った。病院という少々特殊な環境下での暮らしには、こういう笑顔があるだけで、患者も医療従事者も和めるものだと感じた。

「はやと君、またね」

普段は人には見せないような優しい笑みで、悠もはやとの目線に合わせて腰を下ろし、はやとが約束つと差し出した右手の小さな小指に自分の指を絡めて、指きりげんまんと歌っていた。

診察を済ませ、病院を後にするまではやとは楽しそうに俺や悠の後について回っていた。朝から賑わう院内に、はやとのような小児病棟から遊びに来た子供の姿がちらほら見受けられた。はやとのようにひょうひょうと入院生活を楽しんでいるように見せる子もいるが、それはきつといつか、家に帰って学校へ行き、みんなと遊んで勉強するんだと頭の中で思い描いているからなのだろうかと、漠然と俺の中に浮かんだ。

「それじゃ、行くわよ」

「ああ」

病院を後にして仕事へ向かう。駐車場から国道に出る際は、病院の正面ゲートを通る。自然と病院の入り口が視界に入ると、つい中を見てしまう。

『あつ………』

そんな声が聞こえたような気がした。悠は既に運転するため前を向いていたが、俺にははっきり見えた。入り口の自動ドアがすぐ横にあるのに、そこから出ることを許されず、隣の大きな窓にへばりつく様に、こちらを見て小さな口がそう開いていた。瞬間俺の中で何かが全身を締め付けた。それを悟られないように、右手を上げるとそれがはやくに届いたかどうかは分からないが、気が楽になった気がした。

車内は『エオリアン・ハープ』の次の収録されていた『別れの曲』がかかった。それが一層俺の気持ちを締め付けたのかもしれない。

「はやと君、いたの？」

「………ああ」

自分が骨折くらいでクヨクヨしているのが、今度は本当に情けなく思った。

「あんたも早く治しなさいとね」

それを見透かした悠が、俺に横顔を見せながらハンドルを切って、病院がスーパールの影に消えた。

「そつだな………」

仕事を始めても、いつものように情報の整理や掃除、来場したお客の相手など、もはや自分がパイロットだということを忘れたようなものばかりだったが、今日はいつにもましてやる気だった。些細なことでも良いから何かしていないと落ち着かない気分だった。

「奥田、それ終わったらこっちも頼んだぞ」

「はい、分かりました」

いつもなら、ふてくされ気味な俺の返事に、叱りを飛ばしてくる

藤沢上官も今日は戸惑い気味に見えた。無理もないかもしれない。上官だけじゃなく、香田先輩も智史も美友紀ちゃんまでもどこか俺に接する態度がおかしかった。

「おいおい、一体どういう風の吹き回しだ？」

一息入れていると、智史が業務を終えて休憩に来た。

「何が？」

「お前、今日なんか変だぞ？ いつにも増して仕事への取り組みが良いじゃねえか」

胸ポケットから煙草を取りだし、火をつける。俺は既にコーヒ一片手に一息入っていた。

「たまにはこんな日もあるんだよ」

大きく煙草を吸うと、窓の向こうに滑走路を飛び立ったばかりの航空機に狙いを定めるように、吐き出した。

「らしくねえな。あれだけ雑用を嫌ってた奴が、淡々と仕事をこなすなんてよ」

余計なお世話だ。口にはしないで、もう一度煙草を吸った。面白いことを見つけたような顔で智史が俺を覗き込んでくるが、無視しておいた。

「昼からはフライの訓練だろ？ 先輩があそこで待ってるぞ」

俺が固定された肘で窓をさすと、その先には一人フライ機の調整を行っている香田先輩がいた。それを見た智史が焦った顔で煙草をもみ消してコーヒを一気に飲み干して駆けていった。

「しつかりしてくれよな。俺のフルート、乗せてやってるんだからよ」

俺も早々に休憩を切り上げると、航空祭の打ち合わせのための書類のコピーに向かった。外からは一日中絶えることなく航空機の俺を誘惑させるようなエンジン音が絶えることはなかった。

「俺も早くこれを治さないとな」

一週間を超えると腕の痛みもそれほどじゃない。寝起きが辛い程度で、後は相変わらずの一定の安定した軽い痛みくらいだ。おかげ

で悠にも僅かだが余裕を見せられるのだが、なかなか上手くいかず空回りばかりだ。風呂に入ればビニールの中に湯が入り、ギブスが濡れ、食事にも赤子のように丸いものや滑るものはなかなか掴めず、落としてしまう。寝返りを打って思わず左腕を無意識に踏んでしまい、痛みで叫び声に近い何とも言えない声で深夜に起こしてしまふこともしばしばだ。着替えも上着そうだが、下も履きにくいし、靴下もそうだ。介護させてばかりな気がする。仕事中は極力、人の手助けは受けられないようにしているが、俺でも遠慮するくらいの気を使われることは多い。気持ちは嬉しいが、重荷に感じてしまふこともある。少し前みたく、気を使うことなくじゃれ合う様に仕事をしている頃が懐かしかった。

「奥田、資料持ってきてくれ」

「はい」

自嘲感傷に浸るは性じゃない。気合を入れるように深呼吸を二回すると、先ほどコピーした書類を持っていった。

「お疲れ様です」

控え室へとすれ違う帰航の途に就いたパイロットたちに一礼して俺は午後の休憩に今日はベンチな気分だったため、食堂で少々焦げたまいたらし団子を二本買い、ベンチへと向かった。

「何か頭から離れないなあ」

団子片手に思い浮かんでくるのは、エオリアン・ハーブの曲の音に乗って、はやとの表情が浮かんできた。俺は自慢じゃないが病院なんてこの骨折が初めて世話になったようなものだ。だから余計にはやとの病院暮らしと言うものが気がかりになるかもしれない。はやと本人は楽しそうにしていたし、入院経験のある悠も俺ほどじゃないが気にはしているが、それもただの樂觀に見える。

「何が離れないの？」

ベンチの背もたれに身を預け、団子を一つもぐもぐと噛みながら空を見上げていると飛行場の方から悠の声がした。

「いや、大したことじゃないさ」

悠も休憩だろうか、二つほどパンと飲み物を持っていた。自然と俺はベンチを少しずらして、そこに悠も当たり前のように腰を下ろしてきた。

「はやと君？」

核心を突いてくるよな、悠は。

「私が明日休みだから、お見舞いがてら見てくるわよ」

「そうだな、頼んだ」

俺が気にしたところで仕方がないのかもしれないが、あの表情はやはり見ていて気の良いものじゃなかった。仕事を抜けるわけにもいかないため、明日休みの悠に任せることにしよう。

「あんたも珍しいわね」

惣菜パンを口にしながら、俺のことを意外そうに言う悠。その言いたいことは分からないでもないのだが。

「別に。ただちよつとばかりし気になっただけだ」

そう、と軽く悠は言う。と食事に戻った。

「なあ、悠」

二串目の団子を食べながら。もう一つ気になっていたことを聞いた。

「いつでも良いんだけどさ、シヨパンのあれ、MDに入れといてくれね？」

仕事しながらもエオリアン・ハープが耳から離れなかった。特に何かというようなものはないのだが、テンポが良く仕事していると、そのテンポに同調するように仕事をこなす速度が上がる。風のような音色が滔々（とうとう）と耳を波打ち、高音部の幻想的な装飾が絶えず聞こえることで、気分が平靜する。

「良いわよ。気に入った？」

「聞きやすいんだよ」

それを気に入ったと言うのだろうか。あれを聞きながらだと、スムーズに仕事が出来てくる気がする。別に事務所内は常に多くの人が残っているわけじゃないから、音楽をかけても口うるさくは言われ

ないだろう。テレビのつけっ放しもざらじゃないのだから。

「なんつーか、忙しくともその中でゆっくり出来るって言うか、な」
言ってるでよく分からない。それに音楽のことなんてさっぱりだ。

そのせいで上手く表現出来ない。というか言葉が見つからない。

「あんだ知ってる？ エオリアン・ハーブには、牧童が近付いてくる嵐を避けて安全な洞窟に入って、遠くで雨や風が吹き荒んでいる中を、少年は静かに笛を取って雅やかな節を吹いている。ってシヨパンが『牧童の笛』と愛称しているのよ。ちなみにエオリアン・ハーブはシューマンの言葉なのよ」

悠って、やっぱり博学なんだな。関心した。元より悠の話がどういう意味なのかは理解出来ない。そんな難しい言葉を言われても、呆然と聞くのが落ちだが、それでも好きでやってるからという理由だけで、そこまで知っていることは感服する。

「ま、健介に言ったところで分からないわよね」

「そうだな、さっぱりだ」

皮肉めいた言い方じゃない。悠は俺がどういう人間か分かっているから、フォローは言わない。俺も別にどう言われようが気にすることは無い。

「帰ったら入れといてあげるわ」

そう言つと、悠は一足先に仕事へ戻っていった。

「良く頑張るよなあ」

やる気のある悠を見ると、感心するが、いつもより余裕のなさを垣間見た気がする。

「無理が表に出ないと良いんだけどな」

俺は少々気を抜きすぎているが、悠は少々気を張りすぎている。仕事は順調そうに見えるが、家に帰ってから俺には見せないようにしているようだが、俺とてそこまで気が回らないわけじゃないから、目にしてしまう。悠の深いため息を。そして自分ではこれまた隠しているのだろうが、見慣れた頭痛薬の開いた入れ物も見てしまった。
「馬鹿な奴だよな、相変わらず」

そういつ俺も相当な馬鹿だけどな。そんなことを考えながらも、今は限界というわけじゃないだろうから、しばらくは見過ごしてやろう。明日休みなんだし、ゆっくりできるだろう。

「奥田さん、やっぱり雨宮さんと……」

事務所へと戻っていく健介を、二階の窓から偶然通りかかった美友紀がその一部始終を目撃していた。会話は届かなくとも長年連れ添ったような二人の距離は、一目で瞭然とするものだった。

「デキてるってか？」

「香田さん？」

シヨックに打ちひしがれているような美友紀に、香田がフライトスケジュール表を片手に通りかかった。

「前にも言ったが、あいつらは付き合いが長いからな」

「そうですね……」

香田の前だと、他の人間とは違ってあたふたすることなく、素の自分を美友紀は出しているようだった。

「でもな、小野原」

「はい？」

篤志は何か面白いことを仕出かそうとするような悪戯な顔をしていた。

「付き合いが長いからって、臆することはない」

「どうしてですか？」

窓の外では、健介が一服を済ませ、所内に入っていった。ここを通るのも時間の問題かもしれない。

「逆に考えれば付き合いが長いと、そこから先に行くには今更になつて、なかなか進まないこともある。時には互いのことを知りすぎているせいで、かえって先に進めないこともある」

諦めるのはまだ早いぞ、と楽しげに言うと、香田はちょうど正面からやってきた健介の肩を軽く叩くと、何かを呟いてブリーフィング室へと消えていった。

「って俺は、何吹き込んでるんだか……」

室内に入つて香田は自分のしたことに若干の後悔を抱いていた。それを健介はさっぱり状況が飲み込めないと首を傾げながら、美友紀のところへ歩いてきた。

「先輩、何かあった？ 俺に変なこと行って行っちゃったけど」

「な、なんでもないですよっ、きつと」

美友紀がそこで首を振った。香田が何を健介に言つたかは分からずとも、何となく香田の表情を見て予想できたのかもしれない。

「わ、私っ、受付に戻りますね」

「へ？ あ、ああ」

何やら逃げるような足取りで一回の受付へと駆ける美友紀にまたしても健介は取り残された。

「二兎を追う者って、何のことだ？」

健介は香田とすれ違う際、そう言われた。ついでに羨ましいぞ、この野郎とも言われ、何のことだか全く分からないようで、しばらく二人が消えてつた方を見つめたままだった。

「雨宮さん、大浪総括長が呼んでますよ」

「分かりました、すぐ行きます」

飛行場には大まかには整備員、飛行管理員、救命装備員、補給員、総務員、管制官とパイロットに事務員がいる。その中で機付長とは、日々機体の状態変化を敏感につかんでトラブルを未然に防ぎ、さらには機体の清掃から各機体の癖を熟知し、パイロットの指摘に完璧に応える整備員のリーダーで、悠もその一人で、大浪は整備全体を纏める総括長であり、悠の直属の上司だ。

「呼びましたか？」

「雨宮、お前しばらく藤沢のへりの整備から、こいつの整備に代わってくれ」

そう言って指差した方には健介の愛機 S u - 26 のフルートがあった。バードフライ機には基本的に三人一組で一機に整備士が配置される。

「それは構いませんが、でもヘリの方は？」

「それなら配置換えで他の奴が入った」

悠は従順だったが、一つ疑問に思ったことがあった。

「総括長、不満というわけではないのですが、少し軽くはないですか？」

大浪は悠に専属でバードフライ機の整備に当たるように命じたが、専属となると、業務用の航空機の整備に比べて少々時間が余る。バードフライ機の整備は他とは違って、訓練が一日でも僅かのため、その間時間が空いてしまう。ここ最近朝から仕事詰めで、そのリズムが出来ている悠には物足りなさを感じて仕方がないようであった。

「不満か？」

大浪は、普段は温厚だが、仕事となる一種の職人として厳しさを伴わせる雰囲気を持つ。その威厳は総括長に相応しいものを感じさせるが、物怖じというものを普段から感じさせない悠には、あまり意味がないようだ。

「いきなり変わると、取次ぎ分の仕事が少々手こずるかと思うのですが」

「お前なら大丈夫じゃないのか？」

悠としては今残っているヘリの整備をきちんと終わらせてから次の仕事に行きたいと思っているようだが、大浪は首を縦には振らなかった。

「分かりました」

少々不満げな声だったが、腕が確かな上司だけに悠は従い、バードフライ機専用のドッグへと歩いていった。

「やはり無理しているように見えたか？」

「そうだな。雨宮は表情に出さないからな。なかなか見抜けん」

悠の背を大浪総括長と藤沢上官が苦笑しながら見送っていた。

「それにしても、お前から頼んでくるとは思ってたぞ」

「奥田の馬鹿が仕事しながら、余所見して仕事が疎かかなわんからな」

年齢の近い二人は親友のようなプライベートと仕事の相棒といった感じの付き合いであった。

「しつかりしてるじゃないか」

「その目を仕事に向けて欲しいもんだ」

大波が、健介が良く悠を見ているなと笑うと、藤沢が馬鹿な奴のお守りは大変だ、とため息をついた。

「そういう部下をきちんと見るお前も同じじゃないのか？」

「馬鹿言うな」

からかう大浪に、照れたように自機へと向かう藤沢。その目は厳しくともどこか夢を忘れない少年のような光があった。

「おい、大浪。整備帳貸せ。俺がもう一度再チェックしてやる」

「たわけ。パイロットごときが整備をなめるなよ」

やはり子供なのかもしれない。傍から見ている彼らの部下は、その光景に普段は自分たちに激を飛ばす厳しい二人だが、その二人が子供のようにやり合うのを見て、言葉を失っていた。

「ふう、疲れたな」

やはり無理して仕事をしなければ良かった。張り切りすぎてどつと疲れた。時計を見ても、もうそろそろ悠も終わる頃だろう。片づけを済ませてそろそろ車のところへ向かおう。

「奥田、終わったのか？」

「はい、お疲れ様です」

先に仕事を終えた上官が帰宅の支度を終えていた。

「腕はどうだ？」

珍しく上官が俺のことを心配してきた。

「相変わらずです。腫れは収まりましたが、薬無いと痛みますね」

そうか、と短く頷くと、明日は遅れるなよと言い残し、帰っていた。

「あれ？ それだけ？」

思わずその背に呟いてしまった。もう少し何か労いや励ましても

あるのかと思っただけだな。ちょっと拍子抜けしてしまった。

「健介、藤沢さんに心配されるたあ、良かったな」

そんな俺の首に腕を巻きつけてきたのは香田先輩だった。先輩はまだ夜間の飛行が残っているから、これから夕飯らしい。

「あれを心配とは言わないでしょう？」

「何言ってるやがる。そうやって頷いただろ？ それだけ安心したってことだ。可愛がられてるぞ、お前」

ヘッドロックを俺に食らわせながら、先輩はそのまま飯行くぞ、とそのまま連れて行かされた。

「健介、お前雨宮と暮らしてんだろ？ どうだ？」

食堂に着くと、既に悠との待ち合わせ時間は過ぎていたが、まだ来ないようなので、一応メールを入れておいて先輩の奢りで、夕飯にすることになった。何だかんだで先輩は気前が良い。今まで一度たりとも俺は先輩と飯に言っても一銭も払った例がない。

「どうだって何がですか？」

今日もいつものように箸を使わないで済むパスタで俺は済ませている。先輩はガッツリ系の焼肉丼だ。正直その香りに惹かれるものがあるが、スプーンで食べれないためなかなか最近は手が出せない。「何がって、ヤツたのか？」

思わずムせた。食事中に話題にするものじゃないだろう。そういうところも先輩らしいのだが。

「んなわけ無いじゃないですか？」

全く、この人は一体どういう目で見ているのだから。周囲のほかの夜間組みのスタッフたちの話題は、至極まともなものだと言うのに。

「何だよ。折角ヒモになってるのに、何もしてねえのか」

そこでがっかりされる筋合いはない。というか、そんな期待した目で俺を見ないで欲しい。

「俺はヒモじゃありません。ちゃんと働いています」

「あーあ、つまんねえの」

先輩はふてくされたように焼肉丼をかきこんだ。

「つまらなくて結構です。先輩は何か勘違いしてませんか？」

「付き合ってたんだろ？」

「付き合ってますん」

「隠すなって」

「隠すも何事実です」

やっぱり先輩は盛大な勘違いをしているな。俺と悠はそんな関係じゃない。

「中学からの馴染みだろ？」

「そうですよ」

中学以来腐れ縁なのか、お互いの夢がたまたま同じだったのか、こうして同じ職場に居る。

「なのに、今回居してる」

「骨折のせいで生活に支障が出るから居候させてもらってるんです」
俺の言葉に先輩は興味なさげに、ふーんと鼻で頷いた。

「健介、普通はよ、骨折したからって誰かに面倒看てもらうか？」

お茶を啜り、たくあんをバリボリと音を立てながら噛みつつ俺に箸を向けてくる。

「多少の支障は出るし否めないだろう。だがよ、それなら普通は実家が男のところにでも転がり込むのが筋だろ？ 良い大人なんだからよ」

「そうですか？」

俺は特に意識したつもりはない。第一、俺の冗談から今の生活になったんだから、本当に何もしていない。意識してしまうことも無きにしてもあらずだが。

「そうだろ。格好つけて意地でも一人で暮らすか、智史のそこや俺にでも言ってくるのが普通だと思うぞ？」

考えたことはなかった。悠もそんなことを気にかけて様子を見せないから、そのまま今日を迎えている。

「しょーべん臭いのガキじゃないんだ。一つ屋根の下で男女が恋人

でもないのに暮らすか？」

先輩の苦笑に改めて考えたが、そういうものかと思ってしまった。「お前が意識してないだけで、兩宮は逆に気を使ってそう振り撒いているだけかもしれないだろ？」

「そうは見えないんですけどね」

どちらかと言えば悠の方が、こっちが恥ずかしくなるようなことをしている気がする。風呂場で出会わせても気にした素振りは見せず、俺のほうが目やり場に困ってしまうほどだ。

「そう思っているのはお前だけかも知れんぞ」

そう言われると、家に帰ってから気になってしまつう。

「先輩、仕向けようとしてません？」

何となく俺にそう差し向けようとしているような気がする。いつもよりしつこく俺にそんな話題を持ち出すのだから。

「何言ってる。俺がそんなことするはずないだろ」

そう言いながら、顔は井に言ってる。信じるなと言っているようにしか見えない。

「ところで先輩。昼間言ってたことって何すか？」

俺の耳に呟くように言ったこと。俺は誰も追ってはいないのに、あんなことわざを呟いた。

「二兎のことか？」

俺が話題を変えると、先輩は先ほどのことを引きずることなくついでくる。

「いきなり囁いて仕事に戻られても意味が分かりませんよ」

別に今まで気にしていたわけじゃないが、ふと思いついた。俺に囁く前に美友紀ちゃんと何か話していたみたいだが、それと関係があるのかは不明だ。

「お前、小野原狙ってるのか？」

「は？」

唐突に不可解なことを言われた。俺が美友紀ちゃんを狙っている？ 確かに美友紀ちゃんは可愛いとは思うが、狙ったことは一度も

無いし、そんな素振りを見せたこともない。

「雨宮と暮らしながら、小野原を狙う。まさに二兎を追う者じゃないか」

「そういうことですか・・・」

「どういうことかと思えば、話は結局振り出しに戻るようなものじゃないか。どつりで先輩の引き際が良かったわけだ。」

「俺は別に美友紀ちゃんを狙ってはいませんよ」

「そうなのか？」

「後輩としては良い子ですが、俺はそのつもりはないですよ」

苦笑するしかなかった。そういう風に見られていたとは。確かに美友紀ちゃんを狙う奴は多い。仕事場が違う整備班の連中にも結構いるらしいしな。

「じゃ、俺を狙っても良いのか？」

「良いも何も、何で俺の許可が要るんですか」

俺は美友紀ちゃんの何でもないのに。

「じゃあ、やつぱ雨宮狙いか？」

「え？ あ、いや、そういうわけじゃ・・・」

言葉に詰まってしまった。狙っていないと言えばそうだし、狙ってると言えば、悠はそれほどいやな女じゃない。俺とも気の合うところはあるし、狙うには良いと思う。でも、そう一步踏み込むという事に抵抗があるのも確かだ。今更な気もするし、折角今面倒を看てもらっているのに、そういう事を言い出すのも気が引ける。

「お前はそつちか」

どつちのことですか、という問いは口にしなかった。どうせ予想はつく。

「まあ、雨宮は少々愛想が無いが、気遣いは出来る奴だからな。俺の聞いた話じゃ、狙ってる男は小野原と二分しているとかいないとかだよ」

飛行場に勤務してる者の中で先輩を知らない者はいないため、その話は信憑性はあるかもしれない。

「そんなに人を揺さぶりたいんですか……」

聞いていて、少しばかり引つかかるものを感じたが、それでも俺には関係ない。

「別にそんなつもりじゃないぞ。ほれ、噂を試してみれば」

先輩が顎で食堂の入り口を指す。振り返ってみると仕事を終えた悠の姿があつた。ここで待ち合わせと言つことにしておいたから、ちよつと今来たところなのだろう。

「俺の話、間違いじゃないみたいだな？」

「そう、なんですかね？」

先輩は自分で話を振っておきながらその真意は意識していなかつたよつで、悠が他の整備の男たちと来たことに意外そうに見ていた。

「雨宮さん、今日は俺がおごりますよ」

そんな声が幾つも聞こえた。少なくとも四人と悠は食堂に来て、何やら男たちは会話で盛り上がっている。

「雨宮、ここ開いてるぞー」

他の男の相手に半ばうんざりしているような悠に、見かねた先輩が声を上げた。一斉に声の主にあちこちから視線が向けられ、思わず身が竦みそうになつたが、先輩はそんなものを気にした様子を見せることなく、揚々と自分の隣を指差した。ちよつと俺と目が合つと、何かを一緒に来た連中に声をかけると、簡単なメニューでも頼んだよつで、受け取ると男たちを置き去りにして俺たちのところへ来た。

「すみません、ありがとうございます」

俺の斜め前に腰を下ろすとよつやく一息つけたよつで、小さなため息を漏らしていた。

「気にするな。空いてるしな」

なつ？ と俺に同意を求めてくる。俺は別にそのつもりは無かつたから、曖昧ながらも先輩の手前、頷いておいた。

「それにしても健介、あんたまたそれ？ 栄養偏るわよ？」

席に着いて早々、悠は俺の夕食を注意してくる。

「食いやすいから良いんだよ。ただでさえ箸は時間かかるんだから」
「本当はこれ食いたかったんだろ？」

先輩が自分の焼肉丼を指す。そうですよ。俺だっけがつつり系が本当は食べたいんですよ、と心の中で先輩の焼肉丼を食べたつもりに感じていた。

「箸が上手く使えるようになればいくらでも作ってあげるわよ」

まるで子供を諭す母親のように、呆れながらも可笑しそうに自分の食事に手をつけていた。

「それにしても、雨宮は人気あるな」

先輩が周囲に聞き耳を立てるように座ってる男たちに向かって、声をかける。悠に言っている言葉にも関わらず、向き所は男たちだ。「はつきりしないのに、グダグダされても疲れるだけですよ」

本当に疲れているのだろう。表情から良く分かる。もともと遠まわしなことはあまり言わないから、その言葉に嘘はないのだろう。

「小野原と人気を二分しているんだ。もっと鼻高々で良いんじゃないのか？」

「そういうので付き合っても何も良いこと無いですよ」

先輩の言葉をさらりと受け流す悠。それに先輩が、格好良いな雨宮は、と笑っていた。

「ま、こんなならお前も安泰って訳か」

先輩が俺に笑うと、残りの焼肉丼をかきこんだ。俺は噴出しそうになるのを押さえ、悠は何のこと？ と首を傾げていた。

「じゃあな、お二人方」

俺と悠はあがりだが、先輩はこれから飛行が入っている。食事を済ませると先輩は一人事務所へと戻っていった。

「健介帰るわよ」

「ああ」

食事を済ませると、俺たちはそのまま帰路に就いた。先輩の言葉が車中、忘れていたのに甦りちよつとばかり変に意識してしまったが、悠が腕痛むの？ と気にかけたので、そういうことにしておい

て何とかやり過ごした。

「悠、お前明日休みだろ？」

「そうだけど、何？」

家に帰ると先に風呂をもらい、しばらくリビングでテレビを見ていると、悠も風呂から上がってきたので、明日のことを言うことにした。

「明日俺、行きはバスで行くよ。帰りは先輩に乗せてもらうから、送り迎えはいらないから」

折角の休みなんだ。俺がここへ来て以来、もうすぐ一月が経とうとするが、悠はあまり休みが無かった。休日も俺のことやらで忙しく、それが負担になっていっているせいか、本人が気がついていないところで上官たちも配慮しているのを、間接的だが俺も聞いた。規則正しい生活を一見送っている悠だが、俺からすれば飛行場の仕事は、特に整備はハードだ。パイロットも忙しいが、整備士は飛行前と飛行後にも体力を使う。元々体力のある男はさておき、悠は女性だ。差別認識になるから強くは言わないが、悠は一般の女性に比べて少々体が未だに弱い。季節の変わり目には体調を崩すことは、今までに何度も目にはしている。

「お金勿体ないわよ。なに氣遣ってるのよ」

俺の申し出を拒否する。こういう所で我が強くなるというか、元々我が強いが俺に対しては特に頑なになる。

「バス代くらいなら千円ちよいだ。氣になるような額じゃない」

別に診察も入っていないし、早めに出ればバスで十分間にあう。疲れている奴に世話をかけさせるほど、俺は落ちぶれちゃいない。これ以上こいつに負担をかければ、きつと確実に倒れる。人のことは気にかけるくせに、自分のことは手遅れの一步前にならなければ氣づかない奴だ。

「勿体ないでしょ。一食浮くじゃない。それにあんた一人で起きれないでしょ？」

随分な言われようだな。俺はそこまでダメな奴じゃない。ちよっ

と前は一人暮らしの余裕が悠の家に来て余計に緩んだだけで、今は元の生活ペースも戻ってきている。

「携帯のアラームで十分だって。朝飯はコンビニで買っていくから、寝てろって」

テレビからはバラエティー番組の笑い声やらがリビングにこだましている。ソファに身を任せて見るのは至福に感じる。悠は自室でドライヤーでもかけているようで、乾いた風を起こす機械音が右耳から聞こえてくる。フレグランスか風呂上りだからか優しい香りが部屋に満ちて、体だけでなく心も安らぐ。腕の痛みも大分落ち着いているからストレスも緩和されているんだろう。

「怪我人が遠慮しない。送り迎えくらいしてあげるわよ」

呆れたような口調でドライヤーの音に負けない声量で譲ろうとしない。

「悠、お前明日は、はやとの所行くんだろ？ 俺のことは良いから見舞い品でも空いた時間に買いに行けよ」

そうすれば睡眠時間も大分確保できるだろう。俺は雑用なんだから睡眠時間が少なくなるのが、空いた時間に昼寝くらいは幾らでも出来る。その後の事は考えるだけでも気が滅入るが。

「それはお昼頃に行くから、朝は気にしないで良いわよ」

善意だとは分かっている。悠は悪気無く俺に言っているのだろうが、そこまで頑なに言われると、善意が善意で感じられなくなる。こつなつたらお互い引かない性格のため、無益な言い争いになることがある。

「分かったよ。それじゃ頼みます」

「始めからそう言いなさいよね」

たかだか送り迎えの押し問答で、大敗を喫した気分がする。引き際を見極めたつもりだが、悠にしてみれば我が侂な子供を相手にしただけにしか思っていないようだ。

そのまましばらくテレビでその日のニュースを無想に見つめ、明日に備えて早々に自室へと戻った。

「明日は少し早めにするか」

先ほど悠に明日も送りを頼んだというか、頼まざるを得なかったが、やはり俺としては久しぶりの休日はゆっくりとリフレッシュに当ててもらいたい。薄化粧で隠していたが、隈もはつきりと見えた。疲れすぎなのか、他の何かであまり睡眠も深く取れていないのだろう。悠には申し訳ないが、明日は早めに静かに家を出よう。身支度は二十四時間サウナでも立ち寄って整えれば良いし、最悪飛行場内の宿舍のシャワールームでも借りれば万事オツケーだ。

「寝るかあ」

腕を庇いつつ大の字にベッドに横になる。今日は無意味に張り切ったせいかな、すぐに眠気が襲ってきた。そのまどろみの中に微かにエオリアン・ハーブの音色が俺を別世界へと誘うしるべのように聞こえた気がしたが、その記憶もすぐに途切れた。

遠くから俺をまどろみの世界から強く引き寄せる音がする。それは心地良いものじゃない。ユメウツツな何事にも変えがたい優しく穏やかな波の間に間に漂い、暖かい日差しを体全体に浴びる南国の海で波の音と風の音、透き通る蒼とどこまでも高く大きく広がる白の世界に一人静かに浮かぶ俺を、都会の喧騒に連れ込みビルのエアコンや車の排気で汚れた世界へ放り出すかのような不快音感。

「うーん………」

背泳ぎでもするように右手を天上に掲げると、力が入らずにそのまま頭上へと引力に引き寄せられる。九〇度から〇度までの間に勢いのついた俺の手が、途中三〇度の所で硬い物を捉える。それが俺を現実へと引き戻すものだとして理解するのにしばし時間を要する。けたたましいアラームだとうやく認識すると、それを止めるサイドキーの場所を腕だけ別の生き物になったように勝手に勝手に動く。

「ふああ………あ………」

心地良かった世界から一変した現実へ引き戻されると、どこかの映画に出てきそうなゾンビのように意識が朦朧とする。携帯を寝惚け眼の状態で見ると、

「げっ！ 九時！」

携帯のサブディスプレイに表示された時間は九時五分。昨日の記憶が正しければ四時にアラームをセットしていたはず。五時間も寝過ぎたとはあっては、先ほどのまどろみなどどこへやらといった感じで眠気は一気に吹き飛び、嫌な寒気が背筋を走った。

「あれ………？」

思わず叫びそうになったが、ふと疑問が浮かんだ。まだ頭が回転していないのかもしれないが、こんなに寝過ぎたら一人暮らしではないのだから悠が俺を叩き起こすはず。それが無い。しかもまだ部屋が暗い。少しずつ覚醒を始めた頭でもう一度携帯を見ると、力が一気に抜けた。

「何だよ、逆じゃんか」

寝惚けていたせいで時計を逆に見ていた。良く見れば四時四十五分だ。ほっとすると頭の回転も平静も取り戻してくる。

「はあ、焦ったあ」

誰にも見られなくて良かった。この歳になって情けないくらい焦った気がする。今の失態を悠に見られたら、何とも言えない羞恥を味わうな。

「寝惚けとはいえ、馬鹿丸出しかったわよ」

「っ………！」

部屋の入り口で、寝巻きにしているラフな格好で俺のことを見て今にも噴出しそうな顔で見ている悠がいた。

「今日は早いね。いつもより一時間は起きるには余裕があるわよ？」

含み顔で、啞然とする健介を眠れなかったの？ と見る悠。健介は自分の醜態を丸々見られていたことを忘れるかのようにしばし呆然としていた。

「まだ朝ごはん出来てないから、もう少し寝てて良いわよ」

それだけ言い残すと、悠はキッチンの方へと部屋を後にした。

「………なんで起きてんだよ」

本来ならこのまま静かに身支度を整えて、バスがない分タクシーでも呼んでサウナで時間を潰してから出勤しようと思かいていた計画が、既にどこかから漏洩していたのか、悠は既に朝食の支度に取り掛かっていた。何だか考えることが全て 悠の手の上で踊らされている気分だ。今更取り繕うつもりはない。諦めて従うほか無いだろう。

ベッドから重い腰を上げて、背伸びしながら欠伸を漏らすと首を左右に曲げつつ洗面所へと向かった。

「あんたが私を出し抜くのはまだまだ無理よ」

そんな声が聞こえた気がしたが、魚を焼いている音でよく聞こえなかった。

「じゃあ、はやとによろしくな」

いつもより一時間も早く目が覚めたせいで、家にいてもすることが無いということ少々早く出勤した。たまの休みにも関わらず、わざわざ飛行場まで送ってくれた悠にこの後はやとの見舞いに行くということ、よろしく頼んで別れた。

「おはよう」

いつもより小一時間ばかり早い出勤だが、それでも既に早朝の飛行の入っているパイロットや整備士たちの半数は仕事を始めていた。どこかの業者の車も来ているから、早速業務手続も始まっているだろう。

「あつ、奥田さんおはようございます」

事務所に入ると、先ほどの車の業者の方だろうか、受付で手続きの申請を行っていた。軽く挨拶を済ませると、邪魔にならないように奥へと急いだ。

「健介、お前今日は早いんだな」

デスクで今日の雑用もとい、仕事用の書類を分けていると、智史が俺の後から来た。

「早く目が覚めたんだ」

コーヒーを入れ、自分の予定表の確認をしながら俺の正面の自分

のデスクに腰を下ろす。既にエンジンの入った航空機の音が響いてくるが、聞き慣れた古い音楽のようだ。

「智史、これかけてくれ」

俺はカバンからMDと一枚取り出すと、智史に投げた。自分で掛けても良いが、智史の後ろにコンポが置いてある。普段はたまにラジオがかかる程度で、他は夜間組みが暇つぶしに音楽を掛ける程度で、その出番は少ない。

「何入れてんだ？」

「シヨパン」

俺の答えに智史がシヨパン？ と微妙な顔を見せたが、とりあえず多少の興味からかコンポにセットした。昨日悠に頼んでいたエオリアン・ハーブに、ついでだからと他の曲も色々入れていてくれたらしい。

「ほう、クラシックか。珍しいな、お前たちが聞くなんて」

コンポからは俺も曲名は知らないがピアノ演奏が流れている。最初にかかっている曲は聞いたことがある。軽快な弾みで華やかさを演出させる曲。

「華麗なる大円舞曲か。朝には良い曲だな」

思わず俺と智史は入り口の方を驚愕の表情で見つめた。

「何だ？ 何アホ面かいてる？」

俺と智史の視線が向く先には藤沢上官がいる。飛行場の近くに家族で暮らしている上官は、出勤してくる時間は早い。近いから多少の重役出勤も許されると思うのだが、頑固一徹な雰囲気をも自分で理解しているのか、朝は早い。

「藤沢上官、曲、知ってるんですか？」

智史が物凄く意外そうに訊ねた。他にも十人ほどパイロットや事務員たちが仕事にかかっているが、どこことなく曲のリズムに体が乗っているように見えた。

「当然だ。クラシックはよく聞くのでな」

自分のデスクにカバンを置くと新人が入れたお茶に口をつけてい

た。

「てつきり演歌などかと……」

智史の言葉に俺も頷いた。どこからどう見てもクラシックを聞くような雰囲気は微塵も感じられない。むしろ、スナックでママと演歌やブルースでも熱唱している方がしっくりくるお人だ。

華麗なる大円舞曲の後に掛かったのは、上官曰く華麗なる円舞曲らしい。俺は曲名なんてエオリアン・ハープしか知らないし、昔吹奏楽部に入部していたという飛行管理員の女の子に智史が合っているか聞いたら、頷いたので上官の言葉は正しいようだ。しかもそれが変イ長調だとか言うが、俺には何がイ長調で変イ長調なのかすら理解しがたいことなので、そうなのだろうと思うことにした。あの人の口から嘘が出たことを聞いたことが無かったから。

「これは誰のだ？」

「俺です」

上官がなかなか良い選曲してるなと、珍しく朝から俺に対して機嫌が良かった。黒鍵のエチュードとかいう、華麗なる大円舞曲よりも弾み良く、軽快なりズムで華麗なる明るさでも言おうか、その曲がかかると藤沢上官が鼻歌を披露していた。いつもじゃありえない光景に俺と智史に限らず、仕事をしながらも戸惑う職員で、一種異様な仕事場になった。

「おはようございます」

藤沢上官が朝の飛行準備に入り、事務所を後にするとあちこちから、あんな藤沢さん見たことないね、などと小声が漏れていた。そこにちょうど手続きを終えて、暇が出来たのか美友紀ちゃんが戻ってきた。男たちの一斉に美友紀ちゃんの挨拶に返事をする声が重なった。

「おはよう、小野原」

「あ、はい。おはようございます。いつてらっしゃいませ、香田さん」

「おう」

香田先輩が美友紀ちゃんと入れ替わりで運送業務へと出て行く。美友紀ちゃんも飛行へと出て行くパイロットには、店員のように言う。戻ってくればお帰りなさいませと迎える。それが聞きたいがために、わざわざ美友紀ちゃんが事務所に戻るのを見計らう馬鹿な奴もいるが、今じゃ誰も気にしていない。それが当たり前のようになっている。香田先輩もナイスタイミングというか、ちょうど出くわしたからいつものように美友紀ちゃんも送り出し、先輩もおうと軽く美友紀ちゃんの肩をポンと叩くとそのままドッグへと下りていった。

「あれ？ 今日音楽がかかっているんですね」

さっきまではかかってなかったのに、と美友紀ちゃんも意外そうにその音色に気がついた。テレビのニュースも奥のほうで聞こえているが、所内には悠の選曲した朝にはちょうど良い明るい曲が絶えることなくかかっていた。

「エオリアン・ハーブですね、これ」

連絡掲示板に今日の遊覧観光で来訪予定のお客の割り当てやらをチェックやらをしながら、黒鍵のエチュードの次に入っていたエオリアン・ハーブに美友紀ちゃんが反応した。

先ほどまでは軽快なリズムにアップテンポ調の華美で派手な曲調から、優雅で華麗な落ち着いた曲に変わったことで、少々高ぶった気持ちを落ち着かせているような人影が見られた。

「美友紀ちゃんもクラシック聴くんだけ？」

智史が美友紀ちゃんならクラシックが似合う似合うと、一人で何かに納得していた。藤沢上官に比べて美友紀ちゃんの方がそういう知識はあるように思える。十人中九人以上はそう思うのではないだろうかとさえも思ってしまう。

「あ、いえ。妹が今度ピアノコンクールで弾くらしくて、よく家でも練習してたんです」

だから知識とかは全然、と恥ずかしそうに手を振っていた。

「またまたあ、そんなに謙遜しなさんな。俺たちなんか曲名はとも

かく、作曲家すら知らねえんだから」

なあ、と智史が俺に同意を求めてくる。拒否したいところだが、俺も悠に教わるまではどこかで聞いたことがある曲しか浮かんでこない。渋々ながら智史の同意に乗った。

「でも、これって誰が持ってきたんですか？」

「こいつだよ、こいつ。柄にも無いことしやがって。この暇人が。仕事しろ、仕事」

智史が飴玉を投げつけてきた。何もしてないお前と違ってちゃんと書類の整理をしてる。くそみそに言われる筋合いはない。むしろテレビの音声だけをバックに仕事をするよりは、体が自然と音楽と同調しているようで、中には体が揺れている奴も多い。おかげで職場の雰囲気が良い感じだから、何となく俺の仕事も捗っているように感じる。実際にどうかは愚問としておくが。

「そんなこと無いですよ。奥田さんの選曲が良いから、皆さんいつもより快調そうですね」

美友紀ちゃんがフォローを入れてくれるとは。少し鼻が高くなっただ気分だ。

「だよ。たまにはこいつも、いっちょやってくれるから、俺も親友を止められないんだよ」

「お前は喋るな。仕事行け、仕事」

調子良い奴だな、本当に。呆れてしまうが、たまにはこういう朝も悪くはないだろう。どうせ後数時間もすれば、パイロットはほとんど出払って、閑散とするのがいつもの光景だ。ちよつとくらい賑やかになるなら、それを今は楽しみつつ仕事をすれば良い。ギスギスした中で仕事をして肩が凝るだけだ。飛行中は神経を使うパイロットには、こういう安らぎは悪くはない。

「奥田さんってクラシック好きなんですか？」

「いや、元々は興味なかったんだけど、悠・・・いや、雨宮にエオリアン・ハープを聞かせてもらったたら気に入ってね。このMDも作ってもらったんだ」

「……………そうなんですか」

途端に美友紀ちゃんが落ち込んだように見えたのは気のせいだろうか。

「小野原先輩、お客様がお見えになっています」

もう一人の受付担当の新人が美友紀ちゃんを呼びに来た。今年入社の人にはまだまだ一人で対応が出来ないようで、わざわざ呼びに来たようだ。内線を使えば良いのに、気が回らなかったようだ。「美友紀ちゃん、呼んでるよ？」

しばらくコンポの方を静かに見つめていた美友紀ちゃんは、後輩の声が聞こえなかったようで、智史が美友紀ちゃんの目の前で手を軽く振って意識を確認していた。

「へっ？ あ、はいっ、すぐ行きますっ」

どこことなく悲しげな表情だったが、すぐに我を取り戻すと美友紀ちゃんは後輩と一緒に受付へと戻っていった。

「健介、お前も罪作りな奴だな」

「俺、何かしたか？」

「……………お前は、そういう奴だったな」

智史が美友紀ちゃんの消えていった方に、小声で救われないうつのは辛いな、とぼやいていた。

やはり朝から病院という施設は終診時間まで賑わうというか、慌しさを感じる。老若男女が外来診療で初診や再診の順番を待ち、その時間は早い人もいれば、数時間掛かる人と様々だ。再診の人も決められた検査時間まで待機と来れば、ため息が出るだろう。

「あっ、お姉ちゃんだ」

健介を送り、家に戻り掃除洗濯を済ませ、軽く身支度を整えると、近くの店でお菓子や果物を購入し、病院についた頃には、あと一時間ほどで昼食の時間という頃合だった。

「おはよう、はやと君」

小児病棟と一般病棟の入り口は分かれていた。大人とは違って子

供は僅かな細菌でも重症に繋がることもある。それを避けるために
も一般に比べると対策があちこちに見られる。家族と言えど、十二
歳以下の子供は水疱瘡みずぼうそうやはしかなどの伝染病にかかっている可能性
があるため、小児病棟には入れない。健介の診察で訪れるたびに、
はやとのような姿の子供が、兄弟とロビーで楽しげに会話をする光
景は、悠には見慣れたものだった。だが、その子にとっては、時々
しか会うことの出来ない兄弟姉妹との僅かなかけがえのない時間な
のだろう。明るい笑顔が微笑ましくもあり、悲しくもある。

「これ、お見舞いだよ」

悠が籠に沢山入ったお菓子や果物をはやとに見せると、はやとの
顔が破顔し、笑顔で満ちた。いつまでもここで見舞いの品を持って
いても仕方ないと悠は思い、部屋へ行かないかとはやとに訊ねたが、
はやとは待って、と悠を止めた。

「おかあさんが来るから、ここでまつの」

そういうと、待合のベンチに腰を下ろし、自分の隣をポンポンと
叩いた。どうやら悠にここに座るように促しているようだ。

「分かった。お母さんが来るまで待とうね」

「うんっ」

悠とはやとはしばらく朝の連ドラを眺めながら、はやとの母親が
来るのを待っていた。以前にも何度か健介の診察で顔を合わせてい
たため、悠はそれほど気にした様子もなくはやとと時折会話を交え
ながら時間を潰していた。

「あっ」

十五分程してから、はやとが入り口を見て小さく声を上げた。そ
の視線の先には、悠も何度か目にしたはやとの母親の姿があった。

「おはようございます」

はやとは母親を見ると駆けはしませんが、早歩きで母の胸に飛び込
んだ。その後で悠が静かに一礼していた。それに気づいたはやとの
母親も同じように返していた。

「あなたは確か……」

「雨宮悠と申します。最近は同僚の付き添いでよくはやと君と顔を合わせる機会がありました」

悠の言葉に、いえいえこちらこそ、と母親もこの子をご迷惑をと苦笑していた。

母親も来たとあつて受け付け前にいつまでもいても仕方ないので、はやとの部屋へと三人は向かった。五〇四号室の大部屋の入り口に高峰隼人と書かれていた。他にも五人の子供の名前があつたから六人部屋なのだろうと思ひながら、悠は招かれた。

「ここがぼくの部屋だよ」

元気そうに隼人が自分のベッドを指した。そこには絵本やら何かのカードやキラキラグッズなどが数多くあり、まるで少し大きなおもちゃ箱といった感じで賑わいというか華やかというか、つまりはごちゃごちゃだ。それを見た隼人の母親がいつものことのように、優しく叱っていた。ベッドのカーテンは全て開けられていて、他の子も楽しそうに話していたり、他の病室から来た子が一緒に遊んでいたりと、どこにでも見られる友達と遊ぶ少年少女のように悠には見えた。目がクリクリとした可愛らしい女の子や、隼人のようにニット帽を被りながら生え揃っていない歯を大きく見せて笑う男の子。看護師の女性に構って欲しいのか、なにやら駄々を捏ねたり、悪戯をしたり、付き添いのお母さんに甘えていたり、どこにでもいる子供たちばかりだ。見た目で骨折などの症状が分かる子もいれば、どうして入院しているのか不思議に思わせるほど、元気な子もいる。その子たち一人一人が、いつか家に帰り、青い空の下で友達と沢山遊ぶんだと、思い描きながら毎日を過ごしているのだろう。悠はその微笑ましい光景に、上手く笑って返すことが出来なかった。「わざわざありがとう。こんなことまでしてもらっちゃって」

隼人の母親が、改めて悠に申し訳無さそうに感謝していた。

「良いんですよ。私が勝手にしたことですから、お気になさらないで下さい」

毎日この光景を見ている母親にしてみれば、慣れたものなのかも

しれないが、悠の見舞いのお菓子を友達と分け合う隼人の姿や、それに楽しそうに便乗してくる子供やベッドに横になったまま声だけが隼人たちの周りにくる子供。入院して日が浅いのか緊張染みた表情の子もいる。多種多様なその光景は、軽く考えていた悠には少々重たく映っていた。悠も長期に渡り入院生活を送っていたが、その周囲には大人ばかりで、みな落ち着いていた覚えがある。だからこの小児病棟の騒がしさが悠には、ここにいる子たちは本当に病気なのだろうかと思いたくなるものだった。

「おねえちゃん」

そんな悠の周りに子供が数人寄ってきた。

「これ、ありがと」

そう言ってお菓子を悠に自慢げに掲げる少年。その目の輝きは心から言葉の通りに思っているんだと、訴えてきた。

「どういたしまして。みんなで仲良く食べてね」

よしよしと悠が頭を撫でると、嬉しそうに自分のベッドに戻り、付き添いのお母さんに自慢していたり、廊下を通った看護師に、いーだろ？ などと、自慢げにはしゃいでいたり、嬉々様々だ。

「驚いた？」

花を換えに行っていた隼人の母親が、悠の半ば呆然としているのを少し可笑しそうに見ていた。

「一般病棟みたいに落ち着いた雰囲気はないし、むしろ学校みたいに賑やかだからねえ」

「正直、どう反応したら良いのかまだ良く分からないです」

いつもの事のように、それが当然のように頬を緩めている。

しばらく隼人と悠は他の子も交え談笑していた。

「隼人君、飛行機好きなの？」

ベッドの脇には数冊の絵本と航空機のミニチュア模型やプラモデルがいくつか並んでいた。悠には見慣れた機種もいくつかあった。

「うん。大きくなったら空に絵を描くの」

そう言っつて隼人はF 15D/DJイーグルのプラモデルを手に

とって目の前で動かしていた。もう十年ほど昔に出たプラモデルだが、玩具としては十分すぎるほど良く出来ていた。父親が作ったのだろう。

「空に絵？」

パイロットになりたいとかではなく、隼人は空に絵を描きたいと言った。

「うん、僕絵をかくの」

「この子、ずっと病院暮らしだから、絵を描くことが楽しみになっているの」

隼人の言葉の補足を母親がどこか諦めの入った苦笑を浮かべていた。

「でも、どうしてお空に絵を描きたいの？」

絵を描くなら紙やキャンバスにでも出来るはずなのに、どうして空なのか悠には不思議だった。

「おねえちゃん、これ見たことある？」

隼人が悠に一冊の本を渡してきた。絵本かと思っていたら、一冊の写真集だった。

「ブルーインパルス？」

それはブルーインパルスの軌跡を追った写真集で、よく航空祭などで販売されているものだ。

「うん。凄いなだよ。飛行機で空に絵を描くんだから」

興奮気味に隼人が悠の目を見る。隣のベッドから、またその話？と何度も聞かされたのか、少々うんざりした顔の子がいる。片方の足をベッドにつけられた固定器具に載せている。事故か何かで骨折したようだ。

「隼人君は見たことあるの？」

悠にしてみれば、隣の自衛隊の航空祭で何度か目にしているし、普段はバードフライの飛行を目にしている。二つの違いは大きいが、それぞれの特徴があり、見ていて飽きることがない。もう何度その演目を見てきたか覚えていない。

「うつん、ない」

悠が本を返すと、隼人はしょんぼりとした表情でページを捲った。その表情は本当に残念そうだ。ベッドの周囲のプラモデルや、空や鳥などの大空を描いたような絵本、自分で描いたのだろうか、青い空と白い雲の合間に、カラフルな色のラインが走った絵。それを見て瞭然だが、それだけ隼人は焦がれているように悠には見えた。

「そうだ、隼人君」

何も出来ない自分に心苦しさを感じていた悠が、何か出来ることはないかと考えて、思いついた。隼人が何？ と首を傾げた。大きなニット帽がズルツとずれた。

「明日、隼人君が好きなものを、持ってきてあげようか？」

悠が手にしたのは先ほどのプラモデル。自分で描いた絵の中にも本を参考にした絵が見られた。しかし、飾られているのはどれも、いわば戦闘機だ。子供には飛行機と認識しかされていないだろうし、ぶつちやければ単なる玩具だ。しかし隼人の好きな機体が一機もなかった。特に何が出来るといっわけではないが、好きな物があるほうが良いだろうと悠は思った。

「おねえちゃん、持ってるの？」

「うん。プラモデルとは少し違うけどね」

実際には悠は持っていない。部屋には仕事関係は勉強していた本や資料程度しかない。しかし悠には当てがあつた。

「明日、朝に来るからその時に持ってきてあげるね」

誰にも見せないような悠の優しい笑み。隼人の表情に嬉々な瞳が浮かんでいた。

「今日はわざわざごめんなさいね」

あまり長時間いても負担になると、十五分程度で悠は帰ることにした。隼人の母が受付の前まで見送りについてきた。

「いえ、こちらこそ楽しい時間を過ごさせてもらえましたから」

どこまでも礼儀正しく振舞う悠。決して謙遜しなくせに、その振る舞いが嫌らしく感じられない。

「ところで、一つお聞きしても宜しいですか？」

悠は隼人の前だからと尋ねることは配慮して避けたが、やはり始めから気になっていた。

「病氣のことかしら？」

隼人の母親もそのことは始めから分かっていたのだろう。周囲には見た目に分かる症状の子もいるが、そうでない子も多くいる。院内だから元気に過ごすことができて、外へは出られない子などは見た目ではどのような病を患っているのか、その子の親族や関係者しか知らないことも多い。

「無理にとは言いませんが……」

「良いのよ。隠しているつもりはないから」

医療技術が発達し現在では小児がんも約七〇八が完治するようになり、昔のように致命的な難病ではなくなってきたはいるが、それでも我が子の病名を本人や周囲に隠したりすることは未だに少なくはない。偏見はそうすぐには消えることは、いつの時代もないのだ。「あの病室には、白血病、骨折が二人、肺炎の子がいるのよ。そして隼人は神経芽細胞腫しんけいがさいぼうしゅって小児がんなの」

隼人の母親は悲しそうでもなく、勿論嬉しそうでもなく、無表情に近い静かな表情で悠に言った。

「一つ奥のベッドが空いていたでしょう？ そこには隼人と同じ症状の子がいたの」

その言葉に悠はハッと時が止まったように小さく口が開いたままだった。入院すれば必ずしも完治して退院出来るわけじゃない。末期の患者向けのいたずらな延命治療をするではなく、肉体的苦痛を和らげ、孤独感や死への不安などの精神的な悩みの相談に乗り、平安な死を迎えされる施設もあるくらいだ。入院して、退院出来ないまま生涯の道を閉ざされてしまうこともある。隼人の母親の言葉にその全てが込められていた。

「みんな一人だと、不安なのよ。でも、症状や病気が違えど、一緒にいると私たち親じゃ理解出来ないくらい明るくなったり、外で自

由に遊んでいる子たちみたいに元気になれることもあるのよ」

そこで亡くなった子も隼人と同病だった。そこから来る、その子の両親にしか計り知れない不安もあるはずだ。悠には隼人の病状がどのようなもので、治療法がどういうものなのかは知識がないため、病名を聞いただけではパツとするものはないが、同病の子が亡くなったと言われれば、それが軽視してはならないということだけは理解できた。

「そうなんですか。私も子供の頃に長期入院していて、その時は一般病棟だったので、まさかあれほど病院だと感じさせない雰囲気だとは思いませんでした」

悠の言葉に隼人の母親が小さく笑った。その声はとても辛そうでもあった。

「では、隼人君よろしくお伝えください」

「ええ、でもあまり無理して見舞いは良いからね。私たちでも耐え難いことも多いわ。あなたもその目で見たでしょ？ だから無理しなくて良いわよ」

その言葉に一礼すると、悠は病院を後にした。外に出ると暖かい風が微かに吹いていた。

車に戻ると、すぐにエンジンを掛けることなく、背もたれに力なくもたれかかった。騒がしかった外の騒音も車内にいるとほとんど聞こえなくなる。

「はぁ……」

ただお見舞いの品を持って行って、少し話をしただけ。それだけだったというのに、悠は仕事で疲れたような重たいため息を漏らしていた。みんなニコニコ笑って、あどけない笑顔が可愛かったものの、やはり初めて目の当たりにしたその光景に少なからずショックを受けた。ニット帽を被り、隼人の母親がその下は抗がん剤の治療の副作用で抜けてしまったの、という言葉が、胸を打った。隼人のように帽子で隠している子もいるが、僅かに残る髪の毛や、既に全て抜け落ちてしまった頭で遊んでいる姿は、ファッションとしてや

っているわけではないため、部屋へ、小児病棟に足を踏み込んだ瞬間、言葉を失っていた。

「子供の輝きって、凄いのね」

「思わず呟いていた。」

あれだけ自分の病と闘っているのに、それを全く感じさせない素振りには、大人であれば見栄や周囲への配慮だと分かるが、子供はそこまで自分を偽ることを知らない。幼い頃から入院生活を送っていると、尚更だろう。だからあの振る舞いは偽りのない、素直で我が侷な、どこにでもいる子供と同じだ。絶望に打ちひしがれるのではなく、退院して学校に行って遊ぶ。そんな些細な夢を見続けながら過ごす姿はとてもじゃないが、今の自分には出来ないと思った。

「……………」

鼻を吸ると、嗚咽が漏れそうになった。ルームミラーに映る自分の目に必要以上の潤いがあった。

「いけないいけない」

何かを振り払うように悠はその涙を拭くと、メールを一通打った。

三・止まらない、時

いつものように午前の仕事を切り上げ、一人寂しく食堂で昼食をとる。ここ最近はずスタ系ばかりで飽きたため、炒飯と餃子の中華にした。

「おや、今日は珍しいじゃないかい？」

「ええ、たまには飯系を食いたいなって思ってた。やっぱり麺類じゃなかなか腹に溜まらないですから」

食堂で食券を渡すと、おばちゃんが気前良く笑って、それじゃあたっぷり食べて早くあんたの腕前をみせとくれよ、と多めに作ってくれた。

「さて、どこか空いてなかったか？」

特に今日は大した行事もないというのに、スタッフ以外に観光客や近所の住民の姿が多い。

「ここ、良いですか？」

一人で住民の方々のところに混じって食べるのは少々気が引けるため、やっと見つけた場所に座ることにした。

「ん？ ああ」

「何だ、小僧か。今から昼か？」

俺が見つけた席は、藤沢上官と、大浪整備総括長がいた。整備班からは整備長とか言われているらしいが、パイロットからは整備士を総括する人のため、そう呼ばれている。

「はい、少し雑用が多いもので」

少々嫌味を皮肉風に言ったつもりだが、上官たちからはお前の仕事が遅いからだと逆に注意されてしまった。

「小僧、腕の具合はどうだ？」

周囲の席はほとんど埋まってしまったが、この人たちの近くは幾らか空いている。もともと威厳と雰囲気のある二人のため、なかなか近寄れないと言うのが多勢の本音で、俺も元々その一人だが、楽

に席が取れるのであれば特に気にしない。悠の性格が映ってきた気もしないでもない。

「まだポツキリですよ。二ヶ月はかかるらしいですから」

今ではだいぶ落ち着いてきたが、たまに忘れてしまつと下手に動かして激痛が走ることもある。

「全く、自己管理も出来んとは情けん」

藤沢上官の言うことはごもつともだ。だが、これはむしろ整備班にも責任があるようにも思えないでもない。車輪軸に張り紙していても、なかなか目につかないっての。

「小僧、今のうちに基礎から見直しておけよ。ただでさえパイロット不足なんだ。お前でも戦力なんだからな」

「あ、はい」

とっつきにくいことは、とっつきにくいだが、根は二人とも良い人だ。部下のことを何だかんだ言いながらも、気遣っている。さすがはベテランで飛行場の大きな責任を担う人たちだ。大浪整備総括長の言う通り、俺はまだまだ小僧だ。二人の言う通り、仕事の合間にはもう一度基礎からやり直す時間を作らなければ、即戦力として復帰出来ないな。

「奥田、お前か？」

「あつ、すみません」

色々俺の日頃の態度がどうだとかダメだしを受けながら昼食を取っていると、メールが入った。

「彼女がいるようになったのかあ」

大浪整備総括長が酔っ払った親父のように茶化してくるが、サブディスプレイに映し出されたのは、悠だった。

「彼女なんていないですよ。雨宮からです」

苦笑しながらメールを開くと、そこには旦那の仕事帰りに買い物頼む妻のようなメールだった。

「T 4の模型を買ってきて？」

特に理由もなく、そう書かれていた。意味が分からん。何故にそ

んなものを買わないといけないのか事の説明を求めたい。

「模型？ 雨宮、そんなのをお前に使いを頼んだのか？」

大浪整備総括長が、俺と同じように不思議そうに見てきた。とりあえず、その必要目的を返信すると、二十秒も立たないうちに返信があつた。それを見て俺は、声が漏れた。悠の返信にはたった七文字で、『隼人君のため。』と書かれていた。さっぱりしすぎだろ。

「奥田、どうかしたのか？」

藤沢上官が俺の表情の変化に横目で見てきた。

「いえ。ただ病院で知り合った子供への土産に、と言うことみたいで」

詳細は分からないが、元々女らしく絵文字やデコレーションメールなどは男には使わない奴だから、その素っ気ない短文で全ては把握出来ないが、少なくとも俺の言葉に間違いはないだろう。悠はプラモや模型には興味はないはず。だから、俺にこんなものを買うように頼むということは、見舞いの品にするつもりなのだろう。

「この土産屋にそんなのありましたっけ？」

普段はほとんど利用しないため、自衛隊の資料館などになら置いてあるだろうが、ウチにはあるかは分からない。

「完成品ならいくつか応接室や受付前に置いてあるだろ」

それは観賞用の展示物で、売り物じゃないと思う。

「売り物はなかったな。ま、持って行っても良いんじゃないのか？」

なあ？ と大浪整備総括長が藤沢上官に同意を求めると、上官も持っていていけと一言言つと、ざる蕎麦を啜つた。

「良いんですか？ あれ、展示用なんじゃないんですか？」

しかも高いやつだ。俺なんて見ていただけで満足してしまうのに。構わん。まだ子供なんだろ？」

上官がお茶を啜り一息つく俺を見てきた。

「ええ。まだ小学一年か年長組つてところでした」

あくまでも見た目だが、それくらいの年齢だったはずだ。

「なら、持って行ってやれ。子供の為ならここに置かれているより

も、その小さな手で遊ばさせるほうが良い」

上官の言葉に大浪さんが相槌を打っていた。

「それじゃ、お言葉に甘えさせていただきます」

二人が良いというなら、飛行場の社長が許可するも同然だろう。

もつとも社長は滅多に顔を出さないから、俺の記憶の中にも薄い影しかないが、飛行場のベスト四に入る二人が揃って首を縦に振るのだから、帰りに受付の所の一機拝借させていただく。

「それじゃ、仕事に戻ります」

先に食事を済ませた二人はしばらくお茶でも飲んで一息つくのだろう。俺は食べ終わると残りの仕事が残っているため、模型の件の礼を言うと、食器を片付けて食堂を後にした。

「それにしても、ちゃんと見舞いに行っただんな」

事務所に戻りながら、悠が隼人の見舞いに行ったことに感心していた。悠の性格なら当然だが、すぐに打ち解けたようで俺に見舞いの品を注文するほどなら、隼人も大丈夫なのだろう。意気揚々とした気分で俺は午後の仕事に取り掛かった。

「今日もやってるなあ」

午後便の空き時間を利用して、飛行場の上空を閉鎖しバードフライが既に三ヶ月を切った航空祭への訓練に追われていた。上空を何度も旋回しては滑走路上空に侵入しては様々な演目を披露していく。管制塔からの指示で細かい調整に手こずっているのか、何度も同じ技を練習している。体にかかる負担が大きいものは最後にするようで、比較的難易度の低い技をやっている。

「奥田さん」

「美友紀ちゃんも休憩？」

「はい。奥田さんもですか？」

事務所内は相変わらずクラシックがかかっている。朝はテンションが上がるのだが、昼時は他の子が持ってきていた比較的落ち着きのある曲に変わっていた。デスクに向かっていると、これがまた良い子守唄のようで舟を漕いでしまう。藤沢上官も今は出払っている

から、特に注意する人は香田先輩くらいなのだが、その人が居眠りしているとなると、所内は静かだ。

「眠くなってきたからね。ちよつとした眠気覚ましたよ」

窓辺においてあるテラスのようなスペースで寛いでいるのは俺だけじゃない。他にも休憩や資料の打ち合わせなどをしているスタッフもいる。それぞれがバードフライの訓練している最中は思い思いの時間を過ごしている。

「受付は良いの？」

受付はそれなりに見学に来た人や仕事の依頼にくる業者が絶えずやって来る。

「はい、今日はそれほど忙しくはないですから」

四人がけのテーブルを二人で占領する。五つほどあるテーブルは朝と昼時は早い者勝ちになる。

「それじゃ、後は後輩に？」

「いつも私がいると、一人での仕事が身に着きませんから」

何だかんだでちゃんと先輩をしているんだな。俺なんて後輩が入ってきても上官が指導するから、先輩面なんてほとんどする機会がないのに。

「美友紀ちゃんは偉いね」

俺の言葉に美友紀ちゃんが、そんなことないですよあ、と言いなから僅かに赤くなった。本当に可愛げがあつて良い子だと思った。後輩の子は幸せだろう。俺なんてしごくにしごかれただけだったしな。今も変わらないけど。

「腕のほうは少しは良くなりました？」

「痛みは少ないけど、骨はまだまだだよ」

「そうですか。無理して治りが遅くならないようにしないと、フルートも奥田さんを待ってますよ」

窓の外へ目を向ける美友紀ちゃん。俺もそれにつられて空を見ると、智史が乗る三番機が俺のフルートだ。ちよつと上空で花開くように隊形を保ちながら上昇し、四機が花開くように散開していく上

向空中開花。スモークは出してないから迫力こそ欠けるが、プロペラ機独特の風合いのある空中開花になる。

「フルートが遠くに行った気がするなあ」

「そんなことないですよ」

美友紀ちゃんはそう言ってくれるが、やはり今の俺にはフルートが遠い。ジェット機には及ばない高度だが、それでも今の俺には天と地の差があるほど、フルートに限らず、他の航空機も遠い存在だ。子供の頃憧れた時のような気もするし、未来のものを目にした気分でもあった。

「畑山さん、凄く奥田さんのこと気にしてましたから」

「あいつが？」

美友紀ちゃん言葉に思わず素っ頓狂な声が漏れた。あいつが俺のことを心配するはずがない。フルートを預かるとか言いながら、今じゃすっかり自分と一体にしている。たまに俺以上にフルートの呼吸があっているのでは、と思わせる飛行を時折見せる。正直その光景は見たくないと思ってしまう。俺は必要なのでは？ と思わずにはられない。

「どうしたら健介の奴、早く良くなるか？ とか、骨折に良い物って何かないのか？ とか色々と聞いて回ってましたよ」

「嘘お？」

「ほんとですよ。本人は周囲に口止めてましたけど、私も聞かれましたから」

信じられん。あいつが俺のことを心配しているだなんて。いつも性懲りもなく人をからかってはフルートを乗り回しているくせに、根がそんなことをする奴だとは思えない。

「奥田さんが早く復帰することを願ってるんですよ」

そう言つて笑う美友紀ちゃん笑顔に俺は何も言えなかった。驚愕の事実呆気に取られた。

「皆、奥田さんの復帰を待ち侘びているんですよ。奥田さんの飛行を楽しみにしているお客様もいますし」

「俺の？」

「遊覧飛行で、奥田さんを指名する方もいますし、空撮でも奥田さんはヘリを操縦しないのか？ って聞いてくる方もいますから。藤沢さんや香田さんの次について言っても良いくらい、奥田さんは人気があるんですよ？」

「楽しいな笑みを浮かべて、知りませんでした？ と聞いてくるが、全くそんなことは知らない。」

「皆さん何も言わなくても、本当はっていうのがあるんですよ」

今日は意外なことを知った日だ。まさか智史に限らず、ほかのスタッフも気にかけているとは思ってもよらないことだった。

「それに私も、ですから」

美友紀ちゃんが赤らめた顔で、早く奥田さんの飛行を見せてくださいね、と笑って仕事に戻った。

「俺って、そんなに良い奴じゃないと思うんだけどな」

どこか嬉しそうに仕事に戻った美友紀ちゃんを見送りながら煙草を一本取り出した。

午後からの仕事もバードフライが訓練を終えると、雑費の経理やら予定表の組み換えやらで想像以上に終業時間が遅くなった。

「お疲れ様でした」

夜間組みのスタッフに声を掛けると、受付に向かった。昼間の悠の連絡通り、模型を頂戴しに来た。受付時間は終了しているため、受付には人気がない。既に美友紀ちゃんも後輩も帰宅したのだろう。「これだな」

仕事場だけあって、普段は見過ごしがちだが、色々と航空機の模型が飾ってある。プラモデルとは違うため、質感や重量が重厚な作りだ。子供にはプラモデルのほうが良いんじゃないか、とも思うが、時間もないことだし良いだろう。だが、流石にインパルス塗装のはなかったため、同型機のT 4の模型を取り出した。

悠に迎えを頼むのも今さら気が引けるため、タクシーでも使おうかと駐車場の近くにある公衆電話に向かっていると、クラクション

が聞こえた。

「眩しいな……」

こちらに向かつてヘッドライトを照らし、クラクションが俺を呼ぶようになっていた。

「誰だよ……」

手で光を遮りながら近付いていくと、それが智史の車だとうやうく分かった。

「健介、これから帰りなんだろう？ 乗って行ってやんぞ」

「良いのか？」

意外な奴がらしくないことをしてきたため、少々調子が狂うがタクシーよりは安上がりなため、助手席に乗った。

「何だそれ？」

乗り込んで走り出した車内で、ダッシュボードの上に模型を載せると智史が横目で不思議そうに見てきた。

「T 4の模型だ」

「んなもん、見りゃ分かるっての」

どうやら聞きたいのはこっちじゃなかったようだ。

「何でそんなもん持ってきてんだよってことだ」

「訳ありだ」

「そりゃそうだろう。訳なしでそれ持ってたら窃盗だったの」

俺の話にいちいち反応する智史。お互い何が聞きたくて何を応えるのかくらい分かっているのに、こいつは冗談交じりで話に乗ってくる。

「見舞い品だ」

周囲は畑ばかりなため、車のヘッドライトの明かり以外、時折過ぎていく古い街灯や自動販売機などの小さな明かりが微かにあるだけで一面は闇だ。ラジオから談笑が聞こえるおかげで闇の中でも明るさを感じられる。

「見舞い？ 誰の？」

「はやとだ」

「誰だよ？」

そりゃあ、智史が知るはずもない。知ってるのは俺と悠だけだ。上官たちもただ子供とだけしか知らない。話したところで、こいつにはどうでも良いことだろう。

「病院で知り合った子供だ」

案の定、俺の応えに智史はふーんと、興味なさげに鼻で返事してきた。

「子供にそれは豪華な見舞いだな。俺が欲しいくらいだぞ」

確かにこいつの言う通りだ。模型とはいえ市販なら万単位の物だ。俺だってそうそう買えるものじゃない。貰えるならありがたく頂戴して部屋に飾って眺める。

「にしても、どういう経緯で入院患者と知り合ったんだ？」

診察だけで知り合えるもんか？ と智史が横目で俺を見てきた。

「受付前をいつもちよこまかと駆け回ってたからな。入院しているのが不思議な子供だ」

「子供は大人と違って、知らねえからな」

智史の言葉は俺も分からないでもない。告知されないことは一時の幸せかもしれないが、子供の場合はたとえ告知されようとも、理解するのは難しいだろう。ただでさえ、大人でもよく分からない病気だって数多在る。隼人が自分のことを知っていても不思議じゃないが、その詳細まで理解するのは無理だろう。大人ならそれなりの過ごし方というものを思うことが出来るが、子供には一人で行うことができるほどの力はない。誰かが傍にいて、その温もりに包まれるから子供は安心できる。

「治ると良いな、その子」

「そうだな。きつと治るさ」

あれだけ元気にいつもはしゃいでるんだ。退院間近だから、あれだけはしゃいでいるのだろうしな。

「それは良いとして、お前どこに帰るんだ？」

いつの間にか市内に入ると、信号に捕まった。

「あー、えつと……雨宮の家で」

いつものことだというのに、気恥ずかしくなった。

「何赤くなってんだよ。中坊かっつての」

ほつとけ。お前相手だから逆に言いにくいんだよ。

「うるせえよ。ささっで行け」

「そこでムキになるってのはやっぱりそういうことかあ？」

気持ちの悪い笑みを浮かべている。無性に悔しさに似た恥ずかしさ湧く。

「ちげーよ。悠とはまだ何もねえつての」

ったく、さつきまであんなに神妙な面持ちだったというのに、いつの間にか小悪魔にでも取り憑かれたような不敵な笑みを浮かべてくる。

「まだ？ まだっつてか。時間の問題か？」

こいつもこいつだが、俺も俺だな。言い方を誤った。しかし、こいつも同期なんだから、それくらいの察しはついているだろう。全く人をからかうのが好きな奴というもののほど、相手していて疲れるものはない。

「良いから、黙って運転しろ」

だいぶ町明かりが明るくなり、帰路を急ぐ人の波がどこかしこから集まってくる。

「……なあ、健介」

横断歩道を歩く人を二人で疲れきったような目で見送る。一体どこから来て、どこへ行くこうというのだろうか。表情は似ていても一人一人異なる顔つきだ。それを三流映画でも見るような目で見送る俺と智史は、きっと同じ顔をしているかもしれない。

「何だよ？」

ここの信号は長い。一分以上赤のままのため、信号が変わる頃は車の速度が上がり、危険だと苦情が多い場所でもあった。

「知ってるか？」

智史が自分の右側を見る。俺もその方を覗き見ると、反対車線の

脇に立つ横断歩道の歩行者用信号の下に、誰にも目を配られることなく静かに柱に寄りかかっている小さな花束。その脇にはジュースやビールの缶がいくつか捨てられたように置かれている。そこで何が起きたのかなど聞くまでもない。

「普段この道は通らないから、知らなかったな」

いつも悠はこの道の二本隣の道を通る。ここで事故があつたなんて俺は知らない。こんな近くで事故があつても、普段ろくに新聞も見ない俺にはもしかしたらニュースで流れたかもしれないが、仕事で覚えていない。

「そうか。女性でよ、一人娘と一緒に渡ってる時、トラックが来てそのままな……」

「前方不注意か速度超過か？」

「信号無視の速度超過だ」

曲りの出会い頭ではなく、突っ込んできたわけか。

「二人ともそのまま帰らなかったそうだ」

信号が変わり、走り出す。車内は妙な静けさだ。ラジオの音が遠い。

「見えなかったわけじゃあるまい。正面なら死角も少ないだろ」

一般車に比べて大型車は視界が高い分死角も広くなる。巻き込み事故などはあつてはいけないうまくあることだ。だが、正面から来たのであれば、前方不注意か信号無視くらいしかないだろう。飲酒だったら最悪だな。

「その女性はさ、あと二ヶ月もすれば第二子をその手に抱けたはずだったんだ」

やけに詳しいんだな。こいつは独身だから自分の奥さんだというわけでもないだろうに。

「健介、人は何でたった一分ちよいの信号を急ぎたくなるか？」

智史の言葉に俺は外に視線を向けた。俺だつてまだ行けると思つて、ギリギリかたまには少々アウトだったかもしれないが、突っ切ることはあつた。悪いとは分かつていてもその時は仕事に遅れそう

で気が焦っていた。

「たったの一分も待てないほど急ぎの用って何だ？ 命に関わるほど大事な用って遅刻することか？ その一分で人生なんて闇に落ちる用なんてあるか？」

先ほどまでの表情が一変して、俺でも見たことがないような智史の怒りに満ちたような、悲しみに暮れたような目。死んでいる感じだ。

「遅刻するのと、人の命って天秤に掛けたら、遅刻が重いか？」

「んな分けないだろ。人の命に決まってる」

「じゃあ、何で死んだんだ？」

智史の間髪入れない抑揚のない問いに、健介はそれは……、とそれ以上言葉を紡げなかった。智史の目が物言わさぬ目をしていたから、言葉の思わず吞んでしまった。

「子供の命ってよ、親だけじゃ護れねえんだよ。親の命だって子供にや護れねえ。周囲がもつと目を向けないと、誰も何も護れないんだよ」

「お前、どうした？」

智史がこんな話題をするなんて初めてだ。態度の急変に疑念しか湧かない。

「子供つてのはよ、視野が狭いんだ。だから我が俣になるし、我慢が出来ない」

いきなり話が変わったのか、上手くついていけない。

「親に甘えて、叱られて、褒められる。子供はそれが嬉しいんだよ。そして時には子供が何も知らないから、親の核心を突いて、励ましてもくれる。大人以上に大人なのは子供の時だってある」

何が言いたいんだ？ そんな質問をしても、智史は返事をしない。「健介、お前は子供がどうして元気でいられるか分かるか？」

一瞬だけ智史の目が俺の目を捕らえた。すぐに運転に意識を切り替え、その視線は前を向いた。

「そりゃあ、子供は……」

そこで何を言えば良いのか分からなくなった。子供が元気なのは どうしてか？ それは楽しいから？ 親がいるから？ 友達がいるから？ どれも当てはまりそうで、当てはまらない気がした。何故 あれだけ無垢な笑みを見せるのか。昔は自分だって同じ頃があったのだ。なのに、今じゃあの頃どうして笑っていたのか。それが分からない。

「お前は、子供の心を忘れたんだな……」

智史が悠の家に俺を送り届けるまで、その言葉が最後だった。俺も智史の問いの答えを考えていたが、結局浮かぶことはなかった。

「悪かったな。わざわざ」

「気にするな。じゃあな」

家の前で下ろしてもらうと、いつもなら何かからかって行きそうなのだが、軽く挨拶を済ませると、智史はすぐに車を発進させた。

いつもとは全然違う智史に、何も言葉をかけることも、悪ふざけにうんざりしたように突き放す言葉も何もかけられなかった。普通じゃないと言えばそうだが、今のあいつの思いは、何一つ俺じゃあ汲むことが出来ないことだけは、その背を見送りながら思った。

「おかえり。連絡してくれば迎えに行っただのに」

「いや、悪いからな。それと、これな」

家に帰ると、既に夕食を済ませているかと思っただが、ダイニングのテーブルには二人分の食事が置かれていた。

「これ貰えたの？」

「ああ、藤沢さんと大浪さんが持って行って」

包装も何もしていない丸裸の模型。展示ケースからそのまま持ってきたから仕方ないが、それでも悠の予想はプラモデルだったようで、予想外だと言う具合の驚きの顔が見ただけでも気持ちが悪く堵した。

「それで、今日は休めたか？」

食事を取りながら、久々の休日をまさか家事やらに追われて仕事並みの労力を費やしたのではないかと思っただが、目の隈がほとん

どなくなっているから、睡眠はしっかりと確保できたようだ。

「お見舞いに行つてから、しばらく寝てたから」

「隼人はどうだった？」

隼人の話題に触れた時、一瞬智史の先ほどのことが過ぎつたが、深く考えないようにした。

「元気だったわよ。小児病棟の子供つてみんな凄いのね」

「何が？」

「普通ならお母さんに甘えている年頃なのに、一人で夜は過ごして朝になってお母さんが来るまでずっと待ちながらも、楽しそうに笑つてる」

悠の言葉が智史の言葉と重なって聞こえた。親がいなくとも楽しく笑っている。それがどうしてなのか分からない。

「学校も行けないのに、同じ部屋の子供同士、励まし合いながら私たちなんかよりもずっと強いわ」

悠も何かしらショックを受けたのか、本当に疲れた時などに垣間見せる顔をしていた。

「明日は診察だろ？ その時俺も見舞いしてみるよ」

「それなら、あれはあんたが渡してあげて」

リビングのテーブルに置かれている模型。

「俺が？」

「隼人君、空とか飛行機とか好きなのよ。だからあんたが渡してあげて」

渡すのは構わないが、隼人がそういうのが好きだったとは。

「隼人、飛行機好きなのか？」

「みたいよ。でもついでなのかしら？」

「ついで？」

空が好きなのに飛行機が、と言うわけか。俺も昔は空に憧れて、少しでも近付きたくて今の仕事に就いた。飛べない今はただの事務員だ。

「絵を描くのが好きなのよ、隼人君。絵本とかも沢山持ってだの。」

だからあれに憧れているのね」

悠の視線の先には模型がある。なるほどな。そういうわけか。俺とはちよつと憧れる理由が異なるが、それでも空を思う気持ちは同じだ。

「バードフライのことも話したのか？」

俺たちも一応はアクロバットチームだ。空に絵を描くことは多少出来る。

「長くはいなかったから、そこまでは話せなかった」

「だったら、写真も持っていくかな」

「それが良いかも」

悠の家に世話になる前にフルートが中心だが、バードフライ機の演目写真やらは持ってきた。乗れないからと言ってもやはり乗っている気分くらいは感じたくなる。

「それから健介、日曜は暇よね？」

悠が味噌汁を啜ってから予定を聞いてきた。

「ああ、休みだけど？」

今週末は飛行場自体が休みだ。仕事のある事務員たちは出勤だろうが俺たちは休み。特にすることもなし、寝て過ごそうかと思っている。

「だったら、付き合ってくれない？」

「どっか行くのか？」

「ここ、まだオープンしてから一度も行っていないから、行ってみたい」

一枚のチラシを差し出してきた。それは半年ほど前オープンしたエスプリモールとか言う、大型のショッピングモールだ。俺も行ったことはない。何しろ、片道一時間もかけて行くなんで、余程のことがない限り行く気が起きない。

「面白い物か？」

「一度くらい見てみたいじゃない？」

俺は別にそうは思わないが、悠一人じゃ行く気になれないのだから

う。世話になつてゐる分、我が俣は控えるべきか。久々に見る悠の無邪気に近い笑顔を曇らせる資格はないな。

「まあいいぞ、別に」

たまには遠出して、普段は買わないような物を見るのもいいだろう。俺は節約しなければいけないから、荷物持ちつてところだけだな。

「それじゃ、決定ね」

どこか嬉しそつだが、表情はあまり変わらない。冷めているようだが、内心は楽しみなのだろう。悠は顔に出さない性格だし。

「ふう……」

食後しばしして風呂に入り、ようやく一日が終わる。悠は何やらドラマを見ているが、俺は先に部屋に戻った。何か今日は疲れた。

色々な人間の心を垣間見せられて、ついで行くのがやつとだ。睡眠もそつだが、親友の複雑な顔の原因も気になった。ちやらんぼらんな奴だと思つていままで共に笑い、喧嘩して、上を指すライバルとして働いてきたのに、あんな顔は一度も見たことがなく、焦燥感にも似たモヤモヤが気分を晴れやかにはさせてくれなかった。

「ちよつとトイレ」

手洗いを済ませ、リビングでドラマを見ている悠に聞いて見るとにした。

「なあ、智史のことで、ちよつと気になることがあるんだけど」

「智史？」

不意な問いかけだったか、悠は小首を傾げていた。

「ああ、今日あいつに送ってもらったんだけど、途中の信号であいつ顔が変わつたんだ」

「どこの信号？」

悠の問いに場所を伝えると、何か思い出したように、悠が俺を見た。

「健介、あんた一昨年のこと覚えてる？」

「何を？」

「一昨年のことだなんて言われても、覚えていない。」

「智史、一週間くらい航空祭の後に休んだことあったでしょ？」

「あ、ああ。そう言えば」

「言われてみればそんなことがあった気がする。確か忌引きじゃなかったっけか。」

「その時、あの交差点でお姉さんが亡くなったのよ。姪っ子とお腹の子もダメだったそうよ」

「なっ……！！」

「驚愕しか出来ない。そんなことがあったなんて一度も聞いていない。」

「嘘、だろ……？」

「事実よ。あんた知らなかったのね。私も小耳に挟んだただけけど、本当のことよ」

「何ならネットでニュース検索してみれば？ と悠が言うがそんな気は起きなかった。智史のあの言葉は自分の姪っ子に対するものだったのか。自分の姉とその子供を一瞬で亡くした辛さと憎しみから俺が見たことのない表情をして、俺にあんなことを聞いたのか。」

「そうか」

「何だかんだで、自惚れでもしていたのかも知れない。向こうから親友だと言ってきて、俺自身も乗っていたというのに、あいつのそんなことも酌んでやれなかったなんて。」

「あんたに余計な心配はして欲しくなったから、言わなかったのよ。言ったら遠慮するでしょ？」

「悠が俺の考えていることを見透かしているようだ。」

「遠慮って……」

「あんたは間違いなく仕事に支障が出るくらいに気にかけるはずよ。俺以上に俺のことを知っているような口ぶりだ。本人ですら気づかないことは他人が良く分かっているということは間違いではないのかもしれない。」

「本人が言わないんだから、酌んであげなさいよ。今更ぶり返すよ。」

うなことじゃないわ」

「分かったよ。寝るな」

部屋に戻る際に悠が、おやすみと声を掛けてきてそれに片手で応えると、余計なことを考えないためにベッドに入った。

「全く、聞き分けのない子供か、あんたは……………」

部屋のドアが閉まると、小さく悠が息を吐いた。

「いつまで寝てるのよって、起きてたの？」

「……………ああ、まあな」

夢見心地、というわけではなかった。時間がこつも早く過ぎるのかと起きて早々に思ってしまった。気分の悪い目覚めなんて、久しぶりだ。

「診察あるんだから、さつさと支度しなさいよ」

いつものように朝食の支度にキッチンへと消えていく悠。いつもは体を捻りながら欠伸を漏らしつつ朝食へと行くのだが、今日に限って嫌に目が覚め、欠伸も意識しなければ出てこない。すっかり体が活動を始めている。

「昨日の今日じゃ、やりにくいよなあ」

知らなければ楽だったのに、などといまさら後悔したところで今日が変わるわけじゃない。冷水で、いつもより目覚めは良いくせに締りの無い顔に気合を入れなおすように顔を洗う。余計なことを考えている時は、極端なもので身を引き締めるのは効果がある気がする。髪を整えると既に整った朝食を当たり前のように悠の向かいに腰を下ろし食す。

「それ、食べ終わった後に取り替えるから」

悠が目で俺の左腕を見る。ここ数日は洗濯していなかったから包帯も少々汚れていた。綺麗にしておくように言われていたのに、すっかりそんなことは片隅からも消えていた。

「ああ」

特に会話が続きずに気まずいわけじゃない。元々口数の少ない悠

だから、雰囲気はいつもとんなら変わらない。と俺は思うが、今日に限ってこの空気が分らない

「健介、あんた昨日のこと気にしてるのは分かるけど、もう智史自身がある程度の区切りはつけてるんだから、いつも通りにしなさいよ」

呆れたように悠が自分の首下を突く。意味が分からず、自分の首下をみると、ボタンを掛け間違えていた。悠から目を逸らしながら何事も無かったかのように正す。滑稽そうに見る悠の目が痛かった。「うん。それじゃあ、行きましよ」

「はいよ」

支度を済ませ、模型を持つと二人で家を後にする。車内では相変わらずエオリアン・ハープや黒鍵のエチュードなどのシヨパンの曲がかかっていた。既に聞き慣れすぎて曲名まで身につけてしまった。弾けるわけじゃないのに、自然と指が曲に合わせて適当に動いていた。考える暇を与えないようなテンポに、今は身を任せた。

「相当気に入ったの？」

横目で助手席を見てくる悠が、俺が思案に沈んでいることを見透かして話題をふってくる。気を逸らそうとしていることが丸見えだったようだ。

「まあまあ」

「所内でも掛けてるんだって？」

飛行場とは逆の道を行く。もうじき病院の看板が見えてくる頃だろう。古本屋や服屋の無駄にでかい看板が流れていく。名前の分からない街路樹が初夏に向けて少しずつ緑を深めていく景色にあわせるように、町が起きていく。

「誰に聞いたんだ？」

整備班とは使用する場所が異なるため、休憩時間などおそらく誰かが聞いたのを悠にも話したのだろう。

「補給の子がCD探すって言ってたわ」

自分のことではないのに、どこか嬉しそうに話す悠。不思議と俺

がMDをかけてから、飛行場はちよつとしたブームでも来たのだろうか。自分が気に入っていることを誰かが気に入ってくれると、嫌な気はしない。

「どうせ、今だけだろ？」

ブームなんて来てしまえば後は廃れて消えていくだけだ。いつまでも続くものなんてそうはない。いつまでも続けばブームと呼ばなくなるだけだ。それを知らないほうがおかしいと、常識へと変貌を遂げていく。人間なんて所詮は物の本質を知ることなく、上辺だけで満足してしまう生き物だ。だから、クラシックなんてものはすぐに忘れられるに違いない。通じやないから有名になるまで知らない曲だって、数多くある。この曲はあの人、なんて思うこともあって、流行れば当たり前に聞こえてしまい、その価値はその道を知る人間からすれば、嬉しくもあるかも知れないが、下がっていくものだろう。

「良いじゃない、別に。好きな人が聞くには何であっても良い曲なんだから」

冷めていると言うか、達観してるなあと感心に近い呆気に取られかけた。自分のこともきちんと分かっているから、他人のことに口を挟むだけの下地を持ち合わせているのだろう。悠は強い女性だ。それに比べて俺なんてまだまだだ。ちよつとしたことで満足して、いい気になって、棘が刺されば痛みに対処することよりも先に、その痛みに打ちひしがれている。子供そのものじゃないか。

「どうかした？」

一人窓の外に向かってばやいている健介に、悠が怪訝そうな眼差しを向けてくる。

「……強いつて凄いな」

「何よ、急に？」

「何となくな」

健介の呟きに悠の表情がさらに歪むが、健介には目に入っていないようで、一人で何かに納得したり、首を傾げていたり、奇妙な

行動をしていた。

「健介、時々意味わかんないこと考えたり、したりする癖、直した方が良いわよ」

「俺ももつと鍛えないといけないな……」

そんな健介を横目に悠は、昔から変わってないわね、などと苦笑しながら病院へと車を走らせた。車内に音楽がなければ、噛み合うことのない滑稽な二人の独り言で何とも表現しがたい空気で満ちていただろう。

「だいぶその姿も似合うようになりましたね」

病院でいつものように、本当に医師なのかと疑わせる発言をする医師にいつものように診断をしてもらい、リハビリなどの話を少々交えた後、健介と悠は小児病棟の方へと向かった。あまり早い時間は面会時間まで待たなければならぬため、普段より遅い時間で診察をし、仕事に支障が出ないようにとりあえず挨拶を兼ねた簡単な顔出しだけにしておくことにした。

「健介、消毒しなさいって」

五〇四号室に来ると、朝の検温などで看護師が忙しくあちこちを行ったり来たりしていた。まだ眠そうにしている子や、朝から元気一杯はしゃいでいる子など、随分と一般病棟に比べると賑やかだった。

「これか？」

全病室の前に置かれているシャンプーのような入れ物。消毒と張り紙がしてある。医師、看護師はもちろんのこと、見舞いの家族も部屋への立ち入り前は消毒が絶対だ。小児においては尚のことである。

「手洗い場は？」

健介は消毒することには納得しているが、こんなところでハンドソープを使えば手を洗わないと消毒液まみれのままだと思ったのだろう。健介の言葉に悠は思わず噴出した。

「大丈夫よ。それは馴染ませればクリームみたいに消えるから」

悠が手本と言わんばかりに消毒をする。

「おお、マジで消えるんだな。すげえ」

健介は入院というものはテレビで見るとな病室内の事しか知らないため、子供のように消毒一つで表情を輝かせていた。

「恥ずかしいから止めてよね」

そんな健介になるべく目を合わせないように、悠は先に病室へと足を踏み入れた。

「あつ、おねえちゃん」

部屋へ入るなり、悠に気づいた隼人がベッドの上から見つめていた。

「おはよう、隼人君」

昨日悠が隼人に渡した菓子がいくつか隣の棚に置かれていた。封を切った様子もなく、何も手をつけていないようだった。

「よう、隼人」

悠の後にカバンを提げた健介も入ってきた。

「おじちゃんもきたの？」

余り時間のない二人は、ゆっくりしている暇がないため、手早く用件を済ませることにした。

「隼人、お前にプレゼントを持ってきたぞ」

「ぶれぜんとお？」

朝から母親が来ている子や、看護師と楽しげに会話を楽しむ子もいる。カーテンが引かれたままの静かなベッドもあるが、今朝は比較的落ち着いているようだった。

「昨日、隼人君に約束したでしょ？」

悠が健介を見る。それに健介が頷いて、カバンから模型を取り出すと、隼人の表情が華やいだ。

「これ、くれるの？」

「ああ、特別に貰ってきたんだ。大事にしるよ」

プラモデルとは違い観賞用のため、台座から取り外しが出来ないが、それでも隼人はずっと欲しがっていた物のためか、二人が見た

中で一番の笑顔を見せていた。

「おねえちゃん、おじちゃん、ありがとう」

「どういたしまして」

「壊すなよ。良い物なんだからな」

悠は満足げに微笑み返し、健介もキラキラと輝く隼人の目にどこか嬉しそうに頬が緩んでいた。

「それじゃあ、隼人。俺たちは仕事があるからまた今度な」

「もう、かえるの？」

「うん、ごめんね。また今度ゆっくり遊びに来るから」

ものの十分と言ったところだろうか。悠も健介もただでさえ遅刻の上での見舞いなので、時間がなかった。来たばかりだというのにもう帰らなければならぬ悠と健介に、隼人が寂しげな眼差しを向けてくる。いつもなら待合の椅子で母を待っているはずだが、今日は部屋で大人しくしていた。部屋にいること自体がここでは当たり前なのだろうが、その目から嫌でも感じられる孤独の哀しさが二人の良心を締め付けるように感じられた。

「はやと、ダメだよ。大人っていそがしいんだから」

そんな二人に、隣のベッドでテレビを見ていた子が声をかけた。

「隼人、心配しなくともまた来るさ」

「そう言ってるんだから、兄ちゃんたちきてくれるよ」

あどけない隼人に比べて、足を骨折しているようで動きにくそうだが、大人っぽさを感じさせるな、この子。子供も色々なんだなと俺にはとうの昔に忘れてきた何かを思い返させるような何かを感じた。

「ほんと？」

「うん、今日はちょっと時間がないけど、また遊びに来るからね。何か欲しいものとかある？」

子供にはとことん甘い悠の姿に、健介は思わず母子に見えてしまった。

「えほんがほしい」

「絵本？」

悠としては色々と飾られている飛行機の玩具などかと思っていたようで、意外そうな顔をしていた。

「それだけで良いのか？」

まだ幼いからと言うわけではないが、もつと欲しい物があっても、子供の要望に応えることくらいわけないのだが、隼人は空の本が良いと付け加えて笑っただけだった。

「分かった。今度来るときは持ってきてあげるね」

時間も押してきたため、それだけ約束すると俺たちは部屋を後にした。

廊下には車椅子で友達なのだろう、押してもらいながら散歩か遊びに行く途中の子たちとすれ違った。おはようと声をかけると、不思議そうにこちらを見てくる穢れのない表情は、可愛げがあった。

「一人一人症状が違うだろうに、みんな生き生きとしてるよな」

「そうね、大人とは違うのよ。子供って」

時折どこかの病室から聞こえてくる注射を嫌がる子供の泣き叫ぶ声や、各階に設置されているソファの置いてある休憩所では数人が一緒になって朝のアニメを食い入るように見ていたり、ナースセンターの所で無邪気に看護師と遊んでいたりと、様々な時間の過ごし方をしている子供を見ると、良い意味で言葉を失う。どこにももある学校や家庭での一コマが、病棟には凝縮されたようにあちこちで繰り広げられている。長期入院で学校に通えない子供に、教職員が出向いて院内学級と呼ばれる病院での勉強会など、日常生活の全てが見られるような気がする。ただ違うのは、多くの友達や家族と外で走り回って自由に遊ぶと言う事が出来ないだけにしか俺には思えず、ただひたすらベッドで一日を過ごし、リハビリをして退院を目指すという俺の想像していたものとはかけ離れた現実に、言葉が出なかった。

「あら・・・・・・？」

「あ、おはようございます」

先を歩いてきた悠が立ち止った。その視線の先にいる一人の女性。どこかで見覚えがある気はしなくてもないが、思い当たる節がない。「今日も来てくれたのね」

「はい、診察のついででしたから、あまり大したことは出来ませんでしたけど」

悠はすっかり打ち解けているのか、目の前の女性と会話を弾ませていた。

「そちらの方は……」

目が合った。条件反射的に軽く頭を下げると同じように返してくれた。

「どうも、奥田と言います」

俺の名前を聞いて、俺の左目に視線を向けると思い出したようにもう一度挨拶をしてきた。

「健介、隼人君のお母さんよ」

誰なのか疑問に思っていると、悠が肘で突いてきた。なるほどな、どうりで何度か見かけた記憶があるわけだ。

「わざわざお忙しい中、ありがとうございます」

年齢は俺たちより少し上だろう。そこまで畏まられると、こちらとしてもそれ以上に頭を下げないといけなくなってしまう。

「いえ、俺のこれ（・・・）のついでに立ち寄ったので、気にしないで下さい」

左腕を少し持ち上げると、大変でしょうと気遣ってくれる。お世辞じゃない本心から言っているのが良く分かる。我が子が入院を余儀なくされているのだから、その大変さは理解しているのだろう。全く頭が上がらない。

「俺なんて大したことはないです。ここにいる子たちに比べると、恥ずかしいくらいですから」

骨折なんて俺にとっては初めての経験で、負傷者を気取って意気揚々としていたが、それはただの甘えに過ぎないのだとここへ来て実感した。自分の病気や怪我に真正面から真摯に向き合っている子

供が大勢いる中で、俺は浮いていたと思う。通り過ぎる子供からも大丈夫？ と心配そうな声をかけられてるくに返す言葉も見つけることが出来ず、ただ強がって笑うだけしか出来なかったのだから。きつと見た目だけならそこから辺で遊んでいる子供と同じなのに、その体が抱えている負担は俺の左腕では受け止め切れないほど重たいものを抱えている子が、決して強がることなく無垢な笑みを浮かべているのを見てしまうと、今までの俺が情けなくて恥ずかしくなってしまう。

「では、そろそろ私たちは……」

悠がそう言っていると、引き止めちゃってすみません、と俺の目をしっかりと見つめていた。俺は静かに頭を下げると、エレベーターへと歩いていった。エレベーターのドアが閉まると、無意識にため息が漏れてしまった。僅かな時間しかいなかったと言うのに、その時間はとても濃く感じられた。

「何か、凄いよな」

「そうね」

俺の言葉に悠がドアを見つめたまま相槌を打つ。悠は二度目だからそれなりに慣れたのかもしれないが、生まれて初めて見た俺としては、見たことで感じた良いこと悪いこと色々感慨深くなることがあった。

「健介だけじゃないわよ」

「そうか……」

やはり悠は俺の思っていることが分かっているようだ。だから俺も余計なことは言わない。きつと悠も昨日似たようなことを思ったのだろう。それに昔入院していたわけだから、尚のことだ。俺が何を言おうが間髪入れずに返すだけの答えを持っているだろう。そうだとすれば、俺が質問をしているわけじゃなくて、俺が欲しい答えを求めて聞いているだけに過ぎないだろう。

「さ、行くわよ」

「ああ」

そのまま俺たちは特に病院の話題を持ち出すことなく、仕事へと向かった。

飛行場についた頃は既に全ての機能がフル稼働といった様子で、ここも忙しなかった。もう慣れた書類整理を今日もこなしていく。今日の所内は静かだ。情報番組が流れているだけで、先日のような明るい雰囲気はないというか、夢が覚めたようにそれぞれが仕事に向き合っていた。既にほとんどのパイロットも出払っているようで、取り残されたような疎外感に近いものを感じながら俺も仕事に励んでいた。

「そういえば、今日は音楽がかかってないね」

「何か、誰かが持ち帰ったかしたみたいで、奥田パイのMDないんだって」

「誰も他に聞くような持ってないから、今日は静かよね」

「藤沢パイが普通のはお客様に迷惑だからって、今日はなしみたい」
事務の子たちの話し声が聞こえた。意外と浸透していたことに驚きながらも、MDが紛失していたこともわずかばかり気になった。

「奥田パイ」

「どうかした？」

事務の子達はパイロットたちをパイと縮めて呼んでいた。昔は気恥ずかしさもあったが、今じゃ当たり前で特に気にならない。

「MDは持って帰ったんですか？」

「いや、入れたままにしておいたけど？」

持って帰って寝る前にも聞こうと思っていたが、夜間組みが聞くといつたので、コンポにセットしたままだ。

「じゃあ、夜間組みの誰かな？」

「ま、いいじゃん。そのうち戻ってくるよ」

「それもそうですね」

仕事中に聞けないのは少々残念だったが、それくらいで気落ちするようじゃ仕事にはならないため、特に気にすることなく俺も仕事に戻った。

昼食を軽く済ませると、いつものように午後からの便がしばらく空く間にバードフライの訓練が始まった。昨日の事もあり智史のことが気にならないわけじゃなかったが、飛行から戻ってきた時の智史はいつもとなんら変わりなく、事務の子を呑みに誘っていたりと俺が知る智史だったため、勤めて俺も普通に振舞った。悠の言う通り、二年も前のことだから、本人なりにけじめをつけているのだから、俺がどうこう言うてぶり返すのは気が引けた。

「フルートともすっかり馴染みやがったな」

コピエをとりながら窓の外を見上げると、バードフライの主メンバーとしてすっかり定着した様子の智史が乗る俺の愛機が視界を横切っていた。機体にはそれぞれ癖があり、特に俺のフルートは難しい奴だと思っていたが、智史の操縦捌きを見る限り、フルートも智史を気に入っているように見える。俺がいなくとも平気に。

「何か、巢立つていく我が子を見ている気分だな」

正直、羨ましかった。三ヶ月なんてあつという間に過ぎるかもしれないが、それでも俺には長い。ここ最近はろくにフルートの傍にすら行っていない。顔を合わすと体が疼いてしょうがないから距離を置いているが、やはり空を飛ぶことが羨ましい。飛行するにあたり、負担が大きい分業務とは別に空を飛んでいる感覚を強く感じられるバードフライの面々に嫉妬しているかもしれない。海を愛する漁師がなかなか仕事を辞めたがらない頑固な精神を持つことと同じで、俺も地に足をつけるだけの毎日が嫌だ。だが、今の俺には治すことが仕事だ。割り切るしかないが、俺は諦めが悪いというか、悠のように何事にも柔軟に対応できるだけの器がない。

「ちょっと頭を冷やさないとな」

心で分かっているても、体が言うことを聞こうとしない。聞きたがっていない。

「さ、仕事仕事」

逃げるようにコピエを済ませると、窓から離れた。耳にはいつまでも聞きなれた振動する重低音が響いていた。

「奥田、今日はもう上がっていいぞ」

夕刻も過ぎ、飛行場が赤からその色を失っていく。気の早い星々が微かにその光を輝かせていた。空に焦がれる者は数いれど、たとえ今現在誰よりも高い場所へ辿り着けている宇宙飛行士でさえ、その星の瞬きには程遠き存在だ。ここにある航空機ではどうやっても届かない遠い遠い世界だ。死んだら星に成る。その意味が何となく分かった。

「あ、はい。それじゃあ、お疲れ様でした」

一声かけるとあちこちからお疲れ様だとか、また月曜に、だとか返ってくる。

「じゃあな、健介」

「お前は夜間か？」

事務所を出ると、智史と出くわした。今日は飛行続きでまともに話す機会がなかったから意識することは無かったが、ここに来て会うとは思いつまなかった。

「まあな」

いつもと同じ顔だ。昨日のことが夢だったようにも思える。

「雨宮が車で待ってたぞ」

「さんきゅ」

だが、いつもとはやはり違う。茶化してこない。特に話すような話題も浮かばず、悠も待っているというのであれば急ぐに越したことはないだろう。俺は軽く右手を上げると智史の脇を通り過ぎる。

「気にすんなよな。俺はガキじゃねえんだからよ。それと、当たって悪かったな」

「……いや、こっちこそ」

俺にしか聞こえない呟きで智史が言い残すと事務所へ入っていく。その背に一言返事をして、俺も階段へと向かう。智史のその一言を俺は待っていたのかもしれない。聞きたい言葉を聞くことが出来たからか、わだかまりが解けたようで、肩に入っていた変な力が抜けた。余計なことを言わず、聞かずに良かった。明日は休みだ。きつ

ちり自分にけりをつけて、週明けからはいつも通りにライバルとして、親友として元に戻るだろう。

「遅くなった」

「いつもより早いわよ」

俺が車に乗ると、悠の頬が微かに緩んだように見えた。見透かされたか？

「何だよ？ 何か面白いことでもあったか？」

「別に。お腹空いたから早く帰りましょ」

俺の問いを軽く流すと、車を走らせる。ふと飛行場を見ると、ちよとどさつきまで車が止まっていたところから、俺と智史がいた廊下が見えた。明かりがついていて丸見えだ。そういうことかよ。

「覗きの趣味があつたのか」

「さあ、何のことかしら？」

俺の表情を見て、確信を持ったのだろう。白を切る辺り悠らしいと言えばらしい。妙な敗北感もあるが、ま、いいさ。帰路につく車内にかかっていたシヨパンが気分を軽快にさせてくれた。

翌日、日曜とあつて悠と約束しておいた通り、今日は遠出のためいつもと変わらない時間に起こされた。折角の日曜も他と変わらない時間の使い方のため、やっぱり断るべきだったかなどと後悔しながらも片道一時間をかけて既に移動中のため、諦めざるを得ない。

「お前の私服つて思えば久しぶりに見るよな」

運転している悠を見ると、いつも仕事の送迎では目になっているが、今日の私服はそんなんじゃない。なかなか様になっている洒落た格好だ。仕事には特に着飾るようなことはしていないため、結構久しぶりに見る気がする。香水の仄かな香りも嫌じゃない。

「最近の仕事漬けだったし。たまにはこういうのも悪くはないですよ？」

確かに。家で一日まったりとするのも良いが、仕事とはかけ離れたことをするのも良い気分転換になる、か。オープンしたから半年

以上経っているが、当初の賑わいはニュースでも取り上げられたいらだったから、俺も少しは興味があつた。無駄使いは出来ないが、少しくらい夏物の服は買っておきたい頃合だからちよつど良い。

「そうだな。でも日曜は多いだろうな」

この辺りじゃ大型のショッピングモールなんてほかに無い。この辺りじゃ初出店の店も多く入っているとか言う話だ。半年経つたとは言え、休日ともなれば多くの人で賑わっているだろう。

「良いじゃない、別に。誰も気にしないわよ」

人を隠すなら人ごみの中と言うくらいに、多くの人間がいればいるほど一目を気にする人もいるが、実際はそれほど誰も誰かを見ていない。目的があつて来ているのであつて、大方それくらいしかまともに目に留まることはないため、多いほど一目が付きにくく、周囲を気にする必要が薄れる。その代わり行動はしにくくなるが。

街から街へ移り行く景色を眺めていると、家々が立ち並ぶ街と街の間はのどかな畑や水田が続く。腰の曲った爺さん婆さんたちが畑仕事に精を出している。そんな光景もほんの数秒足らずで視界から消えていく。流れる景色に次々と久しぶりに地上から見る隣の風景が広がっていく。空から見る景色とはまた違って車から流れる世界を見るのも悪いことじゃない。それでもやはり早く地上の光景を上空から眺めたいと深心では思う気持ちが強くなる。

「やっぱ、多いな」

「空いてる所、あるかしら」

駐車場はまだ開店から一、二時間程度しか経っていないが、それでもゆつに三分の二は軽く埋まっている。やはり誰も考えることは同じで、出入りゲートの近くに集中して埋まっている。

「距離あるな」

「空いてるだけマシよ」

どれほど駐車できるのかは知らないが、百台以上は見渡す限り止まっている。俺たちが止めた所はゲートまで距離があるが、まだ近いほうだろう。

「結構広そうね」

「だな」

なんだかんだ言いつつも、俺も悠も外観から既に気品や高級感の感じられるエスプリモールに機体が高鳴っているのは違いないだろう。予算はあまりないから、少しだけ懐に吹いてくる風の気配が冬に感じられた。

モール内に入ると、外観同様に内装も拘っている様で、そこいらのショッピングセンターとは漂う雰囲気が違う。だが、多くの人で賑わっている分、少々そのテーマが薄れているように感じるのはいだけだったか。

「健介、他に見たい所ある？」

俺は特に下調べをしたわけでもなく、悠に付き合いながら興味を引きそうなフロアを見て回っていたが、予算を低く見積もりすぎたか、良い感じに思うものは悲笑するばかりだ。とりあえずTシャツ数枚ですぐに予算が尽きたため、もうこれ以上の出費は痛い。

「いや、用件は一通り済んだから特には」

「じゃ、ちょっとお昼にしない？」

そろそろ昼頃とあって、フードコートで何か食べてから帰るのも悪くないだろう。俺と悠は飲食店フロアへ移動した。あちこちから様々に空腹に訴えてかけてくる食欲をそそらせる香りが鼻につく。

「多いわね」

俺も悠もいくら名店だからと言われていても、行列が出来ているのであれば並んでまで食べたいとは思わない性格だ。一生に一度しか食えないってわけじゃないんだしな。

「喫茶店で軽く済ませるしか無さそうだな」

「そうね、どっちにする？」

一通り見て回ると奥の広場にある二つの喫茶店が俺たちの目に止まった。一つは明るい雰囲気、もう一つは重厚感があった。かにもエスプリモールを意識した中世の佇まいだ。

「そうだなあ……おっ？」

二つを見比べて、一つ思い出した。

「悠、こっちにしよう」

俺は明るい雰囲気を感じられる店を選んだ。看板にはリレモンドと書かれているのか、それとも違うのかよく分からない。英語であるならそう読めるが、意味が合わない。

「リール・モンド？」

俺が思ったことは異なる名前を悠が口にした。

「リレモンドだろ？」

俺が聞くと、悠が壁を指差した。よく見ると案内板にご丁寧にアルファベット表記の店名などにはフリガナがふってあった。相変わらず周囲によく目を向けている奴だと心中で苦笑しつつも店に入った。

「いらっしやいませ」

店に入るなり、女性店員がニッコニコな笑顔を浮かべつつ店内に流れる音楽に合わせてリズムを取っているのか、心なしか体が揺れている。随分と楽しそうに接客をしているな。悪気があってのことには見えないから、上手く彼女の時間に乗ることが出来ないが、他のお客も不満は無さそうなので、こういう店なのだろうと思った。

「何名様ですか？」と聞かれたので二人だと伝えると奥のテーブルへと案内された。悠は驚いたようで、俺が声をかけるまで店内の内装に見入っていた。もう一つの喫茶店も気にはなつたが、昨日隼人に約束した絵本のことを思い出して、こっちの喫茶店にした。窓からは一部しか見れなかつたため、俺も店内に足を踏み入れて驚いた。

「すごいわね、このお店」

「ああ、何て言うか、なかなかないよな」

店内は喫茶店だ。スタッフも少々仕事というか趣味で働いているように見えないでもないが、普通の接客だ。だが他の喫茶店と違うのは、棚は色鮮やかな表紙の絵本で飾られている。漫画喫茶などは全く雰囲気は異なり、絵本の鮮やかさで店内が余計なインテリアを置いていないが、爽やかで華やかに見える。

「絵本喫茶なんて、初めて来たかも」

悠も意外そうに近くにあった絵本を手を取っていた。俺も初めてというか、絵本を専用においている喫茶店なんて聞いたことが無かった。

「ご注文はお決まりですか？」

先ほどの子とは違う、今度はきちんとした接客態度の女の子が注文をとりに来た。

「何にする？」

「このおすすめ絵本セットってどういのですか？」

俺のことは無視して悠が店員に問う。何か疎外感を感じた。

「こちらは、当店のスタッフがお勧めする絵本とランチのセットです。また、お客様のご要望があたりでしたら、その中でのお勧めをご用意致しております」

また少し変わったサービスだな、と思うが、先日隼人が言っていたことを思い出して数百もある中から自分で探すよりは、探してくれるというのだからちょうど良いかもしれない。

「俺はそれで」

「私も同じものを。あと、空をイメージした絵本があればお願いしたいんですけど」

「絵本セットお二つですね。畏まりました。少々お待ちください」

注文を繰り返して営業スマイルを残すと、店員が厨房のほうにメニューを伝えるに消えた。

「ここって販売もしているみたいだな」

テーブルの上に置かれているボードタイプのメニュー表にブックセラーを兼ねていることが書かれていた。

「でも、後日配達ってことは注文販売みたいね」

贈呈用の包装やら細かく書かれていた。本屋はモール内にも大手の書店などが入っているが、絵本専用に取り扱っているのはこの店くらいだろう。隼人の希望に副える物が見つかるだろうか。

「翌日配達可なんだから、火曜にでも届けてもらって持っていけば

良いんじゃないか？」

俺の次の診察は水曜だ。その時に持っていけば良いことだろう。悠も納得してくれたようで、他にも自分なりに気になった絵本を手にとってはインテリアにもなりそうなものを買うつもりらしく、見定めていた。

「お待たせ致しました。こちらが絵本セットでございます」

先ほどの店員がランチと絵本を持ってきた。受け取るとごゆっくり、と他のお客の元へ戻り、俺たちは昼食を取ることにした。

「空飛ぶピアノだって」

「俺は羽の生えたタンポポだ」

聞いた事のないタイトルだ。もとい、俺は絵本なんて子供の頃以来のことだから、飾られている絵本なんてどれも知らない。ランチを食べる手を片手に、二人して絵本に没頭する。会話はない。まるで蟹を食べている時みたいだ。店内にピアノ曲が流れている。悠の絵本にはびったりかもしれない。俺の方は、タンポポの綿種が新しい世界を目指して風と共に色々な場所で花や虫と出会って、自分の居たい世界を旅して行くというストーリーだ。要は人間の生き方と同じなのだろう。親元を離れて独り立ちしていく不安と期待が上手く表現されている。やはり狙いは幼い子供だからか、それほど文字は多くない。温もりのある絵がなかなか良い味を醸し出していた。久しぶりに読むと絵本も悪くないかもしれない。

「うん、これは良いかも」

俺が読み終わった後に悠が満足げに絵本を閉じた。タイトルだけじゃ内容がいまいち掴めない。表紙には空を飛んでいるのか、ピアノと子供や動物が描かれている。気になって悠に借りて見ると、俺のとは内容が全く異なり、空を飛ぶピアノが、人や動物の願いを叶えるために演奏しながら空を飛んでいくというものだった。ピアノの演奏を聴いた者の願いが叶うという、いかにも絵本にあるというか、絵本でしか描けない世界観だと思う。

「隼人には良いと思う。俺にはちょっとばかしよく分かん」

何となく著者が言いたいことは分かるが、俺はどうやら心が穢れているらしい。内容がいまいちピンと来るほど飲み込めなかった。だが、隼人のことを考えると、きつとこのピアノに元気になって外で遊ぶんだ、などと願いを掛けそうな気がする。入院生活で外に焦がれているだろうか、こういう話があると少しは気分も変わってくれるかもしれない。俺の感想に満足したのか、悠は俺の本も気に入ったようで買うと言っていた。

俺が清算を済ませている間に悠が絵本購入用のレジで注文をしていた。レジで絵本に書かれている番号を言えば後は住所等を書くだけで言いようで、すぐに悠も支払いを済ませていた。

その後も一通りモール内を見て、食材やら化粧品やらを買って、俺たちは帰路に就いた。疲れたことは疲れたが、疲労というほどの疲れではなく、心地良い休日の疲れになった。

週が空けると、休日間に溜まっていた仕事で飛行場は忙しい時間が流れ、俺の雑用も普段の数倍も溜まっていたるくに休憩を取る時間すらなかった。もうじき骨折から一ヶ月も経つこともあり、すっかり右腕での作業に慣れてきて休息に右腕の筋力がつき始めだそうと言う時期を迎えようとしてきた。

「おい、奥田。航空祭の会場設営の打ち合わせ資料はまだか？」

「はい、ただいま」

今はそれどころじゃないか。あと二カ月後に行われるウチの飛行場の航空祭の準備が半ばを迎えて、飛行計画の他にも出店やフリーマーケットの打ち合わせなど俺にははてんで関係ない雑用まで押し付けられて、先日の休日はやはり寝休日しておくべきだったと後悔するばかりだ。

「あ、奥田さん」

「美友紀ちゃん、ごめん。ちょっと時間がないんだ」

何かの用でもあったのか、俺が会場の資料を会議室へ届けにいくとしたら美友紀ちゃんと出くわした。藤沢上官が急かしていたか

らのんびりと会話を楽しんではいられない。

「あつ……」

何か言いたげにも見えたが、会議室の前で直接の上司じゃないが、今は仮にも雑用係のため、俺を呼ぶおつさんも一応は上司だ。やれやれ、もつと怪我人を労わることくらいしてくれと、内心は思いながらも言葉に出すことはしなかった。腕一本でへこたれていては申し訳ないと思う気持ちのほうが強くなっているからだ。

「昨日からあいつ、何かまた変わったよな」

「香田さん……」

これから飛行のよう形で制服姿だった。窓の外から小型のバスが見え、数人の観光客の姿も見受けられ、これから遊覧飛行というわけらしい。

「ここ最近のあいつは浮き沈みが激しいな。パイロットとしてはアウトだな」

香田が呆れたように健介が入っていった会議室に目を向ける。週明けの昨日から仕事が多忙なことも一つなのだろうが、週末はどこか何かに遠慮するようによそよそしく仕事をしていた健介が、今度は気分一転に張り切って仕事をしている。パイロットたるもの精神的に強くなければ勤まらないが、健介はちよつとしたことで変化が子供のように変わる。

「そうですね、何かあったんでしょうか……」

「だろうな。じゃなければ、余程のことがない限りは、ああはならんさ」

そう言い残すと、香田は搭乗前のお客様への挨拶へと受け付けの前の待合所へ向かっていった。

「余程のこと……」

一人廊下に残された美友紀は、ちょうど整備の打ち合わせでバーンドライの各機体の機付長たちと事務所の一角で打ち合わせをしている悠と目が合い、逃げるように受付へと戻っていった。

「何だったのかしら？」

「雨宮さん？　どうかしましたか？」

「いいえ、なんでもないわ」

一瞬目を合わせたのが、すぐに姿を消した美友紀に悠は首を傾げていたが、打ち合わせの途中だったため深く考えることはなかった。

「お疲れ様でした」

月曜火曜と、休憩すらまともに取りることなく仕事をこなしてた健介。ようやく溜まっていた仕事も片付き、悠はまだ上がっていないためしばらく待つことにして一服していると、こちらでも仕事を終えたような美友紀が少し良いですか？　と私服姿で事務所の休憩スペースで寛いでいた健介の前に来た。

「美友紀ちゃん、どうかした？」

「少しお話がしたくて」

どこかしおらしい美友紀ちゃん。さっきまでいつものように明るい笑みを浮かべていたから、少々戸惑ってしまふ。まだ半分も吸っていない煙草をもみ消し、コーヒーで口直しをして身を正す。

「話って？」

仕事のことだろうか。ここ最近は色々と忙しくてきちんとこなしてきたつもりだが、帳簿の整理が間違っつて美友紀ちゃんに迷惑を掛けたか。自覚なしだったのは痛い。美友紀ちゃんが何か思いつめたような顔をしている。覚悟して聞くほうが良さそうだ。

「あの、ですね」

「うん、覚悟は出来てるから、遠慮なく言ってくれて良いよ。責任は取るから」

俺の言葉に美友紀ちゃんが動揺していた。大きく目を見開いて俺を見てくる。少々顔が赤らんでいるのは、それだけ美友紀ちゃんは言うべきかどうかを考えているのかもしれない。

「あ、あの……」

そんなに言い難いくらいなへマを俺はしてしまったのだろうか。

なかなか言い出さない美友紀ちゃんに内心心臓が強く脈打っている。

「奥田さん、前に言いましたよね。雨宮さんとは何もなくて」

「へっ？」

全くの予想外の言葉に思わず、変な声が出た。美友紀ちゃんが恥ずかしそうに、言っちゃったあめ的な顔をしている。そして俺は呆気にとられている。

「だったら、私と付き合ってもらえませんか？」

美友紀ちゃんは既に勢いで言ったのだろう。俺が呆気に取られ思考が停止した状態に、さらに機能停止にでも追い込むような言葉が聞こえた。はつきりと。

「えっ、み、美友紀、ちゃん……？」

「お返事はまた今度で良いですから」

それだけ言うと、恥ずかしさで一杯なのか身を翻して掛け足取りで事務所から出ていった。何かと仕事をしているスタッフが不思議そうに美友紀ちゃんの後姿を見ていた。とうの俺は何も答えられなかったというよりも、状況が掴めずただただそこから動けなかった。

「やれやれ、どいつもこいつも中坊かつての。ま、俺も人のことは言えねえか」

それを智史が苦笑して見ていたが、俺の目には留まらなかった。

「あ、雨宮さん……」

「あなたも今帰り？」

逃げるように受付の前まで来た美友紀の前に、仕事を終えた悠が現れた。悠はいつものように普通に声を掛けたが、美友紀には今一番顔を合わせたくない人物の一人だったため、一礼すると会話を交わすことなく裏口から駆けていった。

「……」

何も知らない悠は今日の美友紀の様子にただ首を傾げて見送るしかしなかった。

「健介、終わった？」

「あ、ああ。悪い、ちょっと色々あってな」

どうやら悠は先に仕事を終え、なかなか車に來ない健介を呼びに

来たようで、それを見た健介が悪戯を隠す子供のように慌てている姿に何となく勘付いたようだが、何も言うことなく二人して帰路に就いた。車を走らせ、飛行場から十分ほどして掴まった周囲にほとんど明かりのない信号で信号待ちをしていると、悠がぼやくように口を開いた。

「健介、私は別に今更だから良いんだけど、いいの？」

今日はいつもととは違って車内にはラジオも悠の好きなエオリアン・ハーブや他のエチュードを入れた音楽も何もかかっていない。対向車もなく信号の少々暗闇に浮かぶ不気味な赤い光と車の白い光に、メーターの蛍光緑の微かな光があるだけで、二人の顔は互いにはつきりとは見えなかった。

「……見てたのか？」

悠が何を言おうとしているのか悟った健介は、問われてから数秒ほど置いて横目で悠を窺うように口を開いた。

「私がそういう性格じゃないことくらい分かってるんじゃないの？」
悠ならもしあの場にいれば、誰かがそのことを囁くだろう。だが、あの時は誰もそんな様子を見せることなく仕事をしていた。健介には容易に考え付くことだった。

「小野原さんに言われたんでしょ。それでまだ何も答えていない。受け入れたんなら、もう私の出る幕じゃないけど、まだなら今のうちを考えておきなさいよ」

あの時を見ていないにも関わらず美友紀とすれ違った程度だといふのに、悠の勘は恐ろしいほどに鋭く、優柔不断になりがちな健介を叱責するかのような言葉。彼女とて女性だ。美友紀のことくらい考えるまでもないのだろう。美友紀の健介への態度で気づかないのは、健介くらいなものだ。他の誰もが口にしなただけで、恐らく飛行場のスタッフの半数は薄々と感じているだろう。

「急に言われてもな。すぐには答えられないって」

悠が自分に何を言おうとしているのかくらい分かる。俺があの時美友紀ちゃんの申し出を受け入れれば、俺は居候を辞めなければい

けないだろう。しばらくは一人暮らしに戻ったところで乱れるのは食生活くらいな気もするから平気だが、そこは今一番考えるところじゃないのも分かっている。だが、今はどちらかと言うと一刻も早くフルート共に空へ戻ることが俺の中では最優先。だから、困惑してしまう。仕事場で五本の指に軽く入る子から告白されて嬉しくないわけじゃない。

「いつまでも引き伸ばされると、ストレス溜まるんだから、そこは覚えておきなさいよ」

信号が変わり、悠が車を発進させる。Gと呼ぶほどじゃないが、背もたれに押し付けられる微かな重みが一瞬どこか深くにドン、と重たくのしかかるように感じた。結局この日は足早に悠との時間を切り上げると、そそくさと自室へ戻った。二日間で仕事の疲労は早くも溜まっていて、すぐにでも眠りにつけそうな気がしていたが、結局意識を失ったのはベッドに入ってからかなり時間が経ってからだ。

「今日もないな」

水曜の受診日。診察を受けレントゲンを取り、怪我の経過を珍しく医師が真面目に語り、具体的なこれからのことを聞かされ、診療を済ませるといつもなら隼人が待っている待合所にもその姿はなく病室へと昨日届いていた可愛い包装紙で包まれた絵本を持って向かった。

「おはようございます」

病棟へ向かう途中、隼人の母親が同じエレベーターに乗り込んできた。着替えやらを入れているのだろう。大きなカバンを手に俺たちは挨拶を交わした。

「隼人君は、どうですか？」

エレベーターが動き出し、離陸時に感じるよりもはるかに弱い浮重感を感じながら悠が隼人の様子を尋ねた。

「思ったよりも良くないのよ」

てつきりいつものように同室の子たちを楽しませてくれる、うる

さいくらしいに元気だと言われると思っていたので、母親の言葉に俺も悠も驚かされた。

「悪いって、こと……ですか？」

俺が聞くと、しばらく戸惑うように口を閉ざしていたが、意を決して話してくれるようで、エレベーターが止まるのを待った。しばらくの沈黙が、俺と悠に嫌な予感を現実にはさせるかのようになり、苦しく感じられた。エレベーターが止まり、部屋に行く前に隼人の母親が待合所の椅子に誘った。慌しく仕事に追われる看護師や医師が俺たちの前を行ったり来たりし、入院している子も朝食を済ませて早速歩いていたりと、そこにある光景はいつもと全然変わりのものだった。

「最近、抗がん剤の効果があまり出なくてね。昨日、左目を失明したの」

しばらく椅子に腰を下ろしたままだった隼人の母親の何気ないように開いた口から聞こえた言葉に、一瞬俺たちは固まってしまった。

「えっ……」

「本当……ですか？」

悠が信じられないと言った表情をしていた。薄い化粧からでもはつきり分かるくらいに、蒼白に近い顔になっていた。俺ももしかしたらそうだったかもしれない。ほんの数日前まで、俺が持ってきた模型を嬉しそうに抱きしめて自慢げに飾って笑っていたのに、この二日あまりでそこまで症状が悪化していたとは想定外も甚だしい。

初めて悠が隼人の見舞いに行った後に俺も隼人の病名は聞いた。正直俺が分かったのは、小児がんの一種だということだけで、それ以上はどんな病気でどんな治療が必要だとかは知識が皆無だった。

「もともと、隼人は無理しがちでね、本当は病室で大人しくしていないといけないのよ」

周囲のざわつきが嘘のように、俺の耳に入ってくる現実だとは信じたくない事実が静かに聞こえる。

「抗がん剤の治療の影響で、頭はあだし、体力も元からほとんど

ないのに無理して遊ぶことに気を使うから、本当は起きていることも辛いはずなの。想像以上にあの子はボロボロなのよ」

何と言ったら良いのか、どう言葉を返せば良いのか浮かばない。しつかりと隼人の母親の言葉は俺の中に浸透している。だからこそ、世辞すら浮かんでこない。

「私ですら、あの子の事は分かっていたわ。この前になつて目がぼやけているって言ったの。まだまだ子供なのに、変なプライド持ちちゃって隠してたのよ」

「それじゃあ……」

悠が最後まで問うことなく、隼人の母親が頷いた。何を聞きたいのか分かっているようだ。

「視神経にも転移していたの。それが原因で目が見えなくなるかもしれないとは聞いていたの」

俺たちでもかなりのシヨックなだから、家族ともなれば、ましてや自分が激痛に耐えてその手に抱き上げた子ともなれば、計り知れない不安や恐怖、自責などを感じずに入られないだろう。こうして平然と俺たちに語るには、相当な覚悟の上でのことではしか出来るよ。うなことじゃないはずだ。肉体的な負担よりも、心理的負担はきつと今の俺では理解しかなるはずだ。

「今は熱もあつて寝てるわ。昨日はずっと一人で静かに泣いていたから疲れたみたいね」

悲愴なことだろう。親にとっては自分の肉体を引きちぎられるよりも苦痛かもしれない。昨日は一日中傍について、さきほど着替えを取りに戻ったらしいが、きつとろくに休んではいけないのだろう。

「息子が苦しんでいても笑っているのに、何も出来ないなんて、母親失格ね」

自分の不甲斐無さを自嘲するように笑みを浮かべるが、その目は虚ろで力がなかった。

心の中ではいくらでも言葉が浮かんでくるが、口から出すに相應しい言葉など俺は持ち合わせてなどはいなかった。だが、一つだけ分

かることがある。子供に何も出来なくても、そこにいてくれるだけで、子供は安心出来るのだと。

「さてと、そろそろ戻らないと。あなたたちも仕事があるんでしょ？ 早く行かないといけないんじゃない？」

語るのもしんどいことなのだろうに、俺たちを気遣ってくれる、その母の力は偉大だと感じた。それでも隼人の母親は、自分を責めている。そんな人に俺が余計な励ましなどをするのは、かえって追い込むようにしか思えず、俺は自分の口を固く閉ざした。悠もこの時ばかりは俺と同意見だったようで、悲哀に満ちたような眼差しを浮かべるだけだった。

何も出来ない俺たちに来れること。今は一つだけしかないといい、俺と悠は顔を合わせる、隼人の母親に絵本を渡した。

「あの、これ、隼人君にと思ひまして」

視界がぼやけていて、左目が失明したともあれば、正直これを贈るのは非道かもしれない。人前であれだけ元気を装っていた隼人が、今どんな気持ちでいるのかを思うと、合わせる顔がないというものだ。もっと早く知っていたら、もっと早く分かってあげていれば、きっとここで絶句して何も出来ないことに対して打ちひしがれることもなかったはずだ。

「ありがとう」

悠が差し出した絵本を温かな瞳で受け取ると、もう一度ありがとう、と言葉を残して隼人のいる病室へと歩いていった。今日は合わせる顔がなかった。あれだけ楽しみにしていると笑って笑い、俺たちが仕事へ行こうとした時にどこか哀しげに見つめていたあの瞳。あの時は何も思わず、ただ俺たちが来たばかりなのに遊ぶことも出来ずに帰ることを寂しく思っていただけだと思った。だが、もしかしたらあの時既に俺たちのことはぼんやりとしか見ることが出来ず、隼人自身が次に会う時はもう俺たちを声と匂いと触感でしか感じられないと悟っていたから、焼き付けるように、見納めにするようにあんな瞳をしていたのかもしれないと思うと、心を強く締め付ける

心苦しさに襲われる。そんなものは俺たちが勝手に思うだけのことかもしれないが、どうしてもそう思ってしまう。

「健介、行こうか」

いつもなら、俺が従うことが決定しているような『行きましょ』
なのだが、悠も相当なショックを受けたようで、酷くも優しくも聞き取れる声だった。

「ああ」

俺たちは結局そのまま再びエレベーターを降り、病院を後にした。受付前で名前を呼ばれるのを待っている多くの怪我や病を抱えた人々。きつとここにいる人間のほとんどが、階上の病室で懸命に己を蝕む続けるものと闘っている、小さな掌に夢を抱き続けている命があることを漠然と、もしくは何も知らずに何も考えることなく、自分の番を待っているのだろう。これほどまでに今まで自分の力のなさを痛感したことはなかった。この数日は奥田健介と言う人間を様々な観点から自分で自分を見せられた気分だ。

「悠の言う通りだな」

隼人の見舞いを初めて行った後に言った悠の言葉が今になって本当の意味を理解した。

「私たちには、守らなければならない義務よね、あれは」

「そうだな・・・」

仕事に向かう車内は、昨日とは全く違う静かな空気が漂い続けた。飛行場に着き、いつもと同じように俺は事務所へ悠は格納庫へと今までで一番の遅刻をしながら仕事へと向かった。

「あ、奥田さん」

いつもなら社員は裏口からと決められているのだが、気がつけば俺は正面から入っていたようで、お客の対応をしていた美友紀ちゃんと目が合った。

「おはよう・・・」

昨日告白されたことすらも、既に今は昔のことのようで俺はそのままお客に軽く頭を下げると、そのままろくに会話をすることなく

階上へと上がっていった。

「奥田さん……?」

不思議そうに美友紀が健介の後姿を見つめていた。昨日の今日で顔を合わせた時はどう接したら良いのか、気まづくはないかなどと色々と悩みどころがあったが、健介の昨日とは打って変わった表情にどこ吹く風のように美友紀はただ呆気に取られるばかりだった。

「あいつ、今日はどうした?」

業務が午後からということと健介の先輩の香田が美友紀と同じような顔を浮かべて健介の前の机で飛行計画書を見つめている智史の肩に手を乗せていた。

「俺にもさっぱりなんすよ。来て早々明後日の方ばっか見て、仕事になってないんですよ」

智史も昨日までそろそろ切り上げるよ、と仕事に精を出していた健介に苦笑していたのに、今日は今までが嘘のように茫然自失している健介に呆気に取られていた。

「全く感情の起伏が激しい奴だな。あんなんを藤沢さんが見たら即刻下ろされるぞ」

不幸中の幸いなのか、藤沢上官は山頂にある気象観測装置の老朽化に伴う改装工事での資材搬送の業務に出ていて、夕刻まではほとんど飛行場と観測基地の往復で事務所に戻る時間はなかった。

「昨日まではなんだったんだか。先輩は何か知らないんすか?」

「分からん。昨日何かあったか?」

香田の言葉を受けて智史が昨日のことを思い返すが、今日の健介の様子に見合うような出来事は一つしかない。だが、健介のことだ。答えを出していないからと言って健介のことなら、不気味なほどに仕事に打ち込むか、無駄にハイテンションでいるはずだと思った。悠と何かあったとするなら今の状態は考えられなくもないが、それならきつと一人で何かをひたすら呟くか、延々と同じ書類のコピーを取っていたりと意味不明な行動をしているはずだと、仮にも親友だと自負している智史は考えた。

ペースこそ今までよりも驚異的に落ちているが、何とか仕事はしているようだ。ただ身が入っていないだけで、ここに上官がいれば一蹴して湯を入れれば問題はなくなるかもしれないが、その頼みの綱も今は香田だけ。

「あー、えつと……」

智史はこのことを言うべきか悩んだ。美友紀ちゃんが誰を好きで、健介の気持ちに傾いているのが誰で、香田が狙っているのが誰で、健介の気持ちを間違いなく受け止められるのが誰であるのかを把握している智史としては、自分の一言で全てが公になる気がしてどうするべきか判断に悩んだ。

言い淀んでいる智史に、香田は話を聞かせると耳を寄せてくる。

健介は相変わらず上の空のため息を混じらせながら書類の整理をしていた。

「あー、実はですね……」

自分の目標としている先輩というだけあって、逆らうことが出来ず昨日のことを話した。

「……そうか。分かった」

智史の話聞いた香田は感情を高ぶらせることも、落ち込むこともなく大人の対応らしく冷静に頷いていた。

「あつ、でも、あいつ返事はしてないですよ。美友紀ちゃんがその前に帰っちゃったんで」

とりあえずフォローも入れておいたが、香田は聞いているのかわいなのか、デスクに向かって読書でもするかのように静かにパソコンを見つめている健介の下へと歩み寄った。

「健介、ちよつと来い」

健介の肩を叩くが、健介は静かにパソコンの画面に釘付けにされたように見入っていた。集中すると小さく口が開くの癖でもあるのか、目だけは画面の羅列された文字を追っているが、それ以外は人形のように固まったままだった。

「おい、健介っ」

数回呼び掛けても無視しているのか振り向きもしない健介に香田が軽く左腕を叩いた。

「いつ……つっ……!!」

突然の腕からの激痛に無表情だった顔が痛みに歪んだ。智史が健介に、うわぁ痛そう、と自分がされたわけでもないのに苦虫を噛み潰した顔をしていた。

「……あつ、先輩。急に痛いじゃないですか」

本当に今の今まで気づいてなかったようで、微かに涙目で見上げていた。

「ちよつとこい。仕事になつてないだろ」

香田は問答無用で健介を連れ出した。訳が分からず健介は連れられていくだけだった。事務員や他のスタッフたちも何を言うでもなくそれを見送っていた。その中で智史は健介に同情しながらも、健介が先ほどまで見ていたパソコンを覗き込んだ。

「あいつ、何見て固まつてたんだか」

しばらくは戻ってこないだろうと踏んでいたため、智史は自分にも責任があると思い、少しくらいは肩代わりをしてやろうと健介のデスクに移って開かれたままのホームページに目を向けた。

「何だ、これ……?」

てつきり飛行関係かと思つて目を向けた智史の顔が困惑に満ちた。目に映っているのは航空機体のことでも、気象情報でも、曲芸飛行のことでもなんでもなかった。

「小児がん……?」

画面の上部に書かれていた言葉。他にも詳細に病気が症状から治療法まで詳細に書かれたページが開かれていた。

「何であいつ、こんなの見てたんだ?」

智史は健介の不可解で意味深な行動がさっぱり理解出来なかった。「ここで良いか」

ちよつと離島への野生動物生態調査をするために、予約のあった大学の教授らが乗るエアロスパシアルがローターを回転させ始めてい

た。航空局に申請許可を行っていたから、低空飛行等をするつもりなのだろう。次第に離陸に向けてローターの回転が早まり、ゆっくりと機体が地から離れて飛び立った。ヘリには航空機とは違い、少々離陸から着陸までの手続きに手間が掛かるが、それが当たり前前の為、苦になることはなかった。

「先輩、どうしたんすか？」

全く状況が掴めず、ただ香田の後をついてきた健介が来たのは、屋上だった。仕事時間とあって二人以外に人影はない。管制塔からなら見えるかも知れないが、どんな会話をしているのかまでは誰にも分からないだろう。

「それはこっちの台詞だ。昨日までのやる気はどうした？」

先輩が煙草を取り出し、火をつけ大きく吸い込んで吐き出した。風に流されすぐに空気をどうかして白い煙はどこかへ消えていった。

「それは……」

返答に困った。今日は今迄で一番仕事に力が入っていない。それは自負してた。もし、今のままで腕の怪我がなく、飛行が入って飛んででもいたら死んだだろう。そうならないために健康チェックはあるし、そもそも怪我をしていなければ隼人とも出会うことはなかったのだから、こんなことを考えるのは野暮だな。

俺から言わない限り先輩は追及しないと言うようで、ただ煙草をふかしていた。隼人のことを悠以外と言葉交わすのは、今の俺には出来るものじゃなかった。いくら先輩であれど、それが上官であれど、まだ数回の見舞いで言葉を交わした程度の子のことを口にするのは、特に昨日あんなことを聞かされた後とあっては尚更の事だった。俺が何も言えないからか、航空機のエンジン音がするにも関わらず、嫌な空気と静けさが気持ち悪くなる。

「健介、お前はパイロットだろ？　ここ最近のお前はその自覚を全く持っていないな」

痺れを切らしたのか、先輩が煙草を携帯灰皿に押し込めて俺を見してきた。その目は普段は誰からも慕われる先輩の目ではなく、一人

のパイロットとして、元自衛官としてのよつな厳しい目だった。

「そんなことは……」

「本当に言い切れるか？　ここはでかい空港でも自衛隊でもなんでもない、小さな飛行場だ。だがな、そんなものは関係ない。俺たちパイロットに関係するのは人の命と責任を預かることだ」

先輩が視線を俺から着陸してきた軽飛行機に向ける。

「パイロットも整備士も管制員も、事務員も全員が同じものを背負って、この小さな飛行場を運営してるんだ。それを楽しみにしてくる大人も、それに夢を見る子供も来るんだ。私情を挟むなどは言わん。俺たちは人間だ。不完全だからこそ前に進めるからな」

ただ黙って先輩の話に耳を傾けるだけだった。先輩が俺を説教するのは多いが、ここまで語る説教というのは、ここに入社して初めてバードフライに入れたことに浮かれていた時にされた以来かもしれない。

「けどな、お前は弱すぎる。それくらい分かるだろ？」

この数日の自分を思い返してみろ、そう言われている。思い返せば反論出来るだけのことを俺はしていないだろう。怪我前は少しばかり気取るところがあつたが、比較的泰然自若とまでは行かずとも、仕事中は心身ともに安定していた。それが今じゃ色々あつて、強く気持ちを持つこともあれば、今日のように全く身が入らないこともある。

「……はい」

「怪我人だからって確かに甘えてくることは少なくなったが、それでも今のままだとお前は二度と飛べないぞ。今のままが続くのならば俺がお前を外す」

「……はい」

そう答えるのが精々だった。自覚しているから、他に返す言葉が思いつかないのが正直なところだ。

「分かっているなら、言葉だけじゃなくて態度で示せよ」

どうやらこれで終わりらしい。先輩が背伸びをすると、いつもの

表情に戻っていた。

「で、だ」

先輩の説教が終わったと思い、方の力が抜けたとたん先輩がまた説教する時とは違う顔で俺を見てきた。心なしかその距離が縮んだ気がする。

「お前、小野原に言われたのか？」

「へ？」

一瞬何のことを言っているのか分からなかった。呆ける俺にもう一度先輩が耳打ちするような小声で言ってきた。

「小野原に言われたんだろ？」

もう一度言われてようやく、事情が飲み込めた。でも、何で先輩があれを知っているのかは不思議だった。

「で、どうなんだ？」

どうやら先輩は俺がどう答えたかを聞きたいようだ。もしかしたら、こつちが今日の話のメインではないのだろうかと思つた俺は不躰だろうか。何しろ、先輩の目が先ほどよりも本気だ。確か前に食堂で美友紀ちゃんがどうのこうのと言う話題になった気がする。先輩が美友紀ちゃんを狙っているのは前々から知っていたことだから俺の予想はあながち間違いではないだろう。

「どうも何も、まだ返事すらしてないですよ」

「で？」

特に他の言葉を言うわけでもなく、先輩は俺を見てくる。正直今の目は説教する時より怖い気がするのは何故だ？

「で？ とは？」

じつとりとした目つきで、思わずたじろいでしまう。どうやらその先、つまりはどう返事をするのかを聞きたいようだ。正直、今の俺にはそこまで考えられるほど余裕はないんだが。

「今はちよつと一杯一杯なんで、考えてはいないです」

正直に言つた。美友紀ちゃんの好意は嬉しいが、どうしても今頭を過ぎるのは悠と耳にした隼人のことだ。仕事の説教を受けていな

がらも、やはり俺の考える所は隼人に対してのことばかりだった。天秤に掛けるわけではないが俺にはどうしてもそっちの方が大きく重たく感じてしまった。

「断るのか？」

「そのつもりです」

今は仕事への本格復帰と、小さな友人に何を俺が出来るのかくらいしか、真摯に考え受け止めることが出来ない。俺は先輩の言う通り強くないから、何にでも精通できるような力は身についていない。美友紀ちゃんには悪いが、どうしてもその二つが俺の今を象徴するかのように心の中で大きな物になっている。

「兩宮か？」

「違いますよ。そんなんじゃないです」

もつと重たいものです。そう口にすれば少しは気分が晴れるかもしれないが、きつとそれは俺が思うだけのこと、先輩に言ってしまうばぶたれるだろう。痛いのはこの腕の痛みと、棘が刺さっている今の心だけで十分だ。

「お前はそれで良いのか？」

「今の俺じゃ美友紀ちゃんには釣り合えませんか」

先輩、今日は意外と粘るな。いつもなら軽く受け流して終わりだというのに。それだけ先輩は、ということなのだろう。

「そうか。だが、綺麗でいられると思うなよ」

短く言うと、先輩は先に戻っていった。その横顔は真剣に見えたのは気のせいじゃないのだろう。

「とりあえず、今出来ることは今のうちにけじめをつけないといけない、か」

いつまでも引き伸ばせば、相手に期待と不安を強く抱かせてしまう。それを煽るようなことだけはしたくない。今出来ることは、きちんと答えを伝えることだろう。それからまた悩めば、少しは次に向けての薬にはなるかも知れない。

「……………よしっ」

右手で両方の頬を叩いて気持ちを引き締めると、昼も近いこともあって、戦に出掛ける前の腹ごしらえと行くことにした。

「はぁ………」

テキパキといつもなら指示を飛ばしている悠が、周りで作業している整備士の中で、一人幾度となくため息を吐いている。

「雨宮、ローター軸んとこ、オイル差しとけ。それとスキッドに車輪ロックもだ」

大浪が悠に指示を飛ばすが、悠はヘリのボディに雑巾で同じところばかりを拭いているだけで聞いているのかはつきりしない表情だった。

「私の時とは何もかも違うのね」

悠が思い返しているのは、恐らく幼き頃の自身の入院生活なのだろう。

「あの頃は、辛いことしかなかったのに、隼斗君は笑ってるんだもん。健介も頑張ってるのに、私一人、何してるんだろう………」

悠は十分すぎるくらい頑張っていると言うのに、本人はそれが満足できるものではないと思っっているようだ。

「雨宮、聞ってるのか？」

「私、空回りしてないかな………」

いつもは自信に溢れ、気丈に振舞い、周囲からの評価は高いというのに、本人はそれ以上の期待を過度に背負っているのかもしれない。そのため、自分自身に自信を見出せていないようでもある。

「全く、らしくないわよ、私」

パンと頬を叩く。仕事に私用の思いを挟んだ自分を叱咤するよう

に。

「雨宮」

「あ、はい？」

だが、そんな雨宮を見て、大波がいつもと様子の明らかに異なる

悠に表情を険しくして歩み寄ってきた。

三・止まらない、時

「奥田さん」

食堂に行こうとしたら、ばったり美友紀ちゃんに出くわした。思わず先ほどの心の中での決意が揺らいでしまうような笑みを美友紀ちゃんは浮かべている。

「み、美友紀ちゃんも、昼？」

「はい、ご一緒しませんか？」

昨日はいきなり俺の前から姿をくらませたというのに、今の美友紀ちゃんは少々顔が赤いが、楽しそうにしている。何というか、こっちが恥ずかしいというか調子が狂ってしまふ。折角の決意が水に落ちた雫のように波打って消えていくかのようだ。

「何にする？」

折角だから、ここは俺が持つことにして、空いているテーブルに腰掛けた。

「何か、昨日とは違うね？」

「そうですね？ そんなことないと思いますけど」

そう言いながら楽しそうに昼食を取る美友紀ちゃんに、俺の良心に小さな棘が言葉を交わす度に刺さるような痛みが走る。

「昨日はいきなりでごめんなさい」

「いや、別にそれは良いんだけど」

苦笑する美友紀ちゃんに、俺はきつと別の意味を含んだ苦笑で返した。

「いきなりだったから、ちょっと驚いたけど」

俺の言葉に再び恥ずかしそうに微笑む彼女が眩しい。憧れだとかじゃなく、今の俺の決意が後数時間後にはその顔から笑みを奪うかもしれないと思っっているからだろうか。

俺自身、昔から色恋沙汰よりは夢を追ってきたから、それほど経験が多いわけじゃない。慣れた奴に言わせれば青いだの、小便臭いだ

の言われるかもしれないが、俺にとってはそういう括りでいられるものじゃない。そんな俺でも分かるくらい、美友紀ちゃんも同じ空気がする。だから、その笑顔が眩しい。

「いきなりじゃ、ない、ですよ……」

美友紀ちゃんが不意に真顔に戻った。正直、漫画などじゃベタな展開だなど、よく目にするパターンだどこか客観視する自分がいられるのも確かだ。この後の事も恐らくは俺の予想に反しない結果になることも見える。だが、今それを俺が成そうとしているとあつては、少々気が重い。少々じゃないな、かなりだ。

美友紀ちゃんの気持ちは薄々ながら、微かに感じていた。だから、周囲には鈍感だと言われていたが、俺自身がそういう気持ちになるよりも仕事に打ち込んでいたため、気を紛らわせるように直視しないようにしていたところもある。今思えば、それがいけなかったのかも。初めから分かりやすい態度で接していれば、今頃は次のことで苦悩していたのかもしれないし、仕事に張り切っていたかもしれない。そんな平行世界のことを考えたところで、抜け出すことなど不可能なのだから、受け入れるしかないのも分かっている。

「あのさ、美友紀ちゃん」

一瞬美友紀ちゃんの目が反応した。怯える子犬のような表情を垣間見せた気もしたが、すぐにいつもの美友紀ちゃんらしい顔に戻った。

「仕事終わったら、ちよつと良いかな？」

その言葉の真意が何を指すのか美友紀ちゃんも分かっているからか、頷いた。

「えっ？」

と思ったのは、俺だけだった。美友紀ちゃんは静かに首を振って頷いた。横に。

「もしかして、先約あり？」

「そうじゃないです。答えは分かっていますから、今は聞きたくない

です」

真剣な眼差しで、初めから俺がどう答えるのか分かっていたようで、俺の答えへの受け取りを拒否した。

「今は、私もまだまだだつて分かつてます。奥田さんの理想には到底及ばないことも。だから、待つて下さい」

「えっと……美友紀ちゃん？」

予想して考えていた道筋から逸れていく。他の道を考えていなかっただけに、戸惑いが隠せない。

「きつと奥田さんに気に入ってもらえるようになるので、それまで返事は待つて下さい」

お願いします、と頭まで下げられてしまった。先ほどから男の目が、いくつか食事を摂る振りをしながらこちらをチラ見している。

中には隠すことすらなくガン見とでもいうべきか、視線だけこちらに向けて、他は昼食に夢中になっている奴もいる。

「あ、えっと、うん」

勢いに負けたというか、流れに流されたというか、気がついた時にはそう答えていた。

「ありがとうございます。きつと奥田さんにも満足していただけた女になりますから」

こう言う所で言う言葉じゃない気がする。背筋に感じる冷たいものが物語っている。

「うん……」

美友紀ちゃんはいつもの笑顔を浮かべて昼食を済ませて仕事へと戻つていった。俺は一服しにいつものように先ほど先輩といた屋上に繰り出した。

『健介、お前な……』

『いや、俺はちゃんとのおつとしたんですけど、何でかこうなつちやつたわけです……』

その途中で偶々先輩も近くで昼食を取っていたようで、始終目の当たりにして食べ終わつた俺を引き止め止めがっちりと肩を組んで、

ネチネチとしばらく苦情を受けたため、その一服はいつもの数倍美味く感じた。

「これで良かったのか……?」

結果から言えば、曖昧な俺の対応が招いた自業自得の結果だ。それは否定しない。だが、俺はそう強くないから、美友紀ちゃんの悲しげな表情を見たくないと言う衝動に駆られて、結局は先延ばしにして、余計に美友紀ちゃんにひどいことをした。だが、言い訳かもしれないが、時間を置けば今の俺にとっての? If?で、そしてこれからの美友紀ちゃんにとっての? Surelly?が現実になるかもしれない可能性を残したという点では、俺はそこまで悪いことをした気分にはならない。それが叶うかは俺には分からない。先輩にはつきり言えないのも、女性は変われば変わってしまうものだからだ。

「しばらく、休んで来い」

手すりに寄りかかって一服していると、下のほうから少々ドスの混じったような声が聞こえた。大浪整備総括長の声だとすぐに分かった。そして、俺が下を見た時に大浪さんの言葉が向けられた相手が意外で少々驚いた。俺は半ば駆け足で外へと続く別階段で下りていった。

「何だ? いつもなら今頃は後輩に激を飛ばしているくせに」

俺が階段を下りてその人物を見つけるのに時間はかからなかった。何となくいつもそれほど人気のないベンチにいる気がしたから、そこへ向かえば案の定一人でお茶を手に座っていた。

「何よ。あんたこそ仕事は良いわけ?」

「俺はある程度片付けたからな」

昨日の分は。今日の分は溜まってろくに消化していないんだけどな。俺の軽い言葉に、そう……と頷くとだんまりを決め込んだように、喋らなくなった。口数が少ないからいつものことだと思うが、気が滅入っていることくらい大浪整備総括長との会話を聞いた瞬間に分かっていた。

「お前も、隼人のこと気にしてたんだな」

車を降りた時にはいつもの悠の顔をしていたから、仕事へのスイッチが入ったのだろうと思ったが、どうやら思い過ぎだったらしい。結局は俺と同じことを考えて、身が入らず、俺は雑用だから多少の気の緩みは良いが、整備士である悠には許されることじゃない。バードフライの機付長ともあれば、ましてやのことだ。

「割り切ってたつもりなんだけど、ふとした時に浮かんでくるのよ。素直に弱音を吐く辺り、今回は相当のようだ。さすがは大浪総括長。きつと他のスタッフは気づいてはいないだろう。ポーカーフェイスをさせれば余程の人間じゃなければ気づかれることのない奴なのだから。」

「さすがのお前でも、揺らぐことがあるんだな」

少々冗談を交えて言ったつもりだが、悠をさらに落ち込ませたみたいだ。

「………思い違いをしすぎよ」

こいつには冗談が通じない。いつもなら軽く受け流すことすらも今は毒にしかなくなっていないようだ。あまり人前で弱い自分を見せない悠だから、俺も戸惑う。昔は何度かそんな顔を見たことがあるが、ここ数年は久しぶりのことで懐かしくもあり、昔は俺がどんなことをしていたのかも思い出せず、目の前の女一人にかける言葉が見つからないことへの困惑と焦りが次第に募ってくる。

「悠、ちよつと待ってろ」

特にこいつを励ませるような妙案は思いつかない。ただ、こういう時に俺に出来るのはこんなことくらいだ。俺は悠に待つように言うのと、駆けた。腕に伝わる振動が鈍痛を引き起こすが、それくらいは耐えるべきだろう。悠が不思議そうに見ていたが、俺はそれを背に受けながら急いだ。

「お姐さん、いつもの二つ。一つは餡子たっぷり目で」

俺は食堂に行くと、食券を買うのが普通だが、おばちゃんに何か頼む時に使う常套句で声をかける。

「おや、どうしたんだい？　こんな時間に」

お姐さんと呼ばば、おばちゃんたちは気を良くしてくれる。向こうも常套句だと分かっていて俺を息子のように可愛がる。だから、俺はそれに甘える。

「なるべく急いで。ちよつと訳ありでさ。特別甘い頂戴」

俺が急かすように言つと、見透かしたようにおばちゃんがにんまりと含み笑みを浮かべて、奥の同僚に俺の注文を言った。

「何したんだい？　女の子かい？」

近所のおしゃべりおばちゃんみたいな感じで耳打ちをするような小声で話しかけてくる。

「いや、えつと、まあ・・・」

期待するようなことはないんだが、おばちゃんの言う通り相手は悠だ。

「悠ちゃんね。あんた何したの？」

俺が曖昧に受け流すと、核心を突いてきた。鋭すぎ。恐えよ。

「いや、俺は何もしてないですつて。ただ気落ちしてるから・・・」

俺が一通り事情を話すと、ははーん、と楽しい話じゃないのに、かなり楽しそうに俺を見てくる。食堂のおばちゃんたちはこの飛行場で働く人間の過半数を食べさせているだけあつて、その力は意外と大きい。故に俺のこと、もといパイロットたちのことは我が子のように、要らぬ話にまで精通していたりするところがある。俺が悠の家に居候させてもらっている事も。一部の人間にしか話していないのに、誰かの告げ口でとつくの昔に知られている。だからおばちゃんたちにとって、今の俺のことなど大方想像がついているのだろう。

「そりゃ、珍しいね。あの子は強い子なのになえ」

「ですよね」

相槌を打つたつもりだったが、おばちゃんに額を叩かれた。

「そこで頷いちゃ、ダメよお。悠ちゃんは女の子なんだから、そん

なわけないでしょ」

俺を試したのだろうか。おばちゃんはこりゃ、あの子も苦労するわ、と俺を呆れたように今度は見てきた。

「はい、お待ち。さっさと持って行ってあげなさい」

出来上がった団子をおばちゃんが持ってきた。いつもは直接串だけもらうのだが、今日は箱に入っていた。

「多すぎないですか？」

「これが良いんだよ。ついでにお茶も持っていき」

支払いを済ませて、食堂を後にしたらその背後から、男を見せるんだよ、とお節介な一言を向けてきた。悪い人たちじゃないから憎めない。でも、人前でそういう事を言うのは止めてもらいたい。何事かと俺を見る同僚に羞恥心が高まる。女性というものはどうしてあれくらいの年代になると、急に強くなるのだろうか。中にはそうじゃない人もいるが、ここで働いている人は、皆、気が強くてがさつそうに見えて繊細なところもあって、憎めない。きっと俺たちくらいの年代は皆が子供なのだろうな。入社当時は照れやらで逃げるようになるべく目を合わせないようにしてきたが、今は親が実家から出てきて、友人に会っている時の気分もするが、頼りになるから昔ほどは嫌ではなかった。

「悪いな、待たせた」

俺が戻ると、悠は先ほどから身動き一つしていないんじゃないかと思わせるくらい、悠がベンチにそのまま座っていた。俺が食堂に行つてからまた考えていたんだろう。それくらいは俺でも分かるくらいの表情をしていた。

「ほら、食えよ」

隣に腰を下ろし、まだ熱いくらいの熱を持っている団子を差し出す。

「……何、これ？」

突然姿を消したかと思えば、今度は団子とお茶を持ってきた健介に悠は、何を考えているのか分からないといった表情を浮かべてい

た。

「好きだろ。蓬団子」

「あんたじゃないんだから……」

健介が一本を手に取り、先に口に運んだ。出来たてのため健介は熱そうに口をハクハクさせていた。

「美味いぞ。出来たてなんだからな」

差し出した入れ物をおずおずと受け取った。

「何か、多くない？」

普段は団子から溢れない程度に餡子が乗っているのだが、悠に差し出された物は、箱にまで餡子がどっぴりと詰め込まれていて団子が見えないほどだった。

「餡子好きだろ？」

「嫌いじゃないけど。でも、これは……」

健介は手を休めることなくたっぷり餡子がついていたため、ポトポトと子供のように餡子が落ちていたが気にすることなくあつという間に食べ終えた。

「まあ、あれだ。何っーか、うん、悩んでる時は甘い物だ」

悠の機嫌がこんなもので良くなるとは思っていないが、今の俺に出来るのはこれくらいだ。下手な言葉を投げかけても一蹴されるのが目に見えている。だから、こいつにはこれくらいしか俺が思い浮かぶことがない。

「んじゃ、俺はお先に」

特に話すことも思い浮かばない上に、既に昼からの仕事始めも既に過ぎているため、俺は悠の隣にお茶を置くと立ち上がった。

「別に俺が言えるようじゃないけどよ、隼人は俺たちがこう思っただけだから言わなかったわけじゃないだろ？ もっと気、抜けよな。いつも世話になってる悠に大したことが出来ない自分に不甲斐無さを感じながら俺は事務所に戻っていった。」

「……全く」

一人残された悠は所へと戻っていく健介の背に苦笑を浮かべて見

送っていた。心なしか先ほどまで仕事に身が入らず、叱責を受け、今まで自分の仕事に誇りを持っていたため、上司である大浪にそこまで言われて落ち込んでいた顔に、微かに笑みが戻りかけていた。

「相変わらず………なんだから」

残された蓬団子に手を伸ばすと、ドロつと餡子が溢れんばかりに串から落ちた。外側の餡子は冷めたようだが、串を持ち上げるとホカホカの湯気が立ち昇った。

「重いわよ、これ」

思わず苦笑が漏れた。手にした串がしなっている。健介の不器用ながらも、その気遣いが悠には嬉しかったようで、先ほどまで沈んでいた表情が、頬が緩んで優しくなっていた。

「あつっ」

たつぷりの餡子が団子にも入れ物にも熱々の湯気を漂わせ、いくらか好きだからと言ってもその割合には限度というものがあるだろうと思いつつも悠はそれを口にしていった。

午後からは午前の遅れを取り戻すように健介は働いた。昨日ほどの勢いではなかったが、飛行に立つ前の香田は満足げに健介の肩を叩き、健介はそれに背筋に冷たいものを感じていた。その恐れから逃れるために働いていた。

「奥田さん、これどうぞ」

「ん、ありがとう」

健介が香田に遠慮しているのは、午後から仕事に戻ると受付の仕事に余裕があるのか美友紀が何かと世話を焼いてくるからであった。ちよつと子供はおやつの時間である正午から数時間後にはお菓子やコーヒーを淹れてきたり、健介が頼まれた書類の整理の半分を手伝ったりと、美友紀は好意で行っているのであるが、健介としては視線が痛いことだった。

「ようやく終わりかあ」

健介は美友紀のサポートで仕事の遅れは取り戻すことが出来たが、

その好意への心労でいつもより二割増しに終業時間には疲れを感じていた。

「健介、少し良いか？」

先ほど悠からメールで少し遅くなるとあったため、食堂で腹ごしらえでもしようかと思っていた健介に智史が声をかけてきた。夜間組みが仕事の引継ぎをしている中、智史は窓際のリースペースに健介を呼んだ。

「何だ？ お前も今日は終わりだろ？」

「ああ。まあな。ただお前に訊きたい事があってよ」

二人して煙草に火をつけ、ライトアップされた外の景色に目を向けていた。

「お前昼前にネット見てたろ？」

智史の言葉に記憶を辿る。ちょうど香田先輩に呼び出された頃だったか。隼人の病気について見ていた頃だろうか。本来業務中はプライベートなことに会社のものを利用するのは禁止なのだが、今の俺は仕事というほどの仕事が入っているわけじゃないから、特に誰にも何も言われない。

「見たのか？」

智史が歯切れ悪そうに頷いた。先輩に呼ばれた時に切ったつもりだったが、つもりだったようではうちり見られてしまったようだ。

「あれ、何だ？」

さすがは自称親友。単なる暇つぶしで見ていたわけじゃないというくらい分かりきっているようで、その真意を目で訴えてくる。ただ事じゃないことも知っているようだ。開くページを誤ったか。

「何でもねえよって言っても、お前は信じないだろうな」

付き合いが長い分、智史のことも分かる。そしてこいつにも俺のことが分かれている。

「お前、子供じゃないだろ」

「俺の子のことじゃねえよ。これで知り合った子だ」

腕を見れば智史も把握するだろう。いちいち経緯を話しては

面倒だし、俺だってまだそこまで知っているわけじゃない。智史もそれは分かってくれたようで小さく頭が縦に揺れていた。

「それは分かっただけどよ、何でそこまで気にするんだ？ 今朝のこともその子のことで何かあったからだろ？」

「お前の言う通りだ。ちょっとその子の症状が悪化して、動揺してた」

後者についての答えはそれで間違いない。実際に目の当たりにしたわけではないが、もし隼人に会っていたら今でも俺は凹んでいるはずだ。

「お前のことだからな。あれを見て想像は出来た」

要は俺が何故隼人に気をかけるなことをしているのか、と智史は聞きたいようだ。返答には特に考えなかった。相手が智史じゃないのなら、自問自答するかもしれないが、こいつには今の俺の気持ちを理解出来ると思っただから。

「隼人って言うんだけど、その子まだ小学一年くらいなんだがずっと入院しててさ」

俺の言葉に静かに耳を傾ける智史。やはりこいつには俺の話がどこに繋がっているのかを聞かずとも、ある程度の予測は立てているのだろう。続きを待つような目で俺を見てくる。

「確かに初めは俺もそれほど大したこととは思ってなかったんだけど、隼人は俺らと同じ夢を持って放っておけないって言うか、病室にしかいられないから、空を、見せてやりたくて、な」

ようやく智史も事情を飲み込んだようで、納得した表情をしていた。ついこの間聞かされた智史の過去。きっと今俺が話した事と、智史の姉と姪の事が智史の頭の中で重なる部分があったはず。俺だってあの時の智史の言葉が過ぎったから自白したわけだ。

「仕事に支障をきたす辺り、お前らしいな」

「褒め言葉で受け取っとく」

二人して苦笑しつつ特に言葉を交わさない。それは単にお互いに掛ける言葉が見つからないわけじゃない。俺には詳しくは分からない

いが、智史が過去に思いを馳せるような表情で星の散りばめられた輝きで満ちた南の空を見上げていた。

「なあ、健介」

同じように空を見上げていた俺に智史が頼んできた。

「その隼人って子、合わせてくれないか？」

意外な言葉に少々呆気に取られた。隼人の事を聞きたいだとかなら分かるが、詳しい話をするでもなく会いたいと言ってきた。何を考えているのか分からない。突拍子もないことを言われても、俺だつてろくに知っているわけじゃないんだ。

「俺だつてまだ数回しか顔を合わせてない。すぐに知らない人間を連れて行くつてのは負担だろ？」

大人相手ならともかく、子供にしてみれば急に知らない人間が来ると少なからず引いてしまうだろう。入院ともあれば限られた人間しか顔を合わすことはないのだから。俺だつてその中に入りきれないのに、智史を連れて行くのは無理だろう。隼人は軽い病じゃないのだから、俺たちが原因で症状を悪化なんてことは絶対にしたくないし、してはいけない。

「別に今すぐじゃなくても良い。お前が判断した時で構わない」

そう言われたら、頑なにはなれない。しばらくは俺が隼人に出ることをしてやり、少しでも力になれるように慣れれば良いと思っ
ている。その中で必要があれば智史にも手を貸してもらおう。空に焦がれる子の夢を失わせたくはないという、俺と智史の願いは同じだから時間が経てば隼人ももつと心を開いてくれるだろう。

「じゃ、そういうことで。迎えが来てるぞ」

智史が顎で所の入り口を見ると促してくる。振り返ると特に声を掛ける仕草をするでもなく、誰かに誰かを呼んでもらうつもりもなく、入り口の近くで静かに外の窓を眺め時折出入りするスタッフと軽く挨拶をしている悠がいた。

「呼べば良いだろ」

思わずその様子に頬が緩んだ。いつもなら何食わぬ顔で呼んでく

るくせに、今日は昼のこともあつてか、ただ俺が出てくるのを待っているようだった。智史は先に荷物を取りにデスクに戻ると、お先に「、いつもの調子で出て行き、悠に俺の居場所を指差してこちらを見ていた。

「俺も帰るか」

一瞬悠がこちらに目を向けた気がして、俺もデスクの上をある程度片付けて何食わぬ顔で悠と落ち合った。

帰路を急ぐ車内はいつものように悠の選曲した曲がかかっていた。これまたいつものように特に会話はないが、雰囲気や空気は疲れた体には心地良いものだった。路面の凹凸で微かに揺れる車揺れが眠気を誘うゆりかごのように感じていた。窓の外を流れる景色も明かりが少なく、何も代わり映えしないように見えて俺の眠気を促進させるばかりだ。時折瞼が重く感じ、まどろみに身を任せるように俺は全身の力を抜いた。

「健介……って、寝ちゃったのね」

信号待ちでやけに隣が静かだと思い視線を向けるとシートベルトにもたれかかりながら、頭を窓に預けながら健介が静かに寝息を立てていた。

「全く、人の気も知らないで気持ち良さそうに寝てるわね」

小さな苦笑とため息を漏らす、健介には届くことはなく、僅かに悠の口元が優しく上がっていた。

「言い忘れてたけど、健介、あんたベルトの後がくつきりついてるから」

帰宅し、風呂に入る前に悠がボソツと呟いた一言に、健介はずっと悠が自分を見て微笑んでいた理由を昼間のことだと思っていたが、それが違っていたこととしてやられた感に恥ずかしさでいっぱいになっていた。

「先に言えよっ！」

「ばーか」

そんな健介に悠がおかしそうに小笑いしていた。

それからしばらくの後、二人は診察日に意を決したように隼人の病室を訪れた。ここ数回の健介の診察日は仕事の遅れを取り戻すために足早に仕事へ向かっていたという名目で、その心は健介も悠もやはり隼人の母に聞かされた隼人の症状のことが気かりで、気軽い気持ちで訪れることが出来なかった。

「おはようございます」

「あら、来てくれたの？」

部屋に入ると、いつもの騒がしさの中に、落ち着いた様子の隼人の姿があった。その隣で医師と看護師の姿もあった。

「ごめんね、今採血の時間なの」

隼人は静かに、慣れてしまったようにその細い腕に針が刺されていた。邪魔にならないように一旦病室を出ると、隼人の母も俺たちについてきた。

「あの、これどうぞ」

「わざわざありがとう」

昨日のうちに買っておいた果物やお菓子のお見舞いの品を渡す。

久しぶりに見た隼人は、この間見た時よりも少しばかり皮膚が蒼白く全身にあまり力が入っていないように見えた。前に仕事の途中で見ていたホームページのことを思い出した。神経芽細胞腫の症状に骨髄に神経芽腫が転移することによって赤血球の減少が起こり、貧血を引き起こすため、蒼白になったり、元気が出ない、食欲不振、しんどがるなどの症状が出ると見た記憶があった。

「あの、隼人君、今何の検査をしていたんですか？」

朝から採血をしていることが悠には不思議だった。検温等なら分かるが子供が朝から血液検査をすることが気かりになったのだらう。

「白血球の増減を調べてるの。抗がん剤の治療を始めてから毎日朝はあなの」

悠は頷いていた。正直俺にはそれがどういふことなのかよく分か

らなかつたが、そんな俺に気づいた母親が補足説明をしてくれた。
「白血球が減ると感染症にかかりやすくなるの。抗がん剤の副作用
みたいなものよ」

何となく分かったような、分からないような。とりあえず、減る
ことはあまり良いものじゃないようだ。それにさつき見えた隼人の
か細い腕。採血の際に蒸しタオルのようなものを当てていた。採血
くらいは俺だつてしたことがあるから想像がついた。抗がん剤治療
で、ただでさえ子供の血管は細いというのに、それがさらに細く脆
くなつて針を刺すのが難しくなつて、血管を温めて膨張させるため
にタオルで温めていた。きつと何度か失敗してからその手に出たは
ず。何てことないように見えたが、きつと隼人は鋭痛に耐えていた
はず。俺だつて未だに注射は痛いと思うことがある。それが毎日と
もなればいい加減嫌になるだろう。そう思うと、かける言葉が浮か
んでは消えていく。

「隼人君、白血球を沢山作っておくんだよ」

廊下で話していると、医師の声が聞こえた。どうやら採血が終わ
つたらしい。看護師が俺たちに挨拶をして、隼人の母に一声掛ける
と歩いていった。

「こわれたらどうするの？」

部屋に戻ると、医師と隼人が妙な話を耳にした。首を傾げる俺に
悠が小さく首を振っていた。その表情で医師が隼人に励ましをして
いるんだから、と言っているように思え、俺は静かに端でその様子
を眺めることにしていた。

「壊れないように、あんまりはしゃがないようにしていれば大丈夫」

「バイキンが来たらこわさされるんじゃない？」

隼人が絵本を医師に見せた。それは今では懐かしさも感じる絵本
だ。俺もガキの頃はよく見ていたなあと思いつながら、随分と久しぶ
りに見るキャラクターに懐かしさを覚えた。

「じゃあ、隠しておこう。バイキンに見つからないようにね」

隼人の問いに難なく答える医師は、さすがだと思つた。毎日日々

日子供の相手をしていればおのずと身に付くものなのだろうが、子供に不安を与えないようにする答えを瞬時に出すということはそうそう出来るものじゃないだろう。俺ならきつとしばらく沈黙の後にやっと搾り出せるくらいだろう。

「でも、ぼくのだけをかくしてもダメだよ。みんなのをかくさない」と

「………そうだね」

微かに医師の表情が濁った。手馴れているとは言え、隼人が何気なく言った言葉の真意を深読みした医師が隼人に気づかれないように垣間見せたその表情が、俺の中に一番強く残った。しばらく言葉を交わした後、おはようございます、と挨拶を交わし医師の背を見送ると、隼人が俺たちに気づいた。

「おじちゃん、お姉ちゃん」

「うん、おはよう、隼人君」

「よっ、隼人」

先日の隼人の母の言葉を意識してか、無意識に隼人の瞳に俺の視線は向いた。今日は体調が少しは良いのか、少々蒼白だが笑顔を浮かべていた。

「ねえねえ、お姉ちゃん。これ、よんで」

隼人がベッドの上に置かれていた絵本を悠に差し出した。それはこの間俺たちが送った絵本だった。受け取った悠が俺を見てきた。

「良いじゃないか。読んでやれよ」

遅刻するけど……？と目で語りかけてくる悠に俺はそう返した。ただでさえ遅刻してるんだ。後で藤沢上官たちにネチネチ言われるだろうが、良いだろう。今までもろくに会話を交わすことがなかったんだから、その時間のためなら遅刻なんて痛くないさ。

「それじゃ、読んであげるね」

隼人のベッドに腰を下ろすと、やはり体調は良くはなかったのか、少々しんどそうに悠に身を寄せようとしてきた。それに悠が自分から隼人の近くに身を寄せ、隼人に負担がないようにと、自分にもた

れかからせ、絵本を開いた。隼人の母は悠に隼人を任せると、花瓶とコップを持って洗いに行くようで、俺も二人の邪魔をしないようにその後をついていった。

「腕は大丈夫？」

水場で大したことは何も出来ないが、ゴミ捨てくらいならと、手伝わせてもらうと俺の腕のことを聞いてきた。

「今はもうそれほどでもないです。そこまでの重症ではなかったので」

廊下からは子供のはしゃぐ声や泣き声が絶えず静寂をどこかへ運び去っていた。

「それでも大変でしょうね。ところでお仕事は何を……？」
遅刻していることは気づいているのだろう。悠にごめんね、と謝り、俺にも同様に言ってくれた。

「バードフライ飛行場でパイロットをしてみました。今はこれですから、事務ばかりで」

苦笑する俺に、少しばかり驚いた顔をしていた。この辺りの人間なら飛行場のことは知っている。だから、あそこ指せば大抵は理解してくれる。

「そうなの？」

「はい、もう随分と地に足をつけてますけど」

春の陽気の中を飛んでいく小型機が窓から見えた。既に仕事はフル稼働しているのだろう。あれに乗っているのは誰だろうな、と思いつつながら萎れた花を捨てる。

「そうだったの。もう気づいているかもしれないけど、あの子もね、憧れているのよ」

「みたいですね」

隼人のベッドを見れば瞭然だ。あれだけプラモデルや絵本があれば誰だってそう思うだろう。

「だから、あなたたちが持ってきてくれたプラモデルは宝物にしてるわよ」

模型は大事そうに飾られていた。少しでも夢を見られるのであれば俺としても嬉しい。

「そういえば、今度お祭りがあつたわよね？」

「あ、はい一カ月と半月後に開催予定ですよ」

俺の腕も治る頃に航空祭が開催される。楽しみにしていた俺としては、今年に入社当時のようにサポートに回る事が決定している今、嫌ではないがため息ものだ。

「本当なら、連れて行きたかったんだけどね……」

花瓶に水を入れる音に掻き消されるような呟きが聞こえた。

「あの、答えにくいこともかもしれないんですが、隼人はそんなに悪いんですか？」

俺たちが出会ってまだ一月も経っていない。俺たちが来ればその度に隼人はいつもの笑顔で迎えてくれる。ただ、最近は当初のように受付のところまで来ていた姿ではなく、病室のベッドの上で横になっていたり、もたれかかっていたりしながら会うことがほとんどになっている。ここは学校でも公園でもないのだから、それがどういふことなのかと言う事が分からないわけじゃないが、それを信じていない、受け入れたくないと思う俺がいる。

「抗がん剤もあまり効かなくて。採血の度に言われることが隼人も分かってるのよ」

その言葉が指すこと。毎朝行われる血液検査で白血球の数を聞かされ、増えていれば安堵できるが、その逆だと、効果が芳しくないということ。

隼人の母はきつとその時間が、息子が回復に向かう喜びと、刻々と隼人の時間が減っていく恐怖に内心は必死なのだろう。それを知ってか知らずか、ひょうひょうと聞いている隼人。白血球が増えていればまた外にも出られるし、初めて会った時のように元気に受付前までいけるのだろう。だが現状はそう甘くはないことを認識させてくる。毎日毎日隼人は、明日こそはベッドから出られるかもしれないという本当に小さな期待で、その腕に針を刺しているのだろう。

「放射線もやってたんだけど、いまいちで。隼人にはまだ言っていないけど、また新たに転移が見つかってちょっと、ね……」
そこで隼人の母の声が震えた。鼻を嚙る音が共に俺の耳に届いた。その瞬間、仕事の最中神経芽細胞腫の情報を見ていたことを思い出した。

小児がんで一番多いのは、血液の癌と呼ばれる白血病。それ次いで多いと言われるものが、隼人を蝕んでいる病である神経芽細胞腫。主に胎児の神経組織から発生する悪性固形腫瘍で、その腫瘍は乳児期や小児期に現れ、体の多くの部分に発生することがあり、心拍、血圧を増幅させ、血管を収縮させることによって、特定のホルモンを刺激し、体の機能を司る神経系を形成する交換神経組織から発生し、発生しやすいのは腎臓の上にある副腎髄質からで、その他は脊椎の左右横にある交感神経節のどこから出てきてもおかしくはなく、胸の心臓のある辺りから発生することもあり、レントゲンやエコー検査。必要に応じて、血液検査やCTやMRIなどの詳しい画像検査を行い診断を下す。腫瘍が発生すれば急速にリンパ節、肝臓、肺、骨、骨髄など全身に転移が広がっていく。その原因は不明で、多くは五歳未満で診断され、約一人に一人の割合で男の子が僅かに多く発生する病とされ、主な症状としては腹部腫瘤に伴う腹部の張り、肝脾腫である肝臓の肥大、骨髄に神経芽腫の転移に伴う赤血球の減少による貧血、白血球の減少による感染症への懸念と発熱。血小板の減少による出血斑やあざ。腫瘍が出来る場所によっては眼球突出や後退、頸部に腫瘍ができ、交感神経を圧迫するなどによるホルネル症候群、中にはオプソクローヌスと呼ばれる小脳失調や多方向性眼振などが見られることもあり、歩行障害などその症状は神経芽腫の発生場所によって様々。最近では自然治癒することもあるらしく、無治療経過観察をする病院もあるらしい。

「治療法は、他にはないんですか？」

次第に嫌なものを背筋に感じる。まだ時間はあるようだが、思っていたほど結果が出ない現実、隼人の母の心は押しつぶされそう

になっているのだろう。服の袖を時折腫に当てながら俺の問いに答えようとしてくれる。無理に聞き出すことはしていないのだが、俺たちに隠すつもりはないらしく、むしろそつという病と闘っている子供がいることを俺たちに知って欲しい、それを支える家族や病院関係者の思いを理解して欲しい、と言っているように俺には思えた。「遺伝子治療の申し込みをしているの。その結果が届くまでは今のままのあの子を見守るしかないの」

だから、今は出来るだけあの子の好きにさせているの、と小さく続けた言葉は、俺の奈落の底を見せるかのようだった。抗がん剤を使っている時点で腫瘍が広範囲に転移しているということを目指しているのだから、

「手術や移植などは、しないんですか？」

「一度したんだけど、再発したの。それにもう隼人には耐えられるほどの体力もなければ、ね……」

長時間に渡る手術は子供の体力では限界があるということか。ただでさえ入院していると体力が落ちる上に、一度手術で成功したとはいえ再発を経験したとあれば、もう一度ということに躊躇してしまつのは当然のことだろう。それに手術を望んでも、医師が首を横に振ればそこまで、ということなのだろう。

「そうですか……」

また俺は自分から聞いておきながら、返す言葉を紡ぐことが出来なかった。

「戻りましょうか」

いつしか新たな花で飾られた花瓶と、綺麗になったコップを持った隼人の母が俺よりも数歩先を歩いて、振り返っていた。

「これからも、あの子に夢を見させてあげてくれないかしら？ あなたは隼人の憧れだから」

「……出来る限りのことでしたら、いくらでも」

微かに間を空けてしまった。俺が隼人の憧れであつて良いのだろうか。こんな俺に隼人が憧れの眼差しを向けてきても良いのだろうか

か。そんな思いが、ただ頷くだけの行為に疑問を抱かせた。

「ありがとう」

先ほどの涙の乾いた隼人の母の微笑みは、俺に覚悟を持たせるためのもののように俺の目に映った。

「そして、夢を叶えたピアノは、大空へと飛んでいきました」
ちょうど病室に戻ると、悠も絵本を読み終えたようので絵本を閉じた。

「ほら、隼人。お姉ちゃんにお礼は？」

「ありがとう、お姉ちゃん」

「どういたしまして」

悠は満足げな笑みで隼人の頭を撫でていた。

「それじゃ、俺たちはそろそろ……」

時間もだいぶ遅れているため、そろそろ向かわなければ、いい加減上官たちのお灸が待っている頃だろう。

「わざわざごめんなさいね」

「いえ。それじゃあ隼人君。またね」

「うん。ばいばい」

今日は母親がついているためか、隼人は大人しく俺たちに手を振って見送っていた。同室の子達も悠の読み聞かせを聞いていたようで、悠に手を振っていた。

「すっかり人気者だな」

飛行場へと向かう車内で、悠はホッと一安心したような顔でハンドルを握っていた。

「大したことはしてないわ。でも、やっぱり皆可愛いわね」

「そうだな」

悠の話を聞きつつ、俺は隼人の母から聞かされたことを話すべきかどうか迷っていた。これだけ楽しげにしている悠に話すのは気が引けた。

(帰ってから、話したほうが良いか……)

仕事に支障をきたさせるのはダメだろう。俺が何度もそんなこと

をしているのだから、これ以上のことはさすがに仕事の降格に繋がる。悠に世話になっておきながら巻き込ませるわけにはいかない。

「ん？ どうかした？」

「いや、何でも」

表情に出していたのか悠が横目を向けてきたため、俺は窓の外に視線をずらし青々とした田園風景と春の少し薄い空へ思いを馳せた。

飛行場に着き、いつものように別れる。悠の足取りは心持軽く、俺の足取りは気のせいか重たかった。

「奥田さん、おはようございます」

デスクに着くと、先輩も智史も既に業務に発っているようで比較的静かな始業となった。

「おはよう」

今日の雑用が一通り書かれたメモに目を通し一憂していると、仕事中にはずの美友紀ちゃんがいつの間にか隣に立っていた。

「あの、これどうぞ」

そう言っただけ差し出されたのは、いくつかの書類だった。

「これは？」

「ちょっと時間が空いていたので、代わりにまとめておきました」
目を通すと、航空祭の出店計画書や予算報告書など俺のメモに書いてあるものが出来上がっていた。

「あと、これ。すみませんでした」

「ああ、これ美友紀ちゃんが持ってたんだ？」

美友紀ちゃんの手にあつたのはMDだった。結構日にちが経っていたから諦めていたのだが、意外な場所から帰ってきた。

「ちょっとだけ借りるつもりだったんですけど、聞いているうちに私も好きになって同じのを探すのに手間取っちゃって」

恥ずかしそうな眼差しでMDを渡してくる美友紀ちゃんに、俺はなんと言うかありがた迷惑な気分だった。怒っているわけじゃない。

「美友紀ちゃん、その、代わりにやってくれたのは嬉しいんだけど……」

その言葉に美友紀ちゃんの顔に笑みが浮かんだ。その表情に次に繋げる言葉を出すのに躊躇いが生まれるが、言わないわけにはいかなかった。俺のことを気遣ったことなのは分かっているが、俺にも曲がりなりにもプライドというものがある。いくらパイロットから降格を余儀なくされたとはいえ、今の仕事にも誇り（プライド）というものがないわけじゃない。好意で受け取っていてばかりでは高慢プライドでしかなくなってしまう。そこまで俺はまだ今は落ちぶれてはいない。

「その、言い難いんだけど、これは俺の仕事なんだ。美友紀ちゃんには美友紀ちゃんの仕事があるだろ？」

美友紀ちゃんが、予想していたのは俺が笑っているような光景だったのかもしれない。だが、俺も美友紀ちゃんも子供じゃないんだ。「美友紀ちゃんは自分の仕事をしてくれないか？」

少し厳しい口調だったかもしれない。だが、美友紀ちゃんは優しい。だから遠慮するようなことを言っただけ、同じことの繰り返しが始まるだろう。

「……ご迷惑、でしたか？」

美友紀ちゃんの顔からふっと笑みが消えた。やはり予想にもしていなかったのだろう。

「気持ち嬉しいけど、俺に気遣いは別にいいよ。これくらいの仕事はわけないから」

少しだけ美友紀ちゃんの表情が和らいだ。良かった。あまり気にした様子はないようだ。俺の良心に刺さっていた棘がいくらか取れた気分だ。

「分かりました。これからは気をつけますね」

「ごめんね、折角やってくれたのに」

「いいえ、また一つ勉強になりました。奥田さんに気に入ってもらえるためにこれからも頑張ります」

美友紀ちゃんは、小さく意気込むと今度は自分の仕事へと戻っていった。その顔には気持ち新たな澄み切った笑みが浮かんでいるよ

うに見えた。

「前向きなんだな、美友紀ちゃんって……」

自分の悪いところを目の当たりにしても、それに落ち込むでなく次へのステップとしている。これで愛想を切らされただろうと思っていた俺は、呆気に取られたが、美友紀ちゃんの今の態度が上辺だけでなければそれでも良かった。俺の前でそう振舞って、外で泣かれるようなことも考えられるが、予想に反して美友紀ちゃんは俺の別の一面を目の当たりにしてどこか嬉しそうにしていた。だから、後者ではないように思えた。

「ご苦労様です」

「おう」

昼過ぎも午前の遅れを取り戻すためにデスクやコピー機をいったり来たりしていると、事務の子が帰ってきたパイロットに声を掛けていた。

「お、健介。相変わらず地味な仕事してんなあ」

肩にズンと重たい腕がのしかかってきた。左腕に衝撃が微かに響いた。

「もう帰ってきたのか？ 他はまだ帰ってこないぞ」

お互いに他愛ない嫌味で今日初顔合わせだ。

「近場だからな。それより、今日は行ってきたのか？」

智史が自分の分だけコーヒーを入れる。香ばしい香りが俺の鼻まで漂ってくる。気を利かせて俺の分まで淹れると言うことは、こいつの頭の中にはないんだろうな。

「ああ、まあな」

行ってきた。それがどこを指すのかなんて聞きはしない。

顔は笑っているくせに目が笑っていない。

「で、様子はどうだったよ？」

周囲に諭されないように智史の口調はいつも通りだ。

「良くはなかってなかったな」

症状は悪化の一途を辿っている。隼人の母の言葉が嘘だとは思え

ない。あんな時に冗談が出せる人間はいないだろう。治療も芳しくないから遺伝子治療とやらに申請をしているところらしい。詳しくは知らないが、隼人の両親は身を切る思いをしているのだろう。隼人の前では笑顔だったが、俺に見せた表情には明らかかな疲労の色が出ていた。

「神経芽腫だったよな？」

「神経芽細胞腫だ」

「同じだろ？」

「知らん」

「何だそれ？」

「俺は医者じゃない。病気のことを詳しく知るわけがないだろ」

「そりゃそうだな」

智史が自分のパソコンを見つめながらテンポ良く質問をしてきた。何だかんだで仕事には抜かりない奴だな。自分の飛行記録や業務成績表などをつけているのだろう。

「隼人つてのは幾つだ？」

「六歳つてベッドに書いてあったから、年長か小一だろうな」

「幼稚園とか小学校は行ったことあるのか？」

「ほとんど入院生活だと母親が言ってた」

きつと隼人は幼稚園など行ったことがないのだろう。言葉を交わしても一度も外の友達の話題を聞いたことがなかった。聞いたのは、同室の子や他の病室で入院生活を送っている子のことばかりだった。まるで長期入院している噂話に精通しているおじさんのように、病院用語から医師や看護師のこと、病気や治療のことを隼人はまだ十年も生きていないのに、俺の知らない世界を何歩も足を踏み込んだくらいに知っていた。

「治療については聞いたりしたか？」

「今は放射線と化学療法をしているみたいだ。遺伝子治療がどうのこうのつてのも聞いた」

「なるほど。子供に抗がん剤か。言葉が出ないな……」

智史の言葉に俺も返す言葉がなかった。

「ところで、何でお前はそんなこと聞いて来るんだ？」

いい加減、智史が仕事中に妙なことを聞いてくるからこちらから訊ね返した。

「いや、ただどんなのかって思っただけだよ」

智史が俺のほうにパソコンを向ける。てっきり仕事をしていたのかと思っていれば、その画面に映し出されているのは俺が先日開いていたページだった。

「仕事しろよな、お前」

「お前に言われたくねーよ」

智史が俺を呆れたような眼差しで見返してくる。智史も智史だが、俺も俺で仕事しながら智史が話を振ってきたため、気を紛らわせるようにフルートの絵を描いていた。

「俺は今日の分はほとんど終わっただよ」

「俺だって今日の飛行はもうねえよ」

「どっちもどっちだ、馬鹿もん」

いつの間に帰ってきたのか藤沢上官が咳払いをしながら俺たちの前を通り過ぎた。一瞬で俺と智史の下らない言い合いは終わりを告げた。

「仕事せんか、仕事」

藤沢上官が自分のデスクに着くと、俺がもとい、美友紀ちゃんがやっておいてくれた資料に目を通していた。上官が居ると所内が一気に引き締まったような空気に満ちる。俺たちの会話も小声になっていた。

「健介のせいだぞ」

「お前のせいだろ」

二人してまったくだらないことの繰り返しになりそうだったので、二人してため息をついてその話は止めた。

「で、何でお前がそんなの見てんだよ？」

「良いだろ、別に。ちよつと気になっただけだ」

ちよつとの割には、随分と熱心に見ていたような気もするが、ここでまた言い争つては上官の湯が飛んでくる。智史が再び自分のほうにパソコンを向けなおし、コーヒを嚙りつつ目を走らせていた。上官からは見えないため智史は時折俺にいくつか質問をしてきては俺が聞いた範囲で答える形で仕事のフリをしていた。

「俺たちが出来ることって何があるんだか」

病院での隼人の母の言葉が俺の頭には残っていた。

『あの子に夢を見させてあげてくれないかしら？ あなたはあの子の憧れだから』

「俺が憧れだなんて、な」

きつとこの腕の怪我もなく、今でもパイロットとしてフルートと共に空を飛んでいたのなら、そんな一言も誇らしく受け止めることが出来たのかもしれないが、今ではその言葉の大きさ、その言葉に込められた想いに俺の器は耐えられるだけの大きさはないだろう。見栄を張るのも一つかもしれないが、それで子供が夢を見る分には救いと言う名の嘘になるだろう。穢れを知らないその夢に満ちた真白な瞳に、小さく真つ黒な偽りが混ざることに対しての痛みが俺には赦せない気がしてならない。

「お前は大事なことを忘れてるぞ」

俺のボヤキを聞いていたのか、智史が目だけを俺に向けてきた。

「何をだよ？」

「お前が何でここににいるのか、だ」

「・・・・・・は？」

またこいつは突拍子もないことを言う。いつもいつもすぐには答えを出せない問い。いきなりの応用問題に取り組ませられる気分だ。「子供の目にお前はこういう人間に映るか、だ」

ヒントだろうか。いまいち掴み所がなく理解に苦しむ。子供の目で俺がどう映っているのか？ どういう意味だ？

「それが分かれば、お前は自分で隼人に何が出来るか分かるはずだ。これが分からないようじゃ、お前は流れ作業の工場で働いたほうが

似合ってるぞ」

智史がパソコンを閉じると、休憩行ってきまーす、と席を立った。「まったく、何なんだよ、あいつは」

試練を与える師匠のような物言いに、呆れながらも、その問いにはきちんとした意味があるのだと言っことくらいは理解できた。俺の忘れていることと、隼人の夢と憧れ。それがどういう接点を持っているのかを考えるのは俺一人で答えを出さないといけないということなのだろう。智史が残していった言葉を考えているうちに、いつの間にか外は次第に星明りと月明かりに照らされていた。

「結局思いつかなかつたな」

明日は休みだ。診察も入っているからゆっくり隼人の見舞いが出るな、などと考えながら事務所を後にすると、ちょうどドッグのほうから悠が作業着姿のまま現れた。

「ちょうど良かったわ、健介」

俺を探していたのだろうか。まだ仕事は終わらないように見える。「今日は遅いのか？」

「夜間の子が欠勤で代わりをやらないといけないのよ。だから、先に帰ってもらえる？」

残業ではなく、代替か。それなら仕方ない。食堂で時間を潰していてもそうそうは終わらない。先にタクシーでも呼んで帰るほうが良いだろう。

「分かった。今のうちに休んでおけよ」

「分かってる。それじゃあ、お風呂とかよろしくね」

「はいよ」

悠はそれだけを言うと、仕事へと戻っていった。

「さて、飯はどうすっかね？」

食堂で食って帰るべきか、先にタクシーを拾ってコンビニ弁当でも買って家でのんびりとするか。俺の頭が導き出したのは後者だった。

「タクシー呼ばないとな」

「奥田さん……?」

携帯でタクシー会社に連絡を入れようとアドレス帳から呼び出そうとしていたら、背後から美友紀ちゃんの声がした。

「美友紀ちゃんも今日はあがり?」

「はい。受付は六時が定時ですから」

夜間組みが翌朝配送の荷物等の運送に走り、残った仕事は翌日に回される。受付は午後六時までだから、残業はないんだっとな。羨ましいが俺の性には合わない。

「お疲れ様」

挨拶を済ませて再び携帯でタクシーを呼ぼうとしたら、美友紀ちゃんが俺の周りを不思議そうに見ていた。

「奥田さん、今日は雨宮さんとは一緒じゃないんですか?」

控えめに美友紀ちゃんが周囲に目を向けながら聞いてきた。そのあちこちを見ている目は悠を探しているのだろうか。

「今日は代替になつたらしくて、俺だけ先にあがったんだ」

今日に限って乗せていっけてくれるような奴が全員夜間の仕事が入っている。悠が終わるのは、数時間は後だから待っていても仕方がない。ここは少々痛い出費だが、タクシーを呼ばないといつまでも待ちぼうけは御免だ。

「それじゃ、美友紀ちゃん。また明日」

これから帰るのだらうと思ひ、そう言ったのだが、美友紀ちゃんは俺の前に佇んだまま動こうとせず、モジモジと俺を見ている。外灯の僅かな明かりがうつすらと美友紀ちゃんの表情を映し出し、俺もどつしたら良いのか言葉が詰まってしまふ。

「あ、あの……」

美友紀ちゃんが口を開いた。

「タクシーを呼ぶんでしたら、私の車でお送りしましょうか?」

これまた控えめに言うもんだから、意識せざる終えない。懐を温め続けられるのであればそれに越したことはないが、乗せて言ってくれると申し出てくれたのが美友紀ちゃんとなると、それに対して

躊躇いがちになる俺がいる。つい数日前にあんなことを言われてから、何かと世話を焼きに来てくれる美友紀ちゃん。その好意は素直に嬉しいが、後ろめたい気もあるのは確かだ。

「私の家、市街の方ですから気にしなくても良いですよ？」

そんな問われたら、断るのに気が引ける。誘導尋問されているような気分もしてくる。

「じゃあ、お願いしても良いかな？」

そこで断ることをせず、流されるように申し出を受け入れる辺り俺の優柔不断さが滲み出る悪いところなのかもしれない。だが、ただでさえ安月給への降格に、怪我の治療費、悠自身は遠慮しているが、俺の中に今だって腐ろつが果てようがきちんとある誇り（プライド）がそれを許さないため、悠への謝礼も込めた生活費、俺の昼食費やその他諸々にあまり貯蓄が出来ないため、タクシーにかかる費用を無料たで良いと言ってくれるのであれば、今の俺にはありがたいことだった。

「はいっ、では行きましょう」

俺が申し出お受け入れると美友紀ちゃんの顔に笑顔が華やいだように見えた。

美友紀ちゃんの車は可愛らしい人気のある軽だ。車内には仄かに香る甘い香り。女性らしさの感じられる車内インテリアに少しばかりテンションがあがった。悠の車はすつきりとしていて凜としているが、美友紀ちゃんの車は柔らかい雰囲気で満ちている。

「美友紀ちゃん、途中でコンビニよってもらって良いかな？」

どこかで夕飯を買わなければ悠は夕食を済ませて帰ってくるだろう。片腕が使えない今、料理も出来ないことはないが面倒くさい。「分かりました」

美友紀ちゃんはまだ免許を取って二年ほどしか経っていないため、悠の運転に比べると慣れていない感というか、慎重で綺麗な運転だと思った。

「奥田さん、いつも雨宮さんと帰っているんですよね？」

「ん？ ああ、そうだけど？」

特に音楽もラジオもつけているわけじゃないため、妙に俺と美友紀ちゃんの間にごちない空気が漂い、話題を持ち出そうにも俺の頭に浮かんでくるのは、バードフライのことと、業務復帰のことと、家に帰ってからすることと、隼人のことばかりだ。美友紀ちゃんと分かり合えることが少なすぎる。仕事のことは受付の美友紀ちゃんにはなかなか分からないだろうし、隼人のことなんて論外だろうし。「……………羨ましいです」「えっ？」

ボソツと美友紀ちゃんが呟いた。ハンドルを握る腕に力がこもったようにも見えた。

「まあ、居候させてもらっているから、当然なのかな」

長い付き合いの腐れ縁のような間柄でもあるし、悠も当たり前のように俺をサポートしてくれる。学生時代から俺は悠に課題やらテスト間近には教えを請っていた。いつも面倒そうに俺を見下すような目で見てきたが、何だかんだで手伝う人の良さには定評があった。だから俺はそれに甘えていたのかもしれない。冗談を本気なんだかで受け取るあいつは、本当に嫌なら嫌だとはつきり言う。だから、俺は今こうして世話になっているのもあいつとなら当たり前に見えるのだろう。

「当たり前のこと、ですか……………」

小さく美友紀ちゃんがため息をついた。

「美友紀ちゃん？」

「色々頑張つても、兩宮さんがいる奥田さんの距離まではなかなか埋まらないですね」

独り言なのだろうか。美友紀ちゃんが良く分からないことを話始めた。

「一度や二度じゃ、ただの好意としか思われなくて、三度や四度でも、まだ当たり前には思われなんでしょうね」

市街に近付いてきたのか、ちらほらと民家や商店が多く通り過ぎ

るようになつてきた。ちよつと前までの田園風景の暗闇の中で今の美友紀ちゃんの語りを聞いていたら、きつと今以上に俺は美友紀ちゃんの言葉に耳を傾けることが重たく感じていただろう。

「当たり前と思うのは、長い時間を掛けて重ねてきた結果に、やつと相手にそう思ってもらえることなんですよね」

俺が責められるでもなければ、彼女が自嘲に走るわけでもない。ただ言っているだけ。説明をしていると言えばそれで終わりのことだが、その言葉が指すものが俺の今までを思い起こさせる薬のように作用した。

「奥田さんにとって、雨宮さんがそばにいるって、どういうことですか？」

美友紀ちゃんが言葉だけを俺に向けてくる。顔は運転に集中しているのか、俺の顔を見たくないのか、見れないのか、前を向いていた。

「悠が、傍に……?」

改めて聞かれると、返答に困るといつか、それが今更な気がしてかえって答えにくかった。

「気がついたら、そこにいたから、それが普通みたいな感じかな?」
気がつけば、それほど遠くない場所に悠はいた。高校からとはいえ、その三年間に、大学、そして飛行場への就職。活動する分野はそれぞれ違えど、その距離が変わることは一定のままからなくて、遠ざかることもなければ、近づくこともない。だが、助けを乞えば仕方がないといった表情で手を差し伸べ、見返りを求めるでもなく、俺を立ち上がらせる。

「本当に奥田さんは、雨宮さんを何とも思っていないんですか？」

伏し目がちにそんな言葉を投げかけられた。

「えっ……?」

その言葉に、スツと切れるような痛みが俺のどこかに走った。出口の分からない迷路で右往左往していると、声が聞こえ、その発声場所を目指して何も考えずにむやみやたらに走り回るような気分だ

った。そんな俺は相当鈍いのかもしれないと責められる実感だけが残っていた。

「私も、奥田さんにそう思ってもらえるように色々奥田さんが好きなものを調べたりしようとしても、私と奥田さんの間には距離があつて、その間に雨宮さんがいます。でも、それは当たり前なんかじゃないと思います」

美友紀の声色が微かに諦めの音色を含んだ。大山を前に、登山家なら登ることに挑戦するが、一般人はそれを見上げることしかしないような。

「奥田さんにとっては、当たり前のことかもしれません。でも、雨宮さんにだつてちゃんと私と同じスタートがあつたんです」

同じスタートか。そんなことを考えたことなんてなかった。

「きつと奥田さんがずつと前にスタートの合図を出したから、雨宮さんは私がスタートに立つ前にもうゴールの近くまで来ているんです」

俺は美友紀ちゃんの言葉を聞き入れることしか出来なかった。美友紀ちゃんが自分の気持ちを打ち明けているのに、それが美友紀ちゃんの言葉じゃなくて、悠のこれまでを俺に認識させ、受け止めさせようとしているような焦燥のように聞こえてしまう。

「俺は何もしていないよ」

そう。俺は何もしていない。ただ甘えて、乞えば差し伸べてもらえる手に縋っていただけ。

「奥田さんは何もしてなくても、雨宮さんがそこ（・・・）に（・・・）いる（・・・）ことが、雨宮さんがそこに居ようとして頑張った結果なんですよ。きつと」

悠が近くにおいて、俺を助けて世話を焼いてくれることが当たり前だと思つたのは、それは悠が頑張つてそこに居ようとした結果。それに俺は手を引いてもらうことで、俺に何かあれば俺が一番近くに来てくれると思えるのが、すぐに助けを求めればそこに居てくれるのが、悠、ということになるのか。

「あーあ、悔しいです」

低めのトーンだった美友紀ちゃんが、信号で車を止めると、ため息を漏らしながら力を抜いて背もたれに身を預けた。途中で走ることを止め、リタイヤを表明したように。

「もっと私が早く生まれて、雨宮さんと同時にスタートに立っていれば、きっと私のことも当たり前前に想ってもらえたのかなあ」
誰にでもなく、自分に言い聞かせるような美友紀ちゃんの言葉。

「雨宮さんが羨ましいな。私も雨宮さんみたいになりたかったな・・・」

羨望と諦めの吐息が小さな美友紀ちゃんの唇を微かに振るわせた。
「美友紀ちゃん、美友紀ちゃんだよ。誰かと比べて、誰かになるうとする必要はないんじゃないかな？」

「・・・はい」

励ましのつもりで掛けた言葉に美友紀ちゃんが目を伏せ、鼻を嚙つた。ゆっくりと車が走り、俺は間の悪い空気に吞まれ、逃げるように窓の外へ目を向けた。

「奥田さん」

不意に呼ばれて隣を見ると、外の明かりに照らされた美友紀ちゃんの瞳が、雫でその輝きに揺らめきを浮かばせていた。

「コンビ二、着きましたよ・・・っ」

今はお世辞とか励ましとか、下手な言葉はかけないで。そう言われたような気がして俺はコンビ二へと夕飯を買いに車を降りた。

「美友紀ちゃん・・・」

弁当と飲み物を買って雑誌コーナーを歩いていると、ちょうど美友紀ちゃんの車が見え、美友紀ちゃんがハンカチを瞳に当て、顔を伏せている姿が近くの外灯の明かりに浮かび上がっていた。

「俺、ほんとダメだな」

気軽にかけた一言が余計だった。俺の言葉は美友紀ちゃんには鋭い針のような棘として刺さってしまった。俺がもっと考えていないから、こうなった。それは否定出来なかったし、今ではそのつもり

もないが、今の彼女にかける言葉が俺にはあるのだろうか、とコンビニから車に戻るその数メートルほどの距離が果てしなく遠く、しばらくの間、雑誌を読むフリをして雑誌の先を見つめ、美友紀ちゃん満足するまでその涙を流させてあげることしか出来なかった。

「俺は卑怯者だな……」

いざと言う時に、自分では何も出来ず、もしこの場にあいつ（・・）が居てくれれば、何てことを不躰ながら思って、彼女の座る運転席へ目を向けていたのだから。でも、今の俺に出来ることは、それだけで、それだけが精一杯だった。他に出来ることなんて、何もなかった。

美友紀ちゃんが落ち着いた頃を見計らって車に戻ると、先ほどよりも明るい笑みを浮かべて美友紀ちゃんは俺を悠の家まで送ってくれた。さすがに悠の家を認識させるのは今の美友紀ちゃんには辛いことだと思い、近くの公園の前で俺は車を降りた。

「ありがとう、美友紀ちゃん」

「いいえ、こちらこそ、ありがとうございました」

俺たちの言葉は、きつと車送ってもらっただけの意味合いじゃなかった。少なくとも俺は送迎のお礼にもう一つを付け加えた。もしかすると、送迎への礼が付け加えたものだったかも知れない。美友紀ちゃんが車を再び走らせ、俺の視界からその車の後姿は消えた。

「もう、今迄みたいなことはなくなるよな……」

そう思うと、少し後悔の念が俺の胸の中に宿るが、それは絶対に言葉に、実行にはいけないこととして、心の深底に仕舞いこんで鍵を掛けた。明日は休みだから、次に会う時までには俺も自分の中できつちりと整理をつけておかないといけないと思いつながら、家に戻った。

家に戻り、一人で夕食をつまらないバラエティー番組を見つめながら済ませ、シャワーを浴びながら湯を張り、悠の帰宅を待って、俺は眠りに就いた。

翌朝俺が起床すると、悠が自宅の電話でどこかに連絡を取ってい

た。聞くつもりはなかったが、どうやら俺を送っていくために遅刻することを伝えているようだ。もう何度も目の当たりにしている日常風景なのだが、やはり良心にちくりと鈍い痛みが走る。

「いい加減、俺も甘えすぎてるな」

ダイニングのテーブルには既に二人分の健康をきちんと考えている和食の朝食が並んでいる。

いつものことだから。

いつもそう言っつて、俺が呑気に目覚めて支度がある程度整えると似たように飽きの来ないように毎日違うメニューが並んでいる。感謝し足りないのは確かだが、それが多少なりとも負担になっていることを俺は知っている。だがそれは口にしない。それもまた悠には余計な負担になっているからだ。

「さ、食べましようか」

「おう」

悠が連絡を追え、俺を呼んで朝食の時間が始まる。初めのうちは俺に対する悪戯やらが多かったが、今では箸とスプーンも当たり前のように用意されて、変な茶々もほとんどなくなった。変わらないのは大した会話のないくらいだ。

「今日は、別に俺はバスで行くから良かったんだぞ？」

「良いわよ別に。もう連絡したし」

基本的には俺から言葉を投げなければ静かだ。

「毎回俺のせいで遅れてるんだ。今日は送ったらそのまま仕事行けよ。結構仕事、溜まつてるだろ？」

俺が居候していない頃は、今日の分の仕事は自分の労働時間内にきちんと片付けていたが、今は夜間組みに引き継ぐことも幾らか耳に入っている。

「そうね、そうさせてもらおうかしら。帰りは大丈夫？」

「俺は初めておつかいする息子か？」

「似たようなものよ」

俺が何も言わなければ、悠は俺が診察を終えた後に家までまた戻

つてくるつもりだったのだろうか。思わず苦笑が漏れてしまう。それを
見てか、悠の表情も若干緩んで見えた。

朝食を済ませ、俺たちは家を出て病院へと向かった。その途中で
二十四時間営業のスーパーでちょっとした土産の品物を購入して、
俺は病院で降り悠は仕事に別れた。

「少しずつ骨癒合が始まってますね。時々痛むことがあるかも知れ
ませんが、回復へ向かっている兆しだと思って耐えて下さい」

いつものような診察で腕の動きやらを見てもらい、自分の骨が次
第にゆっくりと快方へ向かっていることに安堵して診察を終え、代
金を支払い俺は小児病棟のほうに足を向けた。

エレベーターで上がり病室へ向かっていると、ナースステーション
の所に隼人の母親や医師、看護師や他にも栄養士や薬剤師、ケー
スワーカーのネームプレートをつけた一団が出来ていた。深刻な話
かと思っていたが、彼らの表情は比較的穏やかでそれほど深刻な話
はしてはいないようだった。

「隼人君、騒いだり、わめいたりはしていませんですか？」

ケースワーカーのプレートをつけた男が隼人と言って、思わず近
くの椅子に腰を下ろしテレビを見る振りをして聞き耳を立ててしま
った。

「今の所は静かにしてます。先日、絵本を頂いて、ずっとそれに目
を向けていますね」

問いに母親が答えた。それは俺たちが持っていたものだろうかと思
った。

「絵本か。それもいずれば見れなくなるかもしれないですね」

医師が嘆くように言った言葉に、俺は嫌な汗が背筋に走りそうに
なったが、一団は至って静かな顔をしている。きつと全員が隼人の
容態を理解しているから、絶対にそうならないという希望を抱くこ
との難しさを感じているのだろう。

「絵本だけじゃなく、隼人君はみんなと会話をする事で想像力を
働かせて、きつと私たちが考えているよりも生き生きとしていると

思いますよ」

看護師の女性が普段から母親に次いで隼人に接しているから分かる状況を説明していた。

「そうかもしれないですね。あの子は人が話をしてくれることがすごく楽しみなんだと思います。先日絵本をくださった方が、飛行場のパイロットをなさっていることをあの子に言ったら、いつも以上に口数も多くなって、ずっと話していましたから」

「あはは、そう言えば最近によくその話題を振ってくるね、隼人君は」

母親と医師の言葉に俺は驚いていた。俺のことを話すとは思っていなかったこともあるが、隼人が俺のことを聞いて少しは元気でいられるということが俺の開いた口を塞がなかった。

「やっぱり、外に出たいんでしょう。隼人君は色々なものを見て感じたい年頃ですからね」

ケースワーカーの男の言葉に、全員が各々に頷いている。それくらいなら俺にも覚えはある。初めて診察に来た時に、帰り際に俺たちを羨ましげで悲しげな眼差しで見つめていた隼人の姿は今でも俺の脳裏から消えることはない。その後も度々隼人は俺が病院の出入り口を出て行く姿をそんな目で見ていた。各階に設けられた待合所の窓からは、登下校する子供も見える。それをただ毎日見ている子供にしてみれば、籠の中の鳥も同然だろう。

「だが、治療が芳しくない今は、仕方ないね」

その言葉で一団に静寂が訪れた。俺も顔を見られないようにその場を立つた。俺が立ち上がると臨床心理士のプレートをつけた女性が見舞いの母の心理状態は大丈夫か？ やケースワーカーの男が、お父さんは見舞いに来てくれますか？ などの会話も聞こえてきたが、俺はそれを聞くことなくその場を後にしてトイレへ行った。別に用を足したいわけじゃなかった。隼人の母に向けられる質問に、恐らく隼人の見たことのない母の表情を俺も見たくなかった。

「入院、か」

したことの無い俺には、隼人の辛さは赤の他人状態で汲んでやる
ことが出来ない。長期入院が必要な隼人の病は、それが強く心のス
トレスに反映される。俺が知る限り隼人の見舞いには母親しか来て
いない。仕事が忙しく、なかなかそうもいかないのだろう。俺も早
朝の合間でしか訪れることが出来ない。もし隼人に兄弟姉妹がいる
のであれば、そちらの世話で来られないのかもしれない。そうなる
と子供にとっては唯一頼れる家族との触れ合いがろくに取れず、寂
しくなるだろうし、限られた空間での生活の圧迫感も否めないはず。
だから、起き上がる頃はよく窓から外を見ていたのだろうし、俺
たちが持つてきた絵本や模型に、いつかきつと、という夢を馳せて
いるのだろう。その辛さを分かかってやれない不甲斐無さに悩んでい
ては、結局俺は何も変わらないままなのだろう。昨夜一つの区切り
をつけて、決意もした。だから、考え方を変えて、今の俺に出来る
ことを悩むべきだろう。そうしなければ、俺は掬いようのない馬鹿
じゃないか。

「とりあえず、ここにいても仕方ないな」

袋を片手に俺は病室に向かった。先ほどまでいた医師や母親らは
既に解散したのか、仕事に戻っているようだった。

「よつ、隼人」

部屋に入ると隼人は静かに横になっていた。熱があるのか熱冷ま
しのシートを小さな額につけ、点滴を打っていた。それが抗がん剤
なのか、栄養剤なのかは俺には分からない。

「あつ、兄ちゃん」

俺に気づいた隼人の目が俺を見る。いつものことだが、少々違和
感があった。

「兄ちゃん……」

この間まではおじちゃんだったのに、兄ちゃんって今呼ばれた。

「うん、兄ちゃん。だって兄ちゃん、パイロットなんでしょ？」

起き上がるまでの力はないようだが、隼人の口調は普通にしようと
頑張っているようだ。ただ、その片目は暗闇以外ものを一切捉え

ることが出来ないと言う事が、俺の気持ちが高めることを虐げるよ
うだった。当たり前に見えていたものが見えなくなるという恐怖や
不安。俺には分からないが、大人でも自殺する人間がいるくらいに
受けるショックの強さは計り知れないはず。他人には分からない辛
さと共に生きるということが隼人には理解できていないのだろう。
だから、落ち着いているのか。そう考えたくなくなる。それ以外は考え
たくない。

「何で知ってるんだ？」

母親に聞いたのは知っている。だから敢えてとぼけた。その方が
良いような気がした。

「お母さんがいった。兄ちゃんはこれのパイロットだって」

隼人が指差したところには、様々な空や航空機の写真が張られて
いるコルクボードがあった。その中に以前俺が持ってきたバードフ
ライ機の写真があり、隼人はそれを指していた。俺がそのパイロッ
トだと知ると、呼称がおじちゃんから兄ちゃんに格上げか。子供ら
しいと頬が緩む。自分の憧れが目の前にいると、キラキラと目が輝
く子供の純粹さは眩しいものなんだな。

「すごいね、兄ちゃん」

嘘偽りも何も無い隼人の言葉。ただ心から尊敬している目。それ
を向けられて嬉しくないはずがない。

「まあな」

「でも、それじゃ乗れないんでしょ？」

悪気のない無垢な隼人の言葉。ただ何も知らないだけの瞳。健介
にはその真っ直ぐな光りが痛く感じられた。

「そうだな、今は隼人と同じだ」

外で自由に遊んだりすることが出来ない隼人と、空を飛べない俺
比べるには値しないかもしれないが、似たようなものだろう。俺に
はまだやれることが多いが、隼人はそれすらも制限される。何かし
てやれないかと常に頭の中を駆け巡る。

「兄ちゃん」

「ん？」

隼人が絵本を手に取りながら俺を呼んだ。隼人の手にあるのは俺たちが渡した空飛ぶピアノと言う絵本だ。ピアノの音色が聞こえた時に願いを掛けると叶うとか言う内容だったと思う。

「兄ちゃんは、これが本当だったらどうする？」

隼人にしては大人びた言葉に感じられた。絵本というものが作り話だということを理解しているような。

「そうだなあ、今はこの腕の怪我を治して欲しいって願うかもな」

「じゃないと、飛べないもんね」

俺の返答に隼人の言葉は至って静かなものだった。どこか俺の調子が狂ってしまう。子供ってこんなだったか？ 隼人を見て思ったことだ。

「隼人は、何を頼むんだ？」

聞かずとも分かることだ。今の隼人は俺の予想では病気を治して学校に行つて友達と遊ぶとかだろう。

「うーんとね、空に絵をかきたいって言うよ」

予想に反して隼人の願いは意外なものだった。

「兄ちゃんは、空に絵、かいたことある？」

空に絵を描いたことがあるか。それはどういうことだろうか。隼人のベッドの周りには色鉛筆やクーピーで様々な絵が描かれている。正直、俺にはそれが何を描いたものなのかはよく分からないが、紙一枚一枚に全体が水色や青で塗られ、そこに様々な絵が描かれている。恐らく空に見立てた青地に絵を描いているのかもしれない。

「どういうのなら、な」

隼人の写真コレクションの中から、一枚を俺は手に取った。それは航空祭で飛行を披露した時のバードフライの編隊飛行の写真だ。ちょうどスモークも出していて、機体を鉛筆に例えればこれも一種の絵描きみたいなものだ。相当な技術を要する難しい絵描き。それが隼人の言う空に絵を描くことと似ているのかは分からない。

「うーん、こんなのじゃないんだ」

隼人はどうやら、俺がそう思っていたこととは違うことを言いたかったらしかった。

「隼人はどんな風に絵を描きたいんだ？」

パイプ椅子に腰を下ろし、写真を元に戻す。

「ぼくね、くもに絵をかくんだ」

隼人が窓から浮かぶ初夏へ移行する雲を眺める。それで何となく隼人の言いたいことが把握できたかもしれない。きつと隼人は俺たちがバードフライで空に線で描くのではなく、雲に色をつけるように絵をかくことを夢見ているのかもしれない。

「雲に色をつけるってことか？」

俺の疑問に隼人は、うんつと絶対に叶えるんだというような眼差しで俺を見てくる。

隼人の言葉に俺は頷くが、それは叶えてやることは出来ない。

雲というものは、言ってしまうえば水蒸気が冷えて出来た小さな水の固まりだ。赤や青の光を当てて色をつけたように見せることは可能だ。朝焼けや夕焼けの頃の空を思い出せば、雲は白くはない。彩雲とも呼ばれ、色が付いているように見える。だが、隼人の夢は、紙に鉛筆で絵を描くことと同等だろう。そうなると難しい。不可能というわけではないが、空に浮かんでいる、隼人が今見ているような雲は手を伸ばせば届くような高さにはない。バードフライでもあれほどの高度まで上昇することはないのだ。その雲に色を人工的につけるのは難しい。直接色素成分を散布する方法もあるかも知れないが、それでもきつと染まることはないだろう。色をつけるとなると、雲は空気中の水分が凝結しているもののため、それに色をつけるのではなく、雲になる水に予めにも色水を含ませる必要があるだろう。それは易々と出来るものじゃない。スプレーをするように色をつけるとしても、水分よりも色素のほうが重いからそのまま地上に落ちるか拡散分解するはずだ。

それに別例として、飛行機雲は空の(ト)航跡レールと呼ばれ、これは高空の冷気に冷やされた航空機から排出される高温・高圧ガスに含ま

れる水が飛行機雲となる自然現象なのに対して、バードフライが使用するスモークは一種のコントロールだが、それとは区別し、潤滑油の一種を胴体内に設置したオイルタンクからパイプを通し、エンジンのパイプ付近で噴出させ、高温の噴出ガスの熱で煙を吐き出すことで機体がスモークを吐き出しながら空に絵を描くように見せている。だから、スモークでは雲に絵を描くことは出来ない。

何も知らない子供だからそう夢を描ける。だから、それが無理だとか否定する言葉を俺の口は紡ぐことはしない。子供のために嘘を教えるのは良くないという大人もいるかもしれないが、まだ小学校にも通っていないような幼い子供に、現実を突きつけさせること以上に酷なことはないかもしれない。知らせないのも思いやりだ。子供は夢を持って日々の生活で感性を磨いて、大人に成っていくのが一番だろう。何も知らず、何もないからその心は澄んで綺麗なのだ。それを穢すのは罪だろう。

「あんなに大きなくもに、絵をかくってたのしそうだもん」

隼人の目は夢を語る時は、病気なんてなんのそのと言った具合に生き生きとしている。

「そっか。ピアノが来てくれると良いな」

「うんっ」

表情は比較的豊かなのだが、やはり体は病魔に犯されて日々悪化を辿る一方らしい。つぶらな瞳の周りには隈が出来ているし、発熱からか少々顔色も悪い。慢性疲労のような脱力感も見える。

「ねえ、兄ちゃんは、なんでパイロットになつたの？」

隼人が唐突な質問を投げかけてきた。すぐに応えられるかと思っただが、少しばかり記憶を遡るのに時間が掛かった。

「いくつかあるんだけどな、一つは今隼人が空に絵を描きたいって言ったように、俺は空に憧れてたんだ」

隼人が一緒なんだ、とどこか嬉しそうに小さな笑みを浮かべた。

それに俺も相槌を打った。だが、それだけでパイロットになるという夢が生まれたわけじゃない。空に憧れるだけなら、様々な職業で

も空に関わることが出来る。

「他にも、隼人、お前ブルーインパルス好きだろ？」

「うん」

素直に頷く隼人。

「俺も中学の頃に見た時に好きになって、この仕事に就いたんだ」

いつか将来の自分を思い描いているのだろうか。隼人は色々と言問をしてくる。それに応える時の俺は、傍から見れば子供のように楽しそうに隼人に語っていたかもしれない。自分自身でも、隼人のような子供が将来の後を継いでくれると嬉しいと思い、自分で言うのも何だが、良い顔をしていると思った。好きな話をするというのは、快感に近いものを感じる。それが相手も好きで、知らないことばかりの時に話すというのは、格別のものだ。聞き流されることなく、受け止めてもらえる嬉しさは、大人だろうと子供だろうと関係ない。だから夢中になってしまうこともしばしばだ。

「もう一つは、学校の鉄棒をしてる時だったな」

「てつぼう？」

それがどうして俺がパイロットになった理由と当てはまるのか、隼人には不思議だったのかもしれない。横になりながらも首が少し傾いていた。

「そう。鉄棒だ。隼人は鉄棒はしたことがあるか？」

「ううん、ない。でも病院にもあるよ」

外に出られない子供のために、簡単な遊具が置かれているスペースがあった。きっとそこに小さな物があるのだろう。隼人は今ももう自由に院内を歩くこともままならないようだが、俺たちが出会った頃は遊ぶ機会もあったのだろう。

「そっか。鉄棒をするとな、上下が逆さに見えるんだ。そうすると空が地面になって、地面が空に見えるんだ」

飛べない人間が、空に立っていた。そんな気分になれた。漠然とした日常で見た、小さな光だった。

鉄棒でぶら下がると、上下が逆さまになって普段見慣れたものが

全く別物に見える。京都府の天橋立を見る時に股を通してみると、空に掛かる天の橋に見えるように感じるのと同じだ。中学の頃なんて田舎の学校だから、特に夢なんて持つことなくただ毎日遊んで過ごすだけだった。暇つぶしに鉄棒にぶら下がっていると、ちようど飛行機雲を描きながら行く飛行機が目に入った。紙の上を走る色鉛筆のようで、つい見入って、そのまま力が抜け、地面に顔面から落ちて鼻血が噴出したのを覚えている。

「その時に見た飛行機雲が格好良く見えてな」

それを吐き出す機体を操る人間への憧れに変わったのは、そういう長い時間は掛からなかった。

隼人は話に聞入っているのか、静かにしていた。

「隼人はどうして、空に絵を描こうって思うんだ？」

さつき隼人は、空にある雲は大きなキャンパスのようで、思いっきり絵を描きたいと言葉は僅かに違うがそう口にした。隼人ほどの年なら漠然とした夢を持つことは不思議でもなんでもない。思わず微笑むんでしまうような夢を持つ子供もいる。だが、空に浮かぶ雲に絵を描くという夢を持つ子供は、初めて目にした。こういう閉鎖的空間での生活を強いられている子供にしてみれば、どこまでも広がる開放的なものに対する憧れが、そう夢を持たせているのかも知れない。

「たのしそうだし。それにかっこいいじゃん」

ちよつと照れたような笑みで俺に言った。その表情は自信に満ちているように俺には見えた。夢を持つ子供の偉大さ。自分が同じくらいの年齢だった頃のことなんてほとんど記憶にないが、たった一つの夢を、多少悪く言えば執着し、良く言えばいつか開花することを願い温め続ける心の清らかさには、驚かされるものがある。こんなまだ十年もこの世界に誕生して時間が経っていないというのに、他の多くを望むことなく、それを犠牲にしても、たった一つだけの思いを貫く強さを持つのは、普通に学校に通い、友達と遊んでいる子供にはないだろうと思う。

「そつか。なあ隼人。見てみたいか？」

確か悠の話だったか、隼人はまだ曲芸飛行と言うものを知らないと言っていた。写真で見たブルーインパルスに感銘を受けて以来、様々なものを収集し、俺がバードフライのパイロットだと知ると、今まで以上に俺を見る隼人の目には輝きが増していた。宝石が人から人の手に渡るにつれて磨きを増して輝くように、色々な人の話を、夢を通して聞くことで、隼人は新しい研磨士に出会い、より一層新たな輝きを手に入れた原石のようだ。宝石になるにはもっともつと人の手を渡らないといけない。だから次の手に渡るまでは俺の手で隼人という原石に磨きをかけてやりたいと思った。

「なにを？」

「ブルーインパルスみたいな格好良い飛行を」

俺は近くにあった隼人のプラモデルを手に取り、曲芸飛行のように、隼人の頭上で動かす。子供ならよくやることだろう。自分の頭の中で玩具の車や飛行機などが飛んでいるのを想像して動かすと、そういうことでも想像力などがつく。想像する力は人間にはとても大切なものだ。物事の全ては人の空想や妄想、想像から生まれたものだから。

「見れるの？」

「隼人が見たいなら」

叶えてやるうじゃないか。精鋭集団の飛行ほどの技術はないが、それでも隼人には多少ならずとも刺激にもなるだろう。今の俺じゃ自分の腕を見せてやることは出来ないが、それくらいならしてやれるかもしれない。少しでも隼人が快方に向かう術の一つにでもなれば良い。しばらく隼人は何かを考えていると、母親が戻ってきた。

「どうかしたの？」

「あのね、兄ちゃんがみせてくれるって」

母親は隼人の言っている意味が分からないようで、俺を見てきた。「今ですね、隼人にウチのバードフライの飛行を見させてあげたいと話をしまして」

一瞬、驚きの表情を見せたが、すぐにその顔からそんな感情は消え、隼人を静かに見つめた。母親の顔には重たいため息でも出てきそうな哀しさが見て取れた。俺だって隼人の容態のことは聞いている。だからこそ、じゃないだろうか。

「少し、宜しいですか？」

隼人に何かを言うのかと思っていたら、俺が呼ばれた。ここじゃちよつと、と言葉を濁し、俺を廊下に連れ出した。隼人はすっかりその気なのか、顔色が微かに本来の明るさを取り戻したように見えた。

「奥田さん」

隼人には、少し待っててねと柔らかく微笑んでいたが、廊下に出た途端に先ほどのような優しい温もりが消え、どこか俺を敵視するような少々険しい目で見てくる。女性と言うより母親の目と言ったほうがしっくり来た。

「以前、お話しましたよね？」

有無を言わさない雰囲気を纏う隼人の母親に、正直俺は睨まれた蛙のような気分を覚えた。だが、その言葉の指す過去の言葉は覚えている。だから、俺は隼人にその小さな夢がいつか必ず叶うということを教えて、見せてやりたいと思った。症状の悪化は着実に進行しているのも承知の上で。隼人の母親にも夢を見せ続けてあげてと頼まれたのだから、ただ見せるだけでなく隼人の全てで感じてもらう方が良さだろう。そこまでの障害が多いことは分かっている。

「今の隼人があんなに明るい顔をしたのは久しぶりでした。ここ最近かんしゃくは微熱と倦怠感もずっとあつて、時々癩癩かんしゃくも起こして、自分自身をコントロール出来ない時が多かったので、あの笑顔は本当に嬉しかったです」

微かに表情が隼人に見せていた時のものに戻ってきたようだ。やはり自分の子供が苦しんでいるのを見るのは辛いだろう。俺の考えは間違つてはいないようだ。ただ実行に移すととなるとまた別問題で、隼人の母親もそれを危惧しているのだろう。

「大丈夫です。俺も出来る限りのことは何でもしますから」

もはやパイロットだった頃の鼻の高さは折れた。折れてしまえば開き直りが大事だ。初志貫徹とまではいかずとも、積み上げていけば良いだけのこと。どうせ腕が治らなければ仕事でも雑用の毎日だ。精神的な打たれ強さも前よりは身につけているはず。医師の説得には耐えられるくらいはある自信がある。呆れさせて見せる馬鹿なプライドを持つ事だって厭わない気分だ。

「そのことについては、感謝してもしきれません。ですが、その話は隼人には二度としないで下さい」

「えっ……」

俯きがちな母親から聞こえてきた小さな呟きのような、全否定の言葉。廊下には多くの子供や医療従事者や家族で賑わっている。その中で聞こえてきた一言は、周囲の喧騒を掻き消した。ほんの数秒前まで良い感じに思っていたのだが、一瞬でそれが打ち消された。

「ど、どうして、ですか……」

動揺を隠し切れなかったか、言葉が流暢に出てこなかった。

「隼人は左目を失明しています」

「それは、お聞きしました」

本音がどうか信じられなかったが、隼人の目が時折不自然に揺れて目の動きを制御出来ないのか、あちこちに左目が動いているのを見てしまった。先ほどの話し合いでも医師が絵本をいつまで見られることかなどと、右目も失明する恐れがあることを危惧していた。あまり考えたくはなかったが、ぶつちやけてしまえば本当は夢を見せるという名目上で、見ることの出来る今のうちに隼人には、空に絵を描くという夢に似た現実があるのだと写真や映像としてではなく、光りを見ることの出来る片目だけでも見て、記憶に残してもらいたいと思うからだ。きっと治る。自分にそう言い聞かせているが、心の深底では認めたくないが隼人を蝕む現実を拒みたくても拒もうとしない無意識の自分がいるのも分かっている。表面で繕っていても内面ではそんなことを考えていない最低な自分がいる。だ

からこそなのかもしれない。隼人への救いになるかも知れないことを俺がしてやることで、俺自身が救いを求めている。だから、隼人の母親にそれをしないで欲しいと言われて、思っていた以上にうるたえてしまった。

「視神経まで転移しているということは、どういことが分かりますか？」

ただ聞いてくるだけじゃない物言い。俺に問うというよりも、本当の現実を突きつけようとしているように聞こえてしまう。俺は言葉が出せなかった。俺よりも頭一つ分以上小柄な女性だというのに、放つ空気が俺を易々と凌駕している。それに呑まれてしまう。包み込むようなものじゃない。掴まれた感じで言葉が絞り出せない。

「脳にも転移があるの。治験でワクチンが出来るまでは、私たちはあの子をここから出すわけにはいかないのよ」

「そんな、に……」

親として子供の夢を叶えてやりたいと思っけていても、その代償として差し出さねばならない命の重さを天秤には掛けられないのだということとは分かる。夢のために、最悪命の全てを差し出すことになるかもしれない現実を考えると、踏み込むことが出来ないだろう。夢あつての命を好きに望む親はいないだろう。隼人の母も命あつての夢をとるから俺にそう言ったのだろう。

「治験は、新薬の有効性と安全性を確認する制度で、隼人の腫瘍の一部からワクチンを作ってもらうの。ここじゃそれが出来ないから、時間が掛かるの」

申し込んでいることは聞いていたが、そういうことだということとは初めて理解した。そこで引き下がれば済む話なのだろうが、俺は本当に我が侏な子供なのだろう。

「ですが、隼人は今でも右目の視力が落ちているかもしれないんですよね？ 見えなくなつた時の隼人の想いはどうするんですか？」

あれだけ空や雲への思い。そこに絵を描くということへの強い夢。俺を慕ってくれて、見てみたいと強く輝いたつぶらな瞳。それを俺

は失わせたくない。見られる内にその目に焼き付けて欲しいから。

「今の状態での外出は、隼人を悪化させるだけ。親としてそんなことさせられるわけないでしょ！」

溜め込んでいたものを吐き出すような突然の強い口調だった。その目は今にも何だが溢れ出しそうなほど悲しみや辛さを堪えている目だった。

「夢は回復すればいくらでも見られるのよ。その前に死んだら終わりなの。あなたにそれが分かる？ 家族を失うかもしれない辛さをあなたは分かるの？ あの子は私の息子なの、失わせたくないなんてないの。それを守ることをあなたに理解できるの？」

途中から俺に対する強い問いというよりは、母の嘆きにも聞こえてしまうほど、隼人の母親は我が子を思い、それに伴う息子の夢を淡く見せるだけで良いのだと俺に理解させようと今まで堪えていたものを溢れ出させた自暴自棄のような感情の爆発。そう言われると、俺に反論することは出来ないし、許されもしないだろう。どれくらいの間、医師の話や自分たちで調べた症状から、自分の息子のことに絶望的になったり、自暴自棄になったりと、慟哭になることを必死で堪えてきたのだろう。もう収まりきらないほどの悲しみや嘆きを。

「ごめんなさい。今日はもうお引取り下さい」

余計なことまで言ってしまったと、俺に謝罪すると俺が謝罪する間を与えることなく病室へと戻っていった。俺はその場を動くことが出来ず、行き場のない憤りと自分のしてしまったことに対する憤慨と隼人の夢を叶えると豪語しておきながら、何も出来ない不甲斐無さを抱えていた。

「どうかしましたか？」

立ち尽くしている俺を不思議そうに看護師の女の子が顔を覗いてきた。我に戻り、愛想笑いを浮かべながら俺はその場を後にした。エレベーターに乗り込む際、一度隼人の病室を横目で見たが、先ほどの女の子が俺に首を傾げているだけだった。

エレベーターに乗り込むと、骨折している左の掌がガツと拳になつているのに気づいた。それがどうしてなのか分からない。自分の行おうとしていたことを否定されたからか。隼人に夢を見させるだけで触れされることが出来ないことか。隼人の家族の抱える問題を軽視しすぎていたことか。考えればキリがなく俺の中に自責と疑問が駆け巡る。ギプス越しに伝わる鈍痛も気にならないくらい、今の俺は動揺しているのかもしれない。

病院を後にして、タクシーを呼ぶ気にもバスに乗る気にもなれず、少々距離はあるが俺は歩いた。俺の鼻に排気が気持ちの空回りのように纏わりついて気持ち悪かった。

「俺が、悪いんだよな」

喧騒に満ちた中を歩いていると、自分が一人なのだと良く分かる。耳を澄ませば誰の声かも分からない人の声や工事の騒音、自動車のエンジン音、昼の町の中には静寂はない。その中を一人で歩くと、静かな中で一人というよりも孤独感を感じる不思議さがある。たまに俺に向けられる視線。怪我をしているのがそんなに珍しいか？

そんなことを問いただいたくなるような俺を哀れむ視線に無性に腹が立つ。それが自分のせいだと分かっているから余計に堪えるのに必死になる。

「ほんと、子供だな」

俺は平々凡々と生きてきた。それを自慢することも蔑むこともするつもりはない。多くの人間が当たり前のことであり、一部には羨ましいと思われること。細かく人の空気を読み、当たり前のように自然と人の気持ちを読み取る。真つ直ぐに信じた道を歩み、一生懸命に自分と向き合う美友紀ちゃん。いつも俺を茶化し、馬鹿にしながらもその心に大切な人を失った傷を誰にも見せようとしなない智史。あらゆる角度から物事を見通し、叱責や励ましなど自分の意見を交えつつ他人を思いやる香田先輩。何も言わずにただ黙って見届けてつつも、静かに背を押す藤沢上官。そして、まだ五年程しか生きていないにも関わらず、大きくしっかりとした夢を持ち、周りを気遣い

つつ自分と闘う隼人。

俺の周りには自分をきちんと確立し、その意思を尊重し日々を過ごす人間が溢れている。自分というものを理解しているから他人へ気を向ける余裕があるのだろう。自分のことにも精一杯で、一度の大きな挫折に負け、甘えて、それでも格好をつけ続けている自分。そんな俺が他人に気を遣う前に、まずは自分自身を強くしなければならぬだろう。

無意識に空へため息が漏れる。太陽光を受けてギラツと胴体と翼を輝かせて飛び去っていく旅客機。数百人の命を一度に請け負う大手の旅客パイロットの精神・身体的ストレスは鍛えていなければとてもじゃないが耐えられない仕事だろう。それに比べれば少人数しか相手にしない今の俺なんて比べるだけ無駄なものだろう。自嘲自虐が止まらない。分かっているから分かっている。そんなところだろうな。

歩いて三十分ほどして家に着いた。自分の家じゃないが、すっかり慣れてしまい合鍵で部屋に入る。女性の部屋ならではの甘く優しい香りの中に、男の匂いが微かにする。それだけ俺がここに住み着いてしまった何よりの証か。時計の音くらいしかまともな音はない。携帯をベッドに放り、上着も同様に投げる。日差しに照らされた中で埃が立ち昇る。それを吸うのは嫌に思うが、どうせいつも吸っているのだと思うと気にならない。

「俺に出来ることって何だよ……」

前に智史が言ったことが頭を過ぎる。今の俺には、確かに何も考えずに流れて来る部品を淡々と組み上げる流れ作業の工場での仕事のほうが向いているかもしれない。何で俺はバードフライ飛行場に入社し、憧れだった曲芸飛行チーム（フライ）の一員にまで上り詰めたのか。一人になるとそんなことばかり考えてしまい、気がつけば玄関の開く音が聞こえる時間だった。

「何よ、健介いないの？」

いつの間に日が沈んだのだろう。奥から次々と明かりが差し込ん

でくる。買い物袋のザサザサというビニルの擦れる音と共に、俺の視界も明るくなった。

「あつ、寝てた？」

目を開けると、悠が俺を覗き込んでいた。下ろした髪が表情を分りにくくさせているが、具合でも悪いの？ と今にも訊ねてきそうな顔だと思った。

「いや、起きてた。ずっと」

一睡もしていないが、ベッドに体を横たえていた。特に何をするでもない。陽があるうちに風呂掃除をして以来、ずっとこうしていた。何をする気力も起きない。ずっと考えていた。

「ご飯作るから、それまでゆっくりしてなさい」

一人で何かを納得した悠は、それだけ言い残すとリビングのほうへと戻っていった。夕食の支度を始めたように袋を開ける音や水の音、炎の音、まな板を走る包丁の音などがずっと横になったままの俺の耳に聞こえてくる。

「そついえば、昼飯食ってねえな」

昼前に帰ってきて以来、昼食のことなんて頭になく、ただ呆然としていた。仄かに香る夕飯の香りに腹の虫が空腹を訴えてきた。ここ最近は一食摂っていたから一食抜いただけでどれだけ空腹になっていたかを思い知った。色々なことを考えていても空腹はどうしようもない。悠の呼ぶ声に体を起こし、ダイニングに行く悠にも聞こえる程の腹の虫の鳴き声が響いた。

「お昼は？」

「食ってない。気がついたらお前が帰ってきてた」

正直に話すと、悠は呆れたような声を漏らした。

「何してたのよ？」

「考え事」

一食抜かすと悠の夕食の美味さに少々驚いた。これをいつも食っていたはずなのに、味覚がいつも何倍も鋭くなっているように感じられる。当たり前だということが日頃の積み重ねの結果だという

美友紀ちゃんの言葉が浮かんだ。言われた時には良く分からなかったが、今それを実感した気分だ。

「なあ、悠」

「ん？ 何？」

何となくだが、美友紀ちゃんの言葉で俺がどうしたいのか、智史の俺に言った言葉が分かりそうな気がした。だから悠に俺は全部話した。一人で何時間も考えて出せなかった答え。結局甘えなのだろう。それで良い。一人じゃ答えを出せそうにないから誰かに頼る。それが俺なのだから開き直ろう。

「俺って、隼人に何をしてやれると思う？」

俺の質問は素っ頓狂なものだっただろうか。悠がポカンと俺を見ている。こっちは至って真剣な悩みなのだが。

「どうしたのよ、急に？」

「いや、それがな・・・」

今日隼人の母親に言われたことをもう一度自分で確認するように悠に話した。初めは呆気にとられた顔をしていたが、やがて悠の表情は固くなった。俺の話が進むにつれて真剣な眼差しというよりは呆れてものも言えないと言った感じだろうか。自分で話していて次第に罪悪感にも似たものを、情けなさを感じてくる。

「あんだ、馬鹿でしょ？ というか馬鹿よね」

決められた。自覚は薄々していたが他人に言われるのは結構、こう、何と言つか、くるな。痛い。

「馬鹿馬鹿言うな。これでも今日はずっと考えてたんだぞ」

「それで答えが出ないで、私に聞いた。馬鹿以外の何ものでもないじゃない」

悠が明らかに俺にむけてため息をついた。自分のため息というものには時として哀愁も自覚するが、他人のため息というものは耳にするのも目にするもの良い気分ではない。時として腹立たしさも感じてしまうものだ。本人は悩んで漏らしたものだとしても、その悩みや不安を知らない他人からすれば正直面倒なものだ。今まさに悠

の表情がそれを表している。

「うるせえ。俺だって散々悩んだでんだよ。すぐに答えが出せるなら出してらつての」

その一言に悠は再び呆れたように盛大なため息を俺に向けてきた。少々癪に障るが俺が蒔いた種のせいだから堪える。

「あのねえ、あんたは隼人君のことしか頭にないから、お母さんにそう言われたのよ」

「どういうことだよ？」

隼人の事を考えて何が悪いというのか。病気で苦しんでいる子供と出会ったのだから、その子が温め続けている夢を見せるだけでなく、その肌全てで感じさせたいと思うのは悪いことだと言うのか。

隼人の母親は俺にそれをしないで欲しいと、まだ隼人にしてやれる治療の術がある今は、夢を聞いて共感してやるだけで良いと断言されて、俺は拒否されたのだから。治療する術がなくなれば夢を肌で感じさせることを認めるといふ風に捉えられるその言葉に、俺は憤りを感じる。隼人の病気は刻一刻としてその小さな体を蝕んでいる。その治療の術があるうちは我慢することも厭わないが、だが隼人の場合はそうはいかないだろう。隼人の夢では、恐らく最も重要なものの一つである目で、光りを見ることが出来なくなり、もう一つもその見渡せる範囲を狭めている。成す術がなくなるといふことは、その残された一つの光りも見ることが出来なくなることじゃないのか。そうなつてからでは俺が見せてやりたい夢は意味を成さない。感じるだけでは空に絵を描くことは出来ない。その目で見る事が、何よりの夢。紙の上でのことなら感触を感じることが出来る。だが、それが隼人の場合は空に浮かぶ雲が舞台。感触だけでは分からない。感覚も大事だが、その手で掴むことが不可能に近い分、目と言うものの重要性が必要不可欠なのだ。だから俺は俺なりに、前に隼人の母親に言われた通りに隼人に光りを見ることの出来るうちに、本物を見せてやりたいと思った。手遅れでは永遠にその夢が感じるだけで見ることが出来ない。幼い子供の夢だから、時間が経てば別の夢

を持つことだつて分かる。だが、強い思いを押さえ込ませてまで夢を変えさせられることには、俺には納得出来ない。

「あんたは今までずっと幸せに、何の問題もなく今日まで生きてるでしょ？」

その腕のことを除いて、と付け加えてくる。俺は正直に頷いた。
「でもね、入院つてものが入ると、家族が壊れることもあるのよ。分かる？」

悠は子供の頃に入院をしている。だから、想像のことではなく事実を交えて口にはしている。説得力がないわけではない。

「あんたの場合は、隼人君が自分一人だけで病氣と闘っていると思つてる。だから、馬鹿なのよ」

言い返したい悔しさがあるが、俺の中の認識は悠の言う通りだ。

「大人が入院すると、子供が入院するのは意味が全く違うのよ。大人なら自立していれば特にあんたみたいな独り身なら大して問題は起こらないでしょ？」

仕事や入院治療費などの支障は否めないが、生活の保障はされたも同然だろう。入院中は衣もあれば、食もある。住だつて問題は無い。確かに俺が今入院しても悠の家に居候になっているのと大差はないだろう。

「でもね、子供はそうもいかないの。もちろん病氣と闘う辛さはその子にしか分からないことよ。でも辛いのはその子だけじゃない。

家族にだつて当たり前だった日常を送れなくなるのよ」

「当たり前前の日常……」

「お母さんは連日病院で我が子に付き添うから、家事が滞りなくなせなくなる。病院に寝泊りをするなら尚のこと。毎日毎日家事をこなす主婦つて、あんたが思っているよりもずっと大変なのよ。午前中に掃除洗濯、食事の支度を済ませて病院に行く。それから消灯時間まで付き添って帰宅して、残った家事をこなす。数日なら耐えられるけど、それが長期入院を余儀なくされる隼人君のような病氣だつたりすれば、子供もともかく、母親自身の疲労が蓄積する。そ

して、それが時には夫や兄弟姉妹にもしわ寄せが行くこともあるわ。中高生くらいの子供なら切り抜けられるけど、隼人君みたいな子供を持つと、その兄弟は同年代の子が多いの。そんな子供はまだ親、特にお母さんを必要としているの。そのしわ寄せが母親から来れば、子供の精神状態も乱れる。お父さんが常日頃から家事や育児にサポートしてくれているならまだしも、出張なんかで不在になることが多いと、それがさらに悪化を促すの。入院している子供のストレスだって大きいけど、その命を守るために背負う家族の負担は、夫婦間に軋轢を生んだり、親子の関係も崩れることがある。一人の子供が病気になることの影響の大きさは、実際に経験した人間にしか分からないのよ」

悠は俺が口を挟む間も設けることなく、一気に言った。

「それを隼人君に感じさせまいとする思いも大きい。家族の心は必ず不安定になる。親にしてみれば代わってあげたいって誰もが思うわよ。だから、親も怖いよ。自分たちが強くないと、子供にもすぐに影響する。子供は大人に比べて何も知らないし、純粹だから親が子供に弱みを少しでも見せると思うわけよ」

「自分のせいで、皆が辛い思いをしているって責める、か」

「でも私もそうだったけど、それで済むなら良いほうよ。中には病気になった自分が悪い。自分がこうならなければ家族は元気にいられるのに。自分は悪い子だ、要らない子なんだって思う子供だって多いんだから」

本当は、家族はただ治ってまた元気に走り回って欲しいって思っているだけなのにね、と悠は嘆くように、過去の自分を悔いるように言った。俺には分からない領域の話にも聞こえるが、理解出来ないわけじゃない。隼人を見て、隼人の母親が辛そうに俺を責めたことを悠の話に重ねれば、確信には至らないが想像くらいは出来る。

「だから、隼人君のお母さんがあんたにそう言ったのも分からないでもないわ。ウチも私のせいで似たようなことがあったし。親だって子だって一人の人間だもん。いつまで続くか分からない入院生活

に伴うストレスは堪えるのに限界がいつかは来るもの。あんたが悪
いとは言わないわ。でもね、隼人君のご家族の思いは、比較出来る
ものじゃないのよ」

一般入院と小児入院の大きな違い。強いストレスにさらされる子
供の心を支えること、家族の辛さを理解し、それをサポートするこ
とも小児医療の大きな役割だと言えるのだろう。その中で常時接し
ている親のほかに医師や看護師が子供の心の状態を見つめ、隼人の
ような幼い子供であれば、遊びを通して成長を支える保育士や心理
状態を観察し、カウンセリングする臨床心理士、中でも親にとつて
子供の状態の他にも経済的な悩みや医師に直接言えない不満や質問、
子供の通う学校等との連絡などあらゆる悩みを聞いてくれるケース
ワーカーのサポートが必要となり、その全てを一つのまとまりにし
たトータルケアの重要性もまた必要不可欠となっているのだろう。

「でも、それじゃ隼人の夢はどうなるんだよ？」

ただの駄々でしかないことは分かった。俺は隼人の家族じゃない。
俺の話は隼人の家族にすれば無神経にも思えることだってことも、
今の話で理解しないわけにはいかないだろう。

「それに関しては、私はあんたの考えは否定しないわ。むしろ私も
賛成しても良いかなって思ってる」

きつと悠に一蹴されるだろうと思っていたが、意外な答えが悠の
口から聞こえた。

「もちろん、馬鹿な考えだって事も分かってるわ。あんな状態で日
に日に悪化している隼人君を病院外に連れ出そうなんてことは簡単
に出来るものじゃないでしょうね」

それを踏まえて俺の考えは拒否された。

「この仕事をしていると、隼人君の気持ちも分かるのよね」

いつもは俺の考えを否定して、新たな妥協案を出してくる悠が珍
しく俺の意見に同調している。

「でも、隼人の母親はそれを望まなかった。それじゃあどうしよう
もないだろ？」

意外な事態に内心は一瞬別の意味でうろたえたが、話題は一つとして何も変わっていないから表面は変わりない事実へと向き直す。隼人には喜んでもらえたことだとしても、両親の判断や医師たちがそれを否定すれば、俺たちに出る幕はなくなる。それだけ俺たちと隼人を繋ぐ繋がりには薄いものだと、改めずとも認めなければならぬということだ。

「ダメだって言われて、はいそうですか、であんたは諦めるの？」
悠は見下すような眼差しと箸を持つ手を俺に向けてくる。箸で俺を真っ直ぐに指さない辺りはマナーを守っているのだろうか。

「プロや家族が相手じゃ、俺たちにどうすることが出来るってんだよ」

越えられない壁のごとく立ちほだかる問題は、俺には超えることも崩すことも出来る力を持つ資格なんてないってのに。あの時反論の一つでも出来ていれば、それを盾に遮二無二に突き進んでいたかもしれない。だが、我が子の命を守るために奮闘する親を前に、それはただの屁理屈の繰り返しで、隼人の命が助かるのであれば俺だって助かって欲しいと思う。だから、立ち止まってしまおう。

「前に智史の話をしたでしょ？」

「事故のことだろ？」

突然斜め方向にずれる話題に戸惑う。

「その時、智史とどんな話をしたのかは分からないけど、何か言われたんじゃないの？」

思い返す俺に、悠は全てを初めから知っているような口調で俺の答えを待っている。確か智史の姉と子供はウチの航空祭へ向かう最中の事故だった言った。そして、悠の話なども合わせて、智史の姉の子供は智史の演技を楽しみにしていた。あの航空祭の時、智史は事情をまだ知らず、飛行演目終了後に慌てて飛行場を後にしてそれからしばらく休んだ。詳しい理由を問う暇もなく俺も仕事に追われ、そのことをすっかり忘れていた。

「子供が元気にいられる理由がどうだとかを言われたと思う」

最後に俺に聞いてきて、俺はそれに応えることが出来ないまま結局そのまま流れた。

「今のあるたにそれを改めて聞いても答えられる？ それとも無理？」

悠が慈愛に満ちたような目で俺を見てきた。いつの間にか俺たちの夕食を摂る手は止まり、悠の温かい料理から熱がどんどん冷めていっていた。

「あー、えつと………」

改めて問われても、答えが出せなかった。不甲斐無いが、俺の頭に浮かんできた答えは全て智史に問われた時に浮かんだものと同じだった。

「本当に、あなたは馬鹿ね」

呆笑を浮かべる悠に、俺はいじけるように目の前のおかずを箸で行ったり来たりさせた。行儀が悪いのは分かっているが自分自身の考えの浅さに呆れていたのもあるかもしれない。

「健介、その言葉に隼人君を重ねてみなさい」

四・この夢だけは、空へ

「ほら、胃薬」

「……さんきゅ」

手にした錠剤を水と共に胃へと流し込む。すうつと水が食道を伝い胃へと入っていくほどよい冷たさが全身で感じられる。

「あなたは真性の救いよりの無い馬鹿ね」

昨夜散々人を馬鹿にした上に、今日もしよっぱなから馬鹿呼ばわりだ。言い返したいが今はその気力も湧かない。腹を擦るのが精々だ。

「いつまでもそうしてないで、着替えなさいよ。時間ないわよ」

朝食は悠が用意した粥だった。何も言っていないのに、分かりきったように出されたが、その半分も口に入らなかった。

「子供ね、あなたは全く……」

出来の悪い子供を持った母親のような素振りでもツップを片付ける悠。

「面目ない」

詰めすぎは良くないな。心は満たされても、体には限界というものがあつた。それを超えた時に襲い掛かってくる自業自得の痛みに夜中から苦しめられていた。何度トイレに駆け込んだことか。別に空気が溜まっているわけでもないのに、長く息を吐くとちよつとだけ気持ち楽になる。考えれば誰にでも分かることだが、あの時の俺は一つのことしか頭に無く、こうなると予想出来たことですら脳裏を過ぎることがなかった。苦痛の波が一定の周期でやってくる感覚も何とか掴めて来たが、対処するにもトイレに駆け込むか、腹を擦るくらいしかなく、薬の効果が現れるのを待つばかりで仕事へと向かった。もたれる胃には、車の振動は最悪だった。何度ウヴツと来て、その度に悠に嫌な顔をされたか数えていない。

「じゃあな……」

「少し休んでから仕事しなさいよ。じゃないと皆に迷惑かけるわよ」
車酔いなんてとうの昔に置いてきたものだと思っていたが、甦つてくるものだな。覚悟一つで一石三損くらいした気分だった。飛行場について事務所へと入っていてもあまり良くはなかった。むしろ航空機の音と振動がさらに悪化させる要因にばかりなっている。

タイムカードを入れて自分のデスクに着く。藤沢上官や先輩は既に出ているようで何となく助かった気分だ。朝からあの人たちの声は腹に沁みる。

「何だ、お前？ えらく元気ないな？」

目の前で何かの書類をチェックしている智史が不思議そうにこちらを見てくる。昨夜の覚悟をこいつにも手伝ってもらいたいが、今はその話を持ち出すだけの余裕が無い。チクチクどころか、グニユと押し付けられるような痛みで声が掠れる。

「気にするな。直に良くなる」

胃もたれだなんて言えば笑われる。こいつにだけはそれは嫌だ。何とか堪えているうちに慣れてきて、痛みのサイクルも弱くなってきた。

「そっいや、今日は美友紀ちゃん休みだよ」

しばらく二人して仕事に向かっていたが、智史が思い出したように話題を振ってきた。思わず美友紀という言葉に体が一瞬ビクッとなりそうになった。昨日は俺の休みで顔を合わせることはなかったが、やはりあの日のことが頭を過ぎり、なるべく美友紀ちゃんと顔を合わせないようにと入り口付近に時折目を配っていた。

「べ、別に俺は何もしてねえからな」

面白いことを見つけた悪魔のように智史が俺を見てくる。その目のムカつくことこの上ない。

「お前、何かしたのか？」

ん？ と、智史の問いただすような目。その何かを含んだ目が俺を見透かしているようで気に入らない。

「う、うるせえな。悪いわりか」

「俺はただ美友紀ちゃん、今日はいつも通りに休みだと言っただけなんだけどなあ？」

チラツと智史の視線が出勤表へと行く。それを俺も辿ると、今日は美友紀ちゃんのいつもの休日だった。昨日の俺のように。

「……………鎌掛けやがったな、お前」

「何のことだ？ 墓穴を掘ったのはお前だろ？ 俺は報告をしてやっただけだぞ？」

わざとらしく白を切る智史に、してやられた感を感じて止まない俺が視線を強く送るが、それもはや意味を成してはいなかった。

「そうかそうか。お前も答えを出せる年頃になったかあ。俺は嬉しいぞ」

何様のつもりだか、智史はウンウンと一人で頷いている。悔しさがあるが、正直な所今日美由紀ちゃんと顔を合わせないで済むのは救いかもしれない。昨日の今日のようなことだから、顔を合わせてもどう会話をすれば良いのか分からない。俺自身が別のことに気を取られて、整理仕切れていなかったのも悪い。

「それは置いておけ、永遠にな。話を変えるようで悪いが、お前に話がある」

「おいおい、俺はそっちの趣味はないぞ。どうしてもって言うんなら考えてやらないこともないが？」

あくまで俺をからかいたいか。こいつにとっては今の俺はかっこのいじり甲斐のある餌なのだろう。いつもなら乗ってやっても良かったが、今はそんな時間も惜しい。俺は智史の話を無視して進めた。

「協力して欲しいことがある。隼人の事で、だ」

俺の申し出に智史の顔が変わった。冗談の通じない話題だからこそ、こいつも瞬時に空気を読んでくれる。

「何をすれば良いんだ？」

智史は、何のことだ？ などとは聞いてはこなかった。既にやる気満々と言った様子で要件を聞いてきた。

昨日俺の中で決心したこと。それは隼人の夢をその瞳に映し出させてやるためにしなければいけないことだ。それには乗り越えなければならぬことが多い。まず一つは隼人の外出許可を取ること。容易じゃない事は分かっている。医師や看護師、その他大勢の隼人の治療に携わる人間に話して、受け入れてもらい、認めてもらわなければならぬ。そして、俺の考えと相反する家族の愛を持つ隼人の両親の許諾が何よりも必要だ。それが取れなければ何の意味も成さないし、それまで築き上げてきたものが全て水の泡と言うものだ。そうなることを俺は望まない。だから、仲間を増やして行く必要がある。いや、仲間じゃなくても良い。懐柔さえ出来ればそれだけで良い。

だが、これだけでは叶わない。あくまでそれは一つの課題。もう一つの課題は飛行場にある。

「見学の許可を取りたいんだ。だから、協力してくれ」

仮に隼人の両親や病院関係者に承諾を得られたとしても、次の課題は隼人の見学の件だ。これから飛行場は通常業務の他にバードフライの訓練が多くなっていく。それを隼人には見せてやりたいが、時期が時期だけにそんな余裕がないのは分かっている。だが、時間がない今、そんなことを気にしている場合じゃない。だから何とかしてでも、バードフライの責任者である大浪総括長や藤沢上官、管制官それに社長にも許可が必要になるかもしれない。隼人のこともそうだが、こつちもなかなか険しい道な気がする。何だかんだで、悠の方が圧倒的に信頼があつて、どこか頼りがちな自分もいるが、悠はそこまでしてくれないだろう。あんなことを言っていたことだし、結局は俺がやらなさいといけないことだ。

「見学か？ また何でそんなことを？」

「前に話したろ？ 隼人の好きなこと」

智史にはここで働く奴では悠の他に唯一隼人の事を知っている奴だ。顔を合わせたことはないが、隼人の病状や思い描いている夢のことはほとんど知っている。

「あれか。それとこの関係は何だ？」

智史には雲に絵を描くことと、空が好きだということはいっているが、バードフライのような曲芸飛行が好きだとは言っていない。そのため智史には、飛行場のトップを説得することの関わりが分からないのだろう。

「隼人の夢のために、バードフライを見せたいんだ。と言うか見せる。だから、上官たちの許可が要る」

聞かれたから答えたのだが、智史は意外と冷静と言うか無関心と言ったような返事だった。今それはどうでも良いが、とにかく一人よりは二人だ。まずは手近なところからジワジワと引き込んで行くほうが、お堅い人間がトップを占めているここでは効果が期待できる。

「分かった。夢を届けるサンタになるのも悪くはないな」

「お前はトナカイだ。サンタは俺がなる」

こいつはバードフライの俺の代役だ。言わばソリと言う名の隼人の願いを引く機体の操縦手のトナカイだ。それを引く俺がサンタになってやる。

「お前がサンタなんて無理に決まってるんだろ。むしろサンタは雨宮のほうが相応しい」

「うるせえ。俺が思案したんだ。俺がサンタで何が悪い」

ひとまずは安心できた気分だ。無駄な言い合いもその結果と言えるだろう。

「引き受けたは良いが、どうするんだ？」

智史が具体案を俺に示せと言ってくる。考えが無いわけじゃないが、俺程度の考えでは浅はかなものだろう。藤沢上官にする大浪総括長にしる、顔を数回しか合わせていない社長やほとんど合うことのない管制官なんて、俺の考えの数歩先を読んでいるに違いない。だからこそ、手は一つだ。

「ぶち当たりにいく。唯その一つだ」

「お前は馬鹿か？」

俺の考えに智史が呆れた目を向けてくる。

「上官たちに下手な策をとつても、流されるのがオチだ。真正面から当たつていく方が俺たちらしいだろ？」

昔から、何かあれば後先考えずに上官に楯突いてきた。その度に一蹴されているが、ここはやはり俺たちらしさを出して行くほうが気持ちは伝わるはずだ。常識人であり、職人なのだから、余計なことをする方が無駄と言つものだろう。

「何の話をしている？ 私語よりも仕事せんか」

俺たちの会話にやたら低い年増の声が混じつてきた。その声に俺たちは背筋に冷や汗が流れた。

「お、お疲れ様です」

どうやら早朝の飛行が終わつて戻つてきたのだろう。いつの間に戻つてきたのか気づかなかつた。

「雑談とは随分と余裕があるな、お前たち」

小言を言いながら自分のデスクに腰を下ろす上官。新人の子がタイミング良くお茶を運んできて一息ついている。俺と智史は顔を見合わせて、思った。

《今しかない》

上官は俺たちに叱責したが、そこまで憤怒しているわけじゃない。こんなことはいつものことだ。滅多に他人を褒めるようなことを言わない分、そういう小さな叱責はここでは当たり前と捉えている。

「よし、行くか？」

「ああ」

俺と智史はおもむろに席を立つと、上官の前に立った。

「却下だ」

「えっ？」

「即決ですか……」

俺たちが上官の前に来ると同時に、こちらが口を開く前に棄却されてしまった。

「まだ、何も言つてませんが……」

「全部聞こえていた。仕事のことならともかく、下らん話ばかりしておつて。少しは仕事に誠意を見せんか。馬鹿もんが」

いつものような上官の一蹴叱責。いつもならそこで謝罪するが、今日は引かない。むしろ上官の言葉にムツと来た。

「お言葉ですが、下らない話ではありません。一人の子供の命が掛かってるんです」

まだそこまでの段階には至っていないが、実現に向けてはその言葉も間違いじゃない。

「話だけでも聞いていただけませんか？」

俺をフオローするように智史も頭を下げた。二人で頭を下げる姿に同僚や事務員たちが何事かと見てくる視線が感じられる。その視線が後押しするような効果を生み、上官もその場では強く言えなくなった秀困気に咳払いすると、俺と智史を空き会議室へ連れ立った。「話は聞いていた。だが、詳しくは知らん。事情を説明しろ」

三人だけの会議室。昼からは航空祭の打ち合わせに使われるが、今は広い部屋に三人だけ。事務所にいるよりも緊張感が並々じゃないほど漂っている。こういう場合は昔から好きじゃない。気分が滅入ると言えばその通りだし、無駄な緊張感でたまに足がすりそうになる。

「はい、実は」

俺が腕を骨折してから通院した中で出会った少年、高峰隼人。面会を重ねるうちに親しくなり、隼人の病気を知り、症状の重さも色々々個人的に情報収集して悠や隼人の母親からの話で大方の今の隼人の状態の察しはついた。だから今しかその時間がないということだがまだ何も相手方には承諾は得ていないし、許可が下りるかも分からないと言うことを包み隠すことなく話した。

智史も詳細を知っていたわけではないため、予想を大きく凌駕した事実言葉に言葉を失っていた。何事もなくその場にあるのは、ここへ来る途中に持ってきたコーヒーが、香ばしい香りと共にすぐに消えていく細く短い湯気を漂わせているだけだった。会議室の窓には切り

取られた絵画のように、滑走路と風を浴びて一斉に青々とした短草が波打つようにサヤサヤと靡く田舎の景色が見える。そこで昼寝をすればどれほど心地の良いものだろうかと思いつながら、静かな緊張感の漂う室内に視線を戻す。

「……………というわけです」

全てを話した後、何かを言ってくれろと思っていた智史もシヨックからなのか、それとも仏頂面で腰を下ろしたまま何かを熟考しているのか、一向に口を開く気配のない藤沢上官に恐れをなしているか何も言わなかった。こういう話をすれば、智史は自分の姪っ子のことを思い返したのはほぼ間違いないだろう。隼人が俺を慕ってくれているように、自分を慕ってくれた姪っ子。俺が入院している隼人に受けるその目の輝きよりも、智史のほづがより強いもの感じていたはず。他人から受けるよりも家族から受ける自分を思う思いは何よりも嬉しいものだ。智史なら分かってくれているはず。だが、それが上官に伝わるかは俺には想像がつかない。険しい顔のままコーヒーを嚙り、まるで嚙る音だけが俺の話に対する答えのように聞こえてしまう。非常に居心地が悪い。

「それで全部か？」

「そうですね……………」

不意に上官が口を開き、動揺したのか声が震えてしまった。

「畑山」

俺ではなく、智史を呼んだ。俺と同様に緊張からか、背筋が瞬間伸びた。

「お前はどう思うか？」

どうして俺には聞かないのか。そんな疑問が浮かぶが、お前は口を開くなと言われているような雰囲気にもまれてしまい、噤まざるを得なかった。

「奥田の話聞いてどう思うか？」

「俺は、健介の話には賛成です。今は航空祭のことなどで手が回らないことは承知です。ですが、一人の子供の夢のためにあるという

のなら、自分は協力を惜しみません」

智史の言葉に俺は安堵していた。

「そんな戯言はどうでも良い。模範解答に過ぎん」

だが、上官はそれを一蹴した。模範解答だと蔑んだ。正直、ここまで言われるとは思っていなかった。確かに智史も言う通り、今は航空祭まで一月とちよつとの時期にまで来ている。その中で俺の申し出は、ただでさえ人員不足で超過労働も強いらなければならぬ中でのことだ。上官には、そんな余興に付き合えるほどの時間を割くなら、職員の休養に当てるべきだと言いたいのだろう。少ない人員にも関わらず休みを取らせるのは、それだけこの仕事の責任と云うものは重たいということ。パイロットであるなら、飛行が入り次第呼び出しを受けることもあるが、飛行が無ければ暇と言うわけではない。その間に休むこともまた仕事の内。車を運転するのは訳が違う。誰にでも出来ないからこそ背負うものは様々で、その責任は一人だけが背負うものではない。一人の行動で全てが最悪へのシナリオを進んでしまう。そのため、全員が万端に調整して仕事に望まなければ甚大な事件や事故を引き起こしかねない。整備士などの作業員もまた、常に緊張の中での作業を強いられる。人員が少ない分仕事も増え、それに伴う個人個人の請け負うものは増える一方だ。だからこそ、しっかりと休養させ仕事への意欲を回復させる。それが出来ない者は必要とされることはない。ぶっちゃければ、今の俺はその後者的な存在だ。飛行が出来ない分、雑用だと嘆くが、そんなものは戯言だと思われぬ。

「それがお前の答えなら、さっさと仕事に戻れ」

腕を組み、俺たちをジッと険しい表情で見てる上官に息を呑む。少し視線をずらせば、日常の飛行場の光景が広がっている。その横でこうして張り詰めた空気を放つ部屋に閉じ込められるのは何故だろうと今更ながら思ってしまうそうになる。

「どういう、ことですか？」

自分の答えを否定されて智史が疑問の眼差しを上官に向ける。俺

は何故だか上官が智史の答えを否定した理由を分かったかもしれない。上官はパイロットとしての答えなら、智史の言うことには仏頂面でも頷いたかもしれない。だがそれを戯言だと言うのであれば、自分の気持ちを聞いたのかもしれない。俺が今経験していることは、智史も全くとは言わずとも既視感に近いものを実際に目の当たりにしたことがある。きっと上官もそれを踏まえた上での答えを聞くとしていられるかもしれない。

「あの日のお前は、今の奥田と同じ顔だ。もう一度聞く。お前はど
う思うか？」

智史が俺を見てくるが、別にアイコンタクトをしなくてもいい。あの日というのは、一昨年の航空祭。その日に起きた家族の悲劇。その時の顔が今の俺と同じだと言われ、自分の過去と現在の俺を見ているだけのようだ。その目は俺を見ているようで、俺の後を見ていた。

「俺は……俺は、それでも健介を手伝います。あのことは無関係とは言い切れません。俺もあの日は見てもらいたくて楽しみにしてました。そして今、見たいと言う子供がいる。その子は重病でそれすら容易には見ることが出来ません。健介の言う通り、俺もいつ見られるかも分からない状態なら、出来るうちに見せてやりたいです」

智史は、畑山智史として答えを言った。その答えに藤沢上官は唸るような小さな声を上げると、またコーヒを啜った。何も言わないから、言葉に出来ない緊張感とムカムカと言うべきか、ウズウズと言うべきか、自分でも良く分からない何かに堪えるのが必死だ。
「そうか」

どれくらい沈黙の時間があつたかはわからない。ここにいると時間の感覚が掴めない。ようやく上官が口を開いたと思ったら、それっきり何も言わず上官は席を立った。俺たちの横を通り過ぎ、俺たちがそれに視線を追わせると、そのまま会議室の扉へと歩いて行く。

「あ、あの……」

思わず声をかけた。ただ頷くだけで去られても釈然としないものが残るだけだ。否定するなら否定して、認めてくれるなら認めるとはつきり言われるものだとばかり思っていた俺たちは上官の不可解な行動に困惑するばかりだ。

「奥田、今のお前の味方は畑山と雨宮だけだ。以上」

それだけを言い残すと、上官は会議室を後にした。残された俺と智史は呆然とそれを見送っていた。上官が去ってからしばらく俺たちは人形のように不動のままだった。上官の言葉の意味がさっぱり分からない。ただの状況報告と言ってしまえば、それだけにしか聞こえなかった。

「………どういうことだ？」

智史が聞いてくるが、俺は数回瞬きをするだけで首を捻った。そんなものは俺が聞きたい。話を聞くだけ聞いて、問いて、去っていた。それだけで何を理解しろと言うのだ。賛否の判断を下されたとは思えない。悪く言えば曖昧にされただけにしか思えなかった。

「とりあえず、仕事、戻るか？」

「そうだな………」

二人して困惑したまま会議室を後にした。事務所に戻ると、先に戻った上官は何てこと無いように仕事に戻っていて、俺たちが戻ってくるなり仕事をしると、いつものように言うだけだった。ただ違うのは、その言葉は俺たちに向いていなかったと言うだけだった。

結局俺たちは釈然としないものを抱えたまま、午後まで仕事を続けた。昼食時に香田先輩も飛行から戻ってきて、三人揃って食堂で昼を取ることにした。

「お前ら、一体どうしたってんだ？ チャリンコ乗って飛んできた蝉でも食ったような顔しやがって」

先輩の例えは良く分からないが、とりあえずあの時のままの表情だと言うことなのだろう。

「実は、ですね」

智史が良いよな？ と俺を見る。上官の言葉も気に掛かるが、と

りあえずバードフライのリーダーも兼ねているこの人には、話はしておくべきかも知れない。そう思い智史に頷いた。智史が今は言わなくても良いような隼人の詳細まで先輩に話した。

「そんなことがあったのか。それで健介、日ごとにテンションが違ってたのか」

「ええ、まあ」

洗いざらい話したからには、先輩の言葉に頷くだけだろう。

「しつつかし、お前らなんも分かつちやいないぞ」

先輩は俺たちをあざ笑うように言った。

「何がですか？」

そんな俺たちに先輩は深いため息をついた。

「藤沢さんの言ったこと、覚えてるか？」

俺の味方は智史と悠だけだと言ったことだろうか。他にまともなことは何も言われていない。だが、それは曖昧にされただけじゃないか。賛成もされなければ反対もされなかった。その前には却下されたのだ。否定の方が大きいかもされない。

「健介の味方は智史と雨宮だけだと言ったんだろ？ それがどういうことが分からないのか？」

智史と顔を見合わせるが、傾げるだけだった。

「良いか？ ここのスタッフは人数が少ない分仕事はハードだ。そんな時にお前らが妙なことを言い出した。そして藤沢さんは、味方は三人だけだと言った。ちょっと頭を捻れば出てくるだろ、答えなんて」

先輩は、ちなみに俺はどっちでも良いんだけどな、と付け加えろと昼食の箸を進めた。

「智史でも分からないとなると、健介には分かんねえかもな」

その言葉は少々きつく感じたが、言い返すだけの答えが出ていないのも確かなこと。先輩の指摘は間違っではない。

「俺は焦らすのは好きじゃないから教えてやる。お前の申し出は否定してない。スタッフが忙しい中、それに付き合う時間を割くのは

大変なことだ。健常者ならともかく、病人でしかも重病の子供と来れば、仮にその子がここへ来られたとしても、色々と医療器具も運んでくる必要が出てくるだろう。そうなった時にこちらの対応も慎重にならざるを得ない。そうなれば一人二人の少人数だけじゃなく、ここで働くスタッフのほとんどにも何らかの影響が出る。誰も知らないまま事を進めるのはまず無理だ。全員が忙しくなる中で、それを受け入れる必要がある。そして、今はお前の味方は智史と悠だけ。ここまで言えば分かるだろう？」

「つまりは、スタッフに認めてもらってから出直して来い、と？」

智史が先輩の言葉を受けて整理した。それを聞いた先輩は大きく頷きながら丼飯をかきこんだ。

「じゃあ、まずはここのスタッフ全員の許可を取って来ないといけないのか」

上官らしい物言いだなと思いつつも、言葉の真意を理解したから、問題の大きさにも触れてしまう。時間の無い今、ここのスタッフの承認を得るために割かねばならない時間の多さは、仕事に完全に支障をきたしてしまうだろう。

「心配すんな。俺もやるんだ。空いた時間にすれば一週間もあれば大丈夫だろ？」

先輩の申し出は素直に嬉しい。だが、その一週間という時間。短いようで隼人の事を思えば長すぎるかも知れない。残された一つの光りを見るための、今の俺の望みを繋ぐ隼人の瞳。日に日に悪化する中、その影響は増していくばかりだ。ここ数日でその瞳もぼやけていると聞いたからには、長くない。その間に何とかして全ての障害を越えなければ、俺が隼人に約束したことは叶わない。手に掬った水は多くはない。徐々に零れていく。それが俺のタイムリミット。「だな。やるしかないからにはやるか」

「そうだな」

俺は物分りが良くはない。だから、これはただの我が儘。仕事に私情を挟むのは社会人としては失格だろう。腕が治ってからそれを

取り戻せれば今はそれで良いかもしれない。

「先輩と智史は空いた時間に頼みます。俺は仕事そっちのけでいかせてもらいますんで」

気持ちの変わらないうちに行動あるのみだ。悠長に食事を取っている暇はない。俺は行儀なんてものをそっちのけで一気に昼食をかき込んで席を立った。昼からは二人ともバードフライの訓練が入っている。その間に出来るだけのことはしておこう。明日は診察日だ。その時にも動かないといけない。

「目の前のことしか見えていないのは、治らん、あいつ」

「そうですね。ま、それがあいつらしいんじゃないですか？」

「馬鹿に付き合うのは気苦労が絶えんが、後輩の決心に先輩が付き合わん訳にはいかんだろう」

それを見送る二人は苦笑しつつもどこか楽しげにしていた。

「どうか、お願いしますっ」

事務所の一角は仕事の手が止まっている人間で時間が止まったような静けさが漂っていた。

「皆さんが多忙のことは承知の上です。ですが、一人の子供の夢を叶えてやりたいんですっ」

十数人ほどが常駐している事務所。そこにいる人間の視線は、突然頭を下げた一人の男に釘付けにされていた。仕事の依頼だろうか電話が鳴り、数回の呼び出し音の後我に戻った一人が小声で応対する以外は、突然のことに困惑を隠しきれていないスタッフたちの固まった顔と、仕事そっちのけで頭を下げたまま何度も何度も懇願する健介の姿があった。

「俺一人じゃダメなんです。皆さんの力を俺に貸してもらえませんか」

「皆、俺からも頼みたい。この馬鹿がここまで頭を下げるなんて滅多なことじゃないんだ。どうか、俺からもよろしく頼む」

入り口から、健介のほかに声が響いた。一斉にスタッフの視線が

そちらへ行き、また固まっていた。

「先輩……」

不意に聞こえた声に健介も反応を示して、意外な人物がいたことにスタッフ同様に健介も口が開いたままだった。健介よりも遙かに多くの人望を持つ香田。それが頭を下げていることに一同は動揺の表情を隠しきれないようで、お互いに顔を見合つてなにやら相談する声も混じっていた。バードフライのリーダーがそう言うのであれば、尚のことだった。

「お願いしますっ」

揺れ動くスタッフの心に追い討ちをかけるように健介の声が響き渡った。

「あ、あの、私は構いません。奥田パイの言う子供さんの夢なら、協力できることがあれば言うだけだから……」

健介の熱意なのか、香田の人望なのか、すぐに効果が現れた。普段からパイロットも仕事をしている場所だけに、その影響力というものは他の部署よりも圧倒的なものがある。一人の女性社員の言葉がきっかけになって、次々と声上がり、事務所のスタッフ全員から健介は許諾を得た。

「ありがとうございますっ」

困難なことだと思っていた健介にしてみれば、こつも簡単にいくものかと呆気にとられる部分もあったが、とりあえず最初の一步を無事に踏み出せたことの喜びが大きかった。

「先輩、ありがとうございます」

先ほどの收拾がついて、再び仕事に戻った事務所で、健介は香田に改めて頭を下げた。

「気にするな。これも先輩の見栄だ。後はお前で何とかしろ」

ポンと肩を叩くと香田は事務所に残っていたバードフライの面々を引き連れて事務所を後にした。

「……よし」

一人休憩室に向かった健介は、誰もいないことを確認すると、一

人でガッツポーズをしていた。幸先の良いスタートに健介は少々浮かれ気分だった。

「まだまだ時間はあるな。このままでいけば明日にはいけるかもしれないな」

まだ九分の一ほどに過ぎないが、少なくともスタッフの連携が取れている分、一人に納得してもらえれば、ロコミで徐々に広がりを見せてくれるかもしれない。あくまで可能性のことのため、最後には自分でいかなければならないことは分かっている。それでもないわけじゃないものに賭けるのも今は一つの方法。そんなことを思いつつ健介は再び歩き出した。

「藤沢」

「何だ？ 調整は終わったのか？」

「無論だ。それは良いとしてだな。少々小耳に挟んだんだが」

午後からヘリのメンテナンスのため、ドッグに入れられた藤沢のヘリの周りには数人のスタッフと、それを指揮する大浪の姿があった。

「言わんで良い。分かっとなる」

大浪がどこか面白そうな話をしたそうにしているが、藤沢はそれを無視すると、コクピットへ移動し、計器の調節に取り掛かった。

「そう言うな。お前の部下の話じゃないか。さっきウチの小童が言っとったぞ。小僧が何やら始めたらしいじゃないか」

ニヤニヤと皺に深みを増したほくそ笑みで大浪も機体に取り込んでくる。

「馬鹿のやることは知らん」

そんな大浪を他所に、藤沢は鬱陶しげに黙々と仕事をこなしていた。

「何やら、子供のためにフライを見せてやるとかだっとな。仕事そっちのけで走り回っているぞ」

「減給だな。あの馬鹿」

ふんつと鼻を鳴らしつつも、その表情は自分の言ったことを理解してくれたのだろうと安堵する顔だった。

「一体何を言っただんだ？」

「何も言つたらん。あいつが勝手にやつとるだけだ」

藤沢はそう言うが、大浪はその言葉にさらに皺を深くして近付いた。

「奥田は馬鹿だから気づいてないのかもしれんが、フライの訓練の見学は自由だ。いちいち走り回って全員の承諾なんぞ要らんはずだが、あいつはそんなことにも気が回らんほどに仕事を放置だ。お前が何か吹き込んだ以外に何がある？」

「全く、やかましい奴だな。奥田の覚悟を見てやるだけだ」

いつまでもからかうように聞いてくる大波に、痺れを切らしたのが藤沢は観念したように一部を話した。勝ち誇ったガキ大将のような大浪にはさすがの藤沢もため息をつくばかりだった。

「お前も人が悪いな」

「あいつは最近腑抜けている。今のあいつにはフライへの復帰はさせられんからな」

長い付き合いだからこそ、他人には話さないことも一度崩れてしまえば話してしまう。そんな間柄の二人には、口ではそんなことを言っただけ、それだけ後継者としての期待を背負わせている表れだということ、二人だけが分かっていることなのかもしれない。

「だが、仕事そつちのけにさせてまでさせてやることか？」

「所詮あいつはまだ小僧だ。仕事は復帰してしてから扱けば良い」

「それを言っただけでやれば良いだろうに」

「言えるか、俺の口から」

上司としての威厳とも言えるもの。それを部下に示すことがスタッフ一人一人の士気を高めることに繋がり、事故を未然に防ぐためにも必要以上の馴れ合いはしないように藤沢は努めていた。健介の申し出にも返事を出さなかったのはそのためだった。健介は他のパ

イロツトに比べてまだまだ至らない部分があり、バードフライでの訓練を積むことで精神的にも鍛えさせることを目的にメンバーに組み込んでいたが、その中での腕の骨折。たださえ己の心に左右されやすい健介には、そのショックで入社当時のような腑抜けになったと藤沢は思っていた。ここ最近の起伏の激しさの原因を知ったからには、自ら強く希望してきたことを己の責任でやり遂げるだけの覚悟があるかを見極めるための一つに試練として、助言をすることを避けた。

「相変わらずだな、お前は」

何年もそうして相棒的な存在として組んできた大浪には、もう少しアドバイスなどをしてもらいたいんじゃないかと苦笑するが、それは共に異なるやり方のため、諦めていた。

「人のやり方にケチをつけるな。これくらいがちょうど良いんだ」
それだけを言うと、藤沢はパイロットとして仕事人に戻り、大波のからかいてもそれまでとなり、二人はいつの間にか仕事に真剣さを取り戻していた。

「最後に一つ。お前は小僧のことはどうする？」

健介の処遇ではなく、健介が仕事を放り出してまで駆け回っている目的についてだろう。健介はこのスタッフ全員の承諾を得られれば叶うと思っっている。それをけしかけた本人としての心情を大浪は聞きたいのだろう。

「奥田が動かした結果が伴うなら、他に何を言えと？」

藤沢の答えに大浪は満足げに笑うと、近くで作業していた部下たちに招集をかけて、何かを話していた。機内で調整していた藤沢はその声を聞きながら微かに口の端が上がっていた。

「とりあえず、もう終わりだな」

健介が近くにあった時計に目を向けると、終業時間を過ぎていて、今日は半分ほどだったが、それでも予想を大きく上回る結果に満足して切り上げた。

「仕事、出来なかったな。やべえよな」

仕事との両立は出来ずとも、多少は仕事もこなせると思っていたが、スタッフがこの広い飛行場のあちこちに散らばって作業をしているため、一人一人に理由を話しているうちにあっという間に時間が来てしまったため、昼からは仕事が全くこなすことが出来なかった。分かっていても、事務所に戻る足取りが重い。事務所に戻って藤沢上官と顔を合わせたかと思ってしまう。いずれにせよ上官のお叱りを受けるのは避けられないのも分かっているが、仕事終わりに言われると結構引きずってしまう。

「この時間はいるよなあ……」

半ばやけになって事務所に戻ると、案の定上官がデスクで帰宅準備を始めていた。俺が所内に入ると、鷹の目のような眼光がこちらを向く。思わずおののきそうになるが、出来るだけ頭を低くして自分のデスクへ行くと、声が掛かった。

「奥田。お前、今日の分の仕事はどうした？」

聞かれたただけなのに、色々痛い。理由がはっきりしているだけに言い返す言葉が喉を通って来ない。

「私情を仕事に持ち込むなど言っているだろう」

「す、すみません……」

厳しい口調に縮こまるばかりだ。藤沢上官からすれば俺のしていることは甚だ許し難い事なのだろう。だが、俺だって上官が何も言ってくれないから、自分の思いを貫こうとしている。しかし、それを言ったところでその後のことは容易に想像がつく。言わぬが仏とということだな。

「さっさと仕事できるようにしろ」

「は、はいっ」

俺の横を静かに通り過ぎると、残っているスタッフから挨拶が一齐に上官に向けられ、それを受けながら上官は先に帰宅していった。こっぴどく叱られるのを覚悟していたが、いつもよりも六割減程のお叱りだったため、呆気に取られた。

「何呆けてるのよ。早く帰る支度しなさいよ」

俺がポカンとしてしていると、悠が事務所に来た。急かされ、流されるごとく帰宅準備をして俺と悠は仕事場を後にした。車内では久々にエオリアン・ハーブがかかり、そのテンポが今日の俺の走り回ったことを思い起こさせた。

「聞いたわよ。一人一人に隼人君のことを認めてもらっているんだって？」

「おかげで半分近くには何とか了承してもらったが、仕事にはなんなかった。藤沢さんにも叱られたし」

仕事中は上司であることを意味して上官をつけるが、仕事から解放されればさん付けで呼んでいる。本当は呼び捨てにしたい時もあるが、掴み所の無い人だから強く言えないし、俺がしていることは仕事としては無意味なことだから悪く言う資格も無い。

「香田さんや智史もフライの訓練前とかにウチのスタッフにも事情を話してたわよ」

俺があちこちを奔走している間も、初めに賛同してくれた二人もそれぞれ俺の見ていないところで、俺の目の届いていないところで協力してくれていたのか。感謝しきれない。

「私もそれなりに口コミに協力してたけど、大浪さんも色々話を通してくれているのよ」

「えっ？」

運転している悠の横顔は、田舎の少ない街灯や通り過ぎる車のヘッドライトに時折明るくなったり、暗くなったりを繰り返していた。「藤沢さんはどうか知らないけど、大波さんは結構協力してくれているのよ。多分整備のほとんどの承諾は得たと思って良いんじゃない」

整備を統括する大波さんの許諾を得られたというのであれば、悠の言う通り整備部の人間は否応なしに従っているのだろう。そうなれば八割は今日一日で認めてくれたことになる。残りは医務と食堂と管制、気象班くらいなものだ。それと美友紀ちゃん。管制以外は

きつと俺の顔も聞くだろうから、きつと協力してくれる。だが、管制となると、話は別だ。飛行場の指揮者的な立場で、俺も直接顔を合わせたことは少ない。離着陸等で声では知っていても、なかなか時間が合わないため、それ以外で話をすることがほとんど無い。私情を挟むことはご法度な部署だけに、俺の話を聞いてくれるかも分からない。明日には行くこうと思ってるが、バッグを固めて、一通りのやるべきことを先に済ませてからと考えている。

「そりゃ、助かるな。でも何で大浪さんがそんなことを？」

「さあ。でも、今日藤沢さんと何かを話していたのを後輩が聞いてたらしいの。その後大浪さんが招集かけて、先に知っていた子の話を交えて全員を説得してくれたらしいわ」

藤沢さんと一体何を話していたのか気にはなるが、今は結果重視だ。先輩以上の強力な助っ人が味方についてくれるのは願ってもいないことだ。その好意は素直に受け入れさせてもらおう。重たく感じていた俺の決意が心持ち軽くなった気分だ。

「ありがとな、悠」

「何が？」

俺が急に感謝の意を言うと、不思議そうな悠の横顔がそれを受け止めた。

「色々」と

そう、色々。本当に色々と悠には助けられている。それこそいくら感謝してもし足りないくらいだ。大浪さんがそんなことをしてくれたのも、自分のことをほとんど棚に上げない悠の無意識の言動や行動があるから、大浪さんは藤沢さんとの話の中で、そのきっかけを活かしてくれたに違いない。まあ俺の推測に過ぎないが。

「へんなの」

そんな俺の言葉を変なの、の一言で片付けられるのは少々心寂しい気もするが、今の俺はそれでも気分は晴れやかだ。三日後は隼人の入院する病院の関係者。飛行場での仲間が集ってきたが、向かうは敵陣。仲間は悠のサポートがあるかないかの微妙なところ。俺の

真価が試されるといってもおかしくはないかもしれない。今日はこの少々興奮している熱を冷まさないと次に次への糧としよう。

「痛みはどうですか？」

「もう慣れました。無理に動かさなければ大した痛みもありません」
診察日を向かえ、いつものように診察室でレントゲンを前に色々説明を受ける。徐々に回復してきているようで、最近是指を動かしてもなんてことはない。リハビリも始まり、ギプスも骨折箇所だけの固定バンドに変えられることになった。俺としては一月ほどの長い生活がようやく終わりを告げるだけあって、安堵するものがある。

「ギプス、取れたの？」

意外そうに俺が診察を終えると悠が左腕に視線を向けた。一皮剥けた気分だが、もうしばらくは時間が掛かりそうだ。右腕との太さは明らかかなほど差がついている。骨折当初は上手く使えなかったペンや箸も、いつしかだいたい慣れてきて、まだ下手だが、昔よりは上手くなったと思っている。

「ああ、とりあえず楽になった」

包帯で腕全体を固定せずに済むのは生活への支障も随分と軽くなる。車の運転が出来るのはまだかかりそうだから、結果としては悠の世話に甘えるかもしれないが、手伝えることは増えていくだろう。俺たちは診察を終え、まだ少しばかり時間があるためとりあえず、隼人のことを知らせておく必要があると思いい小児病棟へと足を向けた。

「話すの？」

悠が隣に並びながら視線は病棟の子供たちを向いている。朝から元気な子達の話し声や医師たちと何か話している母親など横丁的な雰囲気もどこかする中を俺たちは探していた。

「おや、あなたたちは隼人君の……」

ちようどいいタイミングで隼人の主治医がいた。俺たちは挨拶を

済ませ、時間もないことなので詳しい話は次の事とし、一通りの事情だけを話すことにした。

「少しお時間を頂いても宜しいでしょうか？」

悠が医師に言つと、一つ返事でついてきてくれた。廊下で話すよりはマシと思い、待合所のベンチに腰を下ろした。

「それで、僕に話というのは？」

「はい、隼人君のことなんですが」

隼人のことを口にするると穏やかな顔だった医師からその表情が消えた。

「私たち、バードフライ飛行場で働いているんです。私は整備士で、こっちはパイロットをしているんです」

悠が俺たちのことを話すと、興味深そうな目を向けてきた。

「それで、一つお願いがあつて話を聞いてもらいたいのですが」

俺が何を言いたいのか大方の予想はついているようで、腕を組んで小さく頷いていた。

「そのことなら、隼人君から直接聞きました。あなたたちがそうだったんですね」

隼人から話を聞いているのであれば、話は早い。簡単に言うだけのつもりだったが核心をつけるだけの時間は割けそうだ。

「はい。ぜひ隼人に俺たちの飛行を見せたいんです。難しいのは分かっています。でも今しかないんです」

お願いします、と頭を下げた。俺の隣で悠も同じように頭を下げたよつで、悠の長い髪が俺の横目にしなやかに垂れた。

「お二人とも、頭を上げてください」

俺たちに苦笑しつつ自分も頭を低くして俺たちの頭を上げさせた。「お二人の申し出は、僕としても考えている段階です。僕個人としては隼人君の夢を叶えさせたいと思う気はあります。ですが、今現在の隼人君の様子は起き上がることもままならない状態。治験からの連絡もまた来ていない今、そんな状態で外出なんて医師としてはもつてのほかなんです」

やはり、医師の答えはNOだった。分かっていたこととは言え、次の言葉が、なかなか口から出てこない。

「どうしても、無理なのでしょうか？」

悠が珍しく引き下がらなかつた。いつもならあっさり諦め次へ気持ち切り替えるというのに。まるで昔の俺のように。

「今の隼人君の状態では、とてもじゃないがここから出すわけにはいかないです。腫瘍が広く転移しているから化学療法を主にしているんですが、化学療法というものには大きな副作用があるんです」

隼人は今、ほぼ全身への転移が確認され、抗がん剤治療に伴う様々な副作用の影響と転移に伴う苦痛に絶えず苦しめられている。俺たちが顔を合わせる度にそんなことを嘆いたり、助けを請うような仕草や声を漏らすのを聞いたことが無い。いつも顔を合わせるたびに聞くことは、ここ最近では俺や悠の仕事のことや、俺たちが贈った絵本がもし本当にあつたとしたら、どんな願いを叶えてもらうかなど、常に隼人の口から出てくる言葉は明るい未来を見ている希望に満ちたものだった。その一方で、家族や自分の中に堪えている神経芽細胞腫という病と闘うことに伴う苦しみや辛さを言葉にせずとも感じ取れるくらいに弱くなっているのだろう。だから、尽くす手がある限り、母親は家族として我が子を再び陽の光に満ちた世界で笑わせるために、出来ることは何でもしようと考えている。それに対抗するように今、俺たちは隼人に大きな負担を強いるようなことを懇願している。それを中立的な立場として判断しなければならぬ医師としては、俺たちに肩入れするというものは、お門違いというものだろう。

「お二人の心中は察します。隼人君の目が見えている間でないとも意味がないと仰ることも」

「だったらっ……」

「治療法がある限り、僕たちは出来る限りのことをします」

頑なな意思を貫く前に、俺は言葉を繋げなかつた。

「治療法がある限りは、隼人君の唯一の空に絵を描くという夢を諦

めさせて、治験の結果が来るまでは今のままの治療を続け、腫瘍の影響で失明をしても次の夢を抱き直せと言うんですか？」

そんな俺を差し置いて行くように、悠が医師の口調に引けを取らない言葉でぶつかりに行った。あまり感情を出すような奴じゃないから、そこまで食い下がろうとする悠の様子に開いた口が塞がらないと言うか、神々しさのようなものを感じていた。

「治る可能性がある中で、それを無碍にするようなことを家族や隼人君が思うと思いますか？」

冷静な言葉に、悠が悔しそうに微かに表情を濁らせた。

「少なくとも隼人君はそうは思わないのではないのでしょうか？ 確かに先生やご家族の言うことは私には分かります。納得も出来ませんが、隼人君にとってはたった一つの夢なんです。子供は大人と違って、まだ多くのことを知りません。大人にとって小さな挫折でも、子供には受け止めきれないものもあります。隼人君がたった一つだけの夢を温めているのは、自分は治ると強く思っているからです。片方の目が見えない今、口に出さなくても隼人君は大きな不安を感じているのではないのでしょうか？ ずっと入院を続けてきて、隼人君にはここで過ごすことが当たり前になっているはずですが。その中で見つけた一つの夢を見るための目を失うことの辛さを表に出さないのではなく、出せないのではないのでしょうか？」

悠の言葉に特に何かを言い返すでもなく、ただ聞き入れているだけの医師。悠もかつて隼人ほどではなくとも、似たような経験をしたからその立場から言っている。そして医師も小児科に勤務しているから、子供のことに關してはプロだ。ほぼ毎日様々な子供の心身を把握している。だから、悠の言葉を否定するでもなく、賛同するでもなく、客観的な立場として受け止めているのだらう。その両者の間に入ることの出来ない俺はあまりにも無力なのだと、悠の言葉と医師の態度から否応なしに感じさせられている。

「隼人君は恐らく、目が見えなくなっただと考えていないはずですが。目が悪くなっただと今は思うように努めているのではないのでしょうか？」

「？」

「とうとう？」

医師が続きを促すように短く言葉を挟んでくる。

「隼人君は同室の子をいつも気遣っています。隣の子の足のことや他の子のことにいつも声をかけています。それは単に隼人君が気を紛らわすためではなく、本心からそう言っているようにしか見えません。それだけ隼人君は自分のことよりも他の子のことを気にしている証拠だと私は思いました。自分の目はただ悪くなっただけで、良くなると思っているから、ということではないでしょうか？」

ここ数日、俺は母親とのこともあり、隼人の前に顔を見せていなかったが、悠は毎日顔を出していた。だから、俺の知らないことも色々と分かっているのだろう。

「自分の方が辛い状況にあるのに、症状の軽い他の子を気遣い、励ましていました。他の子はそれを理解しているからか、懸命に頑張っている隼人君の姿を見て、自分を受け止め、強く、優しくなれています」

医師も悠の言葉に自分の見てきた日常を思い浮かべているのか、静かに何度も頷く仕草をしていた。

「そんな隼人君が、たった一つだけ思い描いている夢を叶えてあげることが、どうしても無理なのでしょうか？」

泣き落とし作戦のような悠の言葉に、医師も揺らいでいるように見えた。俺よりも明らかに説得力のある言葉だから、俺も何も言えなかった。

「確かに、あなたの言うことは分かりますよ。僕も無駄に子供を見ているわけじゃないですからね。でも、助かる命を危機に晒すことは医師として見過ごすことは出来ないんです」

医師の口調が変わった気がする。一人の人間として俺たちを認めてくれたような、納得できる共感できるものを感じたから、それに真正面から向き合おうとしてくれているようだ。

「それじゃあ、治療法がなくなったらどうするんですか？」

今までただ聞くだけだったが、二人の話を聞いてみると、一つ疑問が浮かんだ。隼人の目は日に日に悪化の一途を辿る。だがそれは目だけではない。俺は詳しくは知らないから分からないが、少なくとも転移箇所は悪化し、さらに広範囲へと転移が進んでいるということくらい分からないわけではない。二人の話を聞いてみると、隼人の治療はどうやら治験にかけているようにしか聞こえない。それがもしダメだというのであれば、隼人はどうなるのだろうか。考えたくない答えが俺の中で問いとして浮かんでくる。

俺の言葉に医師と悠の表情が変わった。聞いてはいけないことだったのだろうか。

「隼人の病気はあちこちに転移しているんですよね？ だから抗がん剤での治療をして、副作用に隼人は苦しんでいる。治る可能性があるからって先ほど言いましたが、治らない可能性もあるということですよ？ そうなれば……」

それ以上俺の口から言いたくなく、切った。自分で聞いておきながら、その問いはあまりにも簡単だった。施す術がないということは、その先にあるのは 死。

聞きたくもなければ、言いたくもない現実。自分がいつ死ぬかも分からない中での、友人のあまりにも近い死への事態に、時間の流れの速さというものをひしひしと感じざるを得ない。

「そうですね。その通りです。治験からの結果次第ではここでの治療はもうなくなるでしょう。そうなれば、隼人君は半年も生きられないでしょう」

さらりと言った医師の言葉は、俺たちにはあまりにも衝撃的な言葉を含んでいた。俺も悠も息を呑んでしまった。治験次第で隼人の命はそこまで危うくなるのか。まだ十年という時間も過ぎたことのない隼人が、来年を向かえることすらも難しい段階だということは、予想以上に俺たちの心を揺らがせる風を吹かせた。だということなら、今隼人に施されている治療というのは、ただ答えを待つために行っているだけなのではないのだろうか。延命治療とさして変わり

ないのでは？ と俺の中に嫌な考えが浮かんでくる。

「そんなっ……」

悠の表情が今日一番の変化を見せている。血の気が引いたような俺が今まで見たことのない顔だ。こんな顔もするのかと言うことよりも、そんな顔しか出来ない現実に俺も同じ顔をしているかもしれないと思うほうが先に来た。

「でも、無駄じゃないんです。無い可能性に賭けるような綱渡りは僕はしません」

その言葉は聞こえているのかいないのか、よく分からない。聞こえていても受けたショックで耳から入ってそのまま出て行っているようだ。

「もしものことは、考えていないわけじゃないです。それは隼人君のご両親も既に知っています。その上で今隼人君には出来る限りのことをしています。だから、今はお二人の申し出に頷くことは出来ない。私だけでは判断することは出来ませんから」

結局、俺たちの言葉は医師には通じることは無かった。聞き入れてもらえても、やはり隼人の両親という俺たちでは超えることのない壁がある。俺はあまりにもその壁を軽視していたようだ。自分が正しいと思い込み、隼人の母親に対して憤りを感じていたが、それは間違いだったのだと改めて認識した。

「今はまだ隼人君には治療で日によつての体調は異なりますが、元気な方なんです。だから僕たちもその笑顔を消さないためにも尽力しなければならぬ」

医師の言葉が重たく、俺が意気揚々と考えていたことを、ふりだしよりも前に引き戻すかのように打ち消した。

医師との話を切り上げ、仕事へ向かうため病院を後にする車内は静かにエオリアン・ハープがかかっていた。以前悠に聞いたことが今になってまた頭に戻ってきた。エオリアン・ハープと言う曲は、嵐の中で笛を吹き、嵐が遠ざかるのを待っているということ表現していると言った。それが隼人と重なっているような気がする。嵐

という隼人を蝕む神経芽細胞腫。その中で隼人は笛を吹いて嵐が過ぎるのを待つように夢を抱き、自分よりも他人の気持ちに励みを与えている。隼人は今まさにその嵐の中にいる。この曲を聞いていると、曲の終わりには嵐が晴れるのだろうか、今の俺にはその終わりが隼人の回復と言うよりは、最期に思えて仕方がない。この曲が続いている限り嵐は吹き続ける。俺はそれが隼人だとすると、本来の意味合い通りに回復を望むが、内心では終わり無く笛を吹き続けて欲しいと思ってしまうのは何故だろうか。

「やっぱり簡単じゃなかったな」

「そうね。分かっていたとは言え、シヨックはシヨックね」

悠の説得はその場では通じることは無かったが、少なくとも医師に届いたものはあった。俺たちが帰る際、意味深に一言だけ呟くように言った。

『メイク・ア・ウィツシュと言うボランティア団体を知っているかい？』

俺と悠は知らない団体名だった。それが一体なんだと言うのだろうか。そんな話を車内でしていた。

「MAKE A WISH。願い事をするってことよね？」

「だな。でもそんなの聞いたことが無いな。お前はあるか？」

悠は小さく首を振っていた。その団体が一体何なのか。何故俺たちにそんなことを言ったのか。分からない。

飛行場に近づくにつれて、隼人の新たな情報に動揺してしまったが、ここで揺れ動いているだけでは俺の決意は意味がない。壁にぶち当たることを覚悟の上で動いたんだ。これで終わりじゃない。まだまだ物語には続きを作っていける。それが俺の物語にもなる。もう挫折で揺らいでいる暇が無いんだ。ごときで諦めるわけにはいかない。俺には仲間がいる。それを裏切って終わらせるなんて、男としての名が廃るってもんだ。

「……よしっ」

車内にパチンと甲高い皮膚に衝撃が走る音がした。何事かと横目

を向ける悠の視界に、次第に赤みを増していく健介の頬が見えた。

「何してるのよ？」

「気合を入れなおしただけだ」

左手では力が入らないから、右手で頬を打った。ジンと鈍い痛みが次第に襲ってくる。余計な思いを吹き飛ばしてくれると信じて、意識を仕事に向け直した。

「今日もやるわけ？」

数日前に門前払いをした奴らのいる管制塔が見える。パイロットだからと簡単には中へ入れてもらえず、門前払い所か、門前に踏み込むことすらさせてもらえなかった。その間にも先輩や智史たちの協力の甲斐あって、バードフライ飛行場で隼人のことを知らないどころか認めてもらえていないのは、あの管制塔で働く職員だけで、残りは協力的で舞台は整いつつあった。後はステージと主役の登場を待つばかりの段階まで来ることが出来た。ここで止めるわけにはいかない。俺を認めてくれる人がいるから。俺を叱り飛ばしてくれる人がいるから。俺を憧れだと思ってくれる人がいるのだから。

「当然だ。土下座だろうが何だろうがやってやるさ」

「頑張りなさいよ」

車を降り、いつものように悠と別れた。悠はまだ隼人のことで少々引きずっているが、無理はしないだろう。俺が頑張れるのだから、これまで支えてきた分の疲れをその間に癒してくれば良い。常に頑張る必要はない。あの場で、あれだけ医師の心を揺れ動かせたのは俺からすれば勲章ものだ。次は俺が格好をつけさせてもらおう。支えられてばかりいるのも情けないしな。

事務所へ行くと、俺は真つ先にパソコンを開いた。今日に限って俺の周りに集まってくる人がいない。皆仕事を今のうちに片付けてくれているのかもしれない。

「これが」

俺がネットを開き、キーボードを叩くとサイトがヒットした。メイク・ア・ウィッシュと英語表記の題の下に子供の写真がある。警

察官の制服に身を包んだ少年だ。団体の意義は、名前の通り、願い事をすると言うことらしい。ボランティア団体としてアメリカで発足し、約千人もの子供の夢を叶えてきたと書かれている。子供たちに勇気を与え、社会貢献の場を提供し、難病と闘う三歳から十八歳未満の子供たちの夢を叶えることを目的に設立されたらしい。

「そういうことか」

先ほど医師の言っていた言葉。それは俺たちが隼人に対して思っていることと同じじゃないか。しかも俺たちは言ってしまうと素人だが、この団体はそれに関してのプロと言ったところじゃないか。読み進める中で、「警察官になりたい」「遊園地に行きたい」「野生のイルカと泳ぎたい」などの夢を叶える手伝いをしてきたと実績も載せられている。だが、俺たちと同じようで違うのだとも思った。俺たちは隼人に空に描くという夢を実際に叶えてやるのが出来ないが、それに近いものを感じさせてやりたいと思っているが、この団体は子供たちの夢を叶えてあげるのではなく、夢を叶えるのに必要な様々な手配や配慮をするというものだった。実際に叶えるのは本人。それを行う方法も書かれていた。俺たちは団体でもなんでもない個人だ。だから、団体のような力はない。門前払いも仕方のないことで片付けられてしまうこともある。

「参考にはなるか」

色々と見ていくと、その手段方法は違えど、共通するのは同じだろう。子供の夢。難病に苦しむ中で見せる夢を語る子供の目の輝きの眩しさ。それを失わせたくないという想いがあるから、団体は発足したのだろうし、俺たちも動いている。

「でも、どうしてこんなことを言ったんだ……?」

そこまでは分かったが、そこでまた一つの疑問が浮かんでくる。何故俺たちにあの医師はこのことを言ったのだろうか。参考になるならという理由でなら、特に言う必要は無かったはず。初めから否定してこのことを言えば良いだけのことじゃないか。

「分からないなあ」

「何がだ？」

俺の肩に手を置き、智史がパソコンを覗いてくる。

「何か用か？」

「お前、何険しい顔してんだ？　んなんじゃ誰も寄って来ねえぞ」

智史に言われて周囲を見渡すと、何人か目が合う。向こうからどこか申し訳無さそうに頭を下げて挨拶してくる。つられるように俺も頭を下げる。智史が言う通りなのか、俺はそんなに気迫があったのだろうか。そんなつもりは無かったんだが。ただ気合を入れていただけだが、それが不味かったみたいだな。

「そんな顔をして、何見てたんだよ？」

俺は智史に見られる前に接続を切った。待ち受けにしているバードフライの写真がデスクトップ画面に映し出され、智史はつまらなそうに俺の肩から手を離して自分のデスクに戻った。

「ま、良いけどよ。それよか、この前行ってきたんだろ？　結果は？」

「アウトだ。ただ悠が色々と言ってくれたから、頑なってわけじゃなかったな」

結果としては敗北だな。食い下がった結果が惜敗と言ったところだろうか。所詮は言い訳に過ぎないのだが。

「躓かないですんなりって訳にはいかねえだろ」

分かっていたような口ぶり。それは俺だっただけで分かっていたさ。それでもぶつかっていかないと壁は越えられないんだ。

「それもそうだが、今度はこっちだ」

視線を向けるのは管制塔のある方向。壁の向こうに今のところ全く聞き入れてもらえない難攻不落の城がある。つぎはこっちだ。問題の後の問題は始める前から疲れを感じてしまう。

「手伝えないぞ」

「分かってる。俺一人で十分だ」

智史は通常業務のほかに帰航の後にバードフライも入っている。

多忙極まりないのは人員不足の深刻さを表している。それもあがるが、

こいつにも三割近くの活躍をしてもらったんだ。これ以上仕事に支障をきたさせるわけにもいくまい。

「美友紀ちゃんには話したのか？」

「とつくに」

美友紀ちゃんは、一昨日話した時に同僚の子から話しが伝わっていたようで、あっさりと認めてくれた。応援するとも言ってくれたが、その時にはほとんどの職員からの承諾は受けていたことは黙っておいた。

「さてと、行ってきますか」

「頑張れよ」

俺は重い腰を上げると、深呼吸をして事務所を後にした。智史の呑気な見送りを受けながら。悩んでいても答えが出るわけじゃない。答えは分かっている。この二日同じだったのだから、一日で覆るよなことなんて

「そこにも座れ」

「は、はい」

通されたのは、管制室の一階下の休憩室。と言ってもパイプ椅子と簡易長テーブルが置かれて、茶菓子などが置いてあるだけの簡単なインテリアがあるだけの部屋。元々は見学者用の空きスペースとして解放していたが、いつの間にか休憩室のようになっていた。

「コーヒーで良いか？」

「はい、すみません」

ちょこん。そんな音が似合いそうなくらい俺は椅子に腰を下ろしている。この上では管制塔員が神経を研ぎ澄ませて、この辺り一体の空の監視及び、飛行場の運営に当たっている。こここの飛行場の心臓部だ。いや、脳とでも言ったほうがしっくり来るか。その仕事場の下で俺は目の前でコーヒーを入れているのを見ている。

「ほれ」

「ありがとうございます」

「それで、話っているのは何だ？」

どつしりと威厳たつぷりに俺の前に腰を下ろすのは、管制塔を指揮するお方、小野原管制官。藤沢上官と大浪整備統括長と合わせて飛行場の三大御所だ。

「はい、実は」

俺の話に口を挟むことなく耳を傾けている。俺は隼人のことを話した。医師とのことは口にはしなかったが。

「それで他の部署は話を通ったのか？」

「畑山や香田先輩のおかげで」

そうか、と渋い声で小さく言うと、考えるようにだんまりになった。数日前にも似たような状況を味わった気がする。

「それで、その隼人という子供の外出は、病院側からの承諾は出ているのか？」

いきなり確信を突かれた。答えないわけにはいかないだろう。

「いえ、まだ取れていません」

「その上で確証はあるのか？」

「正直なところ、可能性は低いです。ですが、やるだけです」

呆れたようなため息が鼻から漏れた。口から出されるよりはマシだった。

「昨日、藤沢と大浪が俺に話を聞いてやれと言ってきた。その覚悟を見てやれとな」

「上官たちが、ですか……」

意外な人たちの助力に、当惑してしまう。藤沢上官までもが手を貸してくれるとは思いましなかった。あんなに俺を一蹴してきた人がまさか、と思えばかりだった。

「お前はそこまでして、その子供が喜ぶと思うか？ お前がしてやることで、その子供の何かを変えてやれるだけの意味はあるのか？」

唐突とも取れる俺の話とは無関係な問いに拍子抜けしてしまうが、俺を捉えるその目は真剣だった。その目に応えるには俺も同じ目をしなければ意味がないだろう。

「少なくとも、そう思っています。病室からしか見ることの出来ない

い夢を、肌で感じることで、きつと今以上にその目に宿るものに輝きが増すと思っています」

我ながらクサイ言葉だと思っが、偽りはない。隼人にしてやれるだけのことをしてやるのが出来れば、隼人が思い描いてきたことの夢が壊れる前に、花を咲かせることが出来るかもしれない。この世界に芽を出したその命が、花を咲かせること無く散っていくのは見たくはない。悠長に生きてきた俺よりも、遙かに短い中で凝縮された生き方をしている子供の夢を叶えてやれることが出来ずに、俺が操縦桿を握ることなんて今は出来ない。隼人と知り合えたから、俺はこれまで俺が目指してきたものを思い出すことが出来たのだ。

「そこまで言うのであれば、その結果を持って来い。そうすれば考えてやる」

それだけを言うと、小野原管制官は席を立ち、俺の前から去って行った。俺はその後姿に声をかけずにはいられなかった。

「あ、あのっ。それは認めていただけるということですか？」
「結果を持って来いと言ったままだ。それ以上でもそれ以下でもない。パイロットなら限界を決めるな。やれることに対して、挫折しようが、何をしようがそこで自分の限界を作るな。やれることはまだあるという考えを持って」

言い終わると同時に再びその歩みが俺から遠ざかる。

「は、はい。あ、ありがとうございますっ」

俺は慌てて立ち上がり、思いつきり頭を下げた。ふん、と鼻で笑う声が出た。

「お前は何故いつもその覚悟を初めから見せようとしんない？ 娘にもそれくらいの覚悟を見せんか。全く。美友紀も美友紀だ。どうしてこんな男を」

「・・・へっ？」

俺が顔を上げると既にその姿はどこにも無かった。階段を上がる音が響いてくるだけだった。それはそうとして、最後に何を言われた？ 何か妙なことを言われた気がする。美友紀がどうのこうのと。

嬉しさ半分に、背筋に感じる冷たい何かを半分感じていた。

「・・・・・・・・えーっと、どういうことだ？」

誰もいない室内に俺の問いだけが残された。

事務所に頭に『？』を浮かべながら戻ると、先輩も業務から戻ってきたのかデスクで午後からの訓練に備えて談笑に華を咲かせていた。

「健介、どうだった？」

智史は業務で飛行に行ったようで、その姿はないが、話題は先輩に引き継がれたようだ。

「とりあえず、仮ということでも許可は出ました」

後は俺次第と言うことなのだが、まずは一安心と言っても過言ではないだろう。

「・・・・・・・・先輩？」

俺の言葉を受けて、先輩が信じられない表情で俺を見てくる。他にも話が聞こえたスタッフが同じような表情を浮かべている。俺、何か変なことでも言ったのだろうか。そんなつもりは全く無いのだが。

「お前、本当にあの人が許可下りたのか？」

「はい、そうですけど？」

先輩の言っていることが分からない。何をそこまで驚くのだろうか。

「奥田さん、おはようございます」

美友紀ちゃんが所内にやってきた。すると先輩の目が美友紀ちゃんに向いた。

「おはよう、美友紀ちゃん」

あの日以来顔を合わせたら気まずいかと思っていたが、美友紀ちゃんはいつも通りで拍子抜けしてしまった。美友紀ちゃんは結局いつもと変わらず、俺に色々と今までのようにしてくれている。ただ違うのは、無理をして自分を前に押すようなことをしなくなった。一生懸命になつて俺に声をかけるのではなく、余計な力が抜けたよ

うで、俺としては以前よりも美友紀ちゃんを取り巻く雰囲気ですつきりと綺麗になったように思う。だから、俺も自然と接することが出来るようになった。ただ、それが時折辛さを隠す涙を堪えている時があるように見えることもあるが、俺から声をかけるわけにはいかなかった。

「どうかしたんですか？」

「いや、隼人のことを小野原管制官に話して、何とか許してもらえたんだけど、先輩がそれ聞いてこうなったんだ」

「お父さんに、ですか？」

「・・・・・・は？」

美友紀ちゃんの口から妙なことが聞こえた。それを聞いて先輩が頷いた。

「奥田さん、お父さんを説得するなんて凄いですね」

美友紀ちゃんも驚いた顔をしていた。その一方で俺は嫌な汗が湧き出してくるのを感じた。お父さんって今聞こえた。はつきりと。先輩を見れば、あの人にまともに取り入ることが出来たなんて、と俺を妙な目で見ている。

「み、美友紀ちゃん。もしかして、お父さんって、あのお方？」

俺たち飛行場職員の中で、小野原管制官は藤沢上官以上にお堅い人で知られ、あの人に反抗することが出来るのは、上官たち以上の人間の限られた人間だけと恐れられている。しかもどうやら俺以外は既知の事実らしい。

「はい、そうですよ。普段からすごい頑固なんですよ。それを説得するなんてやつぱり奥田さんは凄いです」

やつべえ、俺。今更になって何も知らなかったとは言え、物凄い人にぶつかりに行つてたんじゃないか。しかも美友紀ちゃんのことともあつたから、去り際に少々ドスの聞いた声を言い残して行つたんじゃない。

「健介。お前度胸あるな。俺でもあの方は苦手だつてのに」

嫌な汗が心の中を流れていく。先輩すら恐れをなしている人なの

に。美友紀ちゃんは自分の父親だから気にした様子はないが、お父上様はそうじゃないだろう。あの時殴られなかったのは奇蹟かもしれない。先輩の視線と美友紀ちゃんの嬉しそうな表情に、俺は乾いた笑いを浮かべるしか出来なかった。

「はぁ……」

今日一日は飛んだ災難日だった。皆の協力の甲斐もあって、私情の仕事は一段落つくことができ、藤沢上官にネチネチと小言を言われながら、ここ数日溜まっていた仕事を少々片付け、昼食時に今日に限って小野原管制官と美友紀ちゃんと出くわして、冷や汗な昼食をとり、精神的疲労の蓄積が通常の何割増だったことか。

「ご愁傷様ね」

どこで話を耳にしたのか、悠にも今日一日のことが知られていて、俺の気苦労を笑って流してくれやがった。こっちとしては今日一日で様々なことを知り、様々なことに心を揺るがされたと言うのに。

「エオリアン・ハープ掛けてくれ」

苦笑しつつも悠はラジオを切り替えてくれた。疲れた心には流水のごとくしなやかな音色が包み込んでくれる、シヨパンの曲が心地良かった。明日からまた仕事に奔走するのかを思うと、このまま家に着かなければと思ってしまった。

「頑張ったわね、健介」

いつの間にかまどろみに襲われ、悠が何かを言ったようだが、聞き取ることが出来なかった。

数日後、飛行場が休場日を迎え、俺と悠は久々にいつもより二時間ほど遅起床したのち、隼人の元へ二人して向かった。ここ最近俺が診察を受けている間に悠が見舞いに行くというのが日常になっていたため、悠と二人で行くのは久しぶりだった。悠はその短い間に医師に話したことを隼人の母親を担当しているケースワーカーに相談していたようで、病院に着くと、いくつか言葉を交わしていた。「そのことでなんですが、もしかしたらお二人の申し出が通るかも

しれないんですよ」

ケースワーカーの女性の言葉に、俺たちは不意を打たれたように止まった。悠の甲斐もあって徐々にではあったが、俺たちの申し出の話は隼人を支える人たちの耳に届くようになっていた。まだ味方は俺たちの相談に乗ってくれるこの女性だけだが、悠はそれでも孤軍奮闘していた。俺はと言えば、情けないことに今日まで小児病棟に足を踏み入れることが出来ず、悠に任せっきりにしていた。心機一転したはずなのだが、俺の認識が甘かったことを知って以来、合わせる顔が無いと駄々を捏ねていた。時間がないというのに。今日は悠がサポートしてくれるからと、足を踏み入れた。久しぶりに目にする病棟内は、ほとんど変わらないような光景が繰り広げられている。俺の記憶と相違するのは、昔はこの喧騒の中に他の子たちや医師たちを励ます隼人の姿があったが、今はそこにその笑顔はなかった。

「詳しくは私の口から言うわけにはいかないでしょうから、お見舞いをしてあげて」

そう言われ、俺たちは隼人の病室へ向かった。室内は俺が知っている光景が広がっていた。難病で苦しみながらも共に励ましあう、共に共感できるだけの絆が生まれた子供たちが笑ったり、治療に泣いたりする光景があった。俺が知っている日常がそこにあつて微笑ましい反面、ここに通うようになってもうすぐ二ヶ月、変わることの無い現実に必要なさを覚えた。

「久しぶり、隼人。どうだ調子は？」

「おはよう、隼人君」

「あ、兄ちゃん、お姉ちゃん」

隼人は横になったまま視線だけを俺たちに向けてきた。その顔には呼吸器が装着されている。俺の内心はその隼人の様子に愕然としていたが、表情に出すわけにはいかなかった。子供は大人の顔色を敏感に感じ取る才能を誰もが持ち合わせている。隼人に限ってはそれが強いため、不安にさせるようなことは出来なかった。

隼人の表情は落ち着いていて顔には笑みが浮かんだ。まだ母親は来ていないのか、隼人は静かに絵本を手にしていた。相変わらずベツドの上は本や玩具で散らかっているが、余り遊んでいるような形跡は無かった。孤独や辛さを紛らわすためにそこに飾られているようだった。

「兄ちゃん、ずっとこなかったね？」

呼吸器越しに聞こえる隼人の声は曇って聞こえる。呼吸をするたびに呼吸器が白く曇るのを見ていると、こっちが息苦しさを感じてしまう。

「悪い悪い。お前に約束したことの準備で忙しくてな」

「みられるの？」

ちよつと前なら嬉しそうに華やいだ表情も、今は余り変化なく言葉にだけ感情を込めているようだ。無邪気な笑顔がないのは寂しいな。

「ああ、もう少しだ。もうちよつとで見せてやるからな」

すっかり変わってしまったような隼人。見た目では少し痩せたようだが、腹部が満腹時のように張っている。これもやはり病のせいなのだろうか。確証はないがそうなのだろう。そう思わざるを得ない現実がここにあるのだからな。

「ほんと？」

「うん、お兄ちゃんが今頑張ってくれているからね」

悠がそつと頬に手を当てた。心地良さそうに隼人の表情がかすかに和らいだ。周りには同じ子供がいるが、やはり心細いものがあるのかもしれない。悠を見る表情が縫るように俺には見えたから。

「あら、雨宮さんに奥田さん」

背後から声が掛けられ振り返ると、隼人の母親と医師の姿があった。挨拶を済ませると、意を決して隼人の母親を外に連れ出した。しなければならぬことがある。

「先日は誠に申し訳ありませんでした。軽はずみなことを言ってしまう、本当に申し訳ありませんでした」

ここ最近はよく頭を下げていますが、今日のは全く別のものだ。今までのことを取り消すわけじゃない。ただ自分のことばかりを優先した申し出をしてしまったことに対する謝罪。許してもらおうとまでは思っていない。ただ聞いてもらいたかった。決して冗談などではなく、軽はずみとは言え、俺は俺なりに本気で隼人に夢を感じさせたいと思っていたことを。

「良いんです。私も隼人のことだと言いながら、自分のことを押し付けてしまいました」

頭を上げて下さいと言われるが、すぐには上げられなかった。誠意ある謝罪かの是非は問わないが、俺なりに俺が納得しなければあげることは出来なかった。そんな俺に小さく心無く苦笑をすると、そつと俺の頭を持ち上げた。

「夫に言われました。奥田さんたちは私たちと同じようにあのこの子とを考えている。だから、それを私たちも受け止めなければいけないんじゃないか、と」

顔を上げて隼人の母親を見ると、違和感が浮かんた。あの日以来刺々しい感じだと印象があったのだが、角が取れたように穏やかだ。それはそれで良いことなのかもしれないが、俺の違和感はそれとは違つところを感じた。言葉にしても良いのか分からないが、良い気分になれるようなものではなかった。むしろ間逆。強い悲しみの向こうにある果てしない虚空へ辿り着いたような達観にも見える無表情。もし自分の母親が目の前でそんな顔をしていては、きっと俺は悲しさなどよりも恐怖に近い何かを感じるかもしれない。今まで見たこともない様々なものを背負い過ぎた表情というもののほど、人の疲れた顔はないだろう。人形の無表情よりも無表情という悲しいものが隼人の母親には見えた。

「あの、つかぬ事をお聞きますが、何かありましたか？」

聞かすにはいられなかった。こう言う時の俺の勘は女性の勘を軽々と凌駕する負の力を持っていることを自覚しているから。

「……アメリカの病院から連絡がありました」

俺の中で全身を強く脈打つものがあつた。これは俺の勘が予感から確証に変わる時に起こるもの。血の気が引いていく寒さが強くなってくる。

「ワクチンの精製は困難だと、聞かされました」

それはつまり、遺伝子治療は望めないと言ふ事じゃないか。今まで外科手術や放射線、化学療法などの集学的治療を、隼人が外で元気に遊ぶ子供の一人に加わるために行ってきた結果、最後の頼みの綱として隼人の両親が望みを託してきた治験がダメだというのであれば、考えずとも答えは見えてくる。隼人を完治させるための治療方法が全て絶たれてしまった。心のどこかでずっと悪魔が囁くように予感していたことが、今俺の前に覆ることの無い現在として立ちはだかつてしまった。

「先生と夫と話した結果、残りの時間は隼人の好きにさせることにしました」

抑揚ない言葉に、俺は何も言い返す言葉が浮かんでくることは無かった。すっと、俺の横を通り過ぎて行く母親の横顔は、俺が嫌いな人間が見せる顔だった。その背中は、降り止むことの無い雨のような涙に耐える、とても悲しく、寂しげで、遠いものに見えた。逃避出来るのであれば迷うことなく、そちらへ行つてしまひそうなほどだった。

「隼人君。今、隼人君がしたいものを聞きたいんだけど、何かあるかな？」

母親の後、室内に戻ると医師が隼人に何をしたいのか聞いていた。その隣で悠が俺と同じような顔をしていた。詳細を聞かずとも、その質問の真意がよく分かるのだろう。悠は人一倍物事を無意識のうちに真摯に考える奴だ。事態が飲み込めたのだろう。俺に答えを求めると、悠の口が小さく開いた。

「何でも良いのよ。隼人がしたいことをこれからはいっぱいしても良いの」

隼人に向けられる母親の微笑みはとても優しく、温かいものだ。

それが偽りだとは思えないが、その後姿を見る俺には、必死で我が子をその目に焼き付け感じようとする辛さが滲み出ているような気がする。

「なんでもいいの？」

「うん、何でも良いのよ」

両手で隼人の小さな包み込む温かさは、きっと今の隼人には何よりも愛しいものなのだろう。そして、その小さな手から伝わる温もりもまた、母親には愛おしくてたまらないものなのだろう。

「これ」

隼人がすぐ横に置いていた絵本を反対の手で母親に見せた。空飛ぶピアノと書かれている絵本。俺たちが持ってきた物。隼人はそれを見せた。

「これをどうしたいのかな？」

少し首を傾けて絵本を見る医師。内容を知らない医師には隼人の言う事が分からないのだろう。俺と悠は何となくだが、思い浮かんだ。

「隼人君は、きっとこのピアノに願い事をしたんじゃないでしょうか？」

悠が言うと、うんつと隼人が頷いた。

「何をお願いしたいの？」

どうして、とは誰も聞かなかった。それはもう意味を成さないと知ってしまったから。

「兄ちゃんが見せてくれるもの」

隼人が俺を見る。やはり隼人の思うことは俺たちが考えていることと同じだったようだ。だから俺は隼人が不安に思わないようにはつきりと頷いた。

「約束したもんな」

治療が意味を成さない今、恐らく隼人のご両親と医師たちは、そのことを嘆いていても隼人の時間は着実に減っていくのだから、隼人のこれからを考えることを第一にしたのだろう。いや、考えない

といけない事態になってしまった。本当はもつと助かる道に縋りたい気持ちだが、きっと隼人の母親にはあるはずだ。時折話の流れとは関係なしに、

《隼人、あなたを愛しているからね》

と、惜しむように言うのが聞こえる。母親がここまで変わってしまった経緯は俺が知る由もないが、きっと色々あったのだろう。そんな言葉で済ますのはどうかとも思うが、俺にはそれしかなかった。そして、きつと悩みに悩み貫いて出した答えが、一秒すらも惜しい隼人の時間を、痛くないように苦しくないように、楽しくて楽しくて仕方がないと言ったような時間を過ごさせてあげたいというものに至ったのだろう。隼人は、母や医師の申し出に自分は回復に向かっていて良くなってきたのだと思っっているのかもしれない。その思いを尊重することをこれからは大切に包み込んでいこうとする家族の在り方が俺の目の前にある。

「あの事ですか？」

「はい。隼人は俺の友達です。だから約束は守りたいんです」

隼人の母親にしてみれば、今の隼人には思っているだけで幸せなこと、本人は治る気であるのだから、大きなことよりも身近なことよつとした喜びを積み重ねていきながら、少しでも一緒に過ごす時間を自分の愛情を注ぎ、隼人の温もりを感じていきたいのだろう。それは家族であるなら当然のことだと思っ。だが、俺は小さなことよりも、到底手に出来ないような大きなものを感じる方が良いと思っ。母親からすれば、隼人の症状は悪化を辿るだけで、隼人の心はちよつとした棘でも大きな傷を作る可能性があり、周囲に今まで見たり聞いたことの無いものを感じることで、ひどく怯えたり不安になり、疲れると言いたいのだろう。話を聞くうちにそれが正しいとも思える意見だ。何しろ、一日中我が子の状態を見守り、性格や心を誰よりも把握していて、それ以上に自分がお腹を痛めてまでこの世界で出会いたかった、自分の子供なのだから。その意見が間違いだと言え人間はいない。もし俺に子供がいれば、同じことを言っ。安心出

来る人たちと、安心出来る場所で過ごすことが一番なのは当たり前前の事なのだから。

だが、俺は隼人や仕事仲間たちに子供の心を思い出さされた。子供と言うのは大人の考え方とはまるで違うことをしたがる。母親や家族の注ぐ愛を、まだ小さな子供は全てを理解出来ない。だから、自分の欲求を抑えることも出来ない。子供は笑って泣いて、叱られて褒められて、抱きしめられて、その器を大きくして、家族の自分に伝えたい思いを心身の成長と共に少しずつ理解していくのだ。だから、隼人はまだまだ発展途上。昔の俺を重ねると、隼人の友達として俺はその意見とは逆の立場に立つ。子供は自分の知らない世界を目の当たりにすると、興奮する。特に男の子はそうだ。その時に感じる喜びは、大人に成ってもいつまでも美化され続け、死ぬまで心に残る。忘れていても思い出させてくれるきっかけを知る友達や仲間がいるから、いつまでも色褪せることなく、壊れることなく残り、次の世代へと受け継ぐ一つの宝ともなる。

「以前、先生が俺に話してくれましたよね？メイク・ア・ウィシユのこと。確かに俺たちなんて足元に及ばないくらいの実績があったて、敵いません。でも、俺は隼人と約束したんです。空に絵を描くことを見せてやる、と」

隼人がうん、と力強く応えてくれる。それが素直に嬉しい。その道のプロだとかに任せて事をするのではなく、自分たちでやり遂げようと頑張るから、達成した時の喜びは願いを叶えられた本人だけでなく、その願いを共に自分の願いのように叶えてきた者たちにも同様に返ってくる。第三者ではなく、共に当事者として味わうことが子供には何よりも楽しいのだ。だが、隼人にはそれが難しい。だから、見てもらうだけでもしてやりたい。

「私たちのほうでは、既に準備は整っています。後は……」
悠が母親と医師を見る。俺も同じように決意に満ちた眼差しを送る。ここで届かなければ強硬手段しか残されてはないだろう。それをするとも今は厭わない。友達は少々無理をすることだってある。

一人の小さな勇者の願いを、俺も、俺の仲間たちも同じ願いとして叶えたいから。

「少し、お話をしましょうか？」

医師が隼人の母親に声をかけた。ええ、と母親も頷き、俺たちにしばらく待つように言つと、病室を後にした。

「簡単にはいかないでしょうね」

「分かつてる。でも言いたいことは言った。後は答えを聞いて、判断するだけだ」

結局その日は隼人の父親が仕事を外せないそうで、後日連絡してくれるとのことで、俺たちは隼人に必ず見せてやると改めて約束を交わして病院を後にした。正直なところ、俺は物足りなさに似た空虚感があった。あれだけ相反する意見で正面から向き合っていた隼人の母親。それが治験から遺伝子治療の望みがないと判断され、施術がないことを知るなり、今までの態度とは豹変した、あのあまりにも悲しげな顔に、腑に落ちないものを感じていた。

「分かつてあげなさい。あんたとは違うのよ」

「それは分かつてる。俺がガキなだけだ」

こんな時にまで俺の中で子供の心のようなものが大きく支配している。心で分かつていても体が受け入れてくれない。その逆かもしないが、自分ではどちらなのかよく分からない。悠はそんな俺に呆れながらも、自分も受けたショックに心を痛めているようだった。こんな時に励ましの一言も掛けられず、逆に掛けられている俺自身は本当にヘタレだ。

翌日からはいつも通りの日常の延長だった。朝起きて診察があれば病院に行き、隼人を見舞い、仕事へ行く。そして上官たちに叱られながら少しずつ仕事の重たさも増していき、筋トレ代わりだと割り切つてこなし、バードフライの訓練を横目に航空祭の準備をこなしてた。地上からしか眺めることが出来ないことには悔しさがあるが、それでも仕事はある。楽しんでもらうためにも俺は俺の仕事に誠心誠意を込めてやるつもりだ。

「は？ ピアノを、ですか？」

俺と悠は飛行場とは違う、会議室のような部屋に隼人の両親と医師と数人のスタッフと座っていた。

「はい。隼人君は空飛ぶピアノの絵本を肌身離さずにかけて、先日もそれに願いをしたいと言っていたことなので」

医師の言葉は分かった。それは俺もその場にいたから覚えている。隼人からは何度も聞いたことでもある。

「どうか、お願い出来ないでしょうか？」

隼人の両親が俺たちに頭を下げる。そう言えば隼人の父親とは初顔合わせだな。会社員らしく普段は忙しいようだが、今日は俺たちに合わせて有給を取ったそうだ。そこまでして俺たちに頭を下げられると、こちらとしては罪の意識を感じてしまう。だが、そうしなければならぬほど時間が惜しいと言うことは考えたくなくとも考えてしまうことだ。

結局隼人の両親から、俺が初めから頑なに伝えてきたことが、いとも簡単に通ってしまい、少々腑抜けてしまったが、結果オーライと言うことですので準備に取り掛かった。俺は俺で飛行場の社長にも話をするべきだと思っていたのだが、上官たち三御所が話を通してくれたらしく、俺は隼人の方に気を回すように言われ、飛行場のことは先輩たちを筆頭に任せることにした。

「どうする？」

悠を見ると、悠も俺を見てくる。

「私は普段からドッグだから、健介の方がその辺は詳しいでしょ？」

そうは言われても、飛行場には音響システムは管制塔に揃っていても流石にピアノは置いてない。航空祭では楽隊の演奏は確かに地元の学生や消防警察の楽隊なんかがしてくれるが、ピアノの搬入は無理だろう。外での演奏は音が航空機のエンジン音に負けてしまうだろうし。

「生演奏っていうのはおそらく難しいかと」

その一言に場の空気が沈む。自分で言っていて良心が痛い。

「そうですね。ではピアノは置くだけで、実際はCDか何かを掛けるっているのはどうでしょうか？」

隼人の父が妥協案を持ち出すが、悠がそれを受けて何かを思いついたように口を開いた。

「ピアノの搬入は難しいかもしれませんが、私に一つ案があるんですけど」

全員の視線が悠に向けられる。席を立つと悠は元々置いてあったホワイトボードにペンを走らせる。何を書いているのかと思えば、バードフライ機であるSu 26の機体の絵と管制塔を書いた。絵が上手いなあと高校の美術以来に目にする悠のセンスに感心した。一通り書き終わると、振り返る。

「空飛ぶピアノの通りになりたいと思います」

「もしかして、その飛行機でピアノを吊るすんですか？」

看護師の一人が口を開くが悠は首を振る。

「いいえ、そういうわけではなくて、機体にピアノの絵を塗装して、スピーカーを使って曲を流すんです」

タイミングを合わせられればピアノが空を飛びながら演奏しているように見えます。と続けた。何も焦らすことなく答えを言う悠には、少々こちらに考えさせる時間があっても良いと思うのだが、悠にしてみればそんなものも時間の無駄なのだろう。悠の簡単な説明に医師や隼人の両親には頷いているが、俺は頷けなかった。確かに悠の考えは不可能じゃないし、今の段階では一番の正攻法だろう。

曲に関してならフライ機とのタイミングを合わせれば上手くいくし、よくやっていることだ。だが、問題があるのも確かだ。俺はパイロットだから詳しくは知らないが、機体塗装に関してだ。航空機の塗装は雨や大気からの機体の保護だけでなく、見る人への配慮もしなければならぬ。そのため、定期的に塗料剥離剤を用いて古い塗装を剥がし、再塗装を行う。バードフライ機は自然硬化型の塗料とシールが使用されているが、作業自体は良く行われているのを俺も見ることがある。だが、塗装はすぐには完成しない。小型の機体では

あるが、再塗装を施す際、機体洗浄も行い、完全に塗料が硬化するまでも少々時間が掛かる。それをこの数日だけで済ませるのは無理じゃないだろうか。第一、塗装案がない状況なのだから、デザインシールの発注との早さは判断が難しいところだ。

「時間がないんだぞ？ 塗装は可能でも、塗装だけじゃ難しいだろう？」

整備班の悠の方が詳しいから、無理なこととは言っていないのだろうが、俺としては無理な気がしてならない。

「四日あれば、やるわ」

俺たちの話は俺たち以外にはさっぱりなのだろう。医師たちはポカンとした表情で話を聞いている。俺が医師から医療の話聞いた時と同じだ。世界にはその世界のプロがいるのだから、下手に出しやばることなく、得意分野はそれぞれのプロに任せれば良いというものだ。

「大丈夫か？」

「やるのよ。もう本当に良いのか？ なんて考えられる場合じゃないんだから。やると決めた以上は、終わりまで行くことが限界なの。そこまでやるのが、あたしたちなのよ」

四日と言うことは、一日でほぼ全ての工程を終わらせる勢いでなければ無理じゃないだろうか。悠はやれる、ではなく、やる、と言いつたのだからその言葉に嘘はないだろう。俺と違って冗談や嘘は親しい仲の人間にしか言わない奴なのだから。

結局、悠の話を通り、俺と悠は早速飛行場に戻り、フライ機の特別塗装の打ち合わせを始め、隼人に付き添うために飛行場と病院との打ち合わせには、医師たちと意外なことに美友紀ちゃんが仲介を買って出てくれた。俺は美友紀ちゃんと共に調整を整えていた。日に日に隼人は体調の変化の起伏が激しくなり、その日にならなければ、状態が分からない状況だった。薬のおかげで大きな変化はないが、それが隼人に辛い思いをさせ続けていることが俺の心を締め付けていた。負担が少ないとは言え、軽い抗がん剤の使用には間違い

が無い。多少の副作用も隼人は辛いはず。それをごまかすように医師たちは隼人に夢の話をし続けていた。一刻も早く見せてやりたくとも、そうは行かない現実に焦りが生まれるが、その度に何とか自分を落ち着けるのに必死だった。

「今日も泊まりか？」

「全機ともなると、スタッフ総出でも足りないくらいだから」

病院で話をつけた日から悠はほとんど家に帰ることなく、飛行場の仮眠室や近所の同僚の家泊まりだった。俺は俺で左腕の自由が増えた分、その間は久々に自分の家に戻っていた。送り迎えは日によって違うが、智史の割合が大きかった。

「お前は無理をしがちだから、気をつけるよ」

「大丈夫。私一人って訳じゃないから」

大浪さんも業務の合間についてくれているから悠の言う通り大丈夫だろう。俺も俺で他人のことばかりに気を配っているわけにもいかない。機体の再塗装は終盤を迎え、完成までは見るつもりが無い。ため、順調かは不明だが、やると言ったからには完成させてくるだろう。俺は隼人のためにも空飛ぶピアノの曲の選曲を任せられ、様々な曲を探すだけだ。まだ邪魔にしかならないこの腕で出来ることは、それくらいだ。

「あんただけにはさせたりしないんだから」

健介の去った後、夜闇に灯る蛍火のようにドッグだけは煌々と明かりが溢れていた。

「雨宮、全塗装は間に合わないぞ」

大浪がマスクを外して一息つきながら悠の方の作業を見回す。

「シールもまだ揃ってないのは理解してます。でも時間がある限りはやりませう」

賛同した整備士たちが時間外勤務だと言うのに、残業を厭わず作業に徹している。漂うシンナーの劈く匂いも喚起で吹き飛ぶ。活気が吹き飛ばすように。

「そう言う努力は買うが、全員のことも考える。ただ働きを喜ぶ馬鹿ばかりじゃないからな」

「そうなんですか？ 私はみんな馬鹿だと思ってますよ？」

誰一人として愚痴を吐いていない。疲労の顔色はあっても、出てくる話題は指示と夢と誇り。

「上司相手に良く言うもんだ」

「では、お帰りになられますか？」

可笑しそうで悪戯な笑み。作業着はもう塗料でまだら模様でも、悠は落書きを楽しむ子供のようそこにいた。

「馬鹿が。小娘ごときに任せられるか」

大浪がそう言いながら、作業の甘い箇所を怒声を響かせて叱る。

妥協は許さない。自分に喝を入れていようでもあった。

「ありがとうございます。業務とは無関係なことを許していただいて」

その後姿に悠は深く頭を下げた。幾人かの整備士がそれを息を呑むように手を止めていた。

「私には何も返すことが出来ません。でも、これだけは譲りたくないんです」

手が開いた整備士の手が毅然としている悠が深々と頭を下げている姿にあっけらかんとしている。

「どんな罰も甘んじて受け入れます。ですから、お力添えをどうかよろしく願います」

機材の作動音が響く。人の手はその場で一旦停止してる。

「頭を下げる必要がどこにある？ 支離滅裂だぞ」

大浪は小さく笑って手が止まった作業を叱咤した。

「子供が夢を見て何が悪い？ それを叶えてやって何が悪い？ がむしやらに頭を下げ回るのは、奥田だけで十分だ。お前たちっ、時間はないぞ。テキパキやれっ！」

激励と叱咤にドッグ内に咆哮のような威勢が響いた。

「頭を下げるのは、成功してからにするんだな。お前もトコトン奥

田に惚れ込んだか？」

「なっ、何を言ってるんですかっ！」

勢い良く悠が顔を上げると束ねた長髪が大きく跳ね上がった。

「時間はないが、焦燥に駆られるな。面倒事は奥田一人で勘弁だぞ。飯を食ってから作業に戻れ」

どうも力みがちな悠に、休憩を大浪が言い渡すともう一度場に緊張の空気を張った。

「格好良すぎです。でも、ちょっと余計なお節介ですよ」

「なら余裕を見せられるだけの経験を積んでおけ。お前もまだまだ奥田の小僧と似たもんだ」

上司と部下であるのに、親子のような空気が夢への架け橋を生み出そうとしている。

「そうなんでしょうね。私もまだまだですから」

「当然だ。お前たちが一人前なら老いぼれは必要ないだろうが」

そんな自嘲に悠はもう一度頭を下げた。上司がいると言うこと。まだまだ健介が小僧なら、悠は小娘。一端ぶる前に、子供のように足掻けとその背中には悠には大きく映っていた。

「健介のヘタレが伝染ったかな」

早く休憩して戻って来いと叱咤されて、悠は笑顔だった。まだまだ終わらないドッグに眠る夢の形に夢を見て。

「待っててね、隼人君、健介」

何が何でも自分出来る最大限のことをする。それが悠の最大限の表現。健介が走り回るなら、悠は時が来るまでに舞台を整える。

二人の進む道は違えど辿り着く道は同じ。今はその道は、もうそれぞれ一人じゃなかった。問題だけは変わらずに迫りつつあっても。

「奥田さん、お父さんに許可取ってきました」

「マジで？ やっぱり美友紀ちゃん凄いな」

美友紀ちゃんには隼人が来た時にどこで見せるか場所探しを頼んでいた。やっぱり隼人には飛行だけではなく、それに関わる全てを

見てもらいたいと思い、管制塔の見学も視野に入れていた。いつの時代も父親と言うものは娘には弱いようで、ここは美友紀ちゃんに人肌脱いでもらったのが功を奏したようだ。

「奥田さんの方が立派ですよ。私はこれくらいしか出来ませんから」
そこまで謙遜しなくても良いのだが、美友紀ちゃんらしくて微笑ましくもある。こんな子が彼女だったら間違いなく毎日が楽しいだろうに、俺はもったいないことをしたな、ともう何度後悔したことだろうか。

そして、奮闘していたのは俺たちだけじゃなかった。隼人がいつ来ても良いようにと、バードフライのメンバーは日頃よりも飛行時間を増やして業務を出来るだけ片付け、フライ機が整備中のため、先輩も智史もほぼ毎日夜間の仕事も入れていた。あまり仕事を入れすぎるのも負担が多くなるからと忠告したのだが、その度に笑い流されて苦笑するしかなかったが、多くのスタッフが一人の夢を叶えるために、自分の時間を犠牲にしてくれることには俺は深く感謝していた。そして俺以上に深く頭を下げていたのが、俺と対立したこともあったが、今ではよく打ち合わせに参加している隼人の母親だった。諦めたわけじゃない意思が強く感じられるようになったと思う。とても心が不安定にはならないではいられないはずの毎日だと言うのに、時間があれば飛行場に足を運んで、許す限りの時間を使ってスタッフに俺が前にやっていたように頭を下げて回っていた。その度に言われる言葉が、きつと母親の心を強くさせてくれたのだと思う。

《好きだから、夢を叶えてあげたいんです》

好きでここへやってきた連中の集まりだから、誰もが同じ思いで夢の叶う日を待ち望んでいる。正直その光景を見た時、目頭が熱くなった。初めは数人しかいなかった仲間がいつの間にかどこを見渡しても同じ思いで働く人間ばかりになっていった。俺の我が侘から始まったことが、全員の目標となり、一人の少年の希望を空に描こうとしている今が一番、俺を奮い立たせてくれている。

「なんか久々に楽しいな」

敵しい現実と向き合っている隼人のことと思うと、そうもいかないが、それでもやはり、航空祭のような仕事意識ではなく、全員が紙飛行機を追いかける子供のような輝いた目をしているこの時が、意味もなく楽しかった。

「待つてるよ、隼人。お前を連れて行つてやるからな」

沢山の人間の夢が溢れている泉の中から、俺たちは隼人という少年の夢を両手に掬い、どこまでも澄み渡り、全ての夢を見つめ続けるあの高い空へ掲げようとしている。絶対に後悔はしないし、誰にもさせない。もう俺たちの前に立ちただかる敵は唯一つ。お宝の中に潜む病魔だけ。そいつを吹き飛ばせるだけの隼人へ感動と感激を俺たちは贈ろう。そんな思いで、俺たちはとうとう隼人を迎える全ての準備に幕を下ろし、その時を待った。

五・空散華夢

まだ朝陽も上っていない、朝五時。四時に叩き起こされ、寝惚け眼で悠の用意した久々の朝食を喉に通し、支度を整える。

「部屋は掃除した？」

「一通りは」

昨日ようやく悠は自宅に戻り、俺も送りのついでだからとそのまま悠の家に帰った。

数日ぶりに上がった悠の家は、俺のいた空気がまだ微かに残っていた。

「それより、出来たのか？」

周囲はまだ暗い中、飛行場へと走る悠の車は、心なしか軽やかな走りに感じた。

まだフライ機の塗装は見えていない。俺のフルートの仕上がりも気がかりだった。デザイン画も一切目を通していないから、どんな新生バードフライが誕生するのか楽しみだった。

「何とか。細かい仕上がりは間に合わなかったけど、シール塗装でも見てくれは問題ないわ」

空飛ぶピアノは先輩の一番機が背負うことになったらしく、フルートは普通に新生デザインを施されたようだ。まだ完成と言うわけではないらしいが。

「ちゃんとピアノだって分かるのか？」

「もちろんよ。それよりも曲の方はどうなのよ？」

悠の問いかけに俺は、含み笑みでオーディオのスイッチを入れた。車内に流れ始めたのはもう何度聞いたか分からない、エチュード第十三番変イ長調作品二十五、『牧童』。

「これ？」

悠が少し意外そうに声を漏らした。そんなものを露知らずと言うようにピアノの鍵盤を走る音色が車内を駆け巡る。

「他に良いのが無かったからな」

色々曲は探してはいたが、エオリアン・ハープを超える曲は無かった。と言うか、俺の中で初めからこの曲しか頭に無かった。隼人にはこの曲が一番相応しいと思っていたから。

「そう。そうしたのね」

悠は特に何を言うでもなかったが、満足げな表情をしていた。元々俺も悠から聞かされて気に入った曲だから、悠も嬉しいのかも知れない。薄暗い車内は明るい曲で飛行場へと向かっていった。

飛行場に着くと、既に明かりで満ちていた。消えることのない滑走路や誘導灯等以外はこの時間はいつも静まり返っているのだが、今日に限って既に稼働を始めていた。

「じゃあ、後は頼んだわよ」

「任せておけ」

いつものようにそれぞれの仕事場へと向かう。まだ来ていないスタッフもいるが、バードフライのメンバー以下今日の主役を担うメンバーは既に揃っていた。

事務所に入ると、既にバードフライのメンバーは飛行演目や時間調整の最終チェックの打ち合わせに入ってるようで、所内にはその姿は無かった。飛行場は休場日で、本来なら職員の休日だが、隼人のためにそれを返上してほとんどのスタッフが出勤してくれた。俺は音響のチェックを行うために管制塔へ向かった。

「おはようございます」

元々出社時間の早い管制塔は比較的いつもの静かな雰囲気だった。俺としては入りづらくて、十日ほど前に知った驚愕の事実も重なり、未だに俺には慣れない場所だ。

「奥田、遅かったな」

いつもよりも二時間は早い出社でも小野原管制官にしてみれば遅いのだろうか。ヘコヘコと頭を下げながら苦笑するしかない。最後の砦として立ちはだかったあの日以来、小野原管制官は美友紀ちゃんの説得の甲斐と、俺が隼人の両親と医師たちから承諾を得て、よ

うやく縦に振らなかつた首を振つてくれた。小さくウムと頷いて。きつと俺の覚悟よりも娘の願いのの方が大きいものだったと思うが、この人には上げる頭はないため口には出来なかつた。

「今日はよろしく願います」

「ああ」

後にフライのメンバーと管制塔のスタッフで演目と曲、飛行ルートに時間の調整等のブリーフィングも終わるだろう。ここは小野原管制官に任せて、俺は次の事に向かつた。

これも小さな夢を大きなものにさせるため。手を抜くことは許されない。次に医務室へ向かい、病院との連携を取れる状態にし、隼人の方が一に備え医師たちと話を交えながら下準備も万端に整えていた。俺の考えとしては、隼人には実際に航空機にも触れてもらい、搭乗体験をさせたいと思つているが、そうなると二時間ほど外での見学となり、今の隼人には辛いかと思う。そのため医務室を管制塔の一階に移動させ、救急にも対応できるようにしておいた。

時間も時間でいつの間にか九時を過ぎ、そろそろ隼人を乗せた救急車が到着する時刻を迎えようとしていた。早朝から飛行場を駆け回つてみると、あちこちで隼人のために、と様々な準備をしていた。

「いよいよ出発か」

隼人が来てからバードフライは離陸を始めるのではなく、隼人に出来るだけ負担をかけないようにと、来場してからすぐに曲芸を見られるように、予め出発しておく手取りになっている。俺も時間が少し空いていたので、タキシングロードの近くで再塗装された機体を見に行った。

「おー、なるほどな。ピアノってそういうことか」

香田先輩の一番機を筆頭にちょうど俺の前をタキシングしていつて、俺の愛機のフルートも新塗装を施されていた。俺が一番驚いたのは、フルートではなく隊長機だった。フルートたちは元よりも少々派手になった感じだったが、隊長機はゼブラ模様のような白と黒が機体腹部に描かれ、その周囲は黒で染められ悠の言っていたピアノ

ノがどう言う事なのかようやく理解できた。これを四日で全機塗装させたのは、さすがは整備班と言ったところだろうか。俺に気づいた智史が呑気に親指を立てて見せてくる。人の機体に呑気に乗っているのを見ると悔しさが感じられるが、今は仕方のないことだ。もうじきあそこには俺が座るのだから。

「奥田さん、さっき病院から連絡があつて、そろそろ到着することのことです」

「わかった。ありがとう」

美友紀ちゃんと受付で到着を待っていると、フライ機が編隊を組んで受付の窓から飛んでいくのが見えた。

「今日は晴れて良かったですね」

外は快晴と呼ぶに相応しく、南国の海を逆さまにしたような空がどこまでも広がっていた。気温も春の心地良い暖かさで、隼人にも負担は少なくてすみそうだ。

「でも折角の休日だったのに、皆には少し申し訳ないかな」

善意で協力してくれているとはいえ、ここ数日は業務以外にも色々時間を押してまでの作業が続いているのだから疲労は溜まる一方だろう。

「気にしなくても良いと思いますよ。今日は誰も仕事って意識じゃなくて、楽しむためって気分で働いてますから」

美友紀ちゃんは世辞などではなく、本当にそう思っているようで自分も楽しそうだ。慌しく駆け回っているスタッフですら、仕事だと気負っているのではなく、実験を楽しむ子供のように好きでやっているような雰囲気がある。

「そっか。なら、いつか」

「はい」

のんびりしていると、駐車場の入り口から救急車両が入ってきた。その後一般車も次いで停止した。俺と美友紀ちゃんは車が止まると同時に外へ出た。

「おはようございます」

一般車のほうに乗っていたのは隼人の両親で、救急車から降りてきたのは車椅子に座りなおした隼人と医師と看護師だった。しかし、救急車を借りてくるなんてすごいな。隼人の鼻にはやはり呼吸器のチューブがつけられ、看護師がボンベを押ししていた。

一通りの挨拶お済ませしていると、隼人の到着に気づいたスタッフたちが他のスタッフに連絡でもしているのか、こちらを見たり、慌しく駆けていた。

「隼人、今日の調子はどうだ」

目線を合わせて腰を下ろし、隼人を真っ直ぐに見ると顔色は比較的落ち着いている。そしてその目はいつにも増して輝きを増しているようだ。

「うん。だいじょうぶ」

グツと親指を立てる仕草をする隼人。その小さな手からは本当に今日を楽しみにしているのだと感じ取る。まだ小さな子供のため人見知りもあるだろうと、藤沢上官たちの指示で俺たち以外のスタッフは遠くからこちらを見るだけだったが、隼人にはあまり意識しなくても良いように思える。ここにいるスタッフ全員が隼人の夢の先にいる憧れの人間ばかりなのだから。

「もう少し時間が掛かるから、中で待つてようか」

美友紀ちゃんも俺と同じように隼人の目線に腰を下ろし、微笑むと隼人は頷いて俺たちは用意された医務室へ向かった。

「隼人の体調はどうですか？」

両親と美友紀ちゃんと先を歩く隼人を前に、俺は医師に尋ねた。

ここまでの約三十分の移動も気がかりだった。あまり外出をしたことのない隼人には車酔いもあるだろうし。

「心配はいらないでしょう。今の隼人君はこの日のための気力で乗り越えているみたいだし」

「そうですか」

俺には良く分からないが、薬の影響なども含めて病魔から受ける隼人の体力の減少は日に日に大きくなっているはずだ。ずっと心待

ちにしていたからと言っても、隼人の容態が何より優先するべき事項。腫瘍の勢いを少しでも遅らせるために投与され続けている抗がん剤の影響で、隼人は寝起きのようにボォーとしていたり、嘔吐を繰り返しているのを何度か目にはしている。それを思うと、隼人に約束を果たせてやれるという高揚感と、隼人の容態を案じると立ち止まりそうになる不安が付きまとう。

「今の隼人君にとっては一日一日が意味のあることでしょう。だから、きつと隼人君は後悔なんて考えていないはずです」

生きることに純粹に真つ直ぐに向き合うということ。幼い命が懸命にここに在るといふ事実が、俺の今まで何気なく生きてきた人生の全て上に行くものなのだと思うのに時間はいらなかった。長い間を無駄にばかりしてきた俺とは違う。その日一日がとても大切に、些細なことでも意味を持つ隼人。そんな少年に、俺たちが出来る恩返しとでも言えるこの日を迎えられるのは本当に良かった。まだ光を感じられるうちに、光指す夢の先を俺たちは届けられるのがたまらなく嬉しかった。

《奥田、そろそろ時間だ》

「はい、分かりました」

小野原管制官からの内線で俺は隼人を外へ連れ出した。普段はあまり目にする機会のないスタッフもそろそろとドッグの近くでその時を待っていた。隼人に話しかけてくるスタッフにも、隼人は楽しそうに対応している。今日の隼人は俺が見た中で一番の花を咲かせているように見えた。だが、満開の笑みを浮かべるにはまだ早い。今日と言つ日はこれまでの集大成とも言えるものだ。

「隼人、願ひ事は決まったな？」

「うんっ」

もうじきピアノがこの空へやってくる。管制塔に目を向ければ、窓越しに小野原管制官たちが見える。時間や空域情報等を計っているようで、こちらに目を向けてはいなかった。

しばらく空を眺めていると、キラツと遠くで太陽光を反射する空

を舞う物体が見えた。それとほぼ同時にスピーカーにスイッチが入ったようで、ジジジと音が聞こえる。

「隼人、きつとお前の願いは叶うからな」

遠くからエンジン音が次第に大きくなってくる。その音に負けないう演奏を空飛ぶピアノが隼人の夢を叶えてくれるはず。

「あつ」

隼人が気づいて目を向けたほうから一機のフライ機が進入してきた。それに合わせるようにエオリアン・ハープがスピーカーから流れ始めた。速度を落とし、隼人の空へとピアノが演奏を始める。白と黒の鍵盤を模倣し、決して絵本のようにはいかないが、それでもそこにあるのは一台の空を舞うピアノ。翼を左右に揺らし、演奏しているように舞うバードフライ隊長機。コクピットにいる先輩がこちらに手を上げている。こんなので良いか？ そんなことを聞いているようでもあつたが、隼人の目にはピアノを自在に操るピアノリストにでも見えているかもしれない。

「隼人、今だ」

願い事は他人に話してしまえばその効力を失う。だから、言葉には出させない。隼人が静かに空を駆けるピアノに願い事をするように見つめている。誰も何も言わない。ただ隼人の願いがこの空に届くことを、全員がそれぞれ空飛ぶピアノに思いを馳せているようだ。

突然エンジンの回転数を上げてピアノが上空へと上昇を始めた。

プロペラ機独特の深みのある音を背に、高みを目指して飛んでいく。それを後押しするようにエオリアン・ハープの音色が願いを受け取っていく。その曲音が、若草を撫で、一人の夢を願う少年の全てを優しく包み込み、その願いを雲の上へと消えていったピアノと共に、この世界に小さな夢を果たしに行く音色に聞こえた。演奏が終わると同時に、隊長機は雲に隠れるようにその姿を消した。願いを聞き入れてくれたピアノが、叶えるのと同時に次の夢を待つ子供の元へと飛んで行ったようだ。

「願ったか？」

「うん」

隼人は満足げな表情で俺を見返してきた。それから十数秒後、カラスモークを出しながら四機のフライ機が編隊を組んで気持ち良さげに俺たちの上空を一糸乱れることなく飛んでいく。

「隼人、お前の夢か？」

俺の言葉はもう隼人には届いていないようだ。隼人は目の前を飛んでいくバードフライ機に釘付けだ。今まで写真でしか見たことなかったような曲芸飛行の飛行。それを自分の目で、風と匂いを感じながら、全身で感じる喜びに逆らうことなく陶醉しているようだ。その目が俺の問いの答えになっている。それを見ている隼人の両親の安らいだ表情。子供の夢を叶えたいと思うのは親の夢。今俺はその場に居合わせている。悪い気分じゃない。むしろここまでやってきたことが、ようやく実を結んだことに対する喜びが大きい。悠はドッグ付近で待機しているようだが、きっと今の隼人のことは見えているだろう。

スモークを出しながら俺たちの前を飛び去っていったフライ機はこれから航空祭と同様の演目をこなしていく。競技専用の機体のため、その機動性には一押しのもがある。

その中で俺は少々演目の変更を申し出ていた。いつもなら最後に持ってくるのは五機の編隊を組んで高速飛行するのがバードフライの演目だが、今回は順序を変更してもらった。隼人の夢は空に絵を描くこと。細かく言えば雲をキャンバスに見立て、それに絵を描くことだ。それはほぼ不可能な夢。叶えられないのは残念だが、妥協してでも出来る限りのことをしてやりたい。そんな思いでこのスタッフは今日を迎えた。だから、俺は一つだけリクエストをした。技名は、Upward Air Bloom。 上向き空中開花。

日本語訳の通りの演目で、五機が編隊を組んで上昇し、花が開くように上空で一斉に四方に飛散していく演技だ。他にも様々な技があるが、俺はこれを最後に隼人に見せたいと思った。雲に絵を描く

ことは出来ないが、空に花を咲かせることは出来る。隼人の小さな夢と言う蕾を俺たちで花開かせる。そんな考えで隼人にも感じてもらえれば良い。

「わああ、ハートだ」

隼人の目はとても生き生きとしている。ちょうどCupidの飛行で、智史の乗る俺のフルートの三番機と四番機がハートを描き、そこに隊長機が矢を射るようにハートの中を貫いていく。様々なアクトバットチームが行っている技の一つだ。空に絵を描いているように隼人には見え、これでまた一つずつ小さな夢が叶っているっているのかもしれない。

約四十分ほどの飛行演目も終わりを迎え、最後に俺の希望していた飛行に入るため、五機が進入してくる。初めて見る演目の全てに俺も少々テンションが高くなっている。ジェット機よりも迫力こそ欠けるが、それでもこれがバードフライ飛行場での最高の演技だ。

隼人にもその熱意は伝わっているようで、車椅子には隼人の意識は座っていないのかもしれない。五機と一緒に大空を羽ばたき、その小さな手に筆でも持って、自由に空に絵を描き続ける。短い時間も隼人には無限に続く空と同じように見えているのかもしれない。

五機が隼人の正面で空へ昇る龍のように一斉に上昇していく。青、黄色、赤、白、緑の五色を絵の具のように空に残して、一斉に開花した。スタッフからもおお、などと歓声が上がっているが、隼人は静かだった。声を出すのも忘れていくくらいに見とれている。その目の輝きが宝石をも凌駕するほどの光に満ちている。まるで最期の光を何一つとして見逃すことのないように、全てを取り込んでいくように。

空に散開していった五機が、全演目の終了を告げるように、一機ずつ隼人の目の前を翼を揺らしながら飛んでいく。

「隼人、あれが俺のフルートだぞ」

隼人の隣に腰を下ろし、隼人の肩を抱いて智史の操縦するフルートを指差す。それを知っているのかいないのか、智史がフルートの

機首を斜め上に傾け、斜めに飛んでいるように見せてきた。それを見た隼人が驚いた表情を浮かべているが、とても楽しそうだから、俺も智史には呆れたが、笑った。

「兄ちゃんも、あんなのできるの？」

五機が挨拶を済ませて着陸してくると、ドッグのほうで整備班が動き出す。まだ、これで終わりじゃないのだ。隼人にはもつと沢山の思い出になる日。これだけで終わらせたくはないと誰もが思っていた。

「ああ。あんなのなんてちよろいぞ」

「兄ちゃんの、見たいなあ」

フライ機が五機並んで隼人の前をタキシングしていく。俺たちもドッグのほうへと移動するため、隼人の車椅子を押した。

「腕が治ったら好きなだけ見せてやるからな。隼人もしっかり病気を治すんだぞ」

「約束？」

隼人が首を上に向けて俺を見てくる。今まで病院内では見たことのない隼人の明るい表情が俺を見つめてくる。その体のどこに隼人を蝕む病魔がいるのだろうかと思ってしまうほどだ。

「約束な」

小指を絡ませると、うんっ、隼人も頷いた。隼人の表情とは裏腹に、母親の表情は優れたものじゃなかった。分かっていたことだが、やはりまだ無理をしている。最後の隼人の笑顔を焼き付けているように見えてしまった。きつとこれからも無理をしても息子に微笑み続けるのだろうか。例え偽りのものだとしても、我が子が笑っているのだから、親が笑っていないと言うのは耐え難いものがあるのだろう。隼人には家族の楽しそうにしている光景に映っているのだろうが、俺の目にはそれは半分だけで、後はとても悲しみに満ちている光景に見えた。フライ機のエンジン音が止まらないでくれ、と内心では思いながら車椅子を押し続けた。

ドッグの近くに並んで停止したフライ機がエンジンを切ると、人

の声と風の音だけで静かになった。体に響いていたエンジン音が突然消えると、心に穴が開いたような空虚感が湧いた。そこに在るのが当たり前だと思っていたものの消失は、人間には失ってからでないといと真価は分からないということなのだろうか。

「隼人、乗ってみるか？」

メンバーが機体から降りてくると、一人一人が隼人に握手を求めて来る。隼人の小さな腕がメンバーの筋肉質な腕と繋がる。あまりにも差のある握手に微笑ましくもあるが、いつかきつと、俺が憧れてこの仕事に就いたように、隼人もメンバーこの手を目標として、これからを歩んでいってもらえれば……。そんなことを思ったのはきつと俺だけじゃないだろう。ここに在る全ての人間が、ここに在る小さな命の灯を包み込んでいたいと思っっているから、今日を迎えているのだ。

「いいの？」

「どれに乗りたいか？」

智史が隼人を抱きかかえた。智史の腕にすっぽりと抱きかかえられた隼人は、俺が思っていたよりも小さく見えた。この時ばかりは隼人につけられていた呼吸器も外され、隼人は心地良さそうに大地の香りを吸い込んでいた。少々オイル臭さもあるが、隼人にはそれもまた一つの香りとしているようで、臭いと言いながらも嫌そうではなかった。

「兄ちゃんのにのりたい」

隼人がフルートを指差した。智史は俺に目を向けてくる。俺は頷きその後を追った。俺も実際、フルートに触れるのは久しぶり。もう一ヶ月ちょいは智史と組んでいるから、遠くから見ているだけだったが、近付くとやはり旧友との再会のように胸が高鳴っている。再びフルートと組めるのはまだだが、徐々に俺もその操縦桿を握りたくなった。一度味わうと、空を自分の腕で飛ぶということは一種の麻薬のようで、抜け出せなくなる。雲と風を切り、大地を見下ろし、空を泳ぐ快感は高所恐怖症でなければ、誰もが虜になるはずだ。隼

人はまだそれを感じたことがないだろうが、コクピットにはそんな想いが詰まっているから、座るだけでも感じる事が出来る。

「よし、俺が乗せてやる」

隼人が智史に抱かれ、翼に足をかけ、座席に乗せられた。傍にいた隼人の両親も嬉しそうに隼人を見つめていて、父親が持参したカメラで隼人の写真を数枚撮っていた。スタッフの数人も女の子中心に隼人に可愛いと黄色い声を上げて写真を撮っていたりと、隼人は芸能人のように盛り上げられて、楽しそうにしていた。

「楽しそうね、隼人君」

「ん？ ああ、そうだな。あんな風に笑うんだな」

いつの間にか悠が隣に立っていた。隼人に満足してもらえた事を誇らしく思っているような優しい笑みを浮かべている。

「子供だもの。本当はもつと笑っていられるはずよ」

遊ぶ時間が少ない隼人だから、こういう時に感じる感情を余すことなく表に出しているのだろう。春を迎えた花が目いっぱい太陽を浴びようとしている隼人の光に溢れた瞳。その片方はもう開くことがないというのに、全くそんなことを感じさせないあどけない笑顔。それにつられて浮かび上がる両親や医師、フライのメンバーからスタッフたち。そして俺の隣にいる悠。一人の少年がもたらした小さな夢の淡い一時。この時間が永遠に続くことを願わずにはいられなかった。いつまでも自分を騙し続けられるほど俺は強くないから。

口から出て行く言葉と心に浮かぶ言葉が、同じ事を言えなくなっていることくらい分かっている。隼人の両親が一番辛いことも。隼人が苦しんでいることも。スタッフたちが一丸になって隼人の夢のためここまですくしてくれている本当の気持ちも。だから、俺は堪えなければいけない。医師や隼人の両親に言われた。残された時間は苦しむことの無いよう、楽しいことを沢山思い出として作っていきましよう。だから、耐えなければいけない。一番辛く苦しい思いをしている人が、偽りのない笑みを浮かべているのだから、俺が

先に折れるわけにはいかないのに。なのに、なのにっ……。

「健介？ どうしたのよ、急に」

「溢れてくるこの冷たいものは何なんだよ……。

君には見せられないでしょうが」

健介は隼人とその周りを囲むスタッフたちに背を向けて、石でも砕けそうなほど強く拳を握り締め、声を堪えて涙を流していた。春の穏やかな快晴の中、ポツリポツリと地面を濡らしては、すうと星に雫は帰っていった。

「まだ今日は終わってないんだから、早く拭きなさい。あんたが笑わないで、誰が隼人君の憧れを担えるのよ。憧れの人は強く在りなさいって」

握り拳を解かれ、悠の手から柔らかい布が握らされた。それがハンカチだと認識できた頃には、悠は既に隼人を取り囲む中に溶け込んでいた。風邪を引いたわけでもないのに、涙が止まらず、視界が水中のように鈍る。悔しいのか、悲しいのか、嬉しいのか、様々な感情が入り混じり、堪えられなくなった。こんな時に一人だけ。恥ずかしい。

「……っ……くそっ……」

涙を拭うハンカチからは、仄かに優しく慣れ親しんだ香りがした。ようやく顔を上げた頃、案の定隼人は機体から降りていて、先輩や美由紀ちゃんたちからバードフライ飛行場の様々なグッズを貰っていた。本当に喜びに満ちた隼人の顔が潤いに満ちた俺の視界に映り込む。何て子供らしい笑顔なのだろうか。何が子供らしくて大人らしいのかは分からない。ただ、純粋な隼人が子供に戻ったように見えた。

「落ち着いたか？」

「……なんだよ、からかいに来たのかよ？」

「そんなんじゃないよ」

周囲から少し離れたところに智史が来た。さっきの俺を見ていた

らしく、今声をかけられたくない一人だった。

「お前、今ぐちゃぐちゃしてんだろ？俺もだった。だから分かるんだよ。それをからかうつもりはない。ただな……」

智史が視線を俺から隼人に向け直す。

「隼人はお前を待つてる。これで残してやろうぜ。子供の心に。それと俺たち中にも、な？」

手にした一眼レフのデジカメ。普段からよく飛行場で写真を撮っているこの備品。もう、それしか出来ないのか。隼人に感じさせることしか出来ない夢。本当は叶えてやりたかった。友達なら馬鹿をすることくらい厭わなはずなのに。だが、俺は子供としての友達にはなれなかった。

「分かった」

楽しい時間はあっという間だ。それだけ無意識のうちに楽しむことに集中している。まだまだ続くと思っていた時間も終わりを迎えようとしていることが寂しかった。

俺と智史は隼人の下へ歩み寄り、誰かに着せてもらったパイロットスーツに身を包んだ隼人をもう一度フルートに乗せた。

「隼人、記念写真を撮るぞ」

智史や先輩たちが隼人の両親に医師と看護師、スタッフをフルートの回りに集合させる。管制塔にいる小野原管制官たちは離れることが出来ないため、こちらに向かって敬礼をしている。隼人に双眼鏡を使って見せてやると、隼人も同じように管制塔に向かって力を込めれば折れてしまいそうな細い腕で敬礼をしていた。それに応えるように、再びスピーカーからエオリアン・ハープが流れ始めた。全員で何人いるのか分からない少なくとも五十人近くがバードフライ機の周囲に集い、フルートの翼や胴体部にまで人で溢れた。これまでフルートは一度にこんなにも多くの人間に触れたことはないだろう。高峰隼人と言う小さなパイロットが搭乗すると、こんなに多くの人間がその傍で彼を称えるように集う。俺には真似出来ないほど高みにいる証だ。

「健介、もつと笑え。顔固くなつてんぞ」

カメラをセットしている智史が、あちこちに細かくチェックを入れる。最高の一枚にしようとしているのだろう。自分も果たせなかった過去を、ここで果たすために。

「ほら、もつと傍に寄りなさい。あんたの機体でしょ？」

「パイロットなら愛機と共に在れ、健介」

翼に寄りかかっている悠が、俺を見上げてくる。その傍で先輩も同じように急かしてくる。

「兄ちゃん、こつち」

隼人には少々大きすぎるコクピット。顔がやつと覗きだせるくらいに隼人は埋まっていた。

「よしつ、乗るか」

周りから囃し立てられれば、乗らないわけにはいかないだろう。

隼人を抱え上げ、先に俺が乗り込み、俺の足の上に隼人を座らせる。二人で座れば狭いコクピットだが、それも気にならない。準備が整ったようので、タイマーをセットした智史が合図をしてこちらに駆けってくる。人の合間を掻い潜ってフルートの翼を蹴り、コクピットのすぐ後に飛び乗った。身のこなしの軽さに驚きもしたが、カメラを見る、と人の頭を足で挟んでカメラに捻られ、そのままシャッターがパシャッと小さな音が聞こえた。

「智史、お前な……」

写真を撮り終わると、画像チェックへとまた足早にフルートを降りていく。人への謝罪もなしに身勝手に行くのはいつも変わらない。怒りなどよりも呆れに近いものがあつた。

「どうだ隼人。楽しめたか？」

「うんつ。兄ちゃんすごいね。ほんとうに絵かいたよ」

隼人は興奮冷めやらぬ様子で、俺の膝の上で感想を細かく言った。詳しいことは分からなくとも、楽しんでもらいたいと言う当初の目的はどうやら達成されたらしいから、良かったのだと喜ぶのが筋と言うものなのだろう。俺も楽しんだことには変わりない。だが、燻

るように俺の心に残っているものはどう捉えるのが良いのか。後の祭りのような心残りがあるのではないか、まだ出来ることが何かないのか、もっと隼人に楽しんでもらえることはないのだろうか。俺を見上げる隼人の顔を見ると、そんなことばかりが巡ってきてしま

う。

「隼人君、そろそろ戻ろうか」

そんな俺の考えを吹き消すように、医師がフルートの傍にやってきた。隼人も満足げに首を縦に振った。

「にいちゃん。ありがとう」

フルートを降りると、隼人は車椅子に座り、その場にいたスタッフたちにありがとうございました、と礼儀正しく体を乗り出す勢いで頭を下げた。

「隼人、次は一緒に飛ぼうな」

「うんっ」

智史が隼人の頭をクシャクシャと撫でる。ニット帽がズレていて、また可愛いと黄色い声が上がっていた。

「ありがとな、フルート」

久々に乗り込んだフルートに今日の礼を言い、俺も降りた。フルートが役目を終え、無言で鼻を高くしているように見えた。地面に足を下ろすと、これで今日は終わりなのだと言う思いに駆られ、降りることに躊躇いが生まれそうになったが、そこに一步を降ろした。「本当に、今日はありがとうございました」

隼人の両親が深々と頭を下げると、俺たちも全員が同じように頭を下げた。感謝しているのは俺たちも同じ。いつかの自分を思い起こさせてくれた隼人と言う少年と夢。そんな子供心に誰もがまた新たに結束が固くなっただろう。願いが叶う時は、誰もが同じ経験を育んできたからこそ、ここに必ずやって来る。かつて俺たちが通った道を志す隼人にも、いつか自分が幼かった頃のことを振り返る時が来るのを信じて。

隼人が両親に引かれて車に戻る際、花道が作られた。また来てね、

とか今度遊びに行っても良いかな？ とか色々な声を受けながら隼人は一時の夢に別れを告げた。

「隼人君、またね」

「お姉ちゃんもありがとう」

「じゃあな、隼人」

「ばいばい」

小さな手がこちらに向けられ振られる。それに応えるようにスタツフたち全員が隼人を送り出した。両親は自家用車で戻るようので、先に救急車が飛行場を後にした。

「奥田さん、雨宮さん。本当にありがとうございました。これでお子も満足出来たことだと思います」

改めて深々と頭を下げる二人に、悠が、自分たちも楽しむことが出来たと言うが、俺は頭を下げるのが精一杯だった。あれだけ仕事を蔑ろにしてまで取り組んできたことが終わりを迎えようとしているのに、本当にこれが隼人にとって最後の大きな思い出になるのかもしれないと思うと、反省すべき点が次々と浮かんでくる。

「あの、隼人は本当に満足していたと思いますか？」

俺の問いに隼人の両親が不思議そうな顔をしていた。過ぎたことを悔やむより、これからのことを考えるのが当然だということは分かっている。でも俺はそれほど前向きな人間じゃない。だから、どうしても聞きたい言葉があるのかもしれない。俺以上に感情の起伏に吞まれることのないように、隼人に不安な感情を抱かせないように努めている両親がどう思っているのか。それが気になっていた。あれだけ悩んでいたのに、施しようがなくなればケロツと態度を一変させられるほど、家族の絆と言う繋がりは薄くはないはず。「少なくとも、私はあの子があんな風に思いつきり笑った顔は久しぶりに見ました。だから、きつと隼人は夢が叶って満足していたはずです」

穏やかな自愛に満ちたような笑み。そこに偽りも何も感じられない。思ったことを素直に言っただけ。そんな表情に見えた。

「そうですか。それなら、良かったです」

もう一度頭を下げ、二人の車を見送った。祭りの後の静けさは好きじゃない。余韻に浸るのも乙なものかもしれないが、寂しさが沸く。感傷に浸るには、俺には不似合いだ。

「終わったわね」

「終わった、な」

他のスタッフが後片付けに戻る中、俺と悠はしばらく車の出ていった後を静かに見つめていた。本当に隼斗が、楽しんで、夢を輝かせてくれたのか。それだけが気がかりだった。

それから四十七時間後。隼人のもう片方の瞳も、静かに光を失った。

隼人は本当に真が強い子供だ。失明と言うことも、どう言う事なのか理解出来なかったのかもしれないが、取り乱すことをしなかったそうだ。夜眠りに就き、翌朝目が覚めたら、もう光を感じ取れず、
『お母さん、まだ夜かなあ？ なんにも見えないよ？』

そう言ったそうだ。検査の結果を聞いた両親は自宅で泣き崩れたらしい。まだ六歳の子供が、自分たちよりも何分の一しか生きていない我が子から、光が奪われた。だが、俺はご両親は気が気ではないだろうから、申し訳ないが、俺は隼斗が今の時期に盲目になったことは、先を考えると、良かったと思っただ。たった六年にしか光を見えなかったが、それでもこれからの暮らしを考えると、不安や恐怖などの重圧が少しでも薄れるように思えた。

隼人の母親はそれ以来毎晩病院に泊まりこみ、隼人の傍を片時も離れることをせず、腕の中で、

『隼人、愛してるからね』

そう言い続け、それが口癖のようになっていた。隼人の父親もいつもは残業などあまり見舞いに来れなかったそうだが、その日以来欠かすことなく毎日隼人の元へ来ている。夫婦の間に軋轢が生じ

ることが良くあるそうだが、隼人の両親は以前にもまして強固な絆を築き、隼人の残された時間を家族で過ごすことを守り続けている。治療の間は外出などもつてのほかだったが、今は時々隼人は自宅に戻り、家族の時間を過ごしている。日に日に悪化を辿る神経芽細胞腫の転移はその間も着実に進んでいる。

俺は溜まった仕事と航空祭と、腕のリハビリで、これからもつと隼人と語らう時間が欲しいと思っていたのに、その間逆を日々追っている。病院に行ってもリハビリで時間が作れず、挨拶をするだけで十分もいられないことがほとんどになった。その間に隼人は首にも転移したらしく、声が掠れるようになっていた。僅か一月ほどで隼人の顔から、夢を叶えた日のような笑顔は見る事が出来なくなっていた。

「隼人にこれ、持っていてやれ」

智史に渡された日記帳のような大きさのアルバム。智史は隼人のことを知っていた。それでも俺に持って行けと俺の胸でその手を離した。

「見えなくてもそこにあるのは紛れもない、隼人の夢と思い出だ。絶対に渡せよ」

ページを捲ると、いつの間に撮ったのか、数多くの写真が貼られ、スタッフたちからのメッセージも添えられていた。

翌日俺と悠はリハビリも兼ねて隼人の元を訪れた。俺から声をかけなければもう俺だと気づいてもらえないということに気づかされた時は、正直大きな壁を感じてしまった。今までは部屋に入った瞬間、

「兄ちゃんっ、お姉ちゃんっ」

と、元気な声が返ってきた。体調が優れない時でも、必ず隼人から俺に声をかけてきていた。それが急になくなり、俺から近くで声をかけなければどこに誰がいるのかまだ慣れていないせいもあり、聞き慣れない声や足音には神経を使うようになっていた。それが、いつかくるとは分かっていたとはいえ、当たり前のことだったこと

が崩れてしまい、俺が受けたショックも大きい。

「隼人、これ、あの時の写真だ」

努めて普通に振舞う。平常心を心がけて。それでも、目の前の光景に、俺一人だったら、言葉も出せなかったはずだ。隣にいる悠の大きさが、ここまでとは思いつきもなかった。

「アルバム？」

「そう。この間の写真と皆から隼人君にメッセージを書いてもらった」

隼人の腕を取り、小さな腕の中にそつとアルバムを抱かせた。隼人にこれを言うのに、正直時間が掛かった。その目はもう光を映し出すことが出来ないと言うのに、それを踏まえた上で隼人にあの日の思い出を切り取ったアルバムを渡す。それがあまりにも酷なことに思えてしまったが、悠が俺の手を取って、行くわよ。と病室へ入り、俺も決心した。恐れが悠の手から吸収された気がして、隼人に渡すことが出来た。

そんな俺の思いとは裏腹に、アルバムを受け取った隼人の表情は晴れやかだった。

「兄ちゃん、どんなしゃしんがある？」

そんなことを聞いてきた。ペタペタとページを捲りながら写真を触る隼人は、見えない代わりに何かを感じ取るうと懸命になっているようだった。

「そうだな、これは隼人が俺のフルートに乗った写真だぞ」

隼人の手を取り、あの日隼人をフルートに乗せてスタツフ全員と撮った写真の上に隼人の手を添えさせた。小さくて細い手。簡単に握り潰せそうなくらいに小さかった。初めて女を抱いた時の弱々しい体の柔らかさよりも、隼人の手は神経と力の作用に体力を思った以上に消費した。壊れそうで力を抑えながらも、壊れることなんかなかった女の温もりとは違って、壊れてしまいそうで力を抑えないと、本当に壊れてしまう弱々しすぎるその手には、恐怖にも似た胸の高鳴りを感じないではいられなかった。

隼人の目には一体どんな思いが浮かんでいるのだろうか。写真を隅々まで触る隼人の仕草にはそんなことを感じた。悠と共に隼人の手をとり、一枚一枚これはどんな写真なのかと、出来る限り詳細に伝えていく。隼人も自分の中にある思い出を引き出して、どんな写真があるのかを感じているようで、「ここね、僕見てたよ」や「これすごかったよね」など、俺の予想を良い意味で裏切って表情には穏やかな笑みが浮かんでいた。それを見るのが、たまらなく悔しかった。

「あの、これ。どうぞ」

隼人の元を離れる際、俺は隼人の母親にもう一冊のアルバムを贈った。隼人に贈ったアルバムと指して変わりないもの。ただ違うのは、隼人にはスタツフたちからの激励などのメッセージがあったが、母親に贈ったものには、俺と悠に智史や美友紀ちゃんなど、今回の隼人の夢のために一番身近で奔走してくれた人間からの一言と、後には一枚一枚の写真の下に一言書けるようにスペースを設けていた。俺たちで、この写真はこういうものなのかと説明を加えてしまうよりも、隼人の家族として、親として感じたものを残してもらおうと悠の提案で、そう作った。

「ありがとうございます」

何度も何度も母親は俺たちにそう言った。本音を言えば、今述べたのはあくまで半分だ。残りの半分の本音は、隼人と両親のことを思ってた。考えたくなくても嫌でも事実だけが徐々に未来を少なくさせる。俺が隼人と出会って二ヶ月を迎えようとしている。ボードフライ飛行場での航空祭も残すところ日にちが目に見えてきた頃合だ。リハビリも次第に進んできて、仕事終わりに立ち寄る日も増えて、隼人とも会う機会がほんの少しだけ増えた。

出会って始めの頃は、どこにでもいる元気な少年と変わりなくて、どうして入院しているのかと思うくらいだったというのに、今では、声も八キ八キとしたものではなく、か細く途切れ途切れになることもあり、体にも目に見えて大きな変化が見られるようになっていた。

腹部腫瘤や肝臓への転移に伴う腹部の肥大などがはっきりと見られ、母親の話では、興奮や癲癇を上手くコントロール出来なくなることも増え、夜に何度も起きてしまうことがあるらしかった。下肢も今ではほとんど自力で動かすことが出来ず、寝たきりのまま常に誰かが傍に付き添う必要があった。嘔吐や下痢などの抗がん剤治療の副作用も相変わらずで、俺たちが来た時には必ず笑顔を浮かべていたが、それも無理をしていることは明らかだった。点滴や呼吸器をつけている姿を見る度に、俺の心に棘が刺さった。無理な治療をしなくなつて、治療中に比べたら穏やかな日も多いが、それだけに明日を迎えることがきつと隼人の両親には、俺や悠以上に怖いと思う日が多くなつてくるはずだ。

「いえ、私たちのほうこそ、こんなことしか出来なくて……」

悠も隼人の前ではいつも通りでいるが、内心は俺とそれほど変わらないはずだ。他人から見れば普段から静かだから気づかれないが、気に病んでいる時に見せる僅かな表情の変化を見逃すことが出来なかった。既に左腕もそれほど生活に支障をきたさなくなったのだが、ずるずると悠の家に未だに世話になつていて。だから、特によく分かる。俺へのいつものネチネチと不満を言う口調にも陰が見えている。

「そんなことはありません。あの子にはきつと一番の思い出になりましたから」

私たちには出来ませんでしたから……。と、嘆くように一言だけ言うと、俺たちは仕事へと向かった。一人の子供の命が、家族の温もりを強固にした代わりに、その代償として支払い続ける時間の早さには誰もが心の内では悔いている。それが日に日に俺を打ちひしがせるように隼人の体から力が薄れていくのをこの目に焼き付けた。

「また、自殺だつてよ。全く、なんちゅう世の中なんだか」

バードフライの訓練が終わり、休憩をしている智史が夕方の二ユーースをデスクに肘をつきながら眺めていた。それを正面に見つつ俺は、航空祭の最終準備の調整に追われていた。地域住民との飛行展示等の騒音問題から、他の航空基地からの招待飛行の時間調整と演目等の打ち合わせ、フリーマーケットの出店者の出店場所や費用に精算など、相変わらずの雑用に磨きが掛かっていた。その間に飛行手順から技術の総復習から基礎体力の向上と筋トレなどと俺も本格復帰に向けて本腰に取り組むようになっていた。一刻でも早くフルートに乗り、隼人へ俺の復帰を見てもらおうと言う事が俺を突き動かしていた。

「ほんと、弱い世の中になったもんだよな」

誰にでもなく智史は愚痴るように呟く。俺は書類に目を通しながらも相槌を打った。生活に便利なものが溢れ、活動自体の低下が大きくなるこの現代。昭和のように近所付き合いも希薄になり、隣人の名前すら知らない生活環境の中でも不自由なく生活できるようになった。便利になった分、必要以上に強くなる必要もなくなり、誰もが打たれ弱くなっている。理不尽なことに対しては、感情を抑えられずすぐにキレるし、ストレスを発散させられる趣味も何もなく溜め込んで、簡単に死にたいと口にする者が溢れている。どうして自分だけ幸せになれないのかだとか、なりたいものになれないだとか、一度の失敗や裏切りですぐに自虐に走る。そういう事を言える時間があるのは、幸せなことじゃないのだろうか。そう愚痴りたくなる。

「世の中ホイホイと渡れねえから、面白いつてのによ」

智史の言葉にすぐには頷けなかった。俺も正直打たれ弱いし、精神的にも弱い部分が隼人の一件もあり、より浮き彫りにされた。長い人生で辛いことも何もなく、不自由もなく、願えば叶い、気ままに生きる。そんなことを思うのは普通だし、別に悪いことじゃない。だが、そんな人生は人生じゃない。俺は堕ちるところまで落ちた事はない。だから、俺の言葉をそんな経験をしたことがないから言え

るのだ、と非難されれば素直に受け入れる。

それ故に言えることもある。思うこともある。ほんの二十年も生きていない子供が、人に死ねだとか、死にたいだとか口にするのを聞く度に、本当はぶっ飛ばしたくなる時がある。今、堪える、耐えるという力を身に付けられない人間が多い。だから、腹が立つ。子供は耐える方法を知らない。だから、死と言うものの本質を考えないで自殺へ歩む者がいる。死ねば楽になる。そんなものは戯言だ。死んで何になる。自分が自殺すればどれだけの負担が身の回りに降りかかるのかをこと細かく考えた上で自殺をした人間はいるのだろうか。いや、いないだろう。いたらそいつはただの馬鹿だ。

「ガキも弱くなったよな。殴り合いの喧嘩も出来ねえ男もいるしよ」
智史は元々不良だったと自分で言っている。本当かどうかは不明だが、よく喧嘩をしたと言う。今では決闘罪などと言う法律もあり、そんな喧嘩も出来ない世の中だ。言葉や間接的に他人を貶めては楽しむ。そして自分がされれば、すぐに死を思い浮かべる。便利な世の中になった弊害の一つだろう。

「軽い命だとか思っているなら、隼人と代われって言いたくなるな」
簡単に死を考えている人間には、俺は真っ先に今はそう言う。すぐに死と言うもの口にする奴には大人だろうが子供だろうが、気を失わせてでも隼人の前に突き出せる気分だ。ろくな夢も抱かず、努力もせず、苦しい辛いことから逃げ、自分とは無関係だと嫌なものは拒否し卑下する弱い人間。そんな奴がのうのうと生きている間に、隼人はたった一つの小さな子供の夢を抱き、見ることが精一杯で、明日を生きることすら日に日に難しい中を、家族や思い出をとて、とても大事にして、自分を苦しめる病魔と闘い続けている。隼人に俺は強くさせられた。まだ子供なのにだとかはもう言わない。俺の方がいかに子供だったのか思い知らされた。命を軽いものとして考えていない奴がいるなら、俺はその命を隼人に差し出せと最悪脅すことも厭わないかもしれぬ。

「お前、人のことそんなに言えねえだろうが」

智史が苦笑しながら俺を見る。分かっているさ、そんなこと。俺だって辛い中でも明るく生きている隼人を知ったのは最近だ。だから、俺にそんなことを言える資格はないだろう。だが、思ってしまったのだ。軽んじる者と重んじながらも感じさせない者の格差と言えるようなものを。

「別に公言はするつもりはない。愚痴だ。聞き流してくれ」

思うだけだ。思うだけ。だから、悔しい。それしか出来ない俺がこうしていることが悔しいのか、隼人に今は何もしてやる事が出来ないことが悔しいのか、それが分からないから悔しいのか、正直いっばいっばいなのが一番悔しいのかもしれない。

「お前のやれるだけのことすれば良いだろ。無理してやっても空回りするのがオチだ」

見透かしたような智史の言葉が、悔しくて、救いになる。俺はこいつをライバル意識しているが、本当は始めから俺なんて相手になっていないのかもしれない。隼人の件も自分の姉たちのこともあり、すでに過去の清算を終えたように智史は落ち着いている。

「ま、お前が俺に勝つなんて百年早えってことだ」

「……そうだな」

からかうつもりで言ったのだろうが、俺にはそれすらも誠のことししか思えず、智史が拍子抜けした顔をしていた。

「準備順調？」

「今の所は特に問題はないな。天候くらいなもんだろ」

帰路を急ぐ車内には、淡々とした会話が時折挟まるだけで、音楽が静かに静寂を包み込んでいるだけであった。横目に流れる夜の闇闇が、隼人の見ている世界とどちらが暗いものなのだろうか、漠然と考えていた。数日前までちらほらと通り過ぎていた光も、今の隼人にはとても眩しいものなのだろうか。懐かしくて温かみのあるものなのだろうか。自分を守ってくれる家族と言う両親を六年しか見ることが出来なかった隼人。隼人がまだ子供だったから良かった

のかもしれないと思うこともある。そんなことを理解できる年じやないだろうからその悲しみも小さなもので済むのかもしれない。

「明日が最後の休みか」

明日は航空祭までの最後の休日。以降は航空祭と復帰へ向けてのより本格的な業務復帰への足取りを急がなければならぬ。恐らく隼人への見舞いもしばらくは出来なくなるだろう。悠もちょうど明日は休みだ。俺と同じように悠も忙しくなる。

「言いたくはないけど、これで最期かもって思ったほうがいいわよ」

悠の言葉に、極力触れないようにしていた事実が突きつけられた。窓の外を見ていた俺の視線は悠に瞬時に向いた。言いたくないなら、言わないで欲しい。

「そんな顔して私を見ても、どうしようもないでしょ」

悠は全く俺のほうを向くことなく運転に集中して、前を向いたままだった。対向車のヘッドライトが悠の瞳を照らし出し、憂いに満ちた悲しい瞳が、ただ前を向いていた。

「あんたも、本当に覚悟しておいたほうが良いことくらい分かっているんでしょ？」

自分を押し殺しているような悠。いや、実際に押し殺しているのだろう。俺がまったくじけなないようにするために。いつだって、仕方がないわね、と呆れたようなため息を漏らしながらも、世話を焼いてくれる。だが、今回は今までのこととはわけが違う。仕方ないわね、の一言がない。人を支えるだけの余裕を準備出来ないのだろう。「私だってそんなに強くはないんだから、今はあんたと同じ。悪いけど、今は他に言えない」

「……悪い」

悠の言葉に、それしか言えなかった。自分のことをあまり口にしてない悠が、ポロツと漏らした本音。久しぶりに聞いたかもしれない。それに俺は返す言葉が見つけれなかった。

何も変わらない、病院の中。薬のようなシップ臭いような匂い。

順番を待つ患者の静かな声に名前を呼ぶ医療事務や看護師。談笑に花を咲かせる医師と入院患者の家族。学校を小さな社会と例えることもあるが、病院も例えることが出来るだろう。その中を悠と歩く小児病棟へ進むと、静かな雰囲気が一掃される。どこからともなく聞こえてくる子供の泣き声。町の喧騒にも似た日常が今日もここにはある。

「何も変わらないようで、変わっているのよね」

悠が優しい目を浮かべて親子を見つめながら俺の隣を歩く。そう、変わらないようで同じ光景はそこにはない。変わらないようで変わり続ける日常。そこには他人の目にはつかない悲しみや苦しみを乗り越えた上で成り立つ光景もまばらではない。初めて足を踏み入れた時は、圧倒的な光景に言葉を失うばかりだったが、慣れればそれほどでもなくなった。通院のついでに見舞うことになったことが当たり前のようになっていたから。

「そうだな。変わって行くんだな、どこも」

変わらないことはない。そう見せる事は出来ても同じであり続けることは難しい。それを維持することは、どれほどの苦労や労力の上に成り立っているのか、俺にはあまり分からない。気がつけば、変わっているし、変わっていないように見えることもある。

エレベーターに乗り、離陸時に感じる浮揚感を微かに感じながら病室のある階で降りる。何度も通うようになって顔見知りになった人たちにいつものように挨拶を交わし、歩く。

「隼人、おっす」

「おはよう、隼人君」

横になり、何をするでもなく静かにしている隼人。入院したことはない俺には呼吸器を付けている隼人を見るのが痛々しくてなかなか直視することが出来ない。

声のしたほうに隼人が顔を彷徨わせる。まだはつきりと特定出来ない隼人に俺たちから場所を知らせるように頭を撫でてやる。そうすると隼人は俺たちに気づいて安堵したように、ほわんとした笑み

を浮かべる。その隣で隼人の母親が静かに俺たちに挨拶をしてくれる。ここ最近のいつものことだ。

「どうだ、調子は？」

見ていて分かってしまうのだが、つい言葉が見つからず毎回そう訊ねてしまう。ボキヤブラリーが少ないのが、こう言う所でも痛手になるのは不甲斐無いと思いつながら、いつの間にか忘れてまた同じ事を考えて、を繰り返す。

俺の言葉に隼人は小さく、

「あたまいたい」

と、掠れた声で応える。その度に、そうかとしか言えないのに、聞いてしまう自分が情けない。隼人には見せるわけにはいかない表情。これは俺が自分で決めたわけじゃない。隼人の両親や医師たちの申し出でもある。隼人には残された時を楽しみ思い出でを過ごしてもらおうと言う話で、俺たちも極力気を遣っている。

特に何かをしてやるでもなく、こうして見舞うようになってからもう随分と時間が流れた。このまま隼人の神経芽細胞腫が良くなればいい、そんなことを思いたくとも、もうそれも思えない。ただ、このままの時間が少しでも長く続けば良い。いつもここに来る度に強く思うばかりだ。

腫瘍の位置により、徴候は様々な小児ガンに侵された隼人。今までCTスキャンやMRI、胸部レントゲンや骨スキャン、骨髄生検、ホルモン検査に血算、血中・尿中カテコールアミンなど様々な俺の知らない検査を隼人は繰り返し替えし、どこに転移したのかを調べ、手術や放射線治療の治療を行い、果ては化学療法にまで及び、治験での骨髄移植なども検討されたが、その術が叶い、隼人が快方へ向かうという望みは儚い夢物語として夢から覚めてしまった。残された現実世界には、初めは絶望や悲哀に満ちた空気もあった。それを知っているのか知らないのか、隼人は何も変わりなく笑顔を絶やさなかった。俺たちの前では決して。

「強いな、隼人は」

俺の言葉に不思議そうな顔で返してくる。隼人は紛れもなく強い子だ。家族の前でしか弱いところを見せたことがないと母親が言ったのだから、他では俺たちに振舞うように頑張っているのだろう。俺たちが隼人に不安を感じさせないように話し合いで決めたように、隼人は一人で無意識のうちに俺たちに悲しい思いをさせないように。それをたった六歳の子供が大人に向けてしている。どれほど強いことか。

「今日も、読んであげるね」

悠がいつものように隼人の傍に座り、絵本を読み聞かせる。悠の手にはもう何度読んだことだが分からないくらい読んだ絵本が二冊。それを隼人が今日もリクエストし、悠が読み聞かせる。絵本と言うものは、子供には現実世界から飛び出すことの出来る夢世界の一つだ。大人に成れば小説だろうと物語だろうと文字の羅列だけで想像できるが、子供にはそこまでの想像力がない。だから、絵が重要な役割を果たす。今それを見ることの出来ない隼人には、悠の読む声でどこまでその世界が広がるのだろうかと思う。悠が読み聞かせをする度に少し気になった。

悠の読み聞かせを聞いている時の隼人は、本当に子供らしい安堵した表情を見せる。それはきつと母親のように優しい声と纏う空気に安心出来るからなのだろう。俺にはないものだ。隼人の母親も悠に隼人を任せると、花瓶の水代えに部屋を後にした。常に付きつきりと言うのはやはり息子であろうと、それなりの疲労は溜まるだろう。自宅とは異なる生活空間にはリラックスするには限界があるだろうし。悠のおかげで少しはマシになってくれれば良い。何も出来ない俺が言うのもなんだが。

読み聞かせをしている悠とそれを心地良さそうに聞いている隼人を俺は椅子に座ってただ見ていただけ。今では色々制限があるのだと思うと、可哀想に思えてならない。まだ遊びたい食べたい盛りだというのに、体の自由は細胞腫による合併症などで、機能の低下や抵抗力の低下でろくに起き上がれないし、白血球の減少によって

抗がん剤治療を行うことで、加熱処理を加えていない物を口に出来ない生もの禁止となり、食事管理されているものばかり。俺たちが初めに持ってきていた果物なども、本当は隼人は口にしていなかった。出来なかったのだ。だから、同室の子にあげたりしていたのだろう。こんな若い年齢で色々和我慢しなければならぬものがあるのは、どれだけ精神的ストレスが溜まることだろう。

駄々を捏ねない隼人に対しては、その心の成長の早さには驚きを軽く通り過ぎていく。溜め込むにも爆発しない、爆発してもあまり表に見せることをしない強さをその年で身に付けているということは、脱帽するが、同時に悲しい。無邪気な子供がどうしてこれほどまでに大人びてしまうのか。子供は焦って大人に成る必要はない。焦れば焦るだけ、大人に成った時の周囲に対する戸惑いは大きく強いものになる。大人ぶるといふことと、大人に成るといふことは天地の差がある。だから、ゆっくりと色々な世界を見て、知って、感性を磨けば良い。我が俣を言う事が子供の仕事の一つでもあるように。

結局、隼人は悠の読み聞かせを聞いて、疲れたのか眠ってしまった。今日を逃したら、しばらくは来れなくなるから、色々と話しようと思っていた。いつものようにバードフライのことや、隼人の夢のこと、あの日の思い出に、ここでの生活など浮かんでくる話題は尽きないこともないが、隼人を見るとその話題が言葉として出て来なくなってしまう。

「可愛い寝顔ですね」

「本当にね……」

戻ってきた母親がそつと隼人の額に手を当てる。頭を撫でるにも帽子に隠された額を撫でるよりも、そつと額を撫でるほうが良いのだろう。見ることが出来なくとも、温もりのある優しい香りのする母の手だけはすぐに分かるはず。隼人の寝顔がさらに柔らかくなつたように見えた。悠も隼人には癒されているようだ。あれだけ俺に對してもなくとも、悲しい目をしていたのに、今は全くその目ではなかった。

「容態は、どうなんですか？」

隼人の手前、聞くわけにもいかなかったが、隼人が眠ったのであれば聞こえはしないだろう。

「良いとは言えないわ。薬で何とか進行は緩やかに出来ても、どうにもね……」

見ればわかるでしょ？ そう言われている気分だ。今の隼人を見て健康優良児だなんてとてもじゃないが言えない。いつの間にこれほどの時間が流れてしまったのだろう。隼人の夢を叶えてやるために奔走していた日々が最も輝いていて、それが終わってしまったから今日まで、祭りの後の静けさが続いている。俺としては最期の時まで隼人にはキラキラとしたものを感じてもらいたい、その時を迎えるものだと思っていたが、実際には、穏やかに過ごすためだけの治療を行い、好きなことを許されても、体が起き上がることもすらもさせてはくれない。声を出すのも疲れるようで、見えなくなつた瞳には、瞼が下ろされたままだつた。発熱や嘔吐、倦怠感が常に隼人を蝕み、もう一人で遊ぶ気力も残されてはいないようで、正直、直視できない光景が来るたびに変わってはいなかった。

俺たちの前でとても穏やかに眠っている隼人。海が凪ぐように、本当に静かで、呼吸器越しに小さな呼吸音が聞こえ、腹部が一定の少し速いリズムで上下を繰り返している。誰もが今の隼人を見れば、きっと和むだろうか。小さな命が懸命にそこに在るのに、それがそこに在ることが当たり前に思えて仕方がない。

「でも、これで良いのかもしれないわね。隼人にはきっと楽しい思い出ばかりが宿っているから」

不幸中の幸い。それを今は誰もが願っているから、その手助けを取っている。もう二度と隼人が元気に駆け回ることが夢でしかなくなつた今、せめてもの隼人へのこの世界に生まれ出たことを、少しでも良かったと思ってもらえるように、隼人を多くの人が包み込んでいる。静かに揺れるゆりかごの中で隼人は今、何を感じているのだろうか。あの日叶つた夢はまだ、本当に叶つたわけじゃない。願

っただけだ。だが、隼人はそれに満足してしまったのだろうか。あの日の思い出を語ることはあっても、これからのことを聞いた記憶がない。

「隼人、お前は本当にこのままで良いと思ってるのか？」

寝顔に聞いたところで、返事はない。ただ反応したのは悠と隼人の母親だけだった。

「どうということよ、健介？」

「いや、単に本当にこれで良かったのかって思ってな」

何かすつきりしない。あの隼人を飛行場に招待した後日からずっと、心のどこかで燻っているものを感じる。隼人は満足げだから良いのかもしれないが、俺が何故か満足出来ない。

「奥田さん、本当はあなた自身が隼人に見せてあげたかったのではないかしら？」

母親の言葉に顔が上がった。

「俺が、隼人に……？」

見せてやりたかった？

「そうかもしれないわね。もとの言いだしっぺはあなたなんだから、ただ見ているだけの事があなたには、辛かったんじゃない？ 今出来ることをすれば良いのに、自分に素直になれなくて、先の理想や過去の悔いばかりに気が回って、空回りしている自分に気づいてないのよ」

悠が隼人の母親の言葉に同意して頷く。前に誰かに似たようなことを言われた気がする。

「奥田さんは、仕事場の方々との協力の下に隼人にあの日を迎えさせるということよりも、自分自身で飛行機を操縦して、隼人に見せてあげたかったから、今そう思っているのでは？」

隼人の母親と悠は顔を見合わせて、ふふつと同時に少しおかしそうに笑った。途端に何故か気恥ずかしさが湧いてきた。それと同時に燻っていたものがフツと消えた感覚も起きた。

「凶星ね。あんたは自分の本音を自分で分かってないのよ。人に頼

り過ぎなせいよ」

いつもの悠の俺を見下すような呆れた口調。それをおかしそうに微笑を浮かべながら隼人の傍を決して離れず、隼人の小さな手を離さないように繋いでいる隼人の母親。二人からは母親や同僚などではなく、女として俺を笑っているようにしか思えなかったが、俺自身が二人の話に納得してしまい反論する気も起きなかった。

「もう、迷わないでいられるようにならないといけないかもしれないよ？」

隼人の母親が、俺を隼人を見る目と同じ目で見てきた。

「そう、なんででしょうか……？」

まだ、はつきりと分らない。

「もっと素直になりなさいよ。あんたは目の前のゴールに行くのが怖いだけでしょ？」

ドンッと俺の背中に悠の言葉の衝撃が来た。それこそ凶星だという証。俺が認めようとしなかった事実の波が押し寄せて俺を打ち付けていく。

「見栄を張っても、格好悪いだけよ？」

隼人の母親の言葉もダメ押しだ。俺の中にあつた事実から目を逸らし続けた高慢が崩壊していく。

「男ってどうして、こうも変なプライドを持つんでしょうね？」

「素直が自分を認めることになることに、気づかないんですよ。男は皆格好つけたがり屋だからねえ」

二人は息が合ったように俺を見る。いつまでもゴールしないのは格好悪いわよ。だとか、事実を偽りで隠してもそこにあるのは事実だけだと真正面から突きつけられる。一皮剥けなさい。そう親に諭されている気分がして、分かっているから受け入れにくい。そんな意味不明な感情に、俺はどうしたら良いのか答えが出せそうではない。それこそが高慢なのだろう。

「隼人、お前は見たいって言ってたよな？」

いつだったか、隼人は俺の飛行が見たいと言った。聞こえている

のかいないのか、隼人の寝言のような小さな、う……………ん、
と言ったように声を漏らした。

(これで十分じゃないのか？ 俺おまえ)

誰かが俺の中で問いかけてくる。俺の知っている奴で、知らない
奴だ。

(いつまでも格好つけてんじゃねえぞ。今の俺おまえはかなりダサイぞ？)

俺の前にぼやけた顔の男がいる。顔以外は俺とまるで同じだ。「
お前は誰だ？」なんて訊ねたりしない。答えは俺が考えている答え
が返ってくるのが分かっているから。

(……………そうかもな。しょうもない子供みたいだよ)

(みたいじゃなくて、そうだってんだよ)

目の前の男が「俺おまえ、馬鹿じゃねえのか？」と笑っている。だから
俺も笑う。「うるせえよ。お前おれのくせに」と言いながら。

(それじゃあ、見せてよ)

俺と男の間に子供が入ってきた。とても元気な子供だ。眩しいく
らいの笑顔を浮かべてキャツキャツと弾けている。いつか見た、誰
かに似ている。

(僕、見たいな。フルートと空に描く、兄ちゃんの、夢を)

ニコツと何の穢れも知らず、これからも穢れを知ることの無い純
真無垢な少年の瞳。色々なものが溢れているその瞳に、俺を取り囲
んでいた壁が風で吹き飛ばされるように崩れ去っていく。

(やくそくでしょ？)

(良いとこ見せてやれよ、俺おまえ)

どこかに吸い込まれていくように、俺が少年とお前おれから離れてい
く。俺に向かってめいっばいに腕をブンブンと振っている少年と、
格好つけるように片手を俺にかざす俺。不思議ともう、その少年た
ちには会えないだろうな、と思った。だが、悲しくはなかった。む
しろ嬉しかった。何でなのかは分からない。そう思ったただけだ。

「健介？ どうかしたの？」

不思議そうに悠が俺を呼んだ。隼人の母親は何故かうふふつ、と

笑みを浮かべている。独り善がりか、隼人の母親の手を握る隼人の手が先ほどよりも強く握り返しているように曲がっているように見えた。

「いや、別に。任せるよ、隼人。約束する。俺とフルートで必ず見せてやるからな」

本当にもう、迷う気がしない。高慢プライドが誇り（プライド）に変わったからなのかもしれない。気分が晴れやかに感じる。そんな俺を見て悠と隼人の母親がまた微笑むように笑った。

「男って、どうしてこうも面倒臭いのかしらね？」

「本当ですね。この馬鹿は特にですから」

「でも、嫌いじゃないんでしょ？」

隼人の母親がどこか含んだような笑みで悠を見る。

「そうですね。でももう少し男らしいところも見せてもらいたいですけど」

難なく受け返す悠に、あら・・・？ と意外な答えを受けたように母親がもう一度微笑んだ。

「それじゃあな、隼人。待ってるよ、絶対に連れて行ってやるからな」

「それじゃ、今日はお邪魔しました」

「いいえ、私も良い気分転換になったわ。ありがとう。でも、ごめんなさいね、隼人起きなくて」

一時間ほど病室にいたのだが、隼人はそのまま目を覚ますことなく、今も静かに眠っている。目が見えない分、周囲の同室の子達の声などにも敏感になっているはずだから、その疲れもあつてか、カーテンで仕切られたベッドの中で母親の手をしっかりと握り締めたまま寝息を立てていた。起こさないように俺たちは一度隼人の頭を撫でて、部屋を後にした。

「あの数分の間に、随分と変わったんじゃない？」

車中で悠があの時、俺が変わったことが不思議だったようで、珍しく明るい表情で聞いてきた。

「そうか？　そうかもな」

上手く言葉に出来ないから言わないが、変わったのかももしれない。俺と恐らくあれは少年せいねんだろう。あの夢を見たいと言っていたのは俺が知る限り、たった一人の少年だ。あの笑顔は間違いない。そしてあの男も俺を解放した。だから俺は変わった気分を感じている。本当に変わったのかは、結果を出さなければ分からない。だから、やっつてやろうと思っっている。

「よしっ。まずは航空祭とこの腕だな」

「………無理はしないようにしなさいよ」

俺の言葉に悠が苦笑を漏らしていた。

再び火のついた俺は、リハビリの甲斐もあり左腕の力はまだ昔ほどじゃないが、握力も回復してきた。車を運転するくらいなら分けないのだが、悠が万が一を唱えてくるので未だに居候させてもらっている。俺以上に忙しくせに、俺以上に忙しく見せない悠には、家の中だけでも自宅なのだから寛いでもらおうと俺なりに色々頑張っているつもりが、その度に手際が悪いだとかと言われ、今は大人しくすることに努めている。

「奥田さん、これ、頼まれていた資料です」

「ありがとう。助かるよ」

「いえ。他にも何かあったら呼んでくださいね」

美友紀ちゃんとは相変わらず、いつもと変わらない態度で接してくる。その半面で、その度に俺は先輩から鋭い視線を感じる機会が増えた。自分が狙っていることを俺が知っていて、尚且つ俺が美友紀ちゃんを一度フツたにも関わらず、特に何かが変わったように見せないことに嫉妬でもしているのだろうか。そんなことを口にするとなんか分かったものじゃない。

「健介、最近隼人はどうなんだ？」

航空祭が間近に迫る中で、智史はよく隼人の事を尋ねてくる機会が一番増えた奴だ。俺だつてリハビリに時間を取られて面会時間を

過ぎて合える日も疎らなのだから、詳しい事情までは耳に挟んでいない。

「良くはないな。寝ている時間が増えて、あんまし話す時間もない」
分かっている。それだけ症状が悪化していることくらい。病室に行けば、隼人の母親が隼人の手を握っていたり、頭を撫でながら、愛していると言うと、僕も、と小さな声で必死に応えようとしている姿を見れば、今がどれだけ一秒でも名残惜しいのかが分かってしまう。

「航空祭、見せてやれたら最高なんだけどな」

智史が遠い目をしていた。こいつも色々な過去と現実を思いを馳せているのだろう。だが、時間という絶対逆らえない波の中では、ほとんど俺たちでは手が出せないことも分かっているのだろう。

「ああ、俺も約束したからな。いつまでも雑用なんてやってる暇はない」

かと言って、ただ待つだけの時間は過ごせない。隼人はもう、治らないのだ。だから、俺は縋っている。約束に。隼人もきつとまだ夢を見ているだけで感じていない。俺に出来ることは、隼人に見せるだけ。両親のように隼人を守り通すことは出来ない。医師のように隼人の病と闘う術もない。悠のように隼人を包み込んでやることも難しい。だから一刻の猶予も惜しいくらいの毎日だ。

「焦燥は失敗の手始めだ。お前の悪い癖だ。治るもんも治らんぞ」
藤沢上官に呆れられるくらいに俺は出来るだけ早く、早く、と一日一日を急いでいた。隼人には出来るだけ遅く、遅く進んで欲しい残された一日一日を。

穏やかな風が吹き渡る快晴の日曜になるはずだったバードフライ飛行場。誰もがそれを望み、きつとそうなるだろうと思っていた日だが、空の彼方に居るであろう神とやらは、そう易々と願いを聞いてくれるものじゃないようだ。多くの人間が願いを言えば、神だつて一度に聞き取れるはずがないだろう。だから俺たちの願いは、聞

き取れなかったようだ。

「今にも降り出しそうだな」

「このまま行つてくれると良いんだけどよ」

強い日差しの中でと言うのは、俺も好きじゃないが、バードフライの曲芸飛行もあるため、やはり青空の一つは拝みたい気分だ。やけに生暖かいというか、蒸し暑い曇天の日曜。雨天ではないため、予定通りバードフライ航空祭は開催されることとなり、いつも以上に朝から多くの人手に賑わう会場内で、スタッフたちはてんやわんや状態で各自仕事に励んでいた。昨日から泊り込みの悠とはまだ顔を合わせていないが、恐らくは午後からのフライの最終チェックに追われているはず。上官たちはブリーフィングルームで招待飛行の人と打ち合わせだし、俺も俺で会場案内やフリマの総合管理と、普段の雑用に磨きの掛かった仕事にあくせくしつつ、今こうして智史と肩を並べて観客を眼下に、しばしの休憩を満喫している。

「昨日、行つてきたんだろ？」

智史の問いが何を尋ねているのかすぐに分かる。

「前と同じだ。むしろ前よりも小さく感じたな」

子供なのだから当然だが、そういうもの以上に隼人が小さく感じた。少し早い呼吸で、ぷっくりとした腹部が上下し、筋力もほとんどない枝のような手を温かそうな母親の手がしっかりと包んでいた。とても静かな寢息で、心地良さそうに眠っているが、そのまま起きることがあるのか？ という思いだけは拭うことが出来ず、むしろ強く俺の胸に残った。

「隼人つて、こんなに小さい子供だったのかって思ったよ」

俺としては、様々なことを導いてくれた隼人はとても子供らしくない大人な子どもに見えていたが、ここ数日は年相応の子供に見えた。本来の姿が俺にはどちらなのかは分からないが、その隼人の姿には悔しさや悲しさしか湧いてはこなかった。ただ、悲しかった。無性に。

「子供が子供であつて悪いことはない。約束したんなら果すのが、

大人つてもんだろ？」

話が急に変わった気もするが、智史なりの何か意味のある言葉であることは間違いない。

「お前なんてすぐにフルートの椅子から引きずり出してやる」

ギプスはようやく外れた。二ヶ月ほどの束縛生活は長かった。利き腕が使えないと言う事がどれほどきつかったか、身に染みだ。後は筋力の回復と飛行技術の遅れを取り戻さなければならぬ。それを成し遂げてようやくフルートと共に再び風を切る事が出来る。そうすればきつと……。

「さて、フルートとの有終の美を飾りに行くか」

「頼んだぞ」

「お前もな」

智史と拳をすれ違い様に合わせた。俺が何を言ったのか分かってる。俺が言いたかった頼み。それが何なのかは、もう良いだろう。智史が応えたのだから、あいつを信頼しよう。

フリマの担当はなってみて分かったが、会場で行われている飛行やら航空祭ならではのものなんて何一つ見れない。ただ耳にエンジン音だけがどんな演技を見せているのか想像するばかりで失念しまくりだ。しかも、隣同士でいざこざが起きたとか、迷子だとか、お目当ての店はどこにあるのかだとか、全くの無関係な出来事のオンパレードだ。就職したての頃の初めての航空祭ですら、機体案内で演目を見ていたというのに。

「とうとう最後か」

聞き慣れた五機のプロペラのエンジン音が響いた。フライ機が離陸したということは、航空祭も直に終焉を迎える。結局何一つ見ることもないまま終わった航空祭。腑に落ちないというか、心残りが幾つもある。

「げっ、こんな時にか」

半袖むき出しの日焼けした腕に、いくつか空の涙が落ちてきた。

フライの演目は順調に行っている中での降雨は、観客にしてみれば

惜しいし、演じ手にも少々迷惑なものだ。だが、それ以上に俺は顔に落ちてくる空の涙が、とても悲しい瞳から零れ落ちたものに思えた。背筋を走る悪寒が今だけは背けたくて仕方がなかった。幸いなことに、演目中はパラパラと本降りになることはなく、止むこともなく、それほどの支障とはならず、結果としてはまあまあ航空祭で幕を閉じた。

「どうだったよ？」

全てが終わり、息を抜いていると、智史が俺の背中に声を掛けてきた。

「きつと、お前の姉さんと姪っ子たちも、あの空で笑ってくれてたぞ」

「・・・そうか。そりゃ良かった」

俺の言葉に、少し間を置いた智史が、照れたように下を向いてはにかみながら、頭を掻いていた。こいつはこいつで、想いがあつたはずだ。だからきつと、こいつの思いは届いたはずだ。俺みたいに迷わず、ひたむきに事を成してしまう奴だから。

「とうとう降ってきたな」

事務所の窓越しに映る薄暗い空。無数に打ち付けてくる雨音が普段以上に俺たちの声を小さくさせる。

「問題なく、今年も済んだだけでも良いほうだろう」

ドッグのほうからは明かりが漏れている。今年が一番の役目を終えたフライ機の整備をしているのだろう。演じ手はこうして所内で休んでいる。俺もまだ後片付けの仕事が多々残っているが、今日は上官の許しも出てもう終わりだ。この後は打ち上げが予定されているが、あまり行く気にならず断った。心身共の疲れもある。週明けからはいつも通りの業務があるのだから、たまにはのんびりと休みたかった。

「健介、お前顔色悪くないか？」

ため息と共に吐き出た煙草の煙で窓が曇る。本日の主役を終えた智史と先輩が俺の顔を窺ってくる。

「腕でも痛むのか？」

「そんなんじゃないっすよ」

この雨が降り出してから、悪寒が止まらない。何が起こったわけじゃない。むしろ何もなく静かだった。飛行場こくは。だから余計に背筋に感じる寒気が気味悪かった。体調は問題ない。問題なのは、きっと、この悪寒を齎してくる俺の心かどこかだ。

「今日は早めに帰って、休めよ」

「そうします」

「送っていくか？」

悠はまだ仕事があるだろう。メールにも返事がない。それを知って智史が申し出てくれたが、断った。どうしてかは分からない。ただ、もう少しだけここにいたかった。この騒がしい所内の静かなここに。打ち上げがあるということ、仕事が先に終わった者から会場へと仕事を後にしていくのを見送り、ほとんど誰もいなくなった中で、いつ降り止むかも分からない夜空の涙をただ眺めていた。

「健介、まだいたの？」

いつの間にか、俺の見つめていた窓に悠の姿が映っていた。作業服から私服に身を纏い、上げていた髪を下ろした姿で隣に立った悠。「もう終わったのか？」

いつの間にか随分と時間が過ぎていたようだ。すっかり暗くなつた外。窓に映る室内の明かりがはつきりと鏡のように俺たちを映し出している。

「一通りはね。残りは他の子たちがやってくれるわ」

帰りましょ、と諭され、ようやく俺は飛行場を後にした。車内で悠は今日のことに対する感想などを言うことはなかった。きっと俺の顔がそうさせているからだ。いつもなら少々興奮しているはずが、今日に限って物凄く気持ちが沈んでいる。俺は分かりやすいから、悠にはお見通しなんだろう。何も聞いてはこない。静かに運転をするだけ。時折音楽に合わせて口ずさむことはあっても、俺に尋ねることはしない。きつと俺から言っても、悠にとっての俺の問いは、

俺が聞きたい言葉を言って欲しいとしか思われていないのだろう。俺もそれを望んでいるから、何も言えなかった。音楽と、エンジン音と、雨音が、妙な音色を奏でるのを聞いているだけだった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・！」

それを突然破るピリリリツという携帯の音。不意なことで驚いてしまった。悠がかけていた音楽の音量を下げた。さんきゅ、と言い電話に出ようとして微かに躊躇ってしまった。サブディスプレイに表示されているのは、隼人の母親の名前だった。全身にドクンと強い何かが脈打った。

「はい、奥田ですが・・・・・・・・？」

恐る恐る通話ボタンを押して出ると、やはり隼人の母親だった。聞こえてくる声はいつも以上に静かで、車のエンジン音さえもうるさいくらいだった。

「・・・・・・・・えっ？」

悪寒が俺の耳によろやくその正体を突きつけてきた。

「隼人が」

携帯越しに悠にも聞こえたのだろう。体が急に前に押し出され、体にシートベルトが食い込んだ。

「う、ごめんっ」

急ブレーキで油断していた俺を、悠の左腕がとつさに抑えてくれたおかげで大丈夫だったが、さすがにびびった。後続車も何もなくて良かったが、今はそれよりもっと衝撃を受けた。

「本当、ですか・・・・・・・・？」

信じたくない言葉だったが、母親の小さく時折震えている声が明らかだった。

「・・・・・・・・分かりました。はい、失礼します」

携帯を閉じると、悠が俺を見る。

「隼人が危篤に・・・・・・・・」

小さく息を呑む音が聞こえた。運転をしながらも表情が青ざめている。悠の右隣の窓に映る俺の顔が、同じだった。言葉を交わすこ

となく俺たちは、「ん」と一言だけ頷くと行き先を変えた。夜の暗闇に浮かぶ町明かりに混じって、ひときわ明るい赤ネオン十字と緑ネオンの病院名の建物の下に着いた。

気持ちだけが焦って、体がついていけず、上手く前へ進むことが出来ず、小さい段差で二度ほどこけそうになった。まだ、そうなったわけじゃない。それでも徐々にそれがすぐ傍まで来ていることに変わりはない。だから、エレベーターが動くことすらも惜しい。面会時間は過ぎていくが、顔見知りの小児担当の看護師の女の子のおかげで、朝とは違う泣き声があちこちで聞こえる静かな病棟内を駆け足になりそうな早足で病室へと向かう。

「隼人っ！」

病室内は誰も取り乱していない。なんてこともなく、一つのカーテンの中だけが慌しかった。聞こえてくるのは医師たちの手際の良に対応する声と、機器の電子音、隼人の両親の呼びかける声。騒がしいはずなのに、俺の耳に入ってくる音はどうしてこうも静かなのだろう。耳が遠くなった気分だ。

「隼人君っ！」

悠も隼人の近くで呼びかける。返事は何一つ返ってこない。そこにいるのは穏やかに静かに、気持ち良さそうに高峰隼人という少年が眠っている。目の前で必死に母や父が、悠や俺が呼びかけていることも知らずに本当にただ眠っているだけ。隼人の母親がぎゅっと小さな手を握り締め、何度も何度も隼人を呼んでいる。「愛しているから」「隼人っ隼人っ……」「起きて隼人っ」「隼人、お母さんは愛してるからね」「皆、みんなっ、隼人のこと大好きなんだからねっ」などなど、数え切れないほど、我が子を呼んでいる。次第に声に震えと嗚咽が混じっている。隼人の父親も威厳などどこかに捨ててしまったように、必死で隼人を呼び戻そうとしている。悠も同じだった。だが、俺はこの現状を受け入れられていないのか、受け止められていないのか、いつしか隼人と呼ぶ声も止み、全身から力が抜けるばかりだった。何も変わっていない。いつもと同じよ

うに隼人は眠っているだけ。なのに、どうしてここまで呼ばれているのに、隼人は………。

「隼人っ！ 約束しただろっ！ いつまでも寝るなっ！ みんな待ってるんだぞっ！ 隼人っ！」

「止めなさいっ」

医師が俺の腕を掴む。いつの間にか俺は隼人の肩を大きく揺すっていた。とても、とても小さく柔らかかな体が揺れていた。機器が一定の音を発していたが乱れていた。

「健介」

パンつと乾いた音が俺の頬から響いた。その音に一瞬全ての視線が俺に注がれ、静寂が支配した。

「落ち着きなさい。健介」

ただ一言の叱責。だが、悠は相当怒っている。俺を捉えて離さない強い眼差しは過去に何度か目になっている。本当に怒りを見せる時は言葉が少ない。鈍い痛みが全身を蝕むように広がる。力は強いほうじゃない悠の張り手の痛みはきつと、俺以上に悠の方が痛いはずだ。その目に宿るものが溢れるのを必死で隠そうとしていたから。体に感じる痛みが俺になれば、心に感じる痛みは悠に、だ。

「す、すみません………」

またやってしまったことを後悔する。後先考えない癖は、直すのに時間が掛かる。本当に申し訳ないことをしてしまった。下手をすれば取り返しのつかないところだった。

「無理もないのは分かりますが、落ち着いてください」

隼人の父親に言われて気を落ち着かせた。その横で医師たちが手馴れたように隼人に出来ることをしていた。

「もう、いつ何があってもおかしくはないと思って下さい」

医師が最後にそう言うと、病室を後にした。家族の時間を過ごさせるように思えた。残されたベッドの周りは静かになった。母親は相変わらず隼人に声をかけ続け、悠と父親も同様に隼人を見守っていた。

「どうして、隼人がっ……」

母親の一言が、全ての言葉の始まりと終わりを示していた。誰も
がそう思いながら、口にする事のなかった禁句のような一言。

「そういうことは言うんじゃない」

父親が肩を抱くと、静かに母親の鳴き声が聞こえてきた。何も言
えない、踏み込めない壁が俺の数歩先に広がっていた。

「帰りましょ、健介」

悠も空気を讀んだようで、俺たちは父親に一言声をかけ、隼人に
も聞こえずとも届けばいいと声をかけ、病院を後にした。最後まで
夫の胸で泣く妻であり、我が子を強く想う母の声がいつまでも耳か
ら離れなかった。家族を愛でる強い思いに俺たちが入る余地などど
こにもあつてはならなかったようだ。

時間と言うものを止められる機械はないのだろうか。時間の流れ
がゆっくりとしているなどと言われたりする地域があるが、それは
所詮生活リズムがそう感じさせているだけで、何もどこも変わらな
い。ただの詭弁や綾だ。漫画や映画の世界のように本当に止められ
れば、と俺は生まれて初めて本気で思った。厳密に言えば一生のお
願いのように、一回きりで効力を失うだけでも良い願いを、本気で
そうあつて欲しいと感じただけだ。

「雨、か」

他に言葉は浮かんでこなかった。他の言葉を口にしてしまえば、
溢れんばかりに溜め込んだものが堰を切りそうだった。

「もっと時間があればな……」

まだ、実感が無い。その一言で全てが片付けられてしまう、今の
この時。

見るからに重たそうな重量感と重圧感を醸し出し、いつ空から地に
ドバっと塊が落ちてくるのか分からない暗い空。日はまだ高いとい
うのに、暗い。

隼人が危篤に陥ってから、十一時間後だった。今思えば、小さな体でもそれだけの時間を頑張ったのだろう。凄すぎる。俺には無理だよ、隼人。どこが痛いのかももう分からない。

まだ大丈夫だ、と心に言い聞かせていた俺たちに連絡が入った。ちょうど朝食を終え、仕事へ向かう支度をしている時だった。いつものように俺が愚痴を漏らし、悠に呆れた叱責を受けている時に鳴った携帯。何気なく出てしまったことを瞬時に後悔した。

たった一言だけ聞こえた言葉。

「隼人が 息を引き取りました」

父親の声だった。通話の横から聞こえてきた声が母親だとすぐに分かった。何度も何度も、隼人っ、と泣き叫ぶような声が遠くに聞こえていた。聞いた瞬間、携帯を落としてしまい、何かと着替えをしていた悠が部屋から出てきて、呆然としている視界に悠を映したが、声が出なかった。携帯から、父親のもしもし？ と、母親の声が聞こえていて、携帯を拾った悠がその声にハッとして取り次ぐように幾らか言葉を交わして切った。

二人して顔を見合わせるが、言葉はなかった。その時、すぐに病院に駆けつけられる覚悟は無かった。それは悠も同じだった。むしろ、俺は全ての思考を奪われたように何も考えられず、呆然としていて、悠はしばらく俺と同じようだったが、会社に連絡を入れて、遅れることを言っていた気もするが、俺の記憶は衝撃の大きい方しか覚えてはいなかった。

「着いたわよ」

式場の駐車場に車が止まった。今日はバードフライ飛行場は通常営業日。いつものように開場してからは人員不足に悩みながらも業

務をこなしていく。だが今日は二人を欠いての始業だろうし、話を聞いているスタッフたちはいつもの覇気はないのかもしれない。雨天がさらにそれを助長しているのかもしれない。

「変なところ無い？」

「いや、大丈夫だろ。俺は？」

車に積んでいた傘に二人で入り、斎場へと重たい足を動かした。

「大丈夫よ。行きましょう」

笑顔が消えた日。今日はその日。いつかくると分かって、来ないでくれと願った日。笑うことを忘れた日。そんな日に俺たちが見たのは、安らかに眠る隼人と、誰よりも明るい笑みを浮かべていた少年の写真だった。

俺は正直今、ちょっとしたひびが入ればすぐにでも決壊しそうなのだが、悠はいつもとなんら変わりない無表情で、大して何かを強く感じているようには見えなかった。だが、きつとそれも俺と同じように堪えているのだろう。俺に比べて隠し通すのが上手いから、ほとんど誰にも気づかれることなく、気づかせることなく、今日を終わえようと水面下では必死になっているのかもしれない。俺はそのままで器用に出来ないから、俺と同じような服装が集まるこの場の空気を吸っていると、体が重くなり気分が滅入り、逃げ出したくなってくる。

「この度は、心よりお悔やみ申し上げます」

「突然のことでお慰めの言葉もございません。心より回復を祈っておりますのに、本当に残念でなりません」

悠がより丁寧に、悲しみを堪えるように俺に続く。

「わざわざ、本当にありがとうございます。隼人の顔を見てお別れをしてあげて下さい」

「はい。私たちにしても、とても大切な日ですので」

悠が、隼人の母親と挨拶を交わしている。だが、二人の瞳からは分かっていたこととは言え、あまりにも早すぎるこの日を迎えた隼人への思いが、言葉に震えと、瞳に雫を溢れさせてくる。

「どうぞ、お供え下さいませ」

「お気持ち、確かにお願い致します」

その隣で俺は、父親に持参した俺と悠と、バードフライ飛行場のスタッフ全員からの香典を渡した。こういう場だから、母親が耐えられない心痛に心身をボロボロにしているから、父親は強くあつていた。感服する。その強さを、俺もいつか家族を持った時に、持ち合わせているのだろうか。持ち合わせられるのだろうか。

「悠っ・・・・・・・・さんっ・・・・・・・・」

「はいっ・・・・・・・・」

悠と、母親は俺以上に隼人と過ごした時間が長く、共通した何かを感じていたはず。あの日から、隼人の母親と会うのは初めてだが、人が変わってしまったように憔悴しきっている。心痛から眠れぬ日を送っているのだろう。化粧で隠しているようだが、その下に隈が見える。それは、隼人の母親に限ったことじゃない。腕が回復した俺はすぐには家に帰らなかった。いや、帰れなかったとも言える。悠は、何度も言っていることだが、自分のことは後回しにする性格だ。だから、あの日病院で目の当たりにした、安らかに、心地良さそうに眠っている隼人が二度と、あの俺たちの励みにもなっていた笑顔を見せないという、時間が経たなければ実感出来ない現実に、大きな心の傷を受けている、いつも誰よりも近い場所で温かく包み込んでいた二人が、取り乱しているその光景に、俺は愕然とし、呆然とするしか出来なかったが、悠はそつと隼人の頬に触れ、触れれば当たり前前に感じられる温もりが徐々に冷めていくなかで、まだ微かに温かい隼人に、小さな嗚咽と共に、ポタポタと隼人に雫を落として、両親と同じように涙していた。

それから、今日まで悠は昔の俺がしていたように、仕事に私情を忘れようとして、肉体的・精神的疲労を嫌い、軽い不眠症になっていた。それを隠して仕事をしていたが、長い付き合いと、二ヶ月も居候していた俺には、すぐに必死になっっていることが分かった。だから、家に帰ることも出来ず、居候を続けている。むしろ、介護に

近いかもしれない。俺だって同じように眠れない日があった。だが、全てを受け止められなかった俺の器は、理想を重ねすぎていたのか現実を直視しきれず、悠よりは随分マシで、家事と送迎の今までしてもらった分の恩返しとして、付き添っていた。誰も何も言わなかった。

「お前が一番知っているだろう。お前がしてやらんでどうする」

藤沢上官がただ一人、そう助言してくれた。だから、俺はまだ泣けていない。泣することが出来ない。それを悠の世話をすることで紛らわしているのかもしれない。

楽しくもなければ、嬉しくもない。悲しい。恐怖にも似た悲しさがある。憤りのない不甲斐無さと、焦りと苛立ちと罪悪感と、何も出来ない自分への怒りも湧いてくる。ぶつけられる場所がない。分からない。

僧侶の読経が終わり、焼香をして、喪主である隼人の父親を始め、隼人に対して涙混じりに言葉を紡いでいく中、俺はため息にも似た強い深呼吸を繰り返して、堪えるほうが今は辛かった。その隣で悠はいつになく静かだった。表情も無表情で、悲しみの向こうにある何かを見ているような、堪えるものを全て吐き出して、何も残っていないようにも見えた。

「隼人、もう起きないのか？」

「………」

焼香の際、俺と悠は壇上に置かれた小さな棺の中で、沢山の花や俺たちが贈った絵本にアルバム、模型などと共に新たな世界へ旅立った隼人の亡骸に静かに声をかけた。返事があるはずもなく、悠はとうとう耐え切れなくなった。悠が涙を流す姿を見るのは、これが二度目だ。その声を聞いていると、俺の心臓がか心に気持ちの悪いざわめきのようなものが走る。吐き出す呼吸が震える。

「隼人、もう、起きないのかよ………」

「………」

泣くことが今日は、当たり前の日。誰も悠の涙を珍しいだなんて思

わなかった。隼人とこれが最期だと思うと、いつまでも隼人の寝顔を焼き付けていた。もうそれしか出来なかった。歪む視界に隼人の顔がぼやけて、最後なのに隼人を見てやれなかった。

五・空散華夢

一度だけ、悠と夜を過ごしたことがある。昨日だ。別に何かをしたわけじゃない。夜中俺も眠れず、天井を見つめていた。

静まり返った室内に、くぐもった、すすり泣くには大きい声が聞こた。

「悠・・・・・・・・？」

悠の部屋に顔を覗かせると、悠が泣いていた。俺の声に驚いたか、息を呑んだのが分かった。初めてだった。あいつが泣いているのを見たのは。絶対に見ることのないだろうと思っていた表情だった。

「悠、お前・・・・・・・・」

「ごめん・・・・・・・・つ、うるさかったね・・・・・・・・」

心を許した人間以外には、少々冷たくも見える態度だった悠が、子供のように泣いていた。我慢せず、堪えず、逆らわず、ただ泣いていた。

「あ、いや、その、そうじゃないけど」

「ごめん・・・・・・・・でも、ダメなの・・・・・・・・つ」

「うおっ・・・・・・・・」

半ばテンパっていた俺に、悠は救いを求めるようにしがみつき、泣き疲れて眠るまで、俺は初めて他人を胸の中で泣かせた。

「お前も、必死だったんだな・・・・・・・・」

「だっ・・・・・・・・て、それしか・・・・・・・・なかつたん、だもん・・・・・・・・」

眠ってから胸倉を掴んでいた悠の手は離すことが出来ず、そのまま俺も眠った。

一睡も出来ていない悠が、やっと眠ったから。こいつが初めて俺を前に本音を露にしてくれたその涙。俺だって馬鹿じゃない。馬鹿かもしれないが、いつも頼りきっていた俺に、心を見せてくれたことに対して、初めて悠の強さと弱さを俺の上着を掴んで眠る、その

手の力強さに、俺はその手を離すことが出来なかった。

「隼人もきつと、皆様の御厚情に深く感謝していることと思います。本当に今日はありがとうございました」

喪主である父親の言葉で式も無事に終わり、出棺を迎えた。

参列者に見送られながら、最後までとても旅立ったとは思えないあどけない寝顔を浮かべた隼人の顔は、きつと永遠に俺の中から消えることはないだろうと思えるくらい、焼き付けた。式の間中、隼人の母と悠の瞳から、潤いが消えることはなかった。隼人の母親は、一人で立つこともままならないようで、父親が絶えず傍を離れることはなかった。霊柩車に乗り込んでからも、隼人の写真を大事そうに、愛しそうに抱え、涙していた。

葬祭場の外は、絶えずサラサラと霧雨が降り続けている。あちこちにぶつかつた雨粒が、パチパチと火花のように、あちこちに落ちた雨音が周囲の喧騒を掻き消している。

そして、とうとう、隼人との最期の時が来た。

甲高いクラクションがあちこちから跳ね返って聞こえてくる。隼人の夢を叶えたピアノが奏でた音色が響いた。ゆっくりと走り出す数台の車の先に、隼人はいる。たつた六年という、あまりにも短い少年の人生が詰まつた体が、これから、この世界から旅立とうとしている。たつた一人で、夢に夢見て来て、俺たちに空を飛ぶことの想いを馳せてくれた少年が。俺は、また何も出来なかった。

「隼人っ」

とつさに叫んでいた。それしか思いつくことはなかった。

「隼人っ！」

斎場を後にする車に向かって、俺は声を荒げていた。

「約束、したのに、ごめんっ」

親族関係者もほとんどが列を成して火葬場へと向かっていく。斎場には、斎場関係者の他にほとんど残っていない。だから、誰も健介にも悠にも大した目は向けない。珍しいことではないということ

からだろう。

「見せてやれなくて、ごめんな……」

車が見えなくなると、掛かっていたエオリアン・ハーブの曲の音が静かに止まった。その瞬間、隼人の短い人生が終わりを迎えた。嵐の人生を笑顔で駆け抜けたこの雨の上に広がる大空へ隼人は、健介や悠の前からいなくなった。

「健介……」

「まだ、何もつ、してやれて……ないんだっ……」

笑うことを止めた日。笑うことを止めたら、後は泣くしかない。だって、悲しすぎるから。

「隼人……」

全力疾走で走り抜けていった、大きくて、小さな隼人の人生に俺はどれだけ多くのことを学ばされた？ それにどれだけ応えることが出来たんだよ。悲しくて、悔しくて、悔しくて、悲しくて。小さな棺の中で眠るあいつが、もうすぐ二度と会えなくなるのに……

「何もつ……出来、ない……ままかよっ……」

車が見えなくなり、健介は崩れ落ちた。全身から力が奪われたように、降りしきる雨の中に崩れ落ちた。たまりに溜まった悲しみや、悔しさが爆発を起こしたように、健介の口から大きく、大きく溢れ出した。全てを掻き消す雨音の中に、健介の叫びに近い泣き声だけが一面を支配している。

「くそっ……くそっ、くそおっ　　っ！」

濡れた地に幾度も悲しみを悔しさに任せて何度も打ち付ける拳。

痛みよりも思いが強すぎて、やっと今までの全てを受け入れようと健介の心が体に追いつき始めたのかもしれない。健介は、そういう奴だった。

「溜めちゃダメ。堪えちゃダメ。今は、泣きなさい」

悠が全身ずぶ濡れになっている健介の体を起こし、先日健介の胸で泣いたように、悠が健介を己の胸に抱きとめた。

「今日は泣いて良いから、思いつきり泣いて。明日の分も、これから先の分も、思いつき度の分を今日、全部泣いて」

先日、同じ思いを吐き出したから、そういう言葉には力がある。今の健介にとつてはとても大きなものだったのだろう。逆らうことなく、伝わってくる温かさに健介の悔しさが、悲しみへと変わっていく。治ったばかりの左腕と、右腕が垂れていたが、悠に抱きとめられ、悠の肩に強くしがみついて、泣いた。

「隼人っ・・・・・・・・・・はや・・・・・・・・・・と・・・・・・・・・・っ」

小さな子供は、一人が泣き出すとつられるように連鎖が広がり、他の子が泣き出すことがある。健介の堪え切れなくなった現実を受け止め始めた悲しみも、悠に映ったのだろうか、それとも降り止まない雨の雫だったのだろうか。痛いくらいに肩を掴んでいる健介にぎゅっとな腕を回し、声を震わせていた。

「ごめんっ・・・・・・・・・・ごめんっ・・・・・・・・・・」

夢に辿り着かない現実なんて、欲しくなかった。逃げ場にしかない夢しか与えられない現実なんて与えたくなかった。俺は隼斗に何をしてやれたって言うんだよ。

「健介・・・・・・・・・・」

温かくて、柔らかい香りに悔しさが悲しみに変わっていく。ただ全部じゃない。悠の方だろうか、掴んでいる腕には力が入って収まらない。それはきつと俺の悔しさだ。

健介の謝罪の涙は、一つだけじゃないのだろう。悠は何も言わず、ただ、同じよう

に雨に打たれていた。

夏の少しだけ蒸し暑い中、天より掬った水を、その手から大地に零すように降る冷たい雫に、二人の悲しみや後悔は、夢を願い、小さな蕾を膨らませ、一輪だけ力強く開花させ散っていった、高峰隼人と言う幼い少年のもたらしたかけがえのない時間の終わりに宿る悲しみや後悔といった思いを大地へと流していくように、健介は悠に抱きしめられていた。冷たい雨に解け出る二人の涙は、温かだった。

長いようで短かった時間が過ぎるのは、早い。朝から蒸し暑い日が続いていた青空も、いつの間にか空高くに、秋の雲がゆっくりとその形を変えながら風と共に去っていく季節を中ほどまで過ぎていた。いくつもの小夜時雨の中で、俺は何度、どんな夢を見たのかももう覚えていない。

「それじゃあ、行ってきます」

「いつてらっしゃいませ」

長い間、業務予定表に雑用ばかりが書き込まれていた奥田の欄には、昔のように飛行業務が入っている。その中に、バードフライの訓練の予定も組み込まれている。未だに俺は智史とのメンバーチェンジが行われていない。それが致し方ないことだと、全治してから月日の浅い今、空を飛べるようになっただけでも感謝しなければいけない。サブとして操縦桿を握ろうとも、また俺は帰ってくる事が出来た喜びを噛み締められる。それで今は良い。

今年の夏も、バードフライの曲芸は上々の評判だった。真っ青な空に真白な入道雲の中に、カラフルなスモークで絵を描いていく。曇っているよりもやはり晴天の方が映える。そんな時期も過ぎ、いつものように飛行場は稼動していた。

コクピットに腰を下ろし、出発前の最終チェックを機体の前方に作業着姿で立ち、こちらを見ている整備員の指示に従い、共に異常がないかを調べていく。

隣に座る同僚と全ての確認を淡々とこなし、顔を合わせることなくスロットルと操縦桿に手を掛け合う。腰から響いてくるエンジンの回転数とヘッドホン越しでも聞こえるエンジン音が心を震わせ、落ち着かせる。やはり俺にはこれしかないのだと同僚と頷きあつて、機体を走らせる。ゆっくりとした振動が徐々に大きくなり、体が揺れる。今は、それすらも刺激で心地よく、泣きそうにもなる。

「じゃあ、行きます」

「よし、行こう」

この世界に神はいない。

与奪することが神だと言うのであれば、それは弱き心に漬け込む悪魔だ。

以前は飛行前に空の女神だとかに安全を祈願していたりもしたが、あの日以来、止めた。

あの日から俺が空に願うものは、一人の少年だ。

真っ直ぐに夢へと突き進み、きつと空に描いている隼人。バードフライの時は全員が神ではなく、隼人に祈願するようになった。その証にフライ機のコクピットには全機に家族や恋人などの写真のほかに、共通した一枚があった。それが俺たちの中では、夢の神となったであろう隼人という少年の夢を、この大空に今は絵を描いているであろう、ただ一人の少年神。

今日は離島への資材運搬業務。復帰してから遊覧飛行やら忙しいが、かつての当たり前だった生活を、再び送れるようになった充実感が俺を満たしている。違うな、充実感と言うもので覆い隠している。そうしなければ、俺一人だけ置いていかれるから。

タクシングロードをスロットルを少しだけ上げてタクシングしていると、横目に機体整備をしている悠の姿が見える。

仕事に集中しているのだろう。こちらには見向きもしない。俺も管制官に離陸許可を要請し、ヘッドホン越しに管制官の指示を仰ぎつつ、仕事に集中する。そんなことが当たり前前の俺の人生は、少しだけ普通じゃないのかもしれない。毎日上空を飛行する喜びを、見て楽しんでくれる人がいることを知ってしまったから、辞めることなど出来ないかもしれない。違う。止めることが出来ないのは、俺には果たすべき約束が、未だにここにあるからだ。

《Clear red take off》

無線から管制官の、離陸許可が出る。グッドラックと、この機体の帰る場所を教えてくれるその一言に、少しだけ座る位置を整え直した。

「All right. take off」
スロットルを上げると、体に伝わる振動とエンジン音が大きくなる。

これからあの大空へと飛び上がるんだという高揚感と、無事に帰還が出来るようにと祈りながら、レバーを引くと、体に掛かる微かなGが心地良く感じる。

前輪が完全に地を離れた瞬間の浮揚感はいつだって、空を飛んでいるという実感と、責任と、快感が俺を支配する。

いつか夢見た世界を今は飛んでいる。

俺の夢であり、願いの叶った場所。

それで良いはずなのに、高く白い空に落ちていくように風を切り裂いていく機体の片隅にある写真を見ると、現実としての夢の約束の霧散を感じてしまい、ひどい罪悪感と後悔も感じてしまう。もっと割り切りの良い性格だったなら、どれだけ良かったんだろうか。智史がすごい奴なんだと痛感した。俺には無理だ。いるはずがない現実を飛行しておきながら、探してしまう空の幻想。いつの間にか随分と経ってしまったあの日のピアノの音色と願い、そして開いた空の花。窓横にはってある写真が、日に日に褪せていくのを見るのは辛いのに、日に日にその気持ちが乾いていく自分がいることを否定することが辛かった。

「あいつが帰ってきたら、飲みに行くか」

「そうっすね。たまにはパーと行きましよう。先輩の奢りで」

仕事の飽いた二人が、事務所の休憩スペースから健介の操る航空機を見送っていた。コーヒーとタバコの煙が視界の飛行機を霧の中に隠すように、ユラユラと換気扇の中に吸い込まれていく。

「お前な」

「美友紀ちゃん、健介たちと飲みに行かない？先輩が奢ってくれるっさ」

「え？は、はいっ、ぜひ」

悪戯な笑みを香田に向ける智史。智史の視線はもう、健介の機体には向いていない。遠ざかるエンジン音も数えている間に消えた。それでも美友紀の視線は、二人の視線を掻い潜りながらも何度か空を見上げていた。

「ったく。お前は調子良すぎだ」

遠くに消えていった健介の乗る航空機を横目に、香田の表情は呆れ顔だった。

たった一人で飛ぶこと。

それは、少しだけ寂しさもある。

乗客を乗せる時とは違う責任が、全て己にのしかかってくる。

決して鳥のように自由に飛ぶことは出来ない。

それでも、遠い昔の憧れや夢から生まれた文明の英知の結晶。

鳥よりも高い空を人は飛んでいる。

それを乗りこなすことが出来ることが、既に自由に飛んでいることかもしれない。

空を飛ぶことには、様々な制約がある。

それを守るからこそ、アクロバットのような飛行も、目的地へ人や物資を運ぶことも自由になれるのだろう。

例えば俺が一人で飛んでいても、地上にはそれを迎え入れてくれる、同じ夢を持った多くの人間や待っている人がいる。そこから飛び立ち、そこへ降り立つことが出来るから、俺がふと思ったそんな不安や恐怖も空を飛ぶ喜びへと変わっていくはず。だから、今日も無事に帰ろうと、操縦桿を握ることが出来る。

「雨宮、先に休憩は入っとけ」

昼休みでもない時間に、大浪が悠にそう言った。悠は車輪軸の油圧点検をしていた時だった。

「え？ ですが、まだ早いですけど？」

当然悠は首を傾げて拒否を示す。

「疲れてるなら休みを取れ。空気を少しは読め」

大浪は悠の言葉など聞く気もなく、馬鹿を見るような視線を悠に向けるばかりだった。状況が理解できないのか、悠は作業の手を止め、立ち上がる。

「主任、フルートの整備はもう終わってますよ。って言うか主任の担当機はフルートじゃないですよ」

見かねた整備員の一人が悠に耳打つ。

「え？ あれ？ 嘘？」

「気づいてもないのか。おい、雨宮を外に連れて行け」

重症だな、と大浪は何が起きたのかはつきりと理解してない悠を問答無用でドッグから追い出した。抵抗もなく悠は、同僚に連れ出されてしまった。

「私としたことが、ほんとダメね」

そよぐ風に顔の熱が程よく冷まされると、悠は犯した失態に頭を抱えた。その顔は初めての失態と言うわけではなく、悠自身も何度目かの失態だと理解した上で、すぐに仕事に戻ることはなかった。

「これがパイロットなら死んでるわよね」

思わずの自嘲。

それは笑えることなんてありえない自嘲。健介と同じであり、同じでないのはミスを犯しても、その罪が重く影響するのは悠ではないという事。整備士のミスはパイロットの命を左右する。だからこそ、悠はきちんと頭を冷やすつもりでいるのだらう。幾度となく空へと消えていくため息が、自分自身に嫌気を感じているようでもあった。

「健介の方がやっぱりちゃんとしてるのよね」

公私を混同すれば、健介は確実に操縦ミスを犯し死ぬ。それもなぐ飛び立った機体が再び車輪を下ろしてくるのは、自身のコントロールも正常に行えている証。それがパイロットには当然の義務であり、健介のしている行動は何一つ間違いはない。

「私って、こんなにダメだったっけ？」

自分自身が分からない。悠の見上げる空には雲が一つもなかった。空つて、ほんと遠いのね……」

隼人の夢が叶わぬままに解けていき、今は健介もその空へと翼を開いて飛んでいった。二人がいなくなつた空を見上げて風に吹かれる悠は、そのあまりにも遠すぎる空に鼻を嚙り、吸い込んだ空気を吐き出すことに失敗していた。

「よし。今日は俺のおごりだ。全部忘れてパーと飲めっ」

飛行から戻ると、先輩が自棄気味にも思えたが、奢ると言う事で俺も悠も参加した。二ヶ月あまりの悠との生活は、今じゃすっかり解消され、元の同僚としての日々が続いている。正直、未だに懐かしく、寂しく思うことがある。だが、それを口に出来ない。しちやいけないと思う俺がいるからだ。絶対甘えれば泣くって言う自信があるから。

「健介、どうしたの？ あんまり飲んでないんじゃない？」

「いや、なんでもない」

隼人との繋がりが切れて、三ヶ月。一人仕事を終えて家に戻ると暗く冷たい空気に、何度とも思い出してしまう。先輩が忘れてパーと飲めというが、そう言われると逆に走馬灯のように全てが甦ってきてしまう。意識しないようにしていたから。

「奥田さん、どうぞ」

美友紀ちゃんが俺が飲み干したばかりのコップにビールを注ぐ。

正直、この一杯でも今日はきつかったが、美友紀ちゃんや先輩の手前、断ることが出来なかった。

日頃の愚痴や、下らない他愛ない話で盛り上がっている。誰一人として俺の心の中に浮かぶものを口にする人間はいない。忘れられてしまったような気がして、楽しいはずの席が、虚しく感じるが、雰囲気壊すのは気が引け、無理をしても次々と注がれる酒の飲み干した。皆が気を遣ってくれているのが嫌でも、その目を見れば分かる。

「すみません、ちょっと外します」

やはりダメだ。今日の酒は美味しくない。飲めば飲むだけあの日が甦る不味い酒だ。

「大丈夫ですか？ お手伝いしましょ……………」

「私もちよつと失礼します」

気分が悪そうに店を出た健介を、介抱しようと美友紀が立ち上がろうとするが、その横を悠が通り過ぎた。

後を追うように店を出た悠に、美友紀は先を越されたように取り残された。

「美友紀ちゃん、気持ちは分かるけど、あの馬鹿には、今は雨宮が必要なんだよ」

どうすれば良いのか戸惑っている美友紀に智史が苦笑しながら首を横に振った。

「小野原、飲め。飲んで忘れる」

「……………はい」

名残惜しそうに店の入り口を見る美友紀の気持ちも智史と香田には理解できるが、昔を思い出した健介を支えるには、ただの慰めではダメだということを知っている二人には、包み込んでやれるだけの健介を知る、悠しかいないことくらい分かりきっていた。

「やっぱり、私じゃダメなんですね……………」

「余話いっ心を支えるには強く在ってはいけない。向き合って支えるには同じように弱い心を見せないといけない。あの馬鹿は隠すことが出来ない奴だから、雨宮も隠さないんだよ。傍から見たら下らないんだがな」

「初めから勝負になんてなりませんでしたね」

「まあまあ。今日はしんみり会じゃないんだから、先輩も美由紀ちゃんも楽しく飲まないよ」

香田が差し出したグラスを見つめながら美友紀は諦めのため息をもらし、グツと振り切るように飲み干した。その横で智史だけが疲れたように息を吐いていた。

「俺、お暇しても良いっすか？」

智史が小声で香田に声をかける。

「いや、いろ。俺だけじゃ小野原の話聞いてはやれん」

「向こうが終われば、今度はこっちか。俺ってこんな役回りなのかねえ」

智史はようやく二人が良い感じになりそうになって、肩の荷が下りるのだとホツとした瞬間、次の仕事が舞い込んできたようだ。

「何か言ったか？」

「いえ、何も。あ、ほらほら美友紀ちゃん。今日は先輩がいくらでも付き合ってくれるから、とことん飲もう？」

「はい、そうですね……」

折角のチャンスも、香田は失恋の隙を狙うことはするつもりはないうので、智史に話題をふらせることにしていた。

「はあ……ダメだな、全く」

外はすっかり日が落ち、星空のきらめきが街明かりに霞んでいた。「悪酔いでもした？」

「そうだな……そうかもな。泣きそうだ、馬鹿みたいに」

店を出てきた悠に、振り返ることなく、本音を漏らす健介。

「全部泣けつて言っただじゃない」

「んなもん、無理だ。出て来るもんは、出て来るんだよ」

そう言い返す健介の声は、すでに震えが混じっていた。

「ちゃんと家で休んでる？」

葬儀の日、全部流したと思っていた涙は、今日に限らず、今日まで何度か悔し涙などで溢れたことがある。一人で家にいる時にだけ。

「……まあまあ」

「私もよ。家に帰ると、思い出すのよね。玄関を開けた瞬間の暗い部屋を見ると特に」

悠の一言が胸に来た。

同じだ。たったの二ヶ月と言う短い間の隼人との時間。その思い出が部屋にも幾つも飾られている。たった二ヶ月なのに、とても濃

くて、未だに全く色褪せない。それが今じゃ、ふと気を抜いた瞬間に俺を苦しめている。今になって浮かぶ後悔が、とても濃い。それでも少しは成長した。公私できちんと割り切れるようになった。あの頃の悠にやっとな追いついた気分だ。

「明日、お墓参り行かない？」

「起きれる自信がない」

今日はもう、枕を濡らして、気付いたら朝を過ぎていそいだ。

「起こしてあげるわよ。いつでも」

そんなに飲んだつもりはないが、結構飲んだ気分だ。目の前が歪んで見える。体が熱くて、目が熱い。吐き出す息に、上手く咳が出せず、つまずくような変な呼吸になってしまふ。悠の声もあまり聞こえない。

「悪酔いね、完全に。相変わらずなんだから」

冷える空気の中、そんな健介を後から柔らかい温もりが包み込んだ。

「今日、一人で帰れる？」

「・・・わかん・・・っ、ねえ・・・っ」

懐かしくて、温かくて、良い匂いがして、ずっと焦がれていた。大切な人を亡くしたとても大きな喪失感と悲愴感を共に分け合った温もり。支えなければいけないと思っていたのに、未だに支えられ続けているのに、とても愛しくて心地良い。

久々に流した涙の味は、悲しさと悔しさの中に、少しだけ甘い酒の香りの味がした。

見晴らしの良い小丘にあるこの場所。金木犀の香風を受け、真白の妖精を迎え、淡い伊吹が湧き立つ季節を巡り、一人の少年が夢に願った、真白で大きなキャンバスが広がる夏の空。そしてまた繰り返す秋の涼やかな風の吹く季節が、この場にも届いていた。早過ぎる時の流れが、そこにはない。

「ここは見晴らしが良いな」

「そうね、風も気持ち良いし」

健介の手には、治療によって制限されていた当時は口に出来なかった、果物の詰まったバスケット。悠の手には、パレットに出した絵の具のようにカラフルな花束。見舞いの時は気づいてやれなかったことも、今ならその制限も何もないので、真新しく、小洒落たデザインの墓前にそつと捧げた。もう何にも縛られることのない少年を想って。

「……早いよな」

「そうね。そろそろ二年になるなんて」

他に誰もいない静かな墓地。その中でひっそりと佇む高峰家の墓前に二人は、静かに線香を焚いた。

「なあ、隼人。お前は今、どこにいるんだ？」

正直、ここに隼人がいるとは思えない。ここにあるのは、隼人の小さく白い、この世界への残し物。あれだけ出会った当時は元気で、最期まで夢を諦めることなく温め続けていたんだ。こんな所で静かに眠っているなんて思えなかった。たった半年だったけど、隼人はその名の通りに、疾風のごとく、俺たちの前から笑みを残して消えた。

あんなに近くにいた、誰よりも強く、たった一つの夢を温め続けた隼人と共に、健介は空を飛んでいる。

どんな時も健介たちには笑顔を見せていた、手を伸ばせばすぐ傍にあつた小さな温もり。それが今ではどこか、近いようでとつもなく遠い場所へと旅立ってしまった。少しでもその軌跡に繋がる何かを感じたいと、健介は隼人と共に空に絵を描き続けている。そうすることで、少しでも隼人が夢と空を見上げられた幸せを感じ取ってくれたのだと思いたいからだ。

だからいつでも探してしまう。それは健介だけじゃない。どっかに探し人の思い、形があるのであるなら、人は探してしまう。だから健介には、隼人がここにいるとは思えないのだろう。

「隼人君、きつと幸せだったわよね？」

手を合わせ終えると、悠が俺を見てきた。

「そうだと良いな」

断言は俺には出来ない。

「隼人、きつとお前は、そこにいるよな」

顔を上げると、秋雲の合間に空の航跡が浮かんでいた。青い空に描かれた、真白な一線。飛行機雲だと分かっているけど、何故かそれが、空に絵をかくことを夢見続けていた隼人の描いたものに見えた。隼人が息を引き取った日。

どんな様子だったか父親が話してくれた。

危篤のまま、何も苦しむことなく、眠りに就いたまま心停止してそのままだったそう。一度も苦しい表情などを見せなかったらしい。危篤に陥る前日は、両親の他に祖父母とも楽しそうに言葉を交わしていたらしい。きつと伝えたいことを全部伝えたと、力が抜けてしまったのだろう。疲れも小さな体に詰まっていたはずだ。

俺はまだまだ話したいことがあったのに、隼人は満足してしまっただろうか。

一つだけの小さな夢を叶え、大好きな人たちに自分の苦しむ姿を見せたくなかったのだろうか。

それが今でも俺の中で後悔として残っている。

きつと、俺が死ぬまでこれは消えることはないだろう。俺がこの世界からさよならした時、その時まで隼人が空で絵を描いていたら、その時は沢山話せなかったことを話して、交わしたままにされた約束の、俺の絵描きを隼人と共に出来れば良い。ここに来ると、そんな気分にはさせられる。隼人がそう思って、俺にそう感じさせるのかもしれない。

「ありがとつな、隼人。……ごめんな」

「どうしたのよ？ 急に」

空を見上げていた俺に、穏やかな風に髪を包まれている悠がいつもと変わらない目に、俺を映す。

「何かな、隼人がいた気がしてな」

「きつと見間違いなんかじゃないわよ」

俺の言葉に悠が俺と同じように空を見上げていた。そこにいるのだと、俺の目には楽しげに風を受け続けて温めていた夢を思いつきり叶えている、笑顔をいっばいに浮かべた隼人の姿が見えた気がした。

「悠」

「何が？」

二人して、流れ続ける雲が受け続ける風に身を委ねる。明日からはまた、仕事だ。だから、それまでの間に、俺が俺として自覚した思いを、証人がいる前で伝えておきたかった。

「隼人、証人になってくれるよな？」

「何が？」

思わず口に出たことに悠が首を傾げる。

「何でも。あのさ、悠」

「何が？」

「俺、また一人じゃどうしようもない時があると思う」

「………そうね」

何も聞いてこない。ただ分かったように相槌を打ってくるだけ。

悠らしいが、もう少し何か言って欲しい気もする。だが、昔からの俺たちらしいから、話を続けよう。

「その時、俺、多分家に一人じゃいらんないと思う」

「かも」

「それがいつかも分からない。いつまで続くのかも」

「健介だし」

何だよそれ？ と思わず口に出そうになったが、それを口にしては台無しになりそうだから、飲み込んだ。男なんだ。少しくらい格好つけてやりたいと思うのも、また心情。

「だから、さ」

「好きよ。健介のこと。男としては頼りないって思ったけど、そう

でもなかったし」

「えっ……?」

意を決して、空から視線を悠に下ろした瞬間、悠が俺を見ていた。「支えてあげる。泣きそうな時も、悔しさが募った時も、泣いている時も、どんな時も」

「え、あ、えと……」

頭に浮かんでいた言葉が全てどこかへ飛んで行ってしまった。真白だ。

「私じゃ、嫌?」

そんなの卑怯だろ。髪を下ろして、俺を見る真剣な目。悠から吹いてくる風が冷たさの中に仄かに香りを含んでいて、そんなことを俺に言うのは。何を言おうとしていたのか全部飛んじまったじゃねえかよ。

「い、嫌なわけないだろ。俺だってお前が好きだ」

「そう」

つい悠の言葉に恥ずかしさからか、熱くなって、言おうと思っていた言葉がムードもなしに口から出てしまった。俺を見ている悠が、人の顔を見て微笑んでいる。なんか、無性に恥ずかしい。

「顔真赤。中学生みたいよ?」

おかしそうに噴出しやがった。

「う、うるせえよ。全部台無しじゃねえか」

「私は健介が好きよ。ずっと。だから、ありがとう。そう言ってもらえて嬉しい」

「悠……」

「これからも支えてあげるから、私を支えて? 私だって一人じゃどうしようもない時もあるし」

「ああ。任せろ。頑張る」

初めて見る悠の赤らんだ笑みに、一気に恥ずかしさが引いて、見とれて飲まれてしまったかもしれない。

「ね、証人の前ですることがあるんじゃない?」

「は？ 何をだ？」

悠が唐突に意味不明なことを言ってきた。俺の思いは予想とは違ったが、結果オーライって感じで、通じた。そしてきつと、隼人も証人としてそれを見て、聞いてくれたと思う。俺の願いは一つ果たされた。それ以外にすることなんかあつたっけか？

「………やつぱりあんたは健介ね。期待した私が馬鹿、か。別にもういいわ。気にしないで」

「お、おい、何だよ？ 何でいきなりキレてんだよ？」

折角思いが通じ合えたのに、何故そこでため息吐いて、俺を蔑むような目で見るとよ。

「いい。帰りましょ」

悠がもう一度墓前に手を合わせると、身を翻して来た道に戻っていく。

「お、ちょ、待てつて。何だよ？ 何で怒ってんだよ？ おい、悠っ」

「怒ってないわよ。もういいの。時間はあるからゆっくり行くことにする。あんたとはそれで良いの」

「意味分かんねえよ。言いたいことあんなら言えつて。気になるだろ」

呆れたまま先に戻っていく悠に、首を傾げながら健介が追いかけていった。

「何でもないわよ。馬鹿っ」

「馬鹿馬鹿言うな。お前の彼氏だぞ？」

「はいはい、そうですね。忘れるところだったわ」

「お前な、もつところ、何て言うか、あるだろ？ ほら………」

言い淀む俺を見て悠の足が止まったが、すぐにまた背を向けて歩き出しやがった。

「あんたはやつぱり馬鹿よ。意気地なしの朴念仁」

そう言い放つて。

何かをぶつぶつと言いながら、近付いてくる足音に悠の表情は緩んでいたが、健介には見せることはなかった。そして、二人が下らない言い争いをしながら歩いていくのを、空から見守るように天使の矢のごとき一筋の穢れのない真白な線が、大空のキャンバスを走っていた。

「お前、俺はそこまで落ちぶれてないんだからな。って聞けよ、おい」

まだまだ一人前になりきれない俺だが、一人じゃ出来ないことを、今まで当たり前のように支えてきてくれた悠との、これからも当たり前の日々が続く中で、いつかきつと支えられる立場から、誰かを支えられる人間へとなっていけるのだろうか。

今はまだ、もうしばらくの間は支えられてないと、支えられないかもしれないけどな。

「・・・なあ、悠」

振り返ることなく悠が空を見上げた。どこかの航空会社の飛行機が尾を引いて白く細長い雲を空に描いていた。どんな雲よりも目を引く一筋の、かつて追い求め、掴み、披露した夢よりもはるかに高い空に描かれる一線の絵。隼人が夢見た青いキャンバス、Soliaに描いた絵のように白く染めた。

「お前と一緒に飛びたくなった」

「何よ、急に？ それに私は整備士よ。いつだって一緒に飛んでるじゃない」

「そんなんじゃない。一緒にこの空を飛びたいんだ。隼人がいるところまで」

「何それ？ プロポーズ？」

健介の言葉に、悠が笑いを堪えているような笑みで、隣に追いついたその横顔に振り返った。ちょうど健介がその横顔を覗き込みもうとした瞬間に。

六・サティな二人

悠の嬉しそうな笑いに、健介は悠の思っていた以上に表情を硬くする。

「じゃあ、何？」

止まる足取り。吹き去る風。二人の距離は変わらない。ただ、若干の不安の色が取り巻く。

「サティって、お前、知ってるか？」

「……お店？」

「違う」

悠にしてみれば冗談のつもりもなく、半ば真剣に考慮した上での回答だった。だが、健介にはそれがボケに思えたのか、苦笑した。

「インドにある言葉でな、妻の殉死って意味だ」

意味分らない。悠の視線がそう語る。

「俺も詳しく知ってるわけじゃない。でもな、今の俺はそうなりそうだから、そしてお前もそうなりそうだから、だから怖い……のかもしれない」

途切れ途切れの言葉にも、悠は健介を視界の中心に捕らえていた。「どういう意味？」

「夫に先立たれた妻は、夫の亡骸と共に火に焼かれて、夫と離れずに死ぬ風習のことらしい」

健介の言葉に、沈黙の風が穏やかに駆ける。擦れる木の葉の音も静かだった。

「正直、俺はまだ決心もまともについてねえし、切り替えられたわけでもない」

だから昨夜のことは、反省してる。健介が頭を掻きながら悠に面倒かけたと頭を軽く下げた。

「その妻は、どうしてそうしたか、あんたには分かるの？」

「え？」

悠は健介の言葉を無視した。答えのない話に、健介の口から言葉はとっさに出てこない。

「どうして先立った夫に付いて一緒に身を焼かれて死のうと思うのか、分かる？」

今度は悠の表情が変化する。ひどく優しく、嬉しそうに。

「取り残される辛さに耐えられないから、だろ？」

自信のない、語尾の下がる返答に馬鹿と返ってくる。

「一概に間違いとは言えないけど、女はね、そんなに弱くはないのよ」

健介としてみれば、思い当たる節は多く、そして同時にその言葉を悠が言えるのかと表情に出す感情に困った。

「そんなことをするのは普通罪になるんでしょうね？」

「そりゃそうだろ。そんなことは許されるはずがない」

健介の言葉は間違いではない。夫が死んだからと妻が後追いするようなことを許す世界は日本にはない。同情や悲哀こそすれど、それは罪。

「でしょうね。妻には妻として、女に生まれた人生があるんだもの」

だから死ぬことは間違っている。そう唱える人間がいるのは当然。生きたいと思いつつも生きられない人間がいるなかで、己の死を己で下すなど言語道断だろう。

「だから俺は、そうなりそうで恐いんだ」

パイロットである以上、サラリーマンの日常よりも危険は多い。

健介はもう、誰も失いたくないという強い後悔の思いに囚われ、踏ん切りがつかないようだ。

「だから男ってダメなのよ」

そんな健介を悠は笑う。不相应な笑いに健介の顔には怪訝げな皺が数本浮かんだ。

「自分の人生がありながら死を選ぶのは、賛同できるものじゃないでしょうね。でも、女はね強いだよ。何もかもが」

健介は言ってる意味が理解出来ないようで、首を傾げ、先を促す。

「立ち直る強さもある。忘れる強さもある。振り切る強さもある。でも、女の体は心ほど強くはないの」

「すまん、よく分からないんだけど？」

「女は、一度ずつと一緒だと思うと、強くなるわ。男は愛することで幸せを感じる。でも女は愛されることで幸せを感じるの」

分かる？ 悠が悪戯なまなざしを向ける。

「難しく考えすぎよ、あんたは。女はね、一度決めた相手にその気持ちは強くなりやすい。それこそ母性が働くの。だから、突然の愛する人の死には、強くあろうとする。弱くなんてならないの」

健介の眉間に皺が寄る。理解できていない顔だ。

「逆じゃないのか？」

「違う。強くなるのは体でも心でもない。思いが強くなるの。そこを勘違いしないで」

悠は健介の言葉を一蹴し、墓地横にある低いフェンスに手を載せると、そこから見える眼下の景色を静かに見つめる。

「女は大切なものを失うと、体と心は弱くなる。でも反対に思いは強くなっていくの。留まるところを知らないくらいに」

悠の背中を健介は見つめる。何も言わず、何もせず、ただその場に立って。

「あんたの言う、サティって昔のことだけじゃないわよね？」

分かったよというような言葉が空へと消えていく。

「……ああ」

健介は肯く。

「勿論、法で認められてない行為だ。あり得ないだろ？ 夫が死んだから後追いするなんて」

健介がまるで自らの話にフォローするように言う。悠もそれに同調するように肯いた。

「そうね。でも、なくならないわけじゃない。後追い自殺なんて表に出ないだけで、少なくともいわけじゃない」

悠の言葉は、健介に返答の言葉をもたらせない。後追い自殺は言

葉は悪いが、いつの時代も存在する。著名な歌い手の死に、熱狂的なファンがそうしたことがある。そして、大規模な事故で夫を亡くした妻が飛び降り自殺をしたことも一時期報道された。それこそ方法は違えどサティそのものだ。

「別にね、ちよっと前の私なら健介の言葉を聞いた時にすぐに否定してたわ」

「そして、そうやって死んだ人間を非難するんだろうな」

悠の背中にかける健介の言葉に、悠は小さく笑った。後追いなどと言うことは世論からすれば愚かな行為であり、許されざる行い。報道的にされてしまえば、間違いなく評論家の批判を少なからず浴びるだろう。それによつて遺族はさらに世間に肩身を狭くせざるをえない。中には同情や悲哀の言葉を掛ける者に、救いを差し伸べる者もいる。傷の舐め合いから始まる癒しは存在する以上、それは消えはしない。

「でもね、隼人君の葬儀の日のご両親の姿、覚えてる？」

「忘れるわけがないだろ」

健介は即座に答えた。憔悴しきり、心労による過労に、今にも我が子の後を追おうとしかねないほどに衰えながらも、健介と悠を迎えた隼人の母親。そう在れたのは恐らく父親の思いだろう。気力で持ちこたえながらも、隼人の母親は今尚父親と共に隼人の墓を訪れ、整然と供え物を欠かさない。

「私、あの人たちは一生一緒に居ると思う。新しい家族が出来た出来た来ないに関わらず、一生」

羨望を投影するように悠は遠い空を仰ぐ。先ほど健介に飛びたいと言われた青い空を。

「ねえ、少し私の話、しても良い？」

「……ああ」

振り返らない悠を、健介はそこから見つめる。

「私ね、想像してたよりもずっと弱いなあって分かったの」

「……は？」

悠の不意の告白は、健介には意外すぎたのだろう。

「お前、何言ってるんだ？」

「聞いて。話はその後に聞くから」

有無を言わさぬ返答に健介は押し黙る。

「毎日をおんなに懸命に生きてる人がいるって、正直分かってなかったわ」

その対象が誰なのかを思い出しているのか、健介も空を見上げた。「隼人君だけじゃない。病院にいた子供みんなにそう思った。仕事よりもよ？」

整備士として、パイロットが安全に飛行できるように機体を整備する人間なのに、そのことを深く考えてなかった。悠の告白は懺悔のように静かだった。健介は立ち位置を変えるように体を揺らし、数歩の足音が風に消える。

「大浪さんにも何度も注意を受けたし、自分で気づけなかった。それって整備士として失格よね？」

「そんなことは……」

健介としては、悠の何倍もその指摘を受けていたのだから、それは大したことじゃないと言いたいのだろう。

「そんなことはあるの。私自身、自分に過信してた。強がらないといけないって」

強がっていいようがいまいが、健介にはいつだって悠は自分を引く力を持っていた。それに何度助けられたことか。そう思う健介の視線が空から降りる。

「きっとそうしないといけないって、いつからか自分に言い聞かせてたのよ」

そうしないと聞かせたいと思わせる人間がいたから。悠が振り返る。二人の視線が重なる。

「……それは、俺のせいかな？」

「違うわ。あんたはあくまでその中の一人でしかない」

過信してるのはあんたも同じね、と悠が笑い、健介は思わぬ失言

に視線を逸らせた。

「さつき言つたわよね？ 夫に殉じて死ぬ妻がいるって。それって、愚かな行為だつて妻は分かっているはずよ。でもそうしたいって、強制でもなんでもないので、自分の人生を投げ捨ててもそうしたいって強い思いが働くの。女ってそう言う生き物なのよ」

話が繋がっているようで繋がっていないことに、健介の眉間に疑問の皺が数本寄る。

「亡き夫がそう願わなくても、残された妻はそうする。女って、自分の事よりもその時はその人のことしか考えられないのよ。気持ち命令するの。そうすることが一番だつて、ね」

隼人が死んだ時、母親の考えられたことは隼人のことだけ。だが母親には夫がいた。同じ辛さを味わいながらも、母親の子に対する絶望を抑えられた、ただ一人の力は今日もその効力を失つてはいない。だからこそ、悠は心の底からあの二人は一生一緒にいると思うのだろう。

「私は、隼人君に沢山のことを教えてもらった。気づかせてもらった」

何かを言い返そうと健介の口が動くが、言葉は何も出てこなかった。

「私もきつと、その愚かな妻を望むんだと思うわ」

「お前……」

初めて恋というものを知った幼子のように、悠の顔は照れと恥ずかしさにはにかんでいた。

「今があるって、当たり前じゃない。どんなに頑張っても当たり前前にならないこともある」

悠の言葉に、健介は息を呑んでいた。美由紀のあの時の告白と悠のその告白が重なって見えたのだろう。思う側と思われる側の差異と言つものを。

「サティって、忌むべきものなのかもしれないわ。物理的に不可能なことなのに、そうする者がいる。でも、愛した者の死は、愛され

た者には物理的に可能かどうかじゃない。その心の満たされで良いのよ」

勝手に死を選び、実行しようと、それは単なる我儘による己の心を救う。健介には悠の口からそんなことが出てくるとは思ってたが、つたという驚きの反面、ため息を吐く余裕を持たせる確信すらあったようだ。

「だから私は弱い。見られなくなかった姿を見られたし、見せたくない姿も見せた。我儘よね、私」

自嘲する悠は、健介に背を向けた。その背中はいつの間にか健介には小さく見えていた。

「でもね、私は一生一緒に居たい。死ぬ時も一緒に、死んでからもずっと一緒に居るの。それが馬鹿げてることは分かっているけど、隼人君と出会ってから、私、壊れちゃったのかも」

少女のようににはかむ悠に、健介は首を振った。

「違う。お前は壊れたんじゃない。疲れたんだろ」

ひどく真剣な眼差しに、悠は何も言い返さなかった。

「笑わないんだ？ てっきり私らしくないって笑われると思ったのに」

「笑ってやりたいさ。俺だって馬鹿にしてやりたいんだよ」

でも、それが出来ない。分かっていたように静けさが一面に降り注ぐ。スズメの羽ばたきすら聞こえてきそうなほどに静かだった。

「健介と私、どっちがおかしいのかな？」

顔を見られたくない。そう言っているように、悠は空をまた見上げた。柔らかい風に悠の髪が背中を滑る。

「ねえ、健介……」

その言葉は続かなかった。続きをかき消すように足音が足元の砂利を弾いた。

「健介……？」

小さな背中からその華奢な体を包み込む腕が回される。

「だから、嫌だったんだ、俺」

分かち合う温もりと、健介から悠への痛みの渡し。だが、苦しさを痛みの言葉は悠の口からは漏れなかった。

「お前がそうなるって分かってたんだよ」

痛みを与える健介の腕を、悠はそつと自分の手を添えるだけで、何も言い返さなかった。

「俺が弱いから、お前も弱くなっちまうんだ。だから、言えないんだよ、俺」

変わらなかった日常。それが当たり前だと周囲ですら思っていた日常。そんな当たり前などないと知ってしまったから、変わらずには居られない。抱きしめた悠の後頭部に、健介の額があたる。

「ねえ、大切な人の為に自分が死ぬのって、悪いこと……なの？」

「当たり前だ。でも、だから良いことにしたいんだ、俺は」

さらに力が加わる。そのまま華奢な体を折ってしまいそうなほどの強い力。何かを失った者が周りにはいる。それを思い続けることをする者がいる。だからこそ、健介も悠もお互いに恐怖を掻き消すことが出来ない。

「傍にいて、欲しい。お前に」

だからこそ、健介は言う。茫漠とした時間を生きる人生は、いつ終わりが来るかも分からない。たとえ望もうが望まないがそれは確実に訪れる。

「一緒に、死んで欲しいの？」

「違う」

悠の軽い冗談の言葉を、真剣に健介は否定する。声色に悠は静かになる。

「私、あなたに何を言われようと、愚かな妻になるわよ」

「ああ、知ってる。お前の感傷的な趣味は、俺にだつてある趣味だ。愚かな妻がいるなら、愚かな夫もないはずはない。健介の言葉に、悠はただ一言、そう。と呟いた。

「でも、俺はお前を残したくないわよ」

「私は健介を残したくないわよ」

顔を合わせぬ二人。代わりに心を通わせている二人。

「だから、俺と飛んで欲しいんだ」

それは単に同じ思いを共有しようと言う、同じ道を歩もうと言うプロポーズなんかではない。

「そう言うこと、だったんだ……？」

「……ああ。ダメか？」

プロポーズには重過ぎる言葉かもしれない。お互いを見つめ、同じ道と時間を歩むことではなく、共に死ぬことを誓う。

「言ったでしょ。愚かな妻は、夫に添い寝をして共に死ぬの」

「お前の考えだけを聞きたい。サティのことはあくまでものことだ」

悠の言葉に、健介はただそう返す。必死な言葉を。そんな健介に悠は笑った。

「私は言ったわ。一生一緒にいるの。死んでもずっと」

「俺も、きつとそうする」

だから健介は強く、強く悠を抱きしめた。痛いとも苦しいとも悠は決して口にはしない。

「健介と一緒にいけるなら、私はそれで良いの」

「……なんか、エロいな」

馬鹿、と悠は健介の腕の中で笑った。それに釣られて健介も笑う。

「行くか」

「ええ。でもその前に……」

解こうとした健介の腕を悠は離さなかった。狭い腕の中で身を翻し、瞳を閉じ、顎を少しだけ上げた。

「ああ」

健介はそこに顔を屈め、悠の体を改めて抱きしめなおし、唇を重ねた。甘い香りと柔らかい感触と、温かな人の生きている温もりの中に、少しだけ二人は涙の味を踏みしめた。

「何で、泣いてるのよ？」

素早いことは何もなかった。ゆっくりと、ただ愛しさを感じるだけのキスは、長かった。

「決別、かもしれない」

だから健介はまた泣いていた。子供のように声をあげるのではなく、頬を伝い見上げる悠に落ちる涙で。

「ずっと、添い寝してあげるから、もう泣かないのよ」

「……ああ、予約する。だから他の誰かなんか入れるなよ」

そう言っただけ健介は悠をまた抱きしめた。悠の首元に顔を埋め、顔を隠すようにキスをしながら。

「馬鹿……」

それを受け入れる悠は笑っていた。痛いはずの腕の中で、そっと健介の背中に回した腕を、同じように痛みを感じさせようとしながら。

「ねえ、結婚って何だと思う？」

悠の問いかけに、健介は顔を上げた。

「前に読んだやつには、いつでも離婚できる状況で、離婚したくない状況って書いてあったな」

「そんなの聞きたくない」

健介が悠に言ったように、悠が言う。

「健介の言葉で言っただけ」

少しだけ悪戯な笑顔に戻った悠に、健介は暫くその目を見つめていた。

「俺の言葉？」

「そう」

健介の問いに即答する悠に、健介はわざとらしく考える素振りを見せると、悠に笑った。

「お前と死んでもこういうこと、すること」

そうして二人はまた、目を閉じ顔を寄せた。

六・サティな二人（後書き）

とりあえず、エピソードその一です。

ご要望次第では、後日談や他キャラのエピソードもあります。

七・雨宮悠の物語 ～中学の出会い～（前書き）

物凄く久しぶりの更新です。

まさかこの作品の更新を予想していた人は居ないでしょう。自分で更新するといつて、計画はなかったですから。

でも、ちゃんと更新を希望する声にお答えする為に、かえって来ました（笑）

色々と詳細が気になる所だと思いますが、まずは悠の健介との始まりの物語を書いていきます。

七・雨宮悠の物語　く中学の出会い

これは、少しだけ昔の物語。私が思い出す、過去の出来事。忘れられない日々、この仕事に就いて、初めて感じたこの仕事を続けていくことへの誇り。その原点からの物語。

中学の時、私はそれほど活動的じゃなかった。それでも文化部系と言っわけでもない。それなりの理由があった。小学生時代に病に冒され、長い闘病生活で受けた治療と代償。だからこそ、出会ったのが始まりだったのかもしれない。いいえ、始まりだった。

激しい運動は体力的にも、肉体的にもまだ完全ではなく、運動後に冷える体に何度も熱を出したことがある。今でもたまにそう言う時がある。季節の変わり目に対する抵抗力の低下は、その証。トレーニングにも励んでいるつもりだけど、一種の体質のように付きまとう。

「俺、将来インパルスでこの空に帰ってくる」

吹奏楽部に入部していた私の活動場所は主が音楽室だけど、練習は思い思いの場所。私の練習場所は校舎を繋ぐ三階の渡り廊下。見晴らしもそれなりに、風通しもよく、冬以外はここで練習することが多かった。

「インパルスって何だよ？」

「知らねえの？　ブルーインパルス。ほら、エアメモでたまに飛ぶだろ？」

そんなある日、練習場に先客が居た。奥田健介。クラスメイト。でも話すことはほとんどなかった。誰が好き好んで男子と話をするものか。別にそう言う意識はないけど、話すことがなかっただけ。健介はいつもつるんでいる友達と駄弁っていた。その端で、私もいつも通りにフルートを吹く。

「ああ、あれか。何？　ケン、お前自衛隊入んの？」

話してる内容が自ずと耳に入る。打ち消すようにフルートに息を

吹きかけ、手すりに乗せた楽譜を見る。

「そこなんだよ。あれ、空自だろ？ 俺、自衛隊には入りたくない
っつーかさ、自衛隊ってきついんだろ？」

「らしいな。俺の兄貴のダチが入ったらしいけど、厳しいんだと」

聞く耳に聞き流す。それでも耳の中に残っていく。当時は奥田君
と呼んでいた。だから、奥田君は自衛隊に入るんだ。どうでも良い
情報を手に入れた。

「でもさ、俺、パイロットなりてえんだ」

「かつけーけど、大変なんだろ？」

夢がパイロット。中学時代に手に入る情報なんて茫漠としたもの
ばかり。だから、気にしてることなんてなかった。夢なんて高校に
入った後でも十分だと思っていたから。一人練習を続ける。会話は
休憩の度に聞こえる。早く帰らないかな。下手な演奏を聴かれるの
は恥ずかしい。帰宅部の奥田君たちが帰るのを待っていた。

「でもさ、こう、空を飛んでる飛行機を操るんだぜ？ 鉄の塊が空
飛ぶってすげえじゃん」

飛行機が好き。次々と意味のない情報が耳に入る。

「まあいいけどよ。お前がパイロットになったら、タダで乗せてく
れよな」

「ばあゝか。俺は戦闘機乗りのが良いんだよ。戦闘機なら、航空大
学校から入れるみたいだからな」

ははつと漠然とした夢に笑いあう。男の子らしい放課後なのかも
しれない。そう思っつて、練習に集中することにした。

「んじゃ、俺、そろそろ部行くわ」

「ああ、明日な」

まだ二カ月はあるけど、コンクール用の課題曲の練習。ソロパー
トとかはないからそんなに力むことはない。でも、結局の所、さっ
きの奥田君たちの話を聞いていて、自分の夢が、一体何なのか、考
えた所で、私はこのフルートをこれからも吹くのかと思うと、それ
は少し違う気がした。

「…………ふう」

風が気持ちよかった。少しだけ涼しくて、髪を梳いていく三階の風が首筋にくすぐったさを残していく。

「雨宮、すげえんだな」

「え？」

背中に掛かる声に、少しだけびっくりした。

「何？ 聞いてたの？ 趣味悪いね、奥田君」

とつさに恥ずかしさにそう言っていた。まさか声をかけてくるなんて思ってたから。

「こんなところで吹いてりゃいやでも聞こえるっつーの。っーか、上手いじゃん。意外だった」

「…………そう。吹奏楽ならこれくらい普通よ」

ほとんど会話したことがない男子と話してる。走ったわけでもないのに、心臓が勝手にドキドキして、渡り廊下の外 下校する生徒たちを見ながら楽譜を片付ける。

「ふーん。奏者になんの？」

片付ける私の背中にも声をかけてくる。奥田君は確かによく喋る男子。うるさいと学級委員に叱られることもあった。だから、そんなに好きな男子じゃない。それが最初の印象だった。

「奥田君はパイロットになるんでしょ？」

「聞いてたのかよ」

「お互い様でしょ」

そんな単調な会話だった。私が男子と学校関係以外の話題で思春期に入ってから初めて話したのは。つまらない女でしょ？ 昔から

そんなに異性と触れ合うことはなかったし、入院中は大人ばかりだったから、中学に入ってからにはなおさらその距離が開いていたのよ。

「そりゃそつか。でもま、上手かった。頑張れよ」

そう言って帰っていく奥田君に、何も言わずに私は音楽室に戻る。

「あなたの夢も立派だよ」

聞こえないように、もうこの話は聞くこともないと誰にでもなく

口にして。

それからは不思議な、と言うか作画的とも取れる日常だった。私の練習場所は変わらない。なのに。

「お前さ、最近ここ好きだよな？」

「屋上行けねえから、ここが一番空に近いんだよ」

練習風景の中に生徒の姿がある。それは学校だから当然。でも、その中でも、奥田君がやはり今日もいた。これはもう偶然などと言う言葉では括れない。明白な故意。

「パイロット様の学生の夢ってやつか？ どうせ叶う前に変わっちゃまうって」

「俺は諦めねえぞ。つーか、まだ始まってもねえし」

それがどういいうわけなのか、さっぱり分からない。

「まあいいけどよ。そういや今日は先輩が大会でいねえからよ、駄菓子屋でも行かね？」

「そうよ、行けば良い。そうすれば落ち着いて連絡が出来るんだから。」

「あー悪い、もうちょっと俺残るわ。後から行くから先行っててくれ」

「そうか？ なら来いよ。1945で勝負な」

「パイロット相手に挑むってか？」

「ローゲーで何言ってるんだよ。じゃあな」

「おう、後でな」

何の会話なのか、理解できなかった。私の知らない世界。知る興味もないけど。そんな印象で私も一通り練習したことで、音楽室に帰ろうとした。

「好きなんだな、ここ」

「ああ、また話しかけてきた。何なの？ ここ最近毎日。」

「そういう奥田君も毎日来てるわね」

「皮肉めいて言ったつもり。」

「まあな。風が気持ち良いし」

それには同意。ここが気持ちが良いから私も練習場所として利用させてもらっている。でもそんなことは言わない。話が膨らむと、奥田君は話し込んでくるから。私は煩い男子が好きじゃないから。

「それじゃあ」

「ああ、今日も上手かったぞ」

それなのに、私から降りると、潔く身を引く。絶対に分かってない曲のことも、いつもと同じ答え。何がしたいのか、全然分からないのに、そのさばさばとした態度がどうも気になり始めている私がついて、そんな私が少し嫌いだった。

七・雨宮悠の物語　く中学の出会いく（後書き）

コースウォーカーズに更新予定は記してあるので、今後はその計画に則って、更新はしていきます。

明日にはハウンと犬の解消記を更新します。

実はもうハウンの解消記は更新部は書きあがっていますが、たまには予定に忠実に更新しようと、明日、更新します。

八・雨宮悠の物語〜それぞれの夢の芽生え〜（前書き）

更新です。

これで悠の学生時代はとりあえずというところで、完結です。

今後の展開は、本編に沿ったサイドストーリーになるかと思えます。

八・雨宮悠の物語／それぞれの夢の芽生え

「お前、ほんと好きだな」

「良いじゃんかよ。空に一番近い場所だぞ、ここ」

「天国に近いわけでもないんだし、ゲーセンいこうぜ」

私は、聞くつもりはまるで無かった。けれど、どうしても演奏をやめると聞こえてくる声に、打ち消す声を持ち合わせていなかった。もう、何回目だろう。ここに奥田君が友達と放課後にやってくるのは。そんな内心の呆れは、茶飯事になってしまっている。

「フーかよ、雨宮さんって、いつもここで練習してんのかな？」

私の練習場所にいつもやってくるあなたたちは、よほど暇なのね。そんなことを言えるほど私は、この二人を知らないし、そんな仲でもない。

「じゃねえの？ この辺りはそうらしいしな」

下の階の渡り廊下からも演奏が聞こえる。後輩が談笑しながら練習している。私は一人。おしゃべりは嫌いじゃないけど、練習くらは静かに、誰にも見られずにやりたい。奥田君たちがいなければ、もつと気分良く出来るのに。

人に努力をしているところを見られるのは嫌。だから、そろそろ私の心はイラつきを覚えていた。

「ま、いいや。俺もそろそろ部活行かねえと」

「もうすぐで終わりだろ？ しっかりやれよ」

「心配ねえよ。俺に勝とうなんざ百億年早えって教えてやる。でもって、卒業式には、ボタンなくなってやっからな」

「お前は無理に賭ける」

「言ったな？ 覚えとけよ。俺、人気あんだぞ」

「分かったから、早く行けって」

そうして奥田君の友達がいなくなる。下らない話に笑えるのは、意味が分からない。ただ、一人減ったことで、静かで透明な夏風が

一息つかせてくれる。今日も一段と空が青いわ。そんなことに気づける余裕が心地よくなる。

「今日はまた一段と空が青いなあ」

近くから聞こえたその声に、ドキツとした。

「そう思わねえ？ 雨宮」

大して親しくも無いのに呼び捨て。慣れたけれど、いちいちこっちに話を振らないで欲しかった。

「……そうかもね。夏だし」

「カキ氷食いたいな」

人の話を聞かない、マイペース。私の調子が狂う。

「雨宮も夏の大会が最後なんだろう？」

また話が変わる。私が答えたところでまた話が変わるくらいなら、無視したほうが楽。私は演奏を再開することにした。

「……そっか。頑張ってるもんな。邪魔しちゃ悪いか。帰るわ」

後ろを通り過ぎる足音に、また調子が狂った。そして、思わず変なおとまで出しちゃった。

「お？ 何だ今の？」

足が止まって、横目に視線が合ってしまった。うう、恥ずかしい。その気持ちだけが、この時は辛かった。

「……何でもない。汗で滑っただけ」

とっさの言い訳がそんなもの。頭の中は、こんな男の子に変なものを見られた、聞かれたとショックで真っ白だった。

「はははっ、雨宮もそういうところあんだな」

悪気の無い笑み。だと分かっている、それは屈辱に近い恥辱だった。

「失敗するから、こうして練習してるの。悪い？」

機嫌が悪くなった声だつて、自覚はあった。去年から時々ここに来ては、ただ、去っていくだけの関係。クラスは違うし、話す話題も無い。この一年、ずっとそれだけ。進展も無ければ後退することもなかった。

今思えば、なんてつまらない女なんでしょうね、私って。

「いんや。初めてそういう顔見せてくれたしな。得した。ごちそうさん」

片手をひらかし、校舎に戻るその背中に何も言えなかった。ただ、恥ずかしさと気持ちの高鳴りに、戸惑ってしまっただけ。

それでも季節は過ぎ去るもので、待つてくれることも無く、部活を引退し、受験に入る。それからめっきり奥田君との接点は無くなって、あの場所に行くことも無ければ、あの場所で響かせた音色も思い出の中に消えていた。ただ、やみくもに勉強して、その日を待つだけ。

「悠あー、そろそろ時間よ」

「うん、今行く」

私立の合格はとった。滑り止め対策は万全。もちろん、両親は私立に生かせてくれるような経済状況ではなく、受かるしかないのが現実で、昨日私は中学を卒業した。吹奏楽部の友達からは、高校に入っても続けようね、なんてありふれた約束を曖昧に頷いたけれど、素直に言うと、そのつもりはなかった。吹奏楽は内臓を鍛えるために進められて入部し他だけというのが本音。でも、やっぱり季節の変わり目には体調は崩すし、あまり変化は無かった。フルートの腕前だけは素人以上に付いたけれど、趣味の枠を脱することは無かった。

「そう言えば、奥田君も受けたんだっけ……？」

「ん？ 何か言った？」

「ううん、なんでもない」

合格発表の会場　受験した高校へ向かう。関係ないことだけれど、ふっと思ひ浮かんだ。

高校の駐車場に止めて、お母さんと発表を待つ。他にも他校や知っている顔ぶれもいたけど、特に話すことはしなかった。

「ドキドキするわね」

「お母さん、受験してないじゃない」

「娘の受験ってのはね、親としては自分が受験するより緊張するのよ」

そういうものらしい。私にはよく分からないけれど、私よりお母さんの方が受験生らしく見えたことは、内緒。

「来たわよ、悠」

「分かってるってば」

先生たちがロールされた紙を持ってきて、掲示板に張り出す。いっせいに動き出す受験生と保護者の中に、私とお母さんもいた。受験票の番号を遠目から探す。不思議と緊張はしてないけれど、やっぱりドキドキした。周りの歓喜、悲哀の声の中で、私は気にすることも無く自分の番号を探す。

「悠、番号何だったっけ？」

「Gの1421」

ずらっと並ぶ番号をじつと見ていると目が回りそうだった。

「あっ……」

その中で、一つだけ私の視線を捕らえた番号。

「うおっしゃっ！ 受かってるっ！ 受かってるっ、おれっ！ ほらっ、あれっ！」

その時だった。まるで私の驚きを奪い去るような威勢のいい声がすぐ目の前から聞こえた。

「あっ、雨宮っ。おいっ、見てくれよっ。俺っ、受かったぞっ！」

「そ、そう……おめでとう」

あまりの強引な喜びに、声を絞り出すことが精一杯。奥田君が実際大きく喜んでいた。

「悠、あつたわよ、ほら、あそこっ」

「う、うん。見えてるから」

私の番号もあった。でも、素直に喜ぶ気持ちはどこかへ行っちゃった。ドキドキしていたものが、奥田君に盗まれたみたいに、隣で喜ぶお母さんの声も届かないくらいに、私は冷静になってしまっていた。

「雨宮、お前は？」

「えっ？ えっと、あつた、よ……？」

突然聞かれて、間抜けな答えだった。

「マジかっ！？ よっしっ！ 頑張ろうな、高校もっ！」

「ちよっ、お、奥田君っ！？」

いきなり両手をとられて、ぶんぶんを上下に振られた。あの時の恥ずかしさは、きつと絶対に忘れない。人前であんな恥ずかしいことをされたのは、あれが初めてだったんだから。

それからの高校生活は不思議と縁があつた。もしかすると、偶然を装われただけなのかもしれないけれど。

「おーい、雨宮」

「……後ろから大きな声で呼ばないで」

学校帰り、偶然じゃない、絶対に待っていた。追いかけるフリをしているのが明らかかな顔だった。

「途中まで帰ろうぜ」

「勝手にすれば」

「じゃあ、勝手にする」

高校に入ると、生活が一変。なんてことは無かった。勉強も何とかが追いついて行けるし、家からもそんなに遠くない。顔見知りもあるし、違うのは部活動に入らなかったこと。誘われることは多かったけれど、どうしてもやる気を見出すものは無かった。

「そっぴやさ、だいぶ髪、伸びたよな、お前」

ただ、変わったこともある。私は奥田君といまだに呼んでいるけれど、奥田君はたまに私のことを、お前と言う。もちろん最初は不快だった。でも、人とは怖いもので、注意することを止めると、次からは慣れが出てきて、今は受け入れてしまっている自分がいた。きつと、同じクラスになってしまったから。そう思ったかった。

「高校に入つて、さすがに編むのは嫌だから」

中学のころは三つ編みをよくしていた。高速が厳しくて、髪を切りたくもなかったから。特に願を掛けるようなこともなかったけど、

ただ、長い髪が気に入っていた。

「俺は今のほうが良いと思うぞ」

「……奥田君の好みは知らない」

「そりゃそっか」

依然としてのおっさりとした態度。でも、さらりとそういうことを言うことから、最近はおっさりの言葉が出てこなくて、体が少し熱くなることが多い。

隣に並んで帰ることは無かった。いつも後ろから来るのに、気がつけば私の前に奥田君の背中がある。

「奥田君」

「ん？」

「髪型くらいしつかりしたら？」

放課後だって言うのに、奥田君の後頭部には寝癖が跳ねてる。その上方で一日を過ごしたなんて、馬鹿らしいというか恥ずかしくないの？

「んなもん面倒じゃん。俺別にオシャレとか興味ないし」

「なら手櫛するの止めれば？」

感心ないようなことを言いながら、しっかりと開いている片手で髪を気にしてる。

「頭が痒かったんだ」

そういうことにして欲しいらしい。男の子って変。

「おっ、P 3 C」

奥田君が空を見上げた。そこを一機のプロペラエンジンの飛行機が飛んでいく。航空自衛隊の飛行機。私も見慣れた飛行機。

「やっぱり今も好きなの？」

「そりゃあな。俺的にはP 2 Jだな。あれは格好良かった」

そう言われても、分からない。

「どんな飛行機？」

分からないことは素直に聞く。この当時の私は比較的素直だった。俺らが小学生くらいの時かな。引退したんだけど、黒くて、あれ

よりちよつとデカかった。B 29つて知ってるか？」

「それくらいは」

戦争で原爆を落とした飛行機。くらいの知識は私にもある。

「B 29の先頭部分つて、スケルトンなんだよ。攻撃とかする時に使ってたんだけど、P 2Jも似たような作りで、格好良いんだぞ」

言われている話は分からない。いつも一言二言な会話だけど、飛行機の話をする、奥田君は私の前でも饒舌になる。きっと、友達という時よりも。

「ふーん。やつぱりパイロットになりたいんだ？」

「ああ。まあブルーインパルスは無理だろうけど、プロペラでも良いな」

中学のころの漠然とした希望じゃなく、高校の奥田君は現実を分かった上での夢を抱いている。そう思った。

「お前は？ 将来はどうすんだ？」

それでもやつぱり奥田君は奥田君。マイペースな話の展開に、私は振り回されるだけ。それも慣れて、別に嫌ではなくなっていた。

「将来は大学に入って考えるかもしれない。今は特に興味あることもないし」

目標を絞る奥田君とは違い、私は明確なビジョンと言うものを、いまだに見つけられない。最低、役場の職員にでもなって、恋愛結婚をして、家庭に入り、主婦になる。そんなありふれたものでも十分な気がした。

「ふーん。お前らしくないな、なんか」

言われなくても分かっていることだけれど、口に出されるとどうしてか、ムツとする。

「雨宮、お前さ、好きなことつて何？」

「急に何？」

すぐに応えない辺りは、自分でも分かる嫌いな部分。でも、直らない。

「良いから。で、何が好きなんだよ？」

急にそういうことを言われても、ぴんとくるものはない。

「フルートと読書とかは割りと好きかも。細かいことも単調よりは好きかも」

強いてのこと。仕事にしたいとかそういうものじゃなく。

「手作業とか好きなのか？」

手作業。 。 どうしてそう思ったのか分からないけれど、間違いない気がする。

「そう、かもね。嫌いじゃないかな」

「物理の実験とか英語とか結構好きだろ、お前？」

また話題が変わる。 ついていく人の苦勞を組まないのは、いつものこと。

「だから何？」

お互いに理系クラス。 数学や物理や化学は別に嫌いじゃない。 そ
うじゃなければ文系にいるはずだから。

「お前さ、整備士とか良いんじゃない？」

「はっ？」

突拍子もない言葉に、素っ頓狂な声で勝手に出た。

「いや、だって、手先は器用で理系。 細かい仕事も嫌いじゃない。

だったら、整備士とか向いてるって、お前」

今思えば、それがきっかけ。 些細なものだった。 きっと健介は覚えていないことでも、私はきつと、その言葉は忘れたりしない。

「他にもやりがいのある仕事とかあるでしょ？」

「ない」

断言される。 呆気にとられて何も言い返せなかった。

「お前には絶対向いてるって」

「どうして奥田君が断言するのよ？」

「パイロットになる男の直感だ」

全く当てにならない返答に、わざわざ反応する私自身に自己嫌悪。

「私は私で将来は決めるの」

「俺がお前が整備士になる方に賭けても良い」

だから。人の話を聞け、この馬鹿。いくら私でもストレスというものを感ずるもので。

「勝手にして」

「あ、俺こつちだから」

ああ、もお。何なのよ、こいつは。

「明日、持ってきてやるから、見てみるって」

「何をよ？」

曲がり角で立ち止まった。その必要はないのに、イラついているのに、奥田君の言葉を待つてしまった。

「パイロットと整備士の本。マジで面白いから、読んでみるって」

「それじゃあ」

私はそれには応えなかった。後ろから聞こえる、持ってくるからな、の言葉にも振り返らずに、それでも少しだけ読んでみたい思いもあつたりして、私は家路についた。

それから、きっと現在の基盤になった付き合いの始まりだったかもしれない。

「ねえ、悠。進路って決めた？」

「うん。一応ね」

「何になるとか決めた？」

「航空整備士、かな」

沸き起こる驚きの中心に、私はいた。当たり前といえは当たり前。そんなことを目指すなんて、少し前の私には考えの欠片もなかった

「何それ？ 悠」

「飛行機の整備士よ」

再びの喧騒。まさかの展開を誰が予想したことか。いや、一人だけいる。

「おーい、雨宮。ちょっと良いか？」

「ちよつとごめんね」

「あ、悠……」

席を立ち、学年が上がって理系クラスの編成で別クラスになった奥田君がドアから呼ぶ。ちょうど頼んでいたものを胸に持って。

「ほら、これ」

「ありがと。いつごろ返せば良い？」

受け取る数冊の雑誌は、主に整備士の基礎知識の載ったもの。中には普通に航空機の写真が載っているものもあるけど。

「俺は何度も読んだからいいや。やるよ、それ」

「そう。なら遠慮なくもらうから」

「ああ」

会話はそれでも単調。会話の数は増えたけれど、内容の展開はいつも偏ってる。でも、私としては何かにつけての恋愛話に発展するよりは、今はこういう展開で終わるほうが気が楽で良かった。

「あれ？ でも、この本、この前出たんじゃないの？」

「うっ……」

一冊の整備士の本。刊行はつい最近だった。何冊か今までにももらった本は、基本的に古い。でも、これだけは新しかった。奥田君の顔を見て、察しはつく。簡単に感情を顔に出す男の子だった。今も昔も。

「お金払うから、ちょっと待ってて」

「いい、いい。俺が読みたくて買ったんだ」

「嘘。これ、パイロット知識のことじゃないでしょ？」

簡単に捲るページには、まだ分からない言葉の羅列と知っている物理の公式。パイロットに関しての記述は見当たらない。

「い、良いんだよ。似たような進路選ぶ奴、お前しかいねんだから、大事にしたいんだよ」

「……………」

その言葉は、私に明確な恥ずかしさと照れを呼ぶ。

「じゃ、じゃあな。ちゃんと呼んで勉強しとけよ。工業の連中より、遅れてんだからな」

「あっ……………もあ」

結局お金は渡せなかった。かすかに感じる本の熱に、奥田君は自分の教室にそそくさと戻っていった。

「へえ」

「ふーん」

「そっかそっか」

「何よ？」

席に戻ると、私を面白そうに見る友達。分からないわけじゃないから、先に釘をさす。

「違うわよ。これを借りたの」

「良いつて良いつて」

「うんうん」

「男子に興味持たない、そっけない悠にも春が来たかあ」
誤解された。

「違つつて。あれのどこが良いわけよ？」

そう、この当時は私に将来の夢と言うものを示唆した男の子という程度でしか、感情を覚えることのない関係だった。向こうがどう思っていたのかは、この時の私は気づくことがなかった。

中学高校を通して、私が知った奥田健介という男子は、夢を語り、夢に引き込んだ、マイペースで自分勝手な印象。それなのに、私は無理な反論をしたことも、いらいらすることはあっても、反発する気が起きたことは、一度もないこともまた、事実で、私の青春時代において、もっとも会話を交わし、人柄を知った男の子でもあった。
《どうだ？ やっぱ大変か》

「そうね。でも、面白いわよ」

高校を卒業と同時に、関係は大きく変わった。通う大学は異なり、卒業式の日に交換したアドレスと番号で、たまに連絡を取り合う程度。

「そっちはどうなの？」

《こっちも大変だ。さぼってる暇もねえよ》

「健介にはちょうど良いじゃない」

《うるせえよ。別に飛行訓練は楽しいから良いんだけどよ》

私は航空整備科のある大学へ。健介は航空大学校へ。それぞれ進学し、生活も一変した。そして一番変わったのは、やっぱり、名前。《そっぴや、悠。お前、卒業したらどこに就職するとか決めてんのか?》

「まだ早いわよ。とは言つても一等航空整備士取らないと大手は無理だろうし、しばらくは付属で経験積むか、地方じゃないかしらね。健介は?」

《飛行時間も規定あるからな。そのときの募集次第つてやつだな》
付き合つてるわけじゃないのに、名前で呼び合う。いつごろ変わったのか、それは良く覚えていないけれど、お互いが進学して顔を合わせることがなくなった頃だった記憶はある。

《あ、やべ。そろそろ時間だ。今日から夜間訓練入つてんだよ》

「そう。せいぜい教官に扱かれなさいよ」

《お互い様だ》

「私は要領よくこなしてるわよ」

《うへえ。猫かぶりかよ》

「猫は可愛いものよ」

そんな冗談も言い合うようになったのは、きっと顔を見ないで話すから。

《んじゃな》

「頑張りなさいよ」

《お互い様だ》

通話を切ると、寮のカーテン越しに空を眺めた。何も飛行しない静かな星空。何となく息を吐き出して、自分の机に向かう。

「さて、明日の予習でもしますか」

机上に広げる教本。入学当初はまるで意味の分からなかった数式や英語名称の部品、取り扱い方。今ではそれを当たり前のように勉強している自分がいて、時間の流れの早さと充実している今の生活に、やる気が少しだけ出てきた。

「今日の気分はこれかな」

ここには、私の夢をからかう人は誰もいない。ただ、いるのはライバル。同じ夢を共有し、競い合う。叱られ、詰られ、悔しくて泣いて、見返してやろうと勉強して、笑いあつて、少しずつ成長していく。きっと健介も同じ生活をしているんだろうと思う。

楽しいことばかりじゃないけれど、これまで歩んだ人生の中では一番明日が来ることを楽しいと思っているこの生活に、私はコンポにCDをセットした。流れてくる牧童の笛の軽快なテンポに、タクトを振るようにペンを動かした。

八・雨宮悠の物語〜それぞれの夢の芽生え〜（後書き）

閲覧ありがとうございました。

現在パソコンを修理に出しているため、通常更新作が手元にないため、更新予定作は「とある事務所のテトテトテン」と「マリーとサイファー」の二作と本作の三本になります。数日ほどで戻ってくると思うので、その時は「ユースウォーカーズ」から更新を再開し、これまでと同じ更新を続けていきます。

それまでの予定作は、21日くらいに

「とある事務所のテトテトテン」を更新します。

九・兩宮悠の物語 ～この地へ～（前書き）

少し長めの更新です。

ここからが悠のストーリーの始まりと言ったところでしょうか。

九・雨宮悠の物語　〜この地へ〜

大学生活は、正直疲れることが多かった。それは疲労ということではなく、充実と言うもの。朝は午前は航空工学から整備技術の講義に、少し回転が遅い頭には念仏のような講義が続き、午後からは実技として実際に航空機器を使用しての整備士としての勉強が続く。その後はバイト。さすがに疲れる。それで疲れないのなら人間じゃない。帰宅してからも明日の予習と復讐をノートにまとめると、寝るのは深夜二時を過ぎることもしばしば。友達と遊ぶこともあるけれど、それでも時間が惜しいと思うことが多かった。

「大変よね、この仕事」

ちょうどドラマでパイロットと整備士のラブストーリーが放送されている。それはそれで面白い。でも、現実とは違うのだと、ドラマのように展開が上手く行くはずもなく、それ以上に、パイロットと会うこともほとんどないそうで、現実は大変の一言に尽きる。

大手で活躍する整備士が如何に大変なことなのか、茫漠と考えていた高校の進路選択までとの現実の差異は、寮に戻ると全身から力が抜ける。まさか各機種毎に一等航空整備士という国家資格がいるとは思わない。就職しても一年間ほどの飛行機の基礎、整備方法、専門用語に整備実習を重ね、幾度もの筆記と実技試験を受け、社内審査を通って初めて国家資格に挑める。道のりはまだまだ遠かった。

「ん？　メール？」

それでもやらなさいといけないと、自己奮起して机に向かう。あまり女の子らしくない室内も、落ち着く。その中で響いた着信音に携帯を手にとる。

「健介？」

よっ（^^）／　どうだ？　そろそろそつちも実技か筆記試験があるんじゃない？　こっちは今日、Undercarrierageの勉強だった。前にやったんだけどよ、教官が抜き打ちで試験し

てきてよ。マジ焦ったぜ。

そんな内容のメール。最近ほぼ毎日来る。まるで定例報告のよう。頼んでもいないけど、飽きずに送ってくる。今日はどうやら Under carriage、つまりは降着装置。簡単に言えば車輪のこと。きつとブレーキシステムのこともついでに勉強させられたんだと思う。そう言う基礎知識もパイロットは学ぶ。もちろん私だってそれくらいは教わった。だから、どういうことをしたのかは想像がつく。

「結構楽しそうね、健介」

それでも確証はないけれど、健介は健介で昔から変わらない夢を追いかけて楽しんでいるみたい。素直に羨ましいと思う。

基礎はちゃんと復讐しなさいよ。

他に書くことが浮かばなくて、それだけを返信した。複雑とか羨望はない。ただ、本当に楽しみにしていたことを頑張っている健介に感心してしまう。

「負けてられないわね」

昔からお調子者のくせにやることはしっかりやっているような健介。気軽な一日の報告メールを見るたびに、感心すると同時にちよつとムカつく。健介が出来ていることを、私が引けを取っているなんて思いたくないという、勝手な嫉妬。つまらないことだけど、そう言う健介とのやり取りがあるのは、悪い刺激じゃなく、むしろ疲れた体を奮い立たせるようなものも感じる。

「置いていかれたくは、ないからね」

ここで机の上にも写真の一枚や二枚、あればもつとそのやる気も上がるというものなのかもしれないけれど、あいにく、健介と写真なんて撮影したことは一度も無くて、せいぜい卒業アルバムくらい。それを見返すほどではなく、静かに机に向かう。

「はあ、一等航空整備士って、航空機全般を扱うのね……回転翼機までなんて、道のりは遠そう……」

大手で働いているような整備士と、今の私。天と地もの差がある。

夢のまた夢と思つて一歩踏み出した私の足は、一体今はどれくらいの所まで来ているのか、学科教習本の中に記されていた、一等航空整備士という資格取得までの経緯に、やる気が少しずつ減った。

「あー、悠っ！ 久しぶり〜」

それから月日と言うものは充実していたのかそうではないのか、高校を卒業して二年が経った。学校を卒業してからも、私にはまだ整備士という資格は無く、これからの就職先での約半年間の整備経験を積んで、二等航空整備士を目指す。学校では訓練課程は終えたけれど、技能証明が無ければ担当する航空機の整備資格がないわけで、それは就職先からの指示と自己判断で決めることになった。

「うわあ、めっちゃ綺麗じゃん、あんた」

それでも私は二年ぶりに地元へ戻ってきた。冬晴れの北風の強く吹く日。それは私が大人の仲間入りと言う子供との一区切りを示す成人式の日だった。大して昔と変わらない町の中で、声を掛けてくる友人たちとの久々の再会は、驚きに満ちた再会で、あの頃みたいなあどけなさはなく、髪も随分と皆変わっていた。もちろん、それは私も同じだったけれど。

「そんなこと無いわよ。みんな同じじゃない。それよりも久しぶり。元気みたいね？」

高校を卒業して、地元を出る前に数度遊んで以来の再会。もう誰一人としてあの頃と変わっていない友達はいないのに、その姿を一目見るだけで、誰が誰なのかすぐに記憶の扉が開かれた。

「いや、悠。あんた化けすぎだつて。モデルとかやってるわけ？」

再会の挨拶がひとしきり終わると、視線が私に集まる。

「してないわよ。言ったでしょ」

私が整備士を目指していることは周知の事実。そんな人前に出て、とか苦手。

「いやあ、もつたいなさ過ぎ。今からでも遅くないって。応募しよう？」

「しないわよ。興味ないんだから」

再会早々の話題にうんざりする。

「そっちこそどうなの？」

自分が話題に上がるのは、未だに好きじゃない。

「そうそう、悠。知ってた。これ、結婚したのよ、去年」

「うそっ？」

思わず視線を向ける。これ、と呼ばれる友達の薬指を見る。そこには、二本の指輪があった。婚約指輪と結婚指輪。今時二つを贈られるのは、相手はそこそこの人なの？ 思わず視線で訴えてしまう。「旦那つてば、銀行員よ。しかも元上司。あんたも隅に置けないとするわよね」

「そうかなあ？ でも告白されたのは、私だよ？」

そうあけすけと言われると、二の句が無い。おかしいことはないし、これからもそう言うことが増えていく。おそらく自分もいつか……。そんなことを考えようとしても、真白なビジョンしかなかった。

「呼んでくれれば良いのに」

「違うのよ。これったら、挙式はグアムよ、グアム。親族だけ連れて、あたしら誰一人呼んでなかったわけ」

「ごめんねえ。でも、最初は考えたんだよ？ でも資金も考えると、後で報告した方が良いと思ったの」

グアム、ね。それなら仕方が無いと言えばそうかもしれない。今の私にはそこまでの資金はないし、時間が何よりない。恐らく招待されても欠席したかも。

「あーあ、あたしらもこうなっていくんかねえ」

「さあ、どうかしら」

少なくとも、最も遅く結婚するなら私。そんな印象を、友達を見ていると思う。でも皆まだ二十歳。それがもう二十歳なのか、と幸せそうに笑うその子を見ていると感じてしまう。

「やあよね。成人式で再会したら、子供いました、とか、結婚しま

したとか言われるの」

「じゃあ、結婚したら良いのに」

これが余裕なんだろうか。そう簡単に言われると、さすがにため息ものであつて、近くをベビーカーを押して通り過ぎる同い年らしい子を見ると、言葉も無かつた。

「あたしはまだまだやることあるのよ。悠だつてそうよね？」

「ええ、まあ」

その同意は、何かむなしなものがある。

「でも、良かったわね。おめでとう。今度何か贈るわ」

それでもやっぱり友達のためでたいことは祝福したいわけで、自然と会話が止まるとそう伝えた。

「いいよあ。悠だつて大変でしょ？ そのうちまた昔みたいに遊びに行けたらそれで良いんだよ」

それを言われると、それを受け止めるしかなくて、そうね、と笑つておいた。

「フーかさ、悠。あんたはどうなのよ？」

「何が？」

続々と会場の文化会館に集まる成人を迎える同年代。覚えていた顔もあれば、名前も出てこないけど、顔は知っているような気がする人もいた。その中で再び振られる話題に首を傾げる。

「奥田君よ、奥田君」

「そうだよねえ。奥田君に誘われて、整備士目指してるんだよねえ？」

その話題か。心の中でうんざりした。

「違つて昔から言ってるじゃないのよ。付き合つてないし、そもそも卒業してから会ってないわよ」

第一、学校が違う。ただ、電話やメールをしていることは言わない方が良さそうな気がし

て、それは黙つておいた。

「そう向きになって否定するのは、怪しいわね。メールくらいはし

てるんじゃないの？」

鋭い指摘に、そっぽを向く。

「顔、反らすってことは、そうなんだね？」

「あー、もお、違っつてば」

何をしてもからかわれることに変わりはないというこころらしく、怒ってるんだけど、どうしてか笑ってしまう。きつと、懐かしいという感覚が甦ってきたからかもしれない。

「ま、本人に確認すればいいわけよ」

「え？ 来てるの？」

前にメールで聞いた時は、確か訓練が入っていると聞いたと思っけれど。

「さつき、他の男の子たちといたよねえ」

思わずその言葉に周囲を見回す。健介が来てる？ 訓練はどうしたのよ？ そんな疑問を抱えて。

「あーこりゃ、当たりだ。うん」

「そうだねえ。反応が早いもんねえ」

「え？」

そんな私の背中に、勝手に納得して肯く女友達二人。直感ですぐに気づいた。

「あんたたちね……」

「はいはい。怒らない怒らない。今日は楽しむ日でしょうが。せっかくの美人顔が般若になってるって、あんた」

「素直に教えてくれないからだよ？」

「もお。本当だって言ってるじゃない……」

振り回されて、盛大に一息漏れた。昔のまんまの今に、楽しいのかそうじゃないのか、よく分からない気持ちだけが残った。

「新成人の皆さんは館内の方へお入りください」

その時、拡声器を持った関係者らしき人の声に、私たちのそんな懐かしい会話も一旦途切れる。

「やっと始まるのね。いつまで待たせる気だったってのよ」

「寒かったもんね。早く行こ」

「そうね」

そこからの会話は懐かしい思い出を語り合いながら、ただ長い時間、舞台上でスピーチをする祝辞とこれからのことを話す来賓の方たちの話を、聞き流しながら少しだけ昔の空気の中で、私たちは時を過ごした。

「これからどうする？ どっか寄ってく？」

ひとしきり式が終わると、写真を撮ったり、談笑が待っていた。

それでも同じ会話が再び私を疲れさせ、なれない振袖も相成って、これから出かけるという気持ちは、正直私には無かった。

「このままじゃ、無理じゃない？」

「というより、私、また行かないといけないから、悪いけどここまでね」

それよりも優先すべきは、仕事。今年は成人式が週末だったから良かったものの、休み明けには早速仕事がある。引越しの荷解きもしないといけないし、準備もある。さすがにこれ以上の時間は取れない状況が待っていた。

「じゃあ、また今度にする？」

「そうだね。悠もこつちで就職したんだよね？」

「ええ。時間が空いたら連絡するわ」

再会は懐かしんだけれど、別れは実にあっさりとしたものだった。それはきつと、誰もが地元に残るから。運が良かったのかもしれない。こうして友達がいるということは。

そこでまた今度遊びに行こうといつになるかは分からない約束をすると、実家に迎えを頼んで車を待つ。どこかへ行く人。帰る人。今日貰った紙袋の中を見て、口々に声を漏らす人。同い年だからか、その全てがどこか懐かしく見えた。この中から、これから先一生会うことの無い人がどれくらいいるのか、そんなつまらない事を考えながら人の波で待っていた。

「免許の試験にも行かないと」

学校時代に卒業はしたけれど、まだ試験場での試験は受けていない。引越しが落ち着いてからにしようと思っていたけれど、見える景色が田舎であると再認識すると、その必要性が間近に思えた。いつそのこと、高校在学中にとっておくべきだったかもしれない。そんな後悔も沸いた。職場には近い所にアパートは借りたけれど、買い物の事を考えると、車で会場を後にするのを見てみると、そう思ってしまう。

「あ……」

暫く待っていると迎えに来た。良かったの？ と聞かれるけれど、時間を考えると肯くしかなく、後ろ髪を引かれることも無く、久しぶりの実家へ戻った。

「悠も成人か。早いもんだ」

その日の夕食は、久しぶりに母の手料理をゆつくりと堪能した。

成人式前日に引越しを済ませて地元に戻ってきたせいか、昨夜は疲労にゆつくり出来なかった。

「そうねえ。なんだかあつという間よね」

家族三人揃って囲む食卓で、両親が私に感慨深そうにそう言う。

理由に思い当たる節が多いだけに受け止める。

「まだまだ実感もないし、変わらないと思うけど……」

二十歳になったからと言って、変わることは納税関係くらいにしか思うことは無い。他の事はそれほど大きな変化があるわけでもなく、仕事が始まるということくらい。

「昔は入退院を繰り返していたからな。今日を無事に迎えられたことだけでもえらいことだぞ」

お酒を勧められたけれど、明日の事を考えて遠慮した。少々父は残念そうだったけれど、いつかは晩酌に付き合っただけでいい。そう思った。これからは親孝行も考えていけなかないのかあ。なんて、少しだけお酒の臭いに思ったりもしたけれど、まだ、私には出来ることは少ないし、今はとにかくここまで来たことをきちんとやり遂げるだけなのかもしれない。

「これで後は、結婚だけねえ」

「悠が結婚、か。想像できんし、早いだろ」

母さんは彼氏はどうなの？ と訴えてくるように見てくるけれど、父さんはそうでもないよう。それは嬉しいようなそうじゃないような、微妙な感情だった。

「今は仕事のことです。いっばいだから、当分ないわよ」

散々口にした言葉を両親にも伝える。

「そうだ。悠にはまだまだ早い」

そこでお父さんと言う存在に同意されるのも複雑だった。それが父親心なのかもしれないけれど。

「何言ってるの。あなただって悠くらいの歳に、だったじゃないのよ」

「それとこれとは別だ。悠が男を連れてきても、追い返すぞ」

「あらあら、悠も大変ね？」

「だから、そんなことないってば」

どうしてそう言う話ばかりなのか、苦笑して受け流すしかなく、本当にそんな気もなかった。でも、同時に自分が結婚するという、女としてのことを考えると、二十歳を過ぎると昔みたいに冗談交じりにならないのかもしれないと、これからの仕事との事を考えると、やっぱり簡単には消えていってほくれず、結婚と言うものがどういうものなのか、初めて少しだけ真剣に考えた今日だった。

「それじゃあ、しつかりやるのよ」

「大丈夫。今までとそんなに変わらないんだから」

翌日、ゆっくりする暇もなく、朝から忙しさが溢れていた。眩しい空の下、ゆっくりと家族談議なんてものは無く、すでに父さんは仕事へ行き、母さんも洗濯の途中で見送りに出てくる。少しだけ懐かしい、母の見送りを受けつつ、それほど心配されていない今。高校卒業後は、名残惜しいと訴えてくる両親の説得に苦笑したのに、今はそれもない。まるで高校時代と同じように朝登校して夕方には

帰宅する。そんな軽いものだった。

「それからこれ、持って行きなさい」

時元に戻り、地元就職し、実家から少し離れた職場へ一人暮らしが再会する。それはかつてのように県外へ進学するわけでもないから、自分の気持ちも比較的落ち着いていた。結局故郷の重力に引かれてしまい、離れられなかっただけかもしれないけれど、親の心配を軽減できるのであれば、それは悪くなかったと思う。

「別に自分で用意するのに……」

手渡される大きな紙袋は、少しだけ重量感に腕が下がる。中には菓子折り。受け取ると、そう言うものなのか、少しだけ疑問も浮かぶ。新人のくせにいきなり取り入ろうとするのか？ とか思われることは無いのだろうか。そんな疑問。

「いいのよ。まずはこうやって話題作りから入れば」

そう言うのは必要ないと思った。配属されるのは整備部署。適当な話題よりも、恐らくは早速業務連絡としての話題や、修学してきたことを聞かれそうな気がする。それでも無碍にするわけにもいかず、受け取りバス停へ向かう。

「落ち着いたら連絡しなさいよ。あ、それなら手伝いに行こうか？」

「大丈夫よ。私だつていい加減大人なんだつてば」

根に差す所は昔と相変わらずだったかもしれないと、思わず小さな笑いが出た。

「それじゃあ、行くね」

「いつてらっしやい。頑張るのよ」

お互いに顔を見合つて、私は先に背を向けた。これからバスに乗り小一時間ほど移動し、これからの生活の地へ向かう。それは新鮮で、不安で、それでも目標がそこまで来ているのだと、興奮もしていた。まだ二等航空整備士の資格すらない私を、雇用してくれたのは昔から知っている小さな飛行場。受験資格はあれど、やはり経験がなくては理解もままならない。現場と学校は異なるのだから。だからこそ、そんな私を認めてくれた会社には、高鳴る気持ちが大き

く私の足を突き動かした。

「よし、お前ら、一旦集まれ」

格納庫内に男の声が響く。ドッグ内で機体整備をしていた整備士数人と、外で出発前の整備をしていた整備士が集まる。

「ラインはいい。ドッグだけ集まれ」

それを見た男が外からドッグへ来る整備士たちを仕事へ戻す。全員が不思議そうに男を見ていた。整備士は大きく二つに分かれ、飛行前、到着後の点検、燃料補給などを行う整備士をライン、航空機に問題があり、格納庫での整備が行われる場合や飛行時間に応じて時間をかけて点検をする場合に担当するのがドッグと区分けする。それも大手が所有する大型の機体はともかく、基本的には整備士一人によって機体は整備される。それでも手間と労力はかかる為に、数人で行うことが一般的ではあるが、この飛行場においてはラインもドッグも基本的に整備士は一人一機を担当している。その為整備士の人数もそれほど多いわけではなかった。男の呼びかけに集まる整備士は十人もいない。

「今年のうちも新卒を採ることになったのは知っているな？」

男の話に、集まった面々は、「ああ、そのことか」と肯く。

「当面は両方の資格受験訓練になるが、それでも戦力には変わりない。まずは俺が指導するが、その後は資格受験次第で配分する。それまではお前たちもそいつをしつかり面倒見てやれ」

はいつ、と返事が響く。

「大浪機付長」

「何だ？」

一人がいいですか？ と男を見る。

「新人はどんな奴ですか？」

誰もが興味を持つところ。男もそれを分かっているのか、わざと間を溜める。

「そいつはな……」

整備士たちが大浪を見る。ラインの作業音がそこから沈黙を連れ去る。時間だけが流れていく。

「女だったな。成績はお前らよりも良いそうだ」

だが、その続きは大浪の言葉ではなかった。

「てめっ、そりゃ俺の言葉だろうがっ」

ドッグの入り口に立つ強面の男は、整備士の格好ではなく、パイロットスーツだった。

「お前がいつまでも溜め込むからだ。最終確認書を見せろ」

「ったく。いいとこどりが。ほらよ。こいつだ。後はラインからサイン貰って、さっさと飛んじまえ」

「そうさせてもらおう。下らない話に花を咲かせるなら、仕事をしろ、大浪」

言うだけ言うと、受け取った書類を手に、ラインで燃料補給を受けているヘリコプターへと男は歩いていった。

「なんであいつがウチの重鎮だな。全く」

大浪が面倒そうにその背中を見送るが、若い整備士たちは何も言えなかった。双方が整備士にしてみれば重鎮である証拠だった。

「大浪機付長。女性なんですか？」

「ああそうだ。相当賢いらしいからな。お前らも気合入れて指導するんだぞっ。良いなっ？」

檄を飛ばすような声に、再び声が響いた。再び仕事に戻る面々を見つつ、大浪は一枚の書類を見ていた。それは新人の学校より送付された書類だった。

「雨宮悠、か。何でまたこんな寂れた所を選んだもんだか……」

そこに記されている成績ならば、大手航空会社にも就職できる。それこそ資格を取るには最適な環境下。大浪にはそれが不思議だったようだ。

「よし。こんなものね」

一通り片付けた室内は1DK。一人暮らしにはそこまで不満のな

い室内。今月までは両親に多少援助を頼んだけれど、来月からは本
当の意味で自立が始まる。

「買い物も行かないといけないわね」

空っぽの冷蔵庫はまだ冷え切っていない。テレビのチャンネルも
設定しないといけないし、仕事の準備もしないといけない。引越し
が完了したとは言え、することはまだまだある。これからここでの
生活が当たり前になっていくのだから、スタートは気持ちよくきら
ないと。

「少し、見学に行ってみようかしら」

ちよつどそんなことを考えていると、ベランダの向こう、何もな
い畑を越えたその向こうからヘリコプターが網戸を突き破ってその
エンジン音を届けてくる。

地元の小さな空港。大手の飛行機なんて着陸出来ない、プロペラ
機がせいぜいの空港。それが私の就職先。

「綺麗な離陸……」

恐らくはベテランパイロットの操縦。昔から実家の上空を飛行し
ていた航空機だけれど、改めて自分がその帰る地の空港で働くとな
ると、それを見る目もいつもと違うように感じる。私も資格を取れ
ば、あのヘリコプターを一人で整備することになるのかもしれない。
そうなると、ただ見ていたものが、人の命を乗せて飛ぶ航空機だと
認識できて、それを整備することは、その最も底辺のところでは人
命を預かる身であるのだと、ちよつとした責任感のようなものが、
私にも湧いてきた。

九・兩宮悠の物語 ～この地へ～（後書き）

次の更新は、「マリーとサイファー」です。

更新予定日は10日を予定しています。

十・兩宮悠の物語〜その、先日の日々〜（前書き）

久しぶりの更新です。

予定より少し早く更新できたかな？ と思いつつ、三ヶ月も放置している以上、他の作品もなるべく早く更新できるよう頑張ります）
^^；

十・雨宮悠の物語／その、先日の日々

軽く身支度を整えて、菓子折り袋を手に、私は家を後にする。自転車でもあれば良かったかもしれないと、徒歩で歩く中で感じる。近いようで空港の出入り口は家から見えるよりもっと向こう、つまりは反対側にあつて、思っていたよりも道のりは遠かった。

「バス通勤、かしらね」

車道を一台のバスが通り過ぎる。私をと同じ目的地行き。少しバス停で待つていれば、あのバスに乗っていたかもしれない。私を置いて走り去るそのバスの背中に、一人取り残されていくような寂しさが風に吹かれた。

歩いて三十分はかかって辿り着いた先に、ようやく空港の名前が見えた。それでも想像しているような空港ではなく、こじんまりとした、一件何かの事務所？ と間違えそうな一階建ての建物。その向こうに管制塔や整備格納庫などが見える。一応アポなしと言うことで、受付へと向かう。建物内は小さな物産店があるくらいで、人影はまばら。人員輸送の為の旅客飛行はなく、遊覧飛行や資材運搬などの受付が一つあるだけ。

「そつえば、ここの空港だったんだ」

それから私の目を惹いたのは、空港名でもあるバードフライ飛行場に所属するアクロバット飛行チーム、バードフライの宣伝ポスター。大々的に宣伝されていて、そう言えば毎年この空港のエアショーで飛行していたのを実家から見た記憶が甦った。ここで働くということとは、これらの機体整備もあるのかもしれない。そう考えると少し楽しみが増えた。

「すみません」

「はいはい、どうされましたか？ 遊覧飛行の申し込みですか？」

窓口受付の所では、中年男性が久しぶりの客を見つけたとでも思ったのか、手をすり合わせて置くから出てきた。

「あ、いえ。私、雨宮悠と申します。明日より航空整備部に入社することになってるんですが……」

何の連絡無しに来てしまった以上、挨拶は無理かもとは予想していた。

「ああ、そうでしたか。いや失敬失敬。今週は資材が五件入っただけで、他にお客が来ませんでね」

失念されることはなかったけれど、この人は会社としてはそれはそれで赤字だというのに、ヘラヘラと笑っていた。

「整備部に配属の雨宮さんね。それで今日はどのようなご用件で？入社式は明日ですが？」

日にちを間違えたのか？ そう言っているような視線に、私は分かってるわ、そんなこと。と、視線を送り返すことはなかったけれど、事情を話した。

「ああ、そういうことですか。いやいや、これは良くできたお嬢さんで。今連絡してみますから、少し待ってくださいね」

「はい」

そう言われて、受付にあった電話で男性がどこかへ連絡を入れる。「あー、もしもし？ 田沼ですが、大浪さんはおりますか？ ええ。今ですね、明日入社予定の新人さんがいらして、挨拶をしたいのですが、どうかと思いました」

電話口では呑気な声。いや、この人はそう言う人なのかもしれない。あまり緊張感がなく、悪い人ではないよう。それでも、もう少し仕事なんだから、身を入れてもいいと思うと私の性格からすれば、身の締まらない態度は好きになれそうじゃない。

「あ、大浪さん。……ええ。そうなんですよ。で、どうします？」

……あ、そうですかあ。はいはい、分かりました。ええ、では、後ほど」

どうやら話が済んだようで、聞いていた限りではアポなしの私だと言つのに、返事は良さそうだった。

「雨宮さん、そっちの社員で入り口から三つ目の航空整備部室へ入

つてくださって構いませんよ」

「そ、そうですか。ありがとうございます」

あっけらかんと言われて、何か調子が狂った。案内デモしてもらえるのかと思っただけけれど、結局案内などはなく、一人で見慣れぬ関係者以外立ち入り禁止とあるドアを潜った。

「ここね」

航空整備部と表札のある一つのドア。さっきの緩んだ緊張感も元に戻り、私は一つ深呼吸をすると、ドアをノックした。

《入ってるぞ》

ノックしたら、そうくぐもった返事が戻ってきた。思わずその答えに、え？ と思った。まるでトイレでのやり取りのような返答に、一瞬固まったけれど、静かにドアを開けた。

「失礼します」

《おおっ！》

「え？」

ドアを開け、中へ入室した瞬間、多くの視線が私を向き、歓声が静かに湧き上がった。

「あ、あの……」

じつと見られ、どうしたら良いのか、頭が真白になった。見た限りでは、男性が五人ほど。女性も二人の姿が見えたけれど、一様に驚いていて、私はどうするべきなのか、思わず部屋の入り口で固まってしまう。

「よく来たな、新人」

「あ、すみません。ご連絡もなしに突然お伺いしてしまいました」
奥から一人の、父さんと同年代のような男性が来る。まとう雰囲気と他の整備士の方の視線に、この人がここの責任者なのだと、何となく察しがついて一礼した。

「ふむ、よく出来ているな、お前」

「いえ、恐縮です」

ただ、そう答えただけなのに、おお、と声が私を見る。全く自分

の置かれている境遇が理解できなかった。その中で一つ理解したのは、ここは本当に私が明日から勤めることになる航空整備部なのだろうか？ と言う疑問だけだった。

「しかし、硬いな」

ああ、と先ほどは驚きの声のように聞こえた声が、今度は納得の聲に聞こえる。どうしてかしら、何か小馬鹿にされている気がするの。

「まあ、せっかく来たんだ、座れ。岡野、茶だ、茶」

そんな困惑する私を他所に、その男性が使い古された黒いソファに座る整備士らしい方たちに言う。

「え？ 俺っすか？」

素っ頓狂な声に立ち上がったのは、私と同年代かとも思える若い男性。一瞬目が合うけれど、すぐに声が被せられる。

「岡野はお前じゃないのか？ 違うのか？ じゃあ、お前は誰だ？」

「は、はいっ。岡野は俺っす。俺が岡野っす」

珍妙なやりとり。よく意味が分からないけれど、数人の方が鼻で笑う声が出て、今は笑う所なの？ と思った。最後の名乗りは、私への自己紹介？ なんて思いそうだったけれど、すぐに岡野さんは窓際に置かれていた給湯器の方へ隣に座る方の足を避けながら、そいそと準備を始めていた。

「雨宮さん、ここへどうぞ」

「……はい」

立ち尽くしていた私に、年上らしい女性が招いて下さり、私も腰を下ろす。

「あの、これ。つまらないものですが、どうぞ」

目の前に先ほどの男性がどっしりと腰を下ろし、私は手提げ袋を差し出す。

「おお、そうか。気が利きすぎるが、ありがたく貰おう」

気が利きすぎると言われても、それは母にもたされたもので、私がか用意したものじゃない。そんなことはお構いなしに、男性が袋を

開ける。

「コーヒー、紅茶の詰め合わせか。なるほど、当たり障り無く、かつ困らないものを、か。お前さん、なかなかやるな？ 今岡、仕舞っておけ」

「はい。雨宮さん、ありがとうございますね」

小さな笑みで私を見てくる。でも、その目が、私には笑っていないようにも見えてしまい、ありがとうございますの一言もまともに出てこなかった。菓子折りかと思っていたけれど、そうじゃなく、私を招いて下さった女性がそれを棚に仕舞いにいくと、入れ替わりに岡野さんがお茶を運んでくる。

「はい、お茶つす。コーヒー切らしてたんで、緑茶つすけど、良いかな？」

「はい、すみません、ありがとうございます」

「いえいえ、そのスーパーで買った安もんつすから」

差し出されたお茶。周りの方々の視線が集まり、緊張してしまっているのか喉が渴いていて、一口だけいただいた。でも、最後の一言は余計だと思う。まるで健介見たいかも、なんて思ってしまふ。

「わざわざ前日に顔を出すのは感心だな。こいつらはどいつも来やしなかったんだがな」

私から視線を外した男性が、私の周りに腰を下ろす整備士さんたちに視線を向ける。誰一人としてその視線を正面から受け止めることは無く、皆が顔を一齐に逸らせて、少しだけ面白く見えた。

「わしは大浪だ。ここで整備長をしている。こいつらは大浪機付長と呼ぶがな」

機付長。やはりベテランの整備士で、上司の方だった。一目で分かる年配の方だから、それはすぐに納得できた。それと、明日より大浪さんのことはそう呼べと言われたんだと、記憶した。

「雨宮悠です。突然のお邪魔にもかかわらず、温かく出迎えて下さり、ありがとうございます」

感謝を述べたつもりなだけけれど、私が一礼して頭を上げると、

大浪さんは少々難しい表情をされていた。

「若いのに感心するんだが、そう硬くなるな。お前も明日からここで働くことになるんだぞ？」

「どうやら、私の態度が硬すぎたせいみたい。分かっただけはいるけれど、お世話になるのだから、初めくらいはちゃんとしていたと思っての行動。だから、そう言われると少しだけ戸惑う私がいいた。」

「すみません、緊張しているからだと思います」

「緊張するのは分かるがな、整備士になる以上、相手の機嫌を伺うような目下からの言葉じゃ、勤まらんこともある。わしらはパイロットの命を支えるからな。時にはパイロットに強く意見できるようじゃないとな」

大浪さんの言葉は私の緊張を解くためではなく、早速仕事に対する指導、だったのかもしれない。私は目の前で同じように岡野さんが入れたお茶を啜る姿に、短い返事と肯くばかり。

「仕方が無いのよ。私は人見知りする方だし、誰とでも仲良くなれば、なんて思わない性格なんだから。」

「まあ、詳しいことは明日からだな。今日はとりあえず、軽く自己紹介でもしとくか」

「そんな私の心を見透かすように、段取りを決める大浪さん。この方は多分、もう私のことを把握したんじゃないだろうか？ と思うほどに淡々としている。人を振り回させるのではなく、人についてこさせるといふか、その人にあつたやり方を示してくれるような、人情のようなものを、少しだけ感じたかもしれない。」

「わしは今言ったとおりだ。岡野、お前からだ」

「うえ？ また俺っすか？」

「一息ついたように腰を下ろした岡野さんがまた立ち上がる。」

「何だ？ 嫌なのか？ 俺に文句があるのか？」

「いえっ、無いっす、はいっ」

正直、そのやりとりだけで、岡野さんという人がどういう人なのか分かったと思う。

「じゃあ、えつと。改めて、岡野将文です。整備担当はセスナや
つてるっす。あとはフライ機の四番機も担当してるんで、よろしく
っす」

何と言うか、口調が独特。くっす、と言うのは、正直私はあまり
好きじゃないかも。

「はい、明日からよろしくお願いします」

「あと、嫁も募集中の童貞二十五歳だろうが」

「ちよっ！ 大浪機付長、何言ってるんすかっ!？」

あはは、と他の方が笑い、岡野さんが違っつ、違っつからっ！と
一人騒ぐ。私はどう反応するべきか迷ってしまった。

「違っつすからね？ 俺、童貞じゃないっすから」

「は、はあ……」

そんな情報は、正直どうでも良い。でも、邪険にも出来ないから、
そう言うのが精一杯。

「じゃあ、次は今岡、いつとけ」

「はい。私は今岡梓紗。担当は整備班長として、全機体の補佐を大
浪機付長とともにやらせてもらっているわ。明日からはびしばし指
導させてもらっつからね？」

立ち上がる今岡さんも、やはりベテラン。でも、それほど歳を重
ねているようには見えない。三十代半ば、という感じかもしれない
けれど、素敵な笑顔が印象に残った。

「じゃあ、次は大川」

大浪さんが主導で、自己紹介は進み、今岡さんの後には、通信整
備士として、全機の整備をする大川和樹さん、岡野さんと同じ整備
担当の小島裕大さんと新穂智美さん、補給員の足立優紀さん、ヘリ
の整備担当の藤村隆志さん、小笠原建二さん、吉原瑞希さんと挨拶
は続き、最後に私が改めて皆さんに挨拶をした。

「一応ここにいる奴らは全員がラインの整備士だ。ドッグの連中は
仕事中でドッグにいるが、そいつらは明日紹介する」

「はい、分かりました」

正直、挨拶をされても、皆産の名前を覚えられたかと言うと、またそれは微妙なところ。とりあえず苗字だけは覚えただけで、既以下の名前を忘れてしまった方もいる。明日はさらに多くの方を覚えなければならぬということだから、頭を使うことになりそう。

「よし、一通りは終わったことだし、先に雨宮にも聞いておくか」
大浪さんの一声に、皆さんが私に注目する。一体何？ と一斉に集まる視線に少したじろぐ。

「雨宮さん、ウチには航空機で一応ヘリが二種、飛行機が三種あるんだけど、担当を試してみたいものはあるかしら？ 資格取得のための実務経験をつまないとはいけないでしょ？」

今岡さんがどうする？ と私を見る。

「わしとしては、雨宮にはフライ機とヘリを担当して欲しいと思うんだが、どうだ？」

唐突な提案と言うものは 唐突にやってくるもので。

「え？」

「お前の学校時代の成績と教員からの推薦状を見たんだが、お前には明日から一年で、ヘリ、レシプロの両方の二等航空整備士を目指してもらおうかと思うんだが、どうだ？」

唐突だからこそ、反応もとつさには出来ない私。

ちよつとまつて。ヘリと飛行機？ 大浪さんは何を言ってるの？ 確かに学校では基礎と実技でどちらも大まかなことは習得させられた。でも、それはあくまでも今後の参考になるかも知れないという浅い程度。卒業する頃には、私は飛行機の整備士を目指すことを決め、コース選択でもその道を選んできた。

当時の私は、緊張もあつて、しばらく考えることに体が固まっていた、と思う。

「え？ あ、あの、でも、それは……」

「大丈夫つすよつ。俺らも両方取らされたんすよ」

岡野さんが明るく言う。それはどうということ？ と他の方へ視線を向ける。

「僕と足立さんは元々機関整備じゃないから、始めから両方の勉強はしていたんだ」

「そうなのよ。ここって小さな飛行場でしょ？ だから、人員を増やすよりも、個々のスキルアップが重要なの」

通信整備士の大川が口を開くと、足立さんが同意に肯き、私をさらに混乱させる。

「一応俺とガツサン、ミッキーはヘリ専属、マッチ、ユーダイ、ともちゃんは飛行機専属なんだけど、人手が足りない時は互いに補い合うのがここの特徴かもな」

そう続けるのはヘリの整備士の藤村さん。他の方をあだ名で呼ぶから、誰が誰だか分からない。

「ガツサンは、小笠原さんで、ミッキーはあたし、マッチは岡野君で、ユーダイは小島君、ともちゃんは新穂さんのことだからね。大川君はカツチン、足立さんはアーミンってあだ名がついてるのわけ。今岡さんは班長、大浪さんはそのまま機付長ね。上司だから」

そう教えてくれる吉原さん。なるほど。皆名前をもじったということなのね。

「ってことで、悠ちゃんは、はるちゃん、ね」

「はるちゃん？」

ね？ と笑顔と共に方に手を置かれ、思わず、へ？ と隣を見た。

「良いっすね、はるちゃん」

「でも、はるちゃん、綺麗だから、もう少し綺麗なものでも良いんじゃない？」

岡野さんは一人興奮、と言うのか勝手に喜び、今岡さんは私のこととをじっと見てきて、少し恥ずかしい。

「良いと思いますよ。雨宮さんには可愛いものが似合いそうじゃないですかあ」

足立さんがのんびりと手を合わせながら私に微笑む。この人は性根がのほほんとしているみたいで、目があっても別段恥ずかしいと言ふ気持ちはなく、すこし友人に似ている気がする。

「俺は別に何でも良いぜ」

「俺も」

「僕も良いと思いますよ」

藤村さん、大川さん、小島さんはとりあえず関心がないようで、ただ賛意を示しただけに見える。別にそれは構わないんだけど、最初に決めるようなことなのかしら？　と思わずにはいられない。

「何でも良いだろうが。それよりも決めることがあるだろ」

全く私と同じ意見の大浪さんが、じつと視線をぶつけてくる。そう。私が考えるべきことは、あだ名ではなく、担当する機種。てつきり一つだけだと思っていたのに、二種　しかも、別の組み合わせだなんて。

「バードフライ飛行場は整備士もパイロットも元々不足がちなもの。

今年はこちらの部署は一人取れたけど、なかなか希望者がいなくてね」

だからこそその人事なの、とその視線には気づく。けれど、それはそれ。これはこれ、じゃないかしら。やれというならやるしかないけれど、それが強制ではないのだとしたら、私はそこまでする気というものは起こらない。願わくば希望するのはあれだけだから。

「まあそう言うわけで、明日までに考えてきてくれ」

結局、それから色々と聞かれはしたけれど、どれも受け流す返答に終わり、私は帰路についた。

「それじゃ、はるちゃん、帰り大丈夫？　なんなら送ろうか？」

「いえ、それほど遠くないですから。ここまでありがたいがとうございまして」

「あ、そう……うん、それじゃ、明日からよろしく」

帰りは出入り口まで岡野さんが見送りに来てくれたけれど、私の頭の中には、どうするべきなのか、という考えで一杯で、岡野さんがバスに乗り込むまでそこに立っていたことにも、バスに乗り込んで発車してからも気づかなかった。

その日の夜、私はベッドに横になり、悩んでいた。

「う、ん……」

明日のしたくは出来ている。入社式の後は早速業務開始。だから明日は真新しいスーツと予め支給された作業着を使う。まだ皺もろくについていない二つを見ると、明日から社会人として歩き出すという実感を感じるけれど、それ以上に早速の選択に、どうするべきか、なかなか答えが出ない。

静かな室内。支度は整った。後は寝るだけなんだけれど、何だか考えがまとまらなくて、寝付けない。

枕元においている携帯を取り出すと、暗くなつた室内に液晶画面の明るさが少しだけ眩しい。新着メールも着信履歴もない静かな携帯電話。意味もなくアドレス帳を開く。高校からの地元の友人、家族、整備士学校の友人でその大半は埋め尽くされている。その中で指が止まる名前。恐らく今の私を知る人の中で、誰よりもこの職業に関してまつすぐな奴。私をこの道に引き込むだけ引き込んで、自分は夢を追い続ける馬鹿。もう会わなくなって三年目に入る。なのはどうしてかしら。あまり遠い存在には思えない。

「健介、もう、寝ちゃったかな……」

画面の時計は二十三時を過ぎた所。まだ早いかもしれないし、健介は寮生活。だから消灯かもしれないし、それは分からない。

「あ……」

その名前を見ていた瞬間、私の心が小さく跳ねた。私の手の中の携帯も震えた。

「……はい？」

《もしもし、悠か？》

大したことじゃない。でも、私の心はその声に、再びドキドキと小さく、少し激しく鼓動していた。

「……何？」

まさかこんなタイミングで電話が来るとは思わなかったから、自分でも焦るくらいに言葉がすぐに出なかった。

《あ、いや、別に大した用じゃねえんだけどよ》

そんな私の心なんて全然知らない健介の拍子抜けする声に、息を吐いて落ち着く。

《お前さ、明日から仕事だったよな？》

「そうだけど、それがどうかしたの？」

質問に質問で返すのは、私のいつものやり方。何となくそっけないことで話題が終わるのが嫌だから、言葉になる、続けられる言葉で返す。そうすれば会話はまだ続くから。

《いやあ、なんつーかさ、すげえなって思ってたさ》

電話越しに軽く笑う健介の声に、何が凄いのか主語のない言葉を理解出来なかった。

《最初は俺がお前を引き込んだのに、今はお前の方が先に夢に辿り着いちゃったんだ》

「大げさすぎ。別に私がこの道を選んだのは自分自身だし、健介とは学ぶ時間が違うんだから当然でしょ」

私の答えに、健介はやっぱり、お前らしいな、と笑ってきた。その人を分かりきったような声色と私の落ち着いた心を跳ね上げる言葉に、うまく自分を演じることが出来たのか、少し分からなくて、胸が少し痛みのない痛みに手を添えた。

《そっぴやさ、結局飛行機の方になるのか？》

相変わらず話題は自分から。健介と話すときはいつもそう。私はただそれに答えるだけ。そして、今の話題はピンポイントに私の全身を駆け抜けた。

「うん。たぶん、そうかな……」

もともとの希望はそう。でも、大浪さんたちに提案されたのは両方。

「ねえ、健介」

《ん？》

「へりと飛行機、どっちかを選ぶなら、健介はどっち？」

《は？》

私は一体何を求めたのだろう。相手は健介。目指す夢も目標も違

う。なのに、私の口は自然とそう、紡いでいた。横になっていた体を起こし、返事を待つ。

《いや、何が？》

「だから、どつちかって言ったら、あんたならどつち？」

詳しい理由は悩む時間を与えるから言わない。考えちゃダメ。早く返事が欲しかった。私を引き込んだ人間なら、どう判断を下すのか知りたくなった。

《どつちかって言ってもなあ。俺はどつちも好きだけどなあ》

健介は健介なのね。優柔不断の答えを出さない言い方。

「じゃあ、どうして飛行機のパイロットになろうとするわけ？」

ああ、私は何を聞いているのかしら。健介の言葉を待つ私と、そんな私を遠くから見ている私が、同時にこの暗い室内にいる。何をしたいの、私？ 聞いてどうする気？ そんな自問が健介の答えを待つ間にループする。

《どうしてって、そりゃ、空を自由に飛べるからだろ？》

でも、そんな考えをめぐらす前に、健介は唯一つの答えを、躊躇いもなく、何を今更だと私に言うように答えた。

《へりよりも操縦性を考えるとやっぱり飛行機だろ？ それに俺はあくまでもインパルスみたいな飛行がしたいからな。へりじゃ無理だろ。つーか、何でこんなこと聞くんだ？》

「……変わらないわけ、ね、あんた」

健介の語りは、あの頃と何も変わってない。空想していた世界から飛び出し、現実を知った今でも、その夢はただ一筋を辿る飛行機雲のように、空を目指している。

《変わらないのは、お前もだろ》

そんな健介に、置いていかれたくない、なんて思っていた私の心は、静かにその慟哭を静めていく。ただ、まるで縮まっていらないのだという現実を知るだけだった。

「違うわよ。健介は何も知らないだけ」

そう、だから健介はありのままの姿で努力して、このままの姿で

そこにいる。

《いや、お前も昔からのまんまだ》

それなのに、電話口の向こうではやっぱり分かりきったような言葉が星空の下を駆け巡って私の耳に届いてくる。

《何があつたかは知らないけどよ、お前はきつかけはどうであれ、自分でやるって決めたらやるだろ？ 俺の目標は話したとおりだけだよ、じゃあ、お前の目標って何だよ？》

はつとさせられた。

《単純に俺が興味も足せたから続けたわけじゃないんだろ？ じゃないと普通は続かないしな。お前は難しく考えすぎだ。何考えてるのか知らないけどさ、もっと簡単に考えろよ》

あまりにも突拍子もなく出てくる、その淡々とした言葉。それに私は返す言葉を考えられなかった。人を氣遣っているのかそうじゃないのか曖昧な言葉でも、その中に含まれる言葉には、核心を突かれてしまう。

「そう簡単にいかないことも、あるのよ」

《ねえよ、んなもん》

クツと胸に来る。あまりにももの即答。あるのよ、と返事しようにもその四文字すら、止まってしまう。

「……あんたは、簡単に言いすぎよ」

《難しく考えるより、単純な目標が夢に進む方が、楽しくなるんだぞ？ まあ、俺はまだ学生だし、働くことはよく分からないけどさ》
そうよ、あんたは学生。私は社会人になるの。だから、あんたみたいな楽観主義だけじゃ、困ることもあるのよ。なんて言おうにも、それを言ってしまうえば、健介に悪い氣がしてしまう。

《まあ、なんつーかさ、どっちかを選ぶなんてことはしなくても良いだろ。空が好き、航空機が好きでこの仕事に就くなら、どっちも好きで良いだろ》

簡単に言う言葉には、本当に難しいことなんて考えていないことが良く分かる。やっぱり健介は健介のまんまなんだと思う。

「どっちも、ね」

なかなかそう簡単にはいかないと思うのは確かだけど、健介のその何も考えていない言い方には、私の悩みが小さく思えてくるから不思議。どうしてこんな奴がパイロットを目指して、大学にまで進学しているのか、少し分からない。

《そつだ。それによ、両方やっておけば、何かあった時とか、再就職する時にでもどっちでも資格でいけるだろ？ 損するもんはないと思うぜ？》

そついわれると、確かにそつ。ただ、自分の当面の負担が増加するということだけで、得られるものは、確かに多い。

《な？ 悪くないだろ？》

気楽に言ってくれちゃって。ほんと、人事だと思ってるわね、健介。

「……そつね。そつかも。でも、明日から就職するのに、再就職なんて考えてないわよ」

《ははつ、そりゃそつだな》

まだ働いていないのに、もうやめた後のことを考えても仕方がないじゃないのよ。それとも健介は私が、長続きしないと思ってるのかしら？ それはそれで甘く見られて、少し嫌かも。

《……健介、教官が集合だよ。先行くぜ？》

《おつと、集合だ。悪いな、別のこと聞こうと思ってたけど、また今度にする》

電話の向こうで、誰かの声が混じった。

「ええ。忙しそつね、そつちは」

《まあな。あと二年あるけど、今が一番忙しいみたいでな。そんじやあ、またな》

よほど急がなければならぬのか、健介は言うだけ言うと、通話を切る。それと同時に室内には耳鳴りがしそつなほどの静けさが私を飲み込む。起き上がった体が、自然とベッドに倒れこみ、薄暗い天井がわずかな時間でも、楽しめた余韻を祭りの後のように残す。

「聞きたいことって、何だったのかしら……？」

最後にそんなことを残して通話を切られると、一体健介は何のために私に電話をしてきたのか気になる。まるで私の話題にだけ付き合ってくれた、だけ、の、よう、な……あれ？

「資格って、どうして健介、分かったの……？」

今までのやり取りがふと脳裏を過ぎって、疑問を残す。一体どうして健介は、私の悩みに気づいたのかしら？ そんなことは一言も言っただけでなかったと思うのに。

「分かりやすいのかな、私って……」

そんなことはないと思うんだけど、健介には、私のことが分かってしまうの？

何も見えない天井に、電話越しに私を笑っているような健介の、最後に見た幼い顔の健介が浮かんだように見えた。

十・兩宮悠の物語〜その、先日の日々〜（後書き）

閲覧ありがとうございます。

もうしばらくは悠に視点を置いた、過去の話になります。

今後の流れとしましては、悠の整備士としての成長と、健介との再会、美由紀の登場、そして隼斗たち家族の登場で本編とクロスさせ、悠視点で流れは本編に沿いながら、自身は本編とは少し変化させた物語にしたいと思います（確定じゃないです^^;）

さて、次回更新予定作は《マリーとサイファー》です。

更新予定日はGW明けを予定しています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0627e/>

sola ~空飛ぶピアノに最後の夢を~

2010年10月10日20時30分発行